

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

鞍手・粕屋郡所在遺跡群・春日市門田2号墳の調査

第 1 集

1976

福岡県教育委員会

山陽新幹線関係 埋蔵文化財調査報告

鞍手・粕屋郡所在遺跡群・春日市門田2号墳の調査

第 1 集

序

山陽新幹線の建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和46年度に始まり、本年度で5年目を経ました。新幹線建設はその名のとおりに急務で、文化財は無視されがちであり、当教育委員会も遅ればせながらこれに対処すべく体制を整えましたが、用地買収などの遅れから本格的な発掘調査を始めたのは昭和47年度からでありました。

昭和50年3月10日山陽新幹線博多開業にこぎつけ、このほどようやく、調査報告書の第1冊目を発刊できることになりました。

本報告書は、鞍手郡・粕屋郡と春日市所在の遺跡群のうち、昭和47年度から昭和48年度に調査を実施しましたもののうちの一部であります。

発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、この状況を御理解のうえ、本書を御活用いただければ幸甚に存じます。

昭和51年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森 田

實

例 言

1. 本書は、昭和46年4月1日から昭和49年3月31日までに福岡県教育委員会が、日本国有鉄道下関工事局から委託されて、山陽新幹線建設のため破壊される埋蔵文化財を発掘調査した1冊目の報告書である。

2. 本書の執筆分担は次のとおりである。

I—1・2	鶴久嗣郎
I—3	井上裕弘
I—3—(1)	小池史哲
I—3—(2)	佐々木隆彦
I—3—(3)	柳田康雄
I—3—(4)	鶴久嗣郎
II・III・IV	鶴久嗣郎
V	鶴久嗣郎・小池史哲
VI	鶴久嗣郎・宮崎貴夫 井上裕弘・小池史哲
VII・VIII・IX	鶴久嗣郎
X	甲元真之・松井忠春

3. 掲載の写真の撮影、実測図の作成および製図は、図版目次と挿図目次に示すとおりである。なお、一部実測・製図・執筆には高橋章・佐々木隆彦・小池史哲・山口譲治・丸山康晴・三津井知廣氏の協力を得た。

4. 本書の編集はI・II・IIIを柳田、IV・VII・VIIIを木下修、VIを鶴久、V・IX・Xを井上がそれぞれ行った。

本文目次

I	序 文	
	1. 調査の経過	1
	2. 鞍手地方の遺跡の環境	12
	3. 春日・那珂川地区の遺跡の環境	16
II	小田山墓地の調査	35
	1. はじめに	35
	2. 遺 構	36
	3. おわりに	39
III	下松尾墓地の調査	41
	1. はじめに	41
	2. 遺 構	42
	3. おわりに	49
	付. 金 丸 墓 地	51
IV	京尾遺跡の調査	53
	1. はじめに	53
	2. 遺 構 と 遺 物	54
	3. おわりに	57
V	若宮条里遺構の調査	59
	1. はじめに	59
	2. 遺 構 と 遺 物	60
	3. おわりに	62
VI	田尻遺跡の調査	65
	1. はじめに	65
	2. 遺 構 と 遺 物	68
	3. ま と め	90

VII	別当塚古墳の調査	93
1.	はじめに	93
2.	発掘調査	94
3.	おわりに	95
VIII	杉園遺跡の調査	97
1.	はじめに	97
2.	発掘調査	98
3.	おわりに	100
IX	久山町下山田地区の調査	101
1.	はじめに	101
2.	発掘調査	102
3.	おわりに	103
X	門田2号墳の調査	105
1.	はじめに	105
2.	調査の経過	106
3.	墳丘	109
4.	石室	111
5.	周溝	114
6.	中世墓	115
7.	遺物	117
8.	まとめ	141

I 序 文

本文目次

1. 調査の経過

(1) はじめに.....	1
(2) 昭和45年までの経過.....	2
(3) 昭和46年度の調査.....	3
(4) 昭和47年度の調査.....	6
(5) 昭和48年度の調査.....	6

2. 鞍手地方の遺跡の環境.....12

3. 春日・那珂川地区の遺跡の環境16

(1) 先土器・縄文時代の遺跡.....	18
(2) 弥生時代の遺跡.....	20
(3) 古墳時代の遺跡.....	22
(4) 歴史時代の遺跡.....	26

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(カラー) 車輛基地建設前の田園風景 (柳田康雄撮影)	1
2	山陽新幹線博多車輛基地全景 (井上裕弘撮影)	1

挿 図 目 次

第 1 図	山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (佐々木隆彦製図)	13
第 2 図	鞍手地区遺跡分布図 (靄久嗣郎・小池史哲作成)	折込み
第 3 図	天神池前細石核実測図 (山口譲治実測, 小池製図)	18
第 4 図	瀬戸第 2・第 4 地点出土土器実測図 (小池実測, 製図)	19
第 5 図	山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡分布図 (日本国有鉄道原図, 木下修作成)	折込み
第 6 図	春日・那珂川地区遺跡分布図 (国土地理院地形図 1 : 25,000 柳田作成)	折込み

表 目 次

表 1	鞍手地区主要遺跡地名表 (靄久・小池作成)	14
2	山陽新幹線関係遺跡一覧表 (靄久作成)	折込み
3	春日・那珂川地区遺跡地名表 (柳田作成)	27



車輛基地建設前の田園風景（1972年8月）



山陽新幹線博多車輛基地全景 (1975年5月)

I 序 文

1. 調査の経過

(1) はじめに

建設はつねに破壊を前提とする、などと今さら言うまでもないが、鉄道の建設と埋蔵文化財は奇妙な関係から出発した。考古学の近代的発展の端緒となった大森貝塚は、わが国最初の鉄道建設によって一部が破壊されたことから、明治10年 E・S・Morse の目にとまったのであった。以来約1世紀、建設に先だって埋蔵文化財の発掘調査が行なわれるのは、ほんの十数年前からである。

いわゆる在来線とは別の、高速鉄道建設の構想は戦前からあったが、これが現実となりはじめたのも20年ほど前であった。朝鮮戦争を契機として立直った日本経済が、昭和30年代後半の高度成長に向けて動きだすのと軌をいつにして、東海道新幹線の建設が行なわれたのである。昭和32年12月9日・東海道新幹線建設を閣議で了承、34年4月20日・起工式、37年6月23日・試運転開始、そして、東京オリンピック開催にあわせて39年10月1日の営業運転開始となる。

この工事で、多くの埋蔵文化財が破壊された。事態を重視した文化財保護委員会（当時）は遅まきながらも39年2月10日「史跡、名勝、天然記念物および埋蔵文化財包蔵地等の保護について」日本国有鉄道に依頼文書を発し、(1)文化財所在地を事業計画から除外すること、これによって事業計画に重大な支障が生ずる時は文化財保護委員会と事前協議を行なうこと。(2)事前協議をへて、発掘調査等がやむをえない場合には、文化財保護法による所定の手続きをとること。(3)発掘調査等は、国鉄が関係都道府県教育委員会に委嘱して、記録保存の措置をとること。(4)これに必要な経費は、当該事業関係予算により負担すること。などを要請した。

いっぽう、新幹線建設計画はテンポをはやめて進展していた。東海道新幹線の建設中から進められていた延長計画は、はやくも40年9月9日、山陽新幹線新大阪・岡山間が運輸大臣の認可をうけ、42年3月16日には起工されたのである。これにあわせて、文化財保護委員会と国鉄との間に、42年3月8日「日本国有鉄道の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」が交換された。内容は、さきの国鉄に対する依頼を骨子として、下記の各項について規定したものである。

(1)国鉄は工事施行に際して、文化財保護の趣旨を尊重して工事施行前に都道府県教育委員会の意見を聴取し、文化財保護委員会と埋蔵文化財の取扱いについて協議する。

序 文

(2)工事施工中に発見されたものについても、前項に準じて措置する。

(3)国鉄が大規模な事業を施行する場合には、その予定地域内の埋蔵文化財の調査について文化財保護委員会と協議し、分布調査を実施する都道府県教育委員会などに対して、できるかぎりの協力をする。また、その経費は原則として行政側で負担する。

(4)発掘調査の実施は、都道府県教育委員会などが受託するよう文化財保護委員会が指導し、その経費は、報告書の作成費を含めて国鉄が負担する。調査の実施などについて協議が整わない場合には、文化財保護委員会が調整にあたる。

(5)国鉄は、事業関係請負業者に対して埋蔵文化財の取扱いについて、都道府県教育委員会と協議その他の手続をとるよう指導する。

この覚書は、直ちに各都道府県教育委員会に通達され、国鉄でも、山陽新幹線建設部長・下関工事局長を含めた各機関の長に通達された。

しかしながら、福岡県に関するかぎり、この覚書の(1)および(3)の項目は、形式が整えられただけに終わった。たしかに事前の分布調査は行なわれたが、それは新幹線の路線決定に資するためのもではなかった。国鉄下関工事局から県教育委員会あてに埋蔵文化財分布調査の依頼があったのは、北九州市で起工式の行なわれてから2カ月も後だったのである。

(2) 昭和45年度までの経過

新大阪・岡山間の建設が進められていた山陽新幹線は、昭和43年10月28日、いわゆる新全線案に博多までの延長が組込まれて、すぐに具体的な像をあらわしはじめた。44年9月12日運輸大臣が博多までの延長を認可し、同12月4日にはその工事計画も認可された。翌45年2月10日には、北九州市を含む4地点で、一斉に起工式が行なわれる段階にまでなった。

しかし、当教育委員会には何の協議もなかった。それどころか、計画路線に史跡三原城跡まで含まれていながら、文化庁に対してさえも何らの協議がなされぬまま、路線が発表されてしまったのである。たまりかねた文化庁は、44年12月17日に国鉄に対して強い調子で警告を発するという事態にまでなった。

当教育委員会でも、華々しく報道される新幹線建設のニュースに、一向に登場しない文化財の問題を土俵にのせるべく、44年12月2日、工事計画大臣認可の直前に、国鉄下関工事局を打診して工事計画の概要を知った。そして、45年に入ってようやく、県当局と国鉄との諸協議の中に文化財が登場し、当委員会から国鉄に対して文化財の取扱いについて協議するよう申入れることになった。これをうけて双方の間に総括的な話し合いが始まったのは、44年度も末になってからであった。

山陽新幹線建設計画は膨大なものであった。営業予定区間は博多駅までであるが、その南方

8.5kmの、春日市と筑紫郡那珂川町にまたがって、420,000m²の車輛基地が建設予定であった。長さ2.4km・幅約250mの広大な予定地には、相当の遺跡の分布が予想された。正式の分布調査依頼が来るのを待っていては、事態に対処できそうになかった。起工式を行なう段階まで建設計画は進んでいたのである。当委員会では、45年2月に車輛基地予定地域の分布調査を実施し、予想どおり38ヶ所におよぶ遺跡の分布を確認した。これとても、表面に見えるものだけであり、全貌をあらわすものではなかった。

昭和45年度に入ると、国鉄福岡工事事務所が設置されてここが窓口となり、4月7日付で当委員会あて「山陽新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の分布地域事前調査について」正式に依頼があった。分布調査終了後には、引きつづき発掘調査を依頼したい旨が付記されていた。当委員会では、延長95.4kmにおよぶ県内の路線予定地の分布調査をおこない、さきの車輛基地予定地域とあわせて55地点・約195,000m²に遺跡の分布する旨を45年11月12日付で回答した。この間、双方の間に数度の協議の機会が持たれたが、協議の内容は、文化財の取扱いについてではなく、発掘調査の方法・期間・経費などについてであった。いわゆる事前協議をおこなう段階というものは、はじめから全くなかったのである。協議の結果、文化課をもつ福岡市・北九州市の管内については、それぞれ9地点・2地点を当該教育委員会で、他を当教育委員会で担当することとなった。調査の実施期間その他については、46年度の項で触れることとする。そして、45年12月2日付で「山陽新幹線建設工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査について」国鉄より当教育委員会あて実施依頼があった。工事計画書がそえられて、着工前までに調査を完了していただかなければならないこと、「覚書」にもとづく文化庁と国鉄との協議は別途おこなう旨が申添えられていた。

(3) 昭和46年度の調査

発掘調査を実施するにあたって、前年度に続いておこなわれた数回の協議の結果、合意に達した基本的事項は次のとおりであった。

1. 発掘調査には約2年、遺物整理・報告書作成などには調査終了後の約1年をあてる。
2. 県教育委員会は、発掘調査実施に支障のないかぎり、国鉄の希望する順序で遺跡の発掘調査をおこなう。
3. 国鉄は、未買収地点の地権者の発掘調査承諾をうることを含めて、できるかぎり発掘調査の実施に協力する。
4. 発掘調査の結果、重要な遺跡が発見された場合、また新たな遺跡が発見された場合は、その都度、その取扱いについて協議する。

これにもとづいて発掘調査を実施することとなったが、国鉄の用地買収交渉が各地で難行

序 文

し、そのあおりをうけて、発掘調査についての地権者の承諾がえられない状態が半年ちかく続いた。また、埋蔵文化財発掘届も提出されないままだったので、協議の過程で、当教育委員会は国鉄側に対して早急に手続きするよう申入れたが届出がなく、やっと47年4月になって発掘届の提出という状態でもあった。

結局、46年度の調査は、年度当初に国鉄から要望された地点には半分も着手することができず次年度以降に予定した地点も含めて表2のとおり11地点を対象としておこなわれた。8月後半から着手という遅れようであったために、このうち4地点は伐採を行なっただけに終わった。また、早くも古墳2基が新たに発見されたが、これは、古い土地造成によって墳丘が破壊され密叢におおわれたために分布調査で発見できなかったものである。車輛基地の南端境界が地元との設計協議で確定し、古墳4基が調査対象にのぼったのも、この年度末であった。このような追加地点は、もよりの調査対象地点の番号に枝をつけて表示（たとえば、第49地点に最も近い場合は第49—1地点）したが、門田遺跡の場合は多岐にわたるため一括して「周辺」とした。

用地買収交渉の難行で工事工程が変更され、文化財の調査希望順位が入れかわって協議をかさねるという、発掘調査の前途多難を思わせる状態で46年度は終わった。

埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書

日本国有鉄道山陽新幹線建立事業地内における埋蔵文化財包蔵地の発掘作業の実施に関する委託（以下「作業」という。）について、受託者福岡県知事職務代理者福岡県副知事辻英雄（以下「甲」という。）と委託者日本国有鉄道福岡工事事務所長滝淵清実（以下「乙」という。）との間に、次のとおり委託契約を締結する。

（総則）

第1条 甲は乙の山陽新幹線建立事業地内における埋蔵文化財の発掘について、別紙の発掘調査実施計画書に従い作業を実施するものとする。

2. 乙は甲の協力を得て作業の実施に必要な土地所有者等の承諾を取りまとめるものとする。

（期間）

第2条 甲は、昭和46年4月1日から作業に着手し、昭和47年3月31日までに作業を完了するものとする。

（費用）

第3条 乙が、第6, 8, 32番遺跡及び第52番遺跡700平方メートルの一部150平方メートルの作業に関する費用として甲に支払う金額は金9402千円とし、その他の遺跡に関しては、引き続き甲、乙協議して乙の負担額を定める。

2. 前項の費用の支払い方法については、甲の作業に支障のないよう甲と乙とが協議して定め

る。

（作業の実施）

第4条 甲は、作業の実施について、乙の施行する山陽新幹線建設事業の工事及び工事工程に支障のないよう努めるものとする。

2. 甲は作業の実施にあたっては、作業箇所作業表示旗を掲げ、関係者に腕章等を着用させるものとする。

（作業日誌）

第5条 甲は、発掘の実施中においては、作業日誌を作成するものとし、乙は、その提出を求めることができるものとする。

（出土品の取扱い）

第6条 発掘された出土品の処理については、甲乙協議のうえ、甲が乙の名において法令の定めるところにより処置するものとする。

（決算及び精算）

第7条 甲は、作業が完了したときは、作業に要した費用について、決算を行ない、決算書を乙に提出するものとする。

2. 乙は、前項の決算書の提出を受けたときは、当該決算書に基づき第3条により約定した金額以内において、甲と議して精算を行なうものとする。

（発掘調査報告）

第8条 甲は、作業が完了したときは、発掘調査概報を添え、発掘作業完了報告書を乙に提出するとともに、乙の名において、発掘調査報告書を文化庁に提出するものとする。

（その他）

第9条 この契約に定めのない事項又は契約の条項について疑義を生じた場合は、甲乙協議して定めるものとする。

以上の契約の証として、この証書2通を作成し、甲、乙なつ印して各自1通を保有する。

昭和46年4月1日

甲 福岡県知事 職務代理者

福岡県副知事 辻 英雄 印

乙 日本国有鉄道

福岡工事事務所長 滝 淵 清 実 印

序 文

(4) 昭和47年度の調査

昭和47年3月15日の山陽新幹線新大阪・岡山間の営業運転開始は、岡山・博多間の建設工事が本格化することを意味するものであった。発掘調査担当技師は、前年度の3名から4名に増員されたが、国鉄側の調査希望地点は激増してとても要望に応じきれない状況となった。これに輪をかけたのが47年10月11日の開業繰上げ発言であった。鉄道百年の記念日をひかえて、国鉄総裁は、岡山・博多間の営業開始を当初予定の50年3月から49年12月に早める意向を表明した。これは、建設現場の担当者たちをも驚かすものであったが、工期短縮のしわよせを発掘調査の期間がもろにかぶることとなり、調査日程調整の協議を何回も繰返した。協議の内容は繁雑になるから省略するが、発掘調査の進展にともなう調査必要地域の拡大の問題とあわせて、昭和46年度当初に合意した調査期間を変更せざるを得なくなったのである。

本年度の調査地点は表2のとおりであるが、これらの中では、門田遺跡・観音山古墳群および深原遺跡の3地点が注目される。

門田遺跡は、那珂川平野にのぞむ2つの丘陵全面にわたる大遺跡である。本年度は予備調査を行なったのみであるが、先土器時代から中世にいたる遺物・遺構が発見され、本調査には少なくとも3年の日時が必要と考えられるに至った。協議の結果、車輛基地の設計と工程を一部変更して、新幹線開業当初に最少限必要な西側10線分に当る部分と東側の一部を、48年度に本調査実施ということで合意した。中央部は、工事工程と調整しながら50年度までに調査を終了することとなったが、このあと、側道にかかる部分がこれに加わってきた。

観音山古墳群は、当初11基しか確認されていなかったが、調査の進行とともに31基の古墳が確認され、観音山山麓一帯に分布する大古墳群の一部をなすことが分かった。予想外に膨大な調査となったため年度内に完了せず、48年度まで持越すことになった。

深原遺跡は、観音山古墳群・井手ノ原遺跡と重複して約5,000㎡にわたる縄文時代有数の遺跡であることが明らかとなった。一部を別府大学に委嘱して調査したが、古墳群の調査終了をまって、48年度にも継続して調査することになった。

47年度は、鞍手・久山地区の9地点も調査を行なうことになったため、工事工程に追われつづけて調査態勢の手薄さを痛感させられた年であった。

(5) 昭和48年度の調査

本年度の調査は、観音山古墳群と深原遺跡の継続調査から始まった。この両遺跡は、新幹線関係遺跡群のなかで、門田遺跡とならんで重要かつ大規模であったために、調査には9カ月と

いう長期間を要した。観音山古墳群では、古墳終末期の埋葬の実態が、古墳自体だけでなく墓道を含む周辺についても明らかとなり、深原遺跡では、縄文早期を中心に多数の石組炉・土器・石器が発見されて、広大な遺跡が全貌をあらわした。

この両遺跡調査の後半に併行して、井手ノ原遺跡の調査を行なった。これは、第37・39・50・55地点がいずれも中世の類似遺構をもち近接しているので拡張したものである。その結果、これら4地点が一連のものであることがわかり、井手ノ原遺跡として一括した。調査の終わった観音山古墳群と深原遺跡では直ちに工事が始まり、井手ノ原遺跡の調査は、走りまわる巨大なブルドーザーやスクレイパーの振動・騒音・排気の中で行なわねばならぬという状態であった。

以上に引続き、門田遺跡の本調査となった。予備調査での予想どおり、多数の細石器をはじめ中世まで連続する各種の遺構・遺物が検出されて、大複合遺跡であることが裏付けられた。また、調査期間が年度末までの7カ月間に限られたために、門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱し、先土器時代包含層の調査に、佐世保市文化科学館と平戸市教育委員会から調査員を派遣して援助をいただいた。

原古墳群の調査は門田遺跡と併行して行なった。ここは、工場敷地として覆土されていたために調査地点としてあげられていなかったが、地籍図と故老の話から古墳の存在が確実になり追加地点としたところである。調査の結果、3基の円墳をはじめ、円形周溝墓・方形周溝墓・土壙墓・住居跡などのほか、縄文早期包含層・甕棺墓群などが発見された。

これらのほかに、側道など付帯施設にかかわる遺跡がある。これは、工事の進展に伴って、地元との協議が整った所では側道予定地が工事用道路として使われはじめたために、48年5月4日に「山陽新幹線の付帯工事にかかわる埋蔵文化財の取扱いについて」早急に協議するよう国鉄に対して公文を出したところ、6月14日付で協議があり、分布調査の結果が調査対象にあがってきたものである。この中で緊急を要するものと、工事工程の変更にとまなう分をあわせて4地点が、年度当初の計画に割りこんできた。このために、年度後半は調査地点が目白押しに並んで調査能力を越えてしまい、国鉄の希望通りに調査が終了しない事態が出はじめた。総裁の開業繰上げ発言以来、工事工程を切詰めてきた国鉄からは、12月3日付で知事と教育長あて「山陽新幹線建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の促進について」調査完了希望工程をつけて要望が来るという状態であった。

このため、鳥ノ巣遺跡の調査を別府大学に委嘱した。ここは、古くから縄文土器が採集されて周知の遺跡であったが、近世以降に墓地が営なまれた跡で遺構は完全に破壊されていた。これとともに年度末にやっと調査に着手できた43-2・54-1の両地点から大した遺構が検出されなかったことでやっと今年度を乗りきるとともに、新幹線関係遺跡調査の最初のヤマを越えたという感じを持った。

序 文

門田遺跡発掘調査指導委員会 昭和47年度の門田遺跡の予備調査で、この遺跡が各時代の遺構をもちかつ広大なものであることを考慮して調査の万全を期すために発掘調査指導委員会を設置した。委員会は、関係各分野の専門家で構成し、発掘調査の内容に応じて臨時委員を委嘱して、学術的視野にたつ指導・助言をうけようとするものである。昭和48年度に委嘱した委員は次のとおりである。

委員長	田 村 圓 澄	歴 史	九 州 大 学
副委員長	波 多 野 暁 三	考 古	福 岡 教 育 大 学
委 員	鏡 山 猛	〃	九 州 歴 史 資 料 館
同	岡 崎 敬	〃	九 州 大 学
同	森 貞 次 郎	〃	九 州 産 業 大 学
同	渡 辺 正 気	〃	九 州 歴 史 資 料 館
同	小 田 富 士 雄	〃	別 府 大 学
同	太 田 静 六	建 築	九 州 大 学
同	土 田 充 義	〃	〃
同	松 本 勲	木 材	〃
同	細 川 隆 英	植 物	第 一 薬 科 大 学
同	永 井 昌 文	解 剖	九 州 大 学
同	鳥 山 隆 三	地 質	〃
同	浦 田 英 夫	〃	〃
同	西 田 民 雄	花 粉 分 析	佐 賀 大 学
同	坂 田 武 彦	炭 素 年 代 測 定	九 州 大 学
同	筑 紫 豊	民 俗	福 岡 県 教 育 委 員 会

昭和48年度には、3回の指導委員会が開催されて、多くの指導・助言をうけたが、委員会の概要は次のとおりである。

第1回委員会 昭和48年6月28日（木）春日市上白水 上白水公民館および現場

出席：委員11名，文化課9名

1. 委員長・副委員長の選出および委員会の運営について
2. 発掘調査の経過報告
3. 遺跡の概要説明 門田遺跡・深原遺跡・観音山古墳群
4. 現場視察および指導・助言 門田遺跡・深原遺跡・観音山古墳群

第2回委員会 昭和48年12月7日（金）春日市上白水 上白水公民館および現場

出席：委員8名，文化課8名

1. 現場視察および指導・助言 原古墳群・門田遺跡・門田2号墳・柏田遺跡
2. 遺跡の概要説明 原古墳群・第33地点・門田遺跡
3. 発掘調査の現状と今後の問題点

第3回委員会 昭和49年3月23日（土）春日市上白水 上白水公民館および現場

出席：委員7名，文化課8名。

1. 現場視察および指導・助言 門田遺跡
2. 遺跡の概要説明 門田遺跡
3. 昭和49年度以降の調査予定と問題点

調査団の構成は次のとおりである。

深原遺跡発掘調査団（昭和47年度）

団 長 賀 川 光 夫（別府大学教授）

調査主任 橋 昌 信（〃 講師）

門田2号墳発掘調査団（昭和48年度）

団 長 角 田 文 衛（平安博物館館長）

調査主任 伊 藤 玄 三（〃 助教授）

調 査 員 甲 元 真 之（〃 助手）

鳥ノ巣遺跡（第34—2地点）発掘調査団（昭和48年度）

団 長 賀 川 光 夫（別府大学教授）

調査主任 橋 昌 信（〃 講師）

門田遺跡先土器包含地発掘調査（昭和48年度）

調 査 員 久 村 貞 男（佐世保市文化科学館学芸員）

同 萩 原 博 文（平戸市教育委員会）

福岡県教育委員会

総 括 教 育 長 森 田 實

教育次長 西 村 太 郎

文化課課長 古 川 善 久（昭和47年度）

同 森 英 俊（昭和48年度）

同 課長補佐 菅 隆

同 今 井 岩 男

庶 務 庶 務 係 長 姫 野 博

同 前 田 栄 一

主 事 小 川 浩 一 郎

序 文

発掘調査	主 事	植 田	實
	嘱 託	吉 村 源	七
	課長技術補佐	藤 井	功
	調 査 係 長	松 岡	史
	技 術 主 査	鶴 久 嗣	郎
	技 師	宮 小 路	賀 宏
	同	柳 田	康 雄
	同	井 上	裕 弘
	同	木 下	修
	同	前 川	威 洋
	同	馬 田	弘 稔
	九州歴史資料館技師 副	鳥 邦	弘
	調 査 員	櫻 井	康 治

なお、調査には、大城慧・坂本嘉弘・中島哲郎・森永弘太・和田利徳・安部保代・飯田直子・梅山朋子・松本ひとみ（以上深原遺跡調査団関係）、植山茂・大槻真澄・谷口俊治・寺田行夫・内藤善史・奥野都・三宅純子（以上門田2号墳調査団関係）、永峰文隆・日野裕之・町田利幸・森田考志（以上鳥ノ巣遺跡発掘調査団関係）、有吉朋行（西鞍山高校教諭）・実川順一（東京都調査員）・河野真知郎（上智大学大学院）・池辺元明（別府大卒）・石田広美（明治大卒）・肥山正秀（福岡大卒）・山口譲治（国学院大卒）・市川富久（東京教育大）・桑田和義（福岡大）・宮崎貴夫・松村恵司・森田徹・角井勉・会田明・内山政則・清水和美・和田むつみ・佐藤晴久・織笠明・川道寛・駒木洋子・迫かつみ・高橋和子（以上明治大）・元井茂・今井正晴・清水澄・女屋和志雄・丸山康晴（以上国学院大）・高橋龍三郎（早稲田大）・稲富裕和（法政大）・高田一弘・三津井知廣・渡辺和子の諸氏と、作業員として春日市・那珂川町・若宮町・久山町在住各位の協力があった。

日本国有鉄道下関工事局

昭和46年度

福岡工事事務所	所 長	滝 潤	清 実
	総務課長	綿 引	浩
	設計協議第1係長	鳥 谷	勝
	同 第2係長	吉 岡	才
	設計協議課員	高 谷	任
	用地課長	竹 元	繁

用地補佐	江	頭	光	雄
同 係長	松	野	忠	浩
同	最	所	勝	実
線増1 課長	田	代		博
同 補佐	上	杉	俊	直
同	山	中	伝 四	郎
線増第2 課長	原	口		修
停車場課長	長	安	智	重
同 補佐	若	松	安	志
同 企画係長	今	川	信	夫

昭和47年度

福岡工事事務所

所 長	滝	渕	清	実
次 長	清	水	影	明
総務課長	綿	引		浩
設計協議第2 係長	吉	岡		才
	高	谷		任
用地課長	竹	元		繁
同 補佐	吉	永	一	男
同 係長	谷	口	迪	夫
同	松	野	忠	次
線増第1 課長	田	代		博
	黒	木	正	典
同 補佐	横	山	正	博
同 係長	西	郷		弘
停車場課長	長	安	智	重
同 補佐	高	原	計	夫
同 第1 係長	石	倉		優

南福岡工事区

区 長	若	松	安	志
助 役	今	川	針	夫

若宮工事区

区 長	大	島	洋	志
助 役	岡	村	勝	己

同

直方工事区

助 役	一	木	憲	一
	田	中	濟	男

序 文

久山工事区	区 長	山 田 隆 廉
	技術助役	渡 辺 俊 雄
		松 尾 圭 介

(齋久嗣郎)

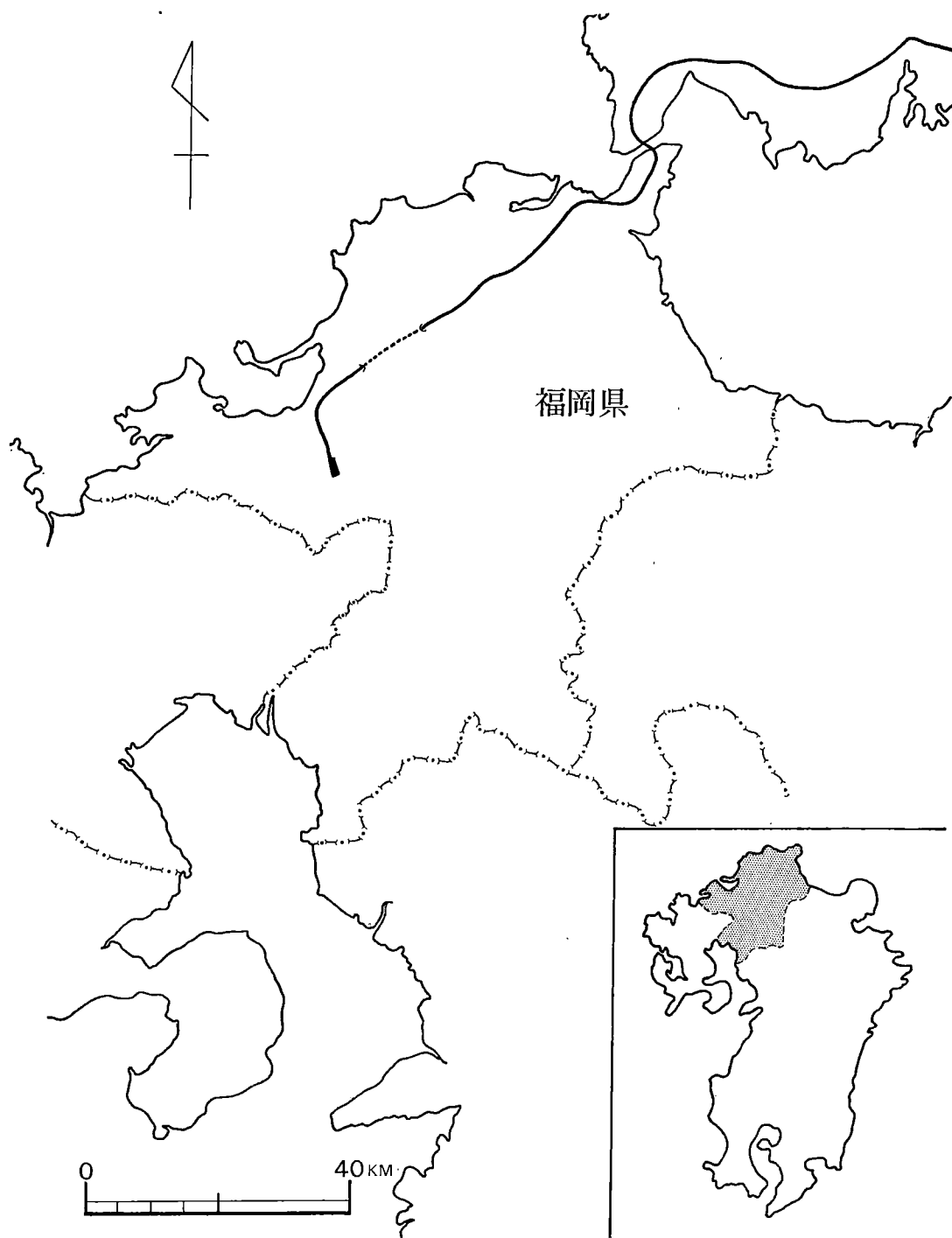
2. 鞍手地方の遺跡の環境

鞍手地方は、遠賀川の形成する筑豊平野の北西部を占め、西方から合流する犬鳴川の流域（宮田町・若宮町）、遠賀川河口付近で合流する西川の上流域（鞍手町）および遠賀川中流域の一部（直方市・小竹町）とから成っている。この地方は、福岡県の北半を東西に二分する三郡山地北半の犬鳴山地東斜面にあたり、西と南を4～600mほどの山地に限られているうえ、低平な丘陵が広く分布しているために、平野部はきわめて狭小なものになっている。遠賀川本流ぞいの直方市や小竹町でさえも、二大支流の彦山川と穂波川とが合流して山地から平野に出る部分にあたり、直方平野と呼ばれる沖積平野の南端部を占めるにすぎず丘陵がちである。また、直方市西郊の六ヶ岳（339m）から北西へ延びる標高150mほどの小山脈が西川と犬鳴川との分水界をなし、さらに西に延び犬鳴山地に連なって北方の宗像平野とを区切っている。したがって平野部は、西川上流部と、犬鳴川上流の若宮平野、同下流の宮田平野に区分されて、いずれも幅1kmほどの狭長なものとなり、若宮・宮田の両平野は盆地状をなしている。これら小平野と山地との間には、面積の半分におよぶ丘陵地が分布し、特に若宮平野の周辺には洪積台地の発達が著しい。

このように、平野部が比較的狭少な地域であるために集落も小さなものが散在し、開発の波に洗われることもなく、古墳以外の諸種の遺跡は数多く地下に眠っていることと思われる。最近の、山陽新幹線と高速自動車道の建設や、徐々に押寄せはじめた開発行為によって、それらの一部が明らかにされはじめた。

鞍手地方の縄文時代の遺跡は、おもに直方市から下流に分布している。遠賀川右岸の、直方市永満寺・上境地区の早期の散布地、植木地区の天神橋・光田両貝塚、西川流域の新延・木月両貝塚などの前期遺跡などで、下流にはさらに多くの貝塚を中心とする遺跡が分布している。犬鳴川流域では、若宮町竹原の山口川氾濫原で、流木にまじって後期の土器片が発見されており上流の鶴ヶ谷遺跡の石鏃の出土とともに、この平野にも縄文時代の遺跡が分布することを示唆している。

弥生時代の遺跡は、犬鳴川流域にもかなり分布している。宮田町下大隈遺跡の後期を中心とする土器群や、若宮町宮永の小型仿製鏡・同金丸の銅鉾などが知られ、高速自動車道建設にと



第 1 図 山陽新幹線の路線と博多車輛基地の位置 (1/1,000,000)

序 文

もなう発掘調査で、若宮平野北縁の丘陵上で中期から後期にかけての住居跡群が発見された。小原・柳ヶ谷・都地原Ⅲ地点遺跡などがそれである。遠賀川下流平野に発展した文化が中期以降支流の小平野へと進出してきたものと思われる。

古墳時代に入ると、若宮平野が他の地域にくらべて重要性をましてくる。古墳群が平野を囲んで分布し、現在知られているだけでも500基をこえるが、その多くが盗掘をうけ破壊されているのは惜しまれる。集落跡なども、最近の調査で明らかにされはじめた。

若宮平野は、西の犬鳴山地から伸びる稲光丘陵と竹原丘陵とによって大きく三分されている。平野の中央部にまで延びたこれらの丘陵の先端には、剣塚前方後円墳、帆立貝式の高野1号墳、竪穴式石室をもつと予想される八幡塚古墳などが立地し、平野東縁の丘陵上にある西ノ浦古墳や下有木古墳などとともに5世紀代に比定されている。6世紀中葉からは横穴式・複室をもつ史跡竹原古墳や、最近の発掘調査にかかる金丸古墳・汐井掛3号墳などがみられ、住居跡も高速自動車道関係の小原・咲花・都地原・柳ヶ谷の諸遺跡や新幹線関係の田尻遺跡などで発見された。さらに7世紀にかけて小原・汐井掛古墳群などが形成され、以後は平野周辺十数カ所に見られる群集墳の築造へと進むように思われる。

他の、宮田平野・西川上流域にも古墳群は散在するが、若宮平野ほどの規模も密度もない。鎧塚古墳群・新延大塚や遠賀川右岸の感田横穴群などが著名である。

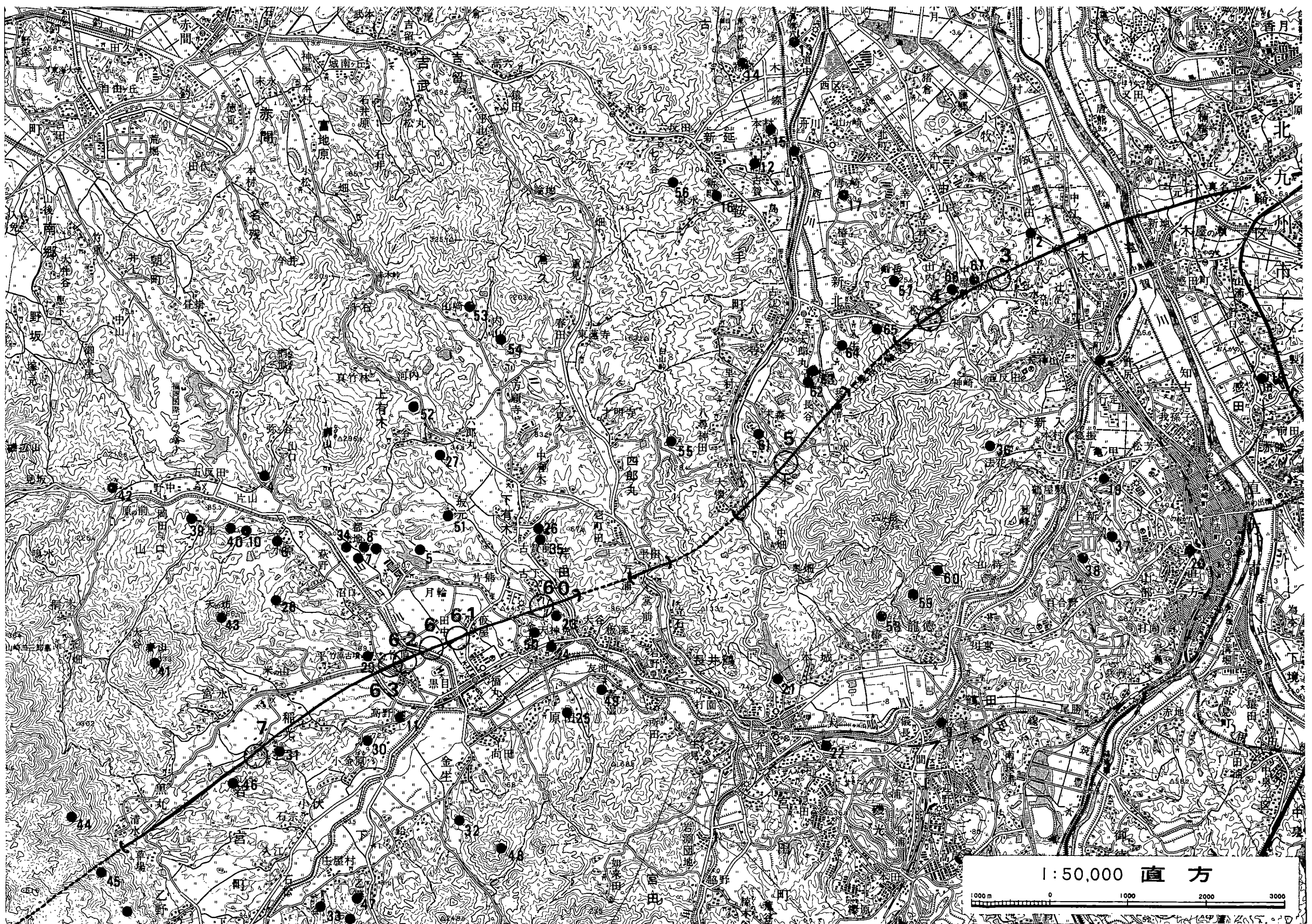
奈良時代の遺跡は皆無に等しかったが、最近の高速自動車道関係の調査で、若宮平野北縁の丘陵上でその存在が知られた。咲花遺跡の住居跡群や都地原・平原遺跡の倉庫跡群などがそれで、蔵骨器の出土とあわせて、その解明は緒についたばかりである。

このほか歴史時代の遺跡でめばしいものは、経塚と山城跡である。経塚は直方市西郊に3カ所、東郊に2カ所の分布が知られている。中世の山城跡は、若宮平野南方の犬鳴山(584m)に熊ヶ城跡、南方の笠置山(429m)に笠木城跡、西方の春山(333m)に宮永城跡が知られており、これに関連する出城・砦は、若宮平野周辺だけでも15カ所をこえる。他の地域にもあわせて10カ所以上が分布しているが、高速自動車道の建設にかかわって、若宮平野北西部で茶臼山城跡および館跡(遠園遺跡)の調査が進められており、その全貌が明らかにされつつある。

(齋久嗣郎)

表 1 鞍手地区主要遺跡地名表

番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	時 期	内 容	備 考
1	新 延 貝 塚	鞍手町新延字本村	微高地	縄 文	貝塚	
2	光 田 貝 塚	直方市植木字塚本	〃	〃	〃	
3	天 神 橋 貝 塚	〃 新入字中曾根	〃	〃	〃	
4	鶴 ケ 谷	若宮町小口字鶴ヶ谷	丘陵先端	〃	散布地	



第 2 図 鞍手地区遺跡分布図 (1/50,000) ○印は新幹線関係埋蔵文化財調査地点

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	時 期	内 容	備 考
5	柳 ケ 谷	若宮町水原字柳ヶ谷	丘 陵	弥生～奈良	集落跡	
6	小 原	〃 山口字小原	〃	弥生～古墳	〃	
7	都 地 原	〃 沼口字都地原	丘陵平地	〃	〃	
8	汐 井 掛	〃 〃 字汐井掛	〃	弥生～歴史	墳墓群	
9	上 大 隈	宮田町上大隈	河岸段丘	弥 生	包含層	
10	小 原 古 墳 群	若宮町山口字小原	丘 陵	古 墳	円墳80基	
11	剣 塚 古 墳	〃 高野字剣塚	丘陵先端	〃	前方後円墳	
12	鎧 塚 古 墳	鞍手町新延字本村	丘 陵	〃	円墳 5 基	県指定史跡
13	古 月 横 穴 群	〃 古門字兵丹	丘陵斜面	〃	刳抜横穴17基(装飾古墳)	国指定史跡
14	神 崎 古 墳 群	〃 新延字神崎	丘 陵	〃	前方後円墳・円墳・横穴	
15	京 畑 古 墳 群	〃 〃 字京畑	〃	〃	前方後円墳・円墳	
16	新延大塚古墳	〃 〃 字大塚	〃	〃	円墳(横穴式複室石室)	県指定史跡
17	殿 原 古 墳 群	〃 新北字殿原	〃	〃	円墳12基	
18	感 田 横 穴 群	直方市感田字麦隈	〃	〃	横穴	
19	八 竜 古 墳	〃 上新入字八竜	〃	〃	円墳	
20	多賀神社横穴群	〃 山部字多賀神社	丘陵斜面	〃	横穴 3 基	
21	浦 宮 古 墳 群	宮田町本庄字浦宮	丘 陵	〃	円墳 2 基	
22	上屋敷横穴群	〃 上大隈字上屋敷	〃	〃	横穴 3 基	
23	浦 原 古 墳 群	若宮町金丸字浦原	〃	〃	円墳16基	
24	天神山古墳群	〃 字天神山	〃	〃	〃 4 基	
25	大 浦 古 墳 群	〃 原田字大浦	〃	〃	〃 17基	
26	下有木古墳群	宮田町下有木	〃	〃	〃 9 基	
27	百 塚 古 墳 群	〃 上有木字向の畑	〃	〃	〃 56基	
28	沼 口 古 墳 群	若宮町沼口	〃	〃	〃 15基	
29	竹 原 古 墳	〃 竹原字諏訪神社	丘陵先端	〃	装飾古墳	国指定史跡
30	高 野 古 墳 群	〃 高野	丘 陵	〃	円墳10基	
31	稲 光 古 墳 群	〃 稲光字沖	〃	〃	〃 3 基	
32	上金生古墳群	〃 金生字上金生	〃	〃	〃 8 基	
33	庄屋村古墳群	〃 下字庄屋村	〃	〃	〃 11基	
34	咲 花	〃 沼口字咲花	丘陵平地	奈 良	集落跡	
35	平 原	宮田町芹田字平原	〃	〃	倉庫跡	
36	法 花 寺 経 塚	直方市下新入字法花寺	丘 陵	中 世	経 塚	
37	広 江 経 塚	〃 上新入字老谷口	〃	〃	〃	
38	高 尾 山 経 塚	〃 〃 字鴨生田	〃	〃	〃	
39	遠 園	若宮町山口字里	丘陵平地	〃	建物跡	
40	茶 臼 山 城 跡	〃 〃 字里・小原	丘 陵	〃	山城跡	
41	宮 永 城 跡	〃 宮永	山 頂	〃	〃	
42	明 専 寺 城 跡	〃 野中	丘 陵	〃	〃	
43	天 の 坊 城 跡	〃 天の坊	山 頂	〃	〃	
44	清 水 城 跡	〃 清水	山 地	〃	〃	

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立 地	時 期	内 容	備 考
45	草 場 城 跡	若宮町乙野草場	山 地	中 世	山城跡	
46	稲 光 城 跡	〃 稲光	山 頂	〃	〃	
47	下 村 城 跡	〃 下字乙藤	丘 陵	〃	〃	
48	鬘 鏡 山 城 跡	〃 金生字鬘鏡山	山 頂	〃	〃	
49	友 池 城 跡	〃 原田字友池	丘 陵	〃	〃	
50	金 丸 城 跡	〃 金丸	丘 陵 上	〃	〃	
51	城 崎 砦 跡	宮田町坂元字城崎	〃	〃	砦 跡	
52	上 有 木 城 跡	〃 上有木字井堀	〃	〃	山城跡	
53	山 崎 城 跡	〃 山崎	山 地	〃	〃	
54	内 山 城 跡	〃 内山	〃	〃	〃	
55	白 山 城 跡	〃 白山	山 頂	〃	〃	
56	新 町 城 跡	鞍手町新延字乙ヶ谷	尾 根 上	〃	〃	
57	剣 岳 城 跡	〃 中山字御山	山 頂	〃	〃	
58	祇 園 山 城 跡	宮田町竜徳字城山	〃	〃	〃	
59	竜ヶ岳城跡	〃 〃 字竜ヶ岳	〃	〃	〃	
60	稲 筑 城 跡	〃 〃 字門の内	〃	〃	〃	
61	段 ノ 上	鞍手町室木字段の上	丘 陵	古 墳	散布地	
62	高 木 古 墳 群	〃 新北字高木	〃	〃	円墳10基程度	
63	高 木	〃 〃 字高木長家	〃	弥生・古墳	住居跡・墳墓群	
64	向 山	〃 〃 字向山	〃	〃	袋状堅穴・円墳4基	
65	音 丸 城 跡	〃 〃 字音丸	〃	中 世	山城跡	
66	中 屋 敷	〃 中山字中屋敷	丘陵平坦地	弥生・古墳 中世・近世	集落跡・墳墓群・建物跡	
67	後 牟 田	〃 〃 字後牟田	丘 陵	中 世	散布地	

3. 春日・那珂川地区の遺跡の環境

福岡平野は東を三郡山地に、南と西を背振山地で限られ、北は博多湾に面している。南と西を限る背振山地はその山麓に多くの丘陵を発達させ、標高 292m の片縄山を中心とする片縄丘陵、標高 100m の鴻ノ巣山を中心とする平尾丘陵（独立丘陵）、標高 169m の観音山から北にのびる春日丘陵などを形成している。東を限る三郡山地には、その派生山塊である四王寺山（標高410m）を中心として北に長くのびる月隈丘陵を形成し、平野部を限っている。

これらの丘陵の間には、標高30～40mの台地が多く発達し、それより一段低いのが、現沖積面より一段高い沖積段丘面（その大部分が河岸段丘）標高 4～15m程度の微高地が日佐付近を中心に形成されている。

平野の西側山麓部には蛇行しながら那珂川が、東に御笠川がそれぞれ南北に貫流し、下流域に広大な沖積平野を形成している。背振山の東に源を発する那珂川は、五ヶ山・南畑と狭い山

間を蛇行しながら流れ、安徳付近で平野に出る。ここから北へ河岸段丘と広大な沖積平野をつくり、博多湾に注いでいる。また、二日市に源を発する御笠川は、三郡山地の山麓に沿って流れ御笠川低地帯をつくる。そして同山地と背振山地を二分し、福岡平野の東部を貫いて博多湾に注ぎ、流域に広大な沖積地をつくっていく。遺跡は、これらの丘陵・台地・河岸段丘面に集中し、先土器時代から歴史時代にわたっている。那珂川と御笠川の両河川によって形成された広大な沖積平野のほぼ中央部に、国鉄は山陽新幹線を南北に走らせ、平野の奥部にあたる那珂川町中原、春日市上白水付近に、500,000 m^2 にわたる広大な博多車輻基地を建設した。

基地は前記した観音山山麓を最奥とし、そこから派生する春日丘陵と那珂川の支流である梶原川が形成した沖積地、河岸段丘面にわたって建設された。基地内の遺跡は60地点にのぼり、福岡県教育委員会は昭和46年から事前調査を行い、現在も継続中である。

先土器時代から歴史時代にわたる多くの生活跡・墓地等が発見され、その内には観音山古墳群・深原遺跡・井手ノ原遺跡・原遺跡・門田遺跡をはじめとする多くの貴重な大遺跡群を包蔵していた。

ここでは基地内遺跡を中心に北を福岡市南部、南を那珂川町安徳、大野城市牛頸付近、東を太宰府町成屋形付近、西を福岡市皿山、那珂川町後野付近に限り、周辺の遺跡群を時代別に概観したい。

先土器時代遺跡としては福岡付近では、近年まで顕著な発見はなかったが、はじめて基地内の門田遺跡の調査によってナイフ形石器・細石器をはじめ多くの資料が発見された。縄文時代遺跡としても、それまで断片的であったが、基地内の深原遺跡・柏田遺跡をはじめとする大集落跡の発見は、それまでの資料を圧するものであった。

弥生時代遺跡としては、奴国の中心とされる須玖・岡本遺跡をはじめ、多くの青銅器類を副葬埋蔵した遺跡群が春日丘陵を中心に集中している。また、この時期には平野部全域の丘陵・台地・河岸段丘面に遺跡が拡大していく。基地内で発見されたこの時期の重要な遺跡として門田遺跡・原遺跡がある。

古墳時代遺跡としては平野の南西最奥部に前期の安徳大塚古墳（前方後円墳）・炭焼古墳群、片縄丘陵には油田古墳群・恵子古墳群、福岡平野最大の前方後円墳で、竪穴系横口式石室に、多くの副葬品を包蔵していた著名な老司古墳、さらに後期の群集墳の白石古墳群がある。また、春日丘陵には基地の最奥部に、数百基を数える後期の観音山古墳群がある。今回、その北端が基地建設により破壊され、31基の古墳群を調査した。この時代の集落遺跡は顕著な発見がないが、最近の調査によって門田遺跡・柏田遺跡・安徳中原遺跡をはじめとする多くの遺跡が台地や低位な河岸段丘面から発見されつつある。須恵器の窯跡としては牛頸の丘陵の入りくんだ谷間を利用して100基近く形成されている。

歴史時代遺跡としては、東方約7kmの地におかれた大宰府に関連する防衛のための施設の一

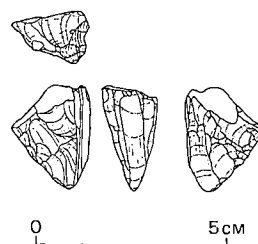
序 文

部が、春日丘陵の支谷を仕切る形で上大利・大土居・天神山に小水城がつくられている。また、7世紀中頃から8世紀にかけての瓦窯跡群として大浦・春日平田・ウトロ・老司・三宅等が群在している。他に、かつて上白水廃寺とも呼ばれた上白水遺跡・三宅廃寺などもある。

平安時代から中世までの遺跡としては、今まではっきりしたものはないが、今回発見された門田遺跡・井手ノ原遺跡にみられる集落跡や那珂川平野南端にそびえる城山にある安徳城跡などが著名なものである。
(井上裕弘)

(1) 先土器・縄文時代の遺跡

2 天神池前 春日丘陵の一支丘上に立地する地点よりマイクロコア（第3図）が表採されており先土器時代遺跡が想定される。マイクロコアは黒曜石を原材とするもので、舟底型に属するタイプである（註1）。



第3図 天神池前細石核（ $\frac{1}{8}$ ）

3・22 柏田遺跡 標高21～22mの那珂川の河岸段丘上の微高地に立地する。山陽新幹線車輛基地建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1973年11月）では縄文時代後期北久根山式土器を伴う住居跡が発見された（註2）。また車輛基地側道付設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1975年2～5月）では縄文時代後期北久根山式土器を伴う住居跡が新たに5軒検出され住居跡群を構成することが判明し、縄文時代晩期のV字溝の検出、および先土器時代の遺物の出土もみられた（註3・4）。詳細は正式報告の予定である。

13 安徳中原遺跡 梶原川の右岸で標高25m位の那珂川の河岸段丘上に立地する。中原集落北方の区画整理事業に伴う那珂川町教育委員会の発掘調査（1974年11月）で縄文時代晩期の条痕文土器が多数出土した。

14 鳥ノ巣遺跡第2地点 観音山塊の北方に延びる高位段丘の標高35m位に立地し中原部落の墓地付近に位置する。福岡県教育委員会が山陽新幹線車輛基地建設に伴う発掘調査を1972年夏と1973年春に実施した。縄文時代後晩期の Pit 群が検出されている（註5）が詳細については報告書に譲る。

15 深原遺跡 観音山山麓の傾斜変換点付近の扇状台地に立地する。福岡県教育委員会が1973年3～8月に発掘調査を実施した。縄文時代早期から晩期にわたる遺物が出土し、殊に早期押型文土器が多数出土した。詳細は報告書に譲るが縄文時代の遺物を出土する井手ノ原遺跡も同一に把握すべき遺跡である（註2・5）。

28 春日原基地内遺跡 旧米軍板付基地内で国鉄白木原駅の西方約400mの地点、牛頸川の河岸段丘上に於いて縄文時代前期と後晩期の遺物が出土している（註6）。

17 瀬戸第2地点 梶原川の左岸で、観音山麓の迫る箇処にあたる河岸段丘の崖から土器片が表採でき、遺物包含層の可能性を有す。土器は縄文時代後晩期に属するもので条痕文土器（第4図1～3）である。

19 瀬戸第4地点 梶原川の左岸で瀬戸集落と下梶原集落のほぼ中ほどの丘陵斜面の崖から土器を表採した（第4図4～6）。

(4)は、橢円押型文土器の胴部破片で口縁部に近い部分まで残されている。色調は暗黄褐色を呈し胎土・焼成ともに良好で胎土への混入物はみられない。外面は $8 \times 4 \text{ mm}$ 程度の橢円文の原体を横方向に回転させ、内面上部は $2 \sim 3 \text{ mm}$ の間隔で縦方向に沈線を並列施文している。口縁部が外反し胴部が張る器形で深原遺跡の例と類似する。

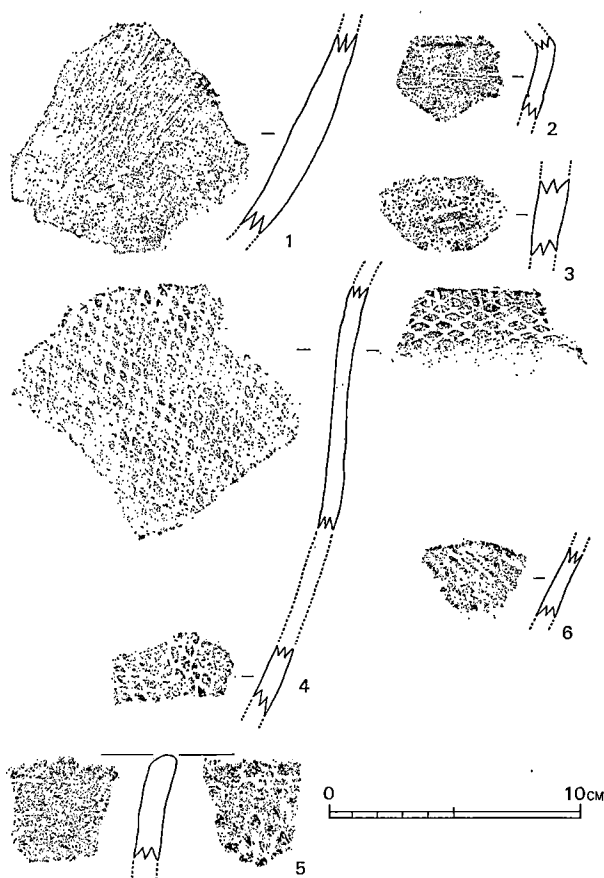
(5)は橢円押型文土器の口縁部破片

で、黄褐色系の色調を呈し胎土・焼成ともに粗雑である。口縁部はやや外反し口唇部はやや波状を呈す。外面は剥脱のための文様が不明瞭であるが、内面はややくずれた状態ながら斜め方向に橢円文を回転押捺している。これも深原遺跡の例と類似する。

(6)は条痕文土器の胴部破片で、胎土は粗であるが焼成は良好で暗黄褐色を呈す。縄文時代後晩期に属するものと考えられる。

23 門田遺跡 那珂川の高位段丘上とそれを刻む谷部に位置する。山陽新幹線車輛基地建設に伴う福岡県教育委員会の発掘調査（1972年7月～1975年10月）で、先土器時代の細石核・細石刃等と縄文時代早期・前期・晩期の遺物が出土した。またこの遺跡は先土器・縄文時代のみならず弥生時代・古墳時代・歴史時代にわたる濃密な複合遺跡でもある（註2・3・4）。詳細については正式報告の予定である。

先土器時代・縄文時代の遺跡分布は、那珂川流域・牛頸川流域の標高 $20 \sim 50 \text{ m}$ の段丘上に集中する傾向があり、那珂川流域においては河岸段丘上に立地しながらも右岸の支流梶原川沿い



第4図 瀬戸第2、第4地点出土土器実測図（ $1/3$ ）

序 文

に殊に集中する。梶原川流域の分布調査が他の地域に比して密であったとも考えられるが、この地域が氾濫原の要素の強い那珂川本流沿いよりも生活地として適当な段丘であったことにも起因すると考えられる。

各遺跡は時期的に早期と後晩期が顕著で、前中期の遺物の発見も皆無ではないが僅少である。早期の遺跡は比較的高い段丘上にみられ、生業関係用具としては石鏃等の狩猟活動関係の用具が主である。後・晩期の遺跡は比較的低い段丘の平坦地に主にみられ、生業関係用具としては石鏃等の狩猟活動関係用具と伴に石斧・石皿・磨石等の植物質食料採集活動関係用具がみられる。また柏田遺跡には石錘の出土があり漁撈活動も考えられる。

当該地域付近では縄文時代集落の存在が従来稀薄であるとみられていたが、柏田遺跡の如く水田面下にも遺構の存在することが判明し今後の遺跡分布を考える上でのひとつの示標となるであろう。また深原遺跡・柏田遺跡等に集落の存在も確認できており、後背地としての丘陵斜面や河川を擁した集落の生活環境を想定することも可能であろう。弥生時代以降の開削による地形変更等によって縄文時代集落が破壊された可能性は高いが、歴史的変遷・生活環境の復原のためにはこれ以上の環境破壊を避けたい地域である。

(小池史哲)

(2) 弥生時代の遺跡

わが国における2000年前の社会機構、とりわけ北部九州におけるそれは、墓制によって特徴づけられる。特に甕棺墓においては、特異な成立過程を展開し、弥生時代後期において発展的解消へと導いた事象は、弥生時代の社会機構の流動性及び激動性を物語っている。甕棺墓制の終焉は、北部九州における弥生人の墓制に対する新たな方向性を導き出す社会意識の変革にはかならない。その中にあって春日市及び那珂川町周辺は、甕棺墓の宝庫であり、当時の墓制の志向性を具現化している。それは、過去の華麗さの中にも、地味でしかも着実な歴史の歩みを我々に物語る。そこには当時絶大な権力機構の中枢に位置した、須玖・岡本遺跡が上げられる。その他、伯玄社遺跡・西方遺跡・一の谷遺跡・立石遺跡・宮下遺跡・門田遺跡・原遺跡等がそれを示している。弥生時代後期にいたっては、甕棺墓から継承される墓制として箱式石棺墓・石蓋土壙墓・土壙墓等がある。これらは墓制に対して社会意識の変革を媒介とした結果にかならない。墓制が変貌していく過程で、画一化された甕棺製作が衰退の一途を辿る。その中にあって、日常什器の転用による小児用甕棺が継続されている。成人用甕棺の画一化された墓制形態の崩壊に対して、それが小児墓制にまで浸透することなしに、一部では画一化された墓制から簡略化された墓制＝日常什器による転用として継承されていったのであろう。そこに小児用甕棺の残存が窺えよう。

また周辺の遺跡で主な集落跡を見ると、大南・弥永原・竹ヶ本遺跡が上げられる程度で発見

例は少ない。これらの集落跡で特徴的な点は、全てに空濠が伴っているという事である。これらはほぼ同一時期に比定されている。これらの集落形態をどの様に考えるかは今後の課題であるが、激動期における集団間の緊張状況を示すものとして上げられよう。

38 弥永原遺跡 遺跡は福岡市大字弥永原に所在し、水田から比高 8.5 m の中位段丘に位置している。遺構としては、空濠・竪穴住居跡・土墳墓・柱穴が検出されている。空濠は弥生時代後期の所産で、北々東から南々西に走る。竪穴住居跡は 6 軒検出されている。土墳墓は 2 基検出されている。遺物の中には、空濠からガラス製勾玉の鋳型が出土している（註 7）。

63 一の谷遺跡 遺跡は那珂川と御笠川の間に延びる春日丘陵に位置し、春日市大字下白水字一の谷に所在する。昭和 43 年に土取り場で破壊寸前に筑紫郡春日町教育委員会が緊急調査を実施した。

遺構は甕棺墓 29 基が検出された。その内小児用甕棺 6 基、壺棺 1 基である。土墳墓は 19 基、石蓋土墳 1 基・木棺墓 2 基・箱式石棺墓 1 基・溝状遺構 4 条である。出土遺物は 4 号土墳墓から磨製石ノミが出土し、箱式石棺からは、鉄剣 1 口が出土している（註 8）。

68 高辻遺跡 春日丘陵中央部に形成された高辻遺跡は、春日市大字小倉字高辻に所在する。昭和 45 年 3 月に春日市スポーツセンター用地として買収されることになり、同 46 年 9 月から春日市教育委員会が発掘調査を実施した。遺構としては、B 地区において甕棺墓が 31 基、溝状遺構 4 条が検出された。31 基の内訳は、18 基が成人用、11 基が小児用、甕棺抜き跡が 2 基である。C 地区では、甕棺墓 8 基・土墳墓 8 基を検出した。甕棺墓 8 基の内 1 基が小児用である。周辺には集落遺跡の存在が確認されており、集落と墓域との相互関係も興味深い（註 9）。

69 大南遺跡 遺跡は春日市大字小倉字大南に所在し、春日丘陵上に位置する。昭和 35 年 3 月の発掘調査で V 字溝から高さ 10 数 cm の小銅鐸が発見された。その後、第 5 次調査まで実施され、弥生時代中期から後期末の大集落が検出された。第 5 次調査では、第 1 次調査で発見された V 字溝の延長の調査が実施され、丘陵斜面に沿って西側へ延びることが確認された。竪穴住居跡の軒数は今迄に 104 軒が確認されているが、総数としては 130 軒以上あったと思われる。今迄の調査では、鉄製品がかなり出土し、第 4 次調査では弥生時代後期の住居跡から銅戈と思われる鍔片が出土している（註 10）。

72 伯玄社遺跡 本遺跡は弥生時代の甕棺所在地として早くから知られていたが、春日市公民館の建設の為、春日市と福岡県教育委員会が昭和 41 年から 42 年にかけて発掘を実施した。遺跡は春日市大字小倉字伯玄町に所在する。須玖丘陵の東面に突出した花崗岩のバイラン土を基盤にした一支丘に位置し、水田面からの比高は約 11 m 程である。

検出された遺構は、竪穴住居跡が丘陵西南部で 3 軒、丘陵上全面に土墳墓 36 基、石蓋土墳墓 13 基、甕棺墓 133 基以上である。遺物は土墳墓から朝鮮半島に普遍的に見受けられる磨製石鏃 6 本が副葬品として出土した（註 11）。

77 西方遺跡 春日丘陵の北部、竹ヶ本遺跡東部 250 m に位置する。昭和 36 年の竹ヶ本遺跡の

序 文

発掘調査の最中、ブルドーザーの削平により銅鉾10本が出土した。ここは比高5.6mの丘陵の北側斜面に弥生時代中期の包含層があり、銅鉾は中期包含層の上層から出土した。埋置状態は、長さ1m、幅40cm、深さ20～30cmの長方形の遺構であったようだ(註13)。

85 須玖・岡本遺跡 遺跡は春日丘陵の北端、熊野神社の下方台地標高約21mに位置する。本遺跡は、明治32年に発見された支石墓から前漢鏡30数面・細形銅剣・銅戈・銅鉾8口以上・ガラス璧・ガラス勾玉・管玉が発見された。現在支石墓に使用された大石は、熊野神社に置かれる。

昭和4年には京都大学によって、11基の甕棺が発掘された。その内の1基から細形銅剣1口が出土している。その後、昭和37年に九州大学を主力とする発掘調査が実施された。その結果19基の甕棺墓と3基の土墳墓が検出された。出土遺物は細形銅剣1口・細形銅戈1口・銅釧1・鉄刀1・ガラス勾玉1・ガラス小玉38である。現在遺跡は壊滅状態である(註12)。

88 竹ヶ本遺跡 遺跡は比高20～30mの春日丘陵の一支丘に位置する。遺跡は、弥生時代から古墳時代にかけての堅穴住居跡が30軒近く確認されている。弥生時代の住居跡群の廻りには、空濠が掘られていた。遺物は、土器(特殊器台も含む)、石器の他、砥石・鉄器がかなり出土しており、鉄器の使用がかなり普遍的であったことを示している(註13)。(佐々木隆彦)

(3) 古墳時代の遺跡

春日・那珂川周辺は奴国の中心で、弥生時代遺跡の宝庫として注目を集めてきた。そのため、古墳時代の遺跡はあまり注意されていなかった。たとえば、この地域の前方後円墳の発見数からいっても、昭和41年以前は那珂川右岸で3基、左岸で老司古墳1基のみであった。ところが昭和41、42年の炭焼古墳群及び油田古墳群の調査に伴って分布調査を実施したところ、新たに右岸に安徳大塚古墳、左岸に前方後方墳らしき1基を含む6基を発見することができた。その後、権現塚古墳に装飾を確認するやら、近年の分布調査によって、多数の古墳群を発見すると共に、那珂川右岸にさらに前方後方墳1基、前方後円墳1基を確認した。また、牛頸川に面した前方後円墳1基を含む塚原古墳群の発見も大きな成果で、やっとこの地域の古墳時代の一部が明らかになりつつある。油田古墳群の調査で、これらの古墳の編年を試みたことがあったが(註14)、主要古墳の実体が不明なうえ、調査された主要古墳も公表されていないため推論でしかありえなかった。

近年これら主要古墳の測量を行なっているので、随時まとめていくつもりである。

次に一部の主要古墳の概要を紹介する。

92 卯内尺古墳 旧秋月藩士江藤正澄の自筆本『福陵雜纂』三に那珂郡老司村卯内尺で、明治20年10月に発見された三角縁三神三獣鏡がみえるが、これは最初老司古墳のものではないかと思われていた。しかし、これは老司古墳の西北約200mのところにある粘土槨をもつ円墳から

発見されたものであることが判明した。これが卯内尺古墳である（註15）。

93 老司古墳 昭和41年から3回にわたって、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会の委嘱によって九州大学で発掘調査を行った。福岡平野最大の90mをこえる前方後円墳で、後円部に3基前方部に1基の石室が発見された。石室の構造は「竪穴式石室の形式をおそっているが横口となり、追葬に便利な横穴式石室初現の形式」である。墳丘の周辺部は著しく削平されているので、平面プランは不明なところが多いが、河原石による葺石と、壺形の埴輪が確認された。

出土遺物は、第1号石室から農具（鋤先1・鎌2）、工具（斧3・鉈5・刀子14・蕨手刀子12・砥石1）、武器（刀1・剣4・鉄鏃多数）、装身具（硬玉製勾玉2・小形扁平滑石製勾玉24以上・碧玉製管玉48・小玉多数・櫛1）、鏡（舶載方格規矩鏡1）、土器（土師器器台1）、棺外出土遺物（手鎌2・櫛1）。

第2号石室からは、人骨（男性人骨2体）、武器（剣3・鉄鏃多数・三角板革綴短甲1）、鏡（仿製変形文鏡1）、その他（尾錠1）。

第3号石室からは、農具（鋤先4・鎌3）、工具（斧11・鉈6・鑿4・鋸1・刀子10・蕨手刀子5・鹿角柄3・砥石1）、武器（刀8・剣7・矛3・短甲1・鉄鏃多数）、装身具（硬玉製勾玉7・碧玉製管玉115・ガラス製管玉1・硬玉製環玉1・小玉1・金環2・櫛1）、鏡（舶載方格規矩四神鏡1・舶載方格規矩鏡2・舶載君宜高官内行花文鏡1・舶載小形重圈文鏡1・舶載三角縁神獸鏡片1・仿製内行花文鏡2）、土器（土師器盤1・土師器片1）、その他（鎖状鉄製品4）。

第4号石室からは、人骨（男性成年人骨1体・男性熟年人骨1体・性別不明左上腕骨1本）・農具（鎌1）、工具（斧1・鉈3・刀子3・鹿角装刀子1・鹿角装不明工具1・錐状鉄器1）、武器（剣4・矛1・鉄鏃10）、装身具（小形扁平勾玉42・櫛3）、土器（土師器器台1）がある（註16）。

96 観音堂古墳 割合平坦な丘陵の東縁にあり、すぐ東下に那珂川がせまっている。墳丘は一見前方後方墳をしており、低い前方部は北を向き、後方部は現状では2段築成の状況が明らかである。全長約26m、後方部径約17m、前方部先端幅約6m、後方部高さ約2.5m、前方部高さ約0.5mの小型のものである。前方部があまりにも低く小さいので、前方部と思われるところが、別個のもので、ただの方墳である可能性があるが、段築があるところから、方形周溝墓のような簡単な方形墳ではないと思われる。主体部の構造は不明である（註14）。

97 権現塚古墳 平坦な丘陵の最も高い所に位置した円墳である。宅地造成により最初南半分を失なったが、北半分には周濠、周堤をよく残していた。墳丘径約27m、高さ約4m、周濠幅約4m、周堤幅約6m、高さ約4mあり、宅地造成以前に石室は破壊されていたらしいが、南半分が破壊された時に石材が露出したらしく、3m×1.5m、厚さ0.4mほどの花崗岩が3個周濠内に置いてあった。これから見て、大石を利用した横穴式石室であったらしい。ところがそ

序 文

の後、北半分も宅地造成にかかり、完全に消滅してしまった。この時露出していた大石が移動し、下になっていた面に赤色顔料による装飾文様があることが明らかになった。文様は不鮮明で、1個の同心円が明らかなだけで、他に2個ほどある文様は不明である。福岡平野で初の装飾古墳であるが残念なことである。現在石材是那珂川中学校の校庭にある（註14）。

98 浦ノ田古墳群 大半是那珂川町大字片縄字浦ノ田に属するが、4号の前方後円墳の一部が福岡市大字老司に属する。昭和43年12月に宅地造成にかかったために、昭和44年1月にかけて国土館大学によって発掘調査された（註14）。

100 小丸古墳群 字小丸および字丸口にわたって構築された小型前方後円墳2基、円墳6基からなる古墳群である。石室構造は横穴式石室と思われるが、破壊されたものが多い。1号の前方後円墳から円筒埴輪片を採集した。現在は半壊した1号墳のみ現存し他は消滅した（註14）。

105 妙法寺古墳 那珂川の左岸に面した狭長な丘陵の尾根の頂部に位置する小型前方後円墳、全長約25mの北向きと思われる。石室は主軸に平行して、南側向きの横穴式複室である（註14）

106 油田古墳群 那珂川左岸の標高48mの帯状丘陵上にある5基の古墳群である。1号は径約18mの円墳で、長さ4.2mの木棺の側壁を粘土で固めたものを主体部とし、内行花文鏡片を副葬していた。盗掘の上げ土の中から土師器片・鉄鏃片、周溝から鉄斧が検出された。2号は一辺約8.5mの方形墳で箱式石棺を主体部としている。枕付近から刀子1・竖櫛1が検出された。3号も一辺約11.5mの方形墳で、主体部は1号と同様である。主体部に刀子1を副葬していた。4号も一辺約9mの方形墳で、割竹形木棺を主体部とし、刀子1を副葬していた。V字形の周溝から土師器の壺が発見された。5号は主体部の不明な小型円墳である。築造年代は、4世紀後半から5世紀初頭に位置づけられよう（註14）。

107 大万寺前古墳 妙法寺古墳・油田古墳群と同じ丘陵上に築造された小型前方後円墳である。前方部は北東を向き、後円部に南東向きの横穴式石室を有するが、盗掘により天井石を取られている（註14）。

114 安徳大塚古墳 古墳は、那珂川の上流の福岡平野の奥まったところで、那珂川の右岸に背振山系からのびた標高50mから80mの丘陵があり、この尾根上に面している。

昭和46年5月に行なった予備調査の結果、墳丘全長64m、後円部径約35m、高さ約6m、前方部幅約20m、高さ約2mの前方後円墳で、葺石があることが判明した。主体部は盗掘されていたが、朱の付着した礫と粘土の発見から礫床粘土槨であることが明らかになった。後円部の盗掘坑から円筒埴輪片、前方部のトレンチから焼成前に底部を穿孔した複合口縁の壺形土器が発見されている。

墳丘形態からいっても福岡平野で最も古い前方後円墳であろう（註17）。

119 炭焼古墳群 標高50～60mの丘陵の尾根上に築造された古墳群で、昭和42年に1支群を調査した。1号は調査前に破壊されたが、内部主体は箱式石棺2基であつたらしい。2号は一辺約

8 mのいわゆる方形周溝墓で、箱式石棺墓2基、土墳墓1基の主体部からなっていた。1基の石棺から2体の人骨が発見され、合計4体が埋葬されていたことになる。周溝から土師器片が検出された。3号も一辺約6 mの方形周溝墓で組合式木棺を主体部とし、棺外に鉋1を副葬していた。周溝内から鉄斧1と土師器が発見された。4号も一辺約5 mの方形周溝墓で、小型の石蓋土墳墓を主体部としていた。周溝内から土師器が発見された。5号は径約20 mの円墳と思われるもので、内部主体の小形竪穴式石室には、鉄剣・鉄鏃・刀子を副葬し、周溝からは有孔円板・刀子・土師器高杯9が発見された。6号は小型の箱式石棺で、墳丘や周溝は不明（註18）。

126 ウトロ古墳 ^{グチ} 標高53 mの舌状丘陵の尾根線に構築された前方後方墳で、墳丘の約3分の2が1度開墾され、著しく原状を失っているが、墳丘の南側で、くびれ部から後方部の南側コーナーには明らかに稜線が残り、前方後方墳の特徴をよくとどめている。墳丘測量の結果、全長約30 m、後方部一辺約21.5 m、前方部長約8.5 m、前方部幅約9 mの大きさで、後方部高さ約2.5 m、前方部高さ約1 mをしている。後方部は現状では、2段築成の状況がうかがえるが、低い前方部に明らかに2段築成があるので、後方部は3段築成になるものと思われる。主体部は不明であるが、古式古墳の範疇に含まれるものと思われる。また、同一丘陵の先端に1基と北東側の同様な丘陵の尾根上にも2基の低墳丘の古墳があり、墳丘外と思われるところから土師器の壺棺も発見されている（註19）。

128 原古墳群 「油田古墳群」に掲載した原古墳は、所在地点が完全に違っていた。円墳で竪穴式石室から短甲・鉄剣・鉄斧等が出土したのは間違いないが、所在地は春日市大字上白水字原で、山陽新幹線関係遺跡の第33—1地点（原古墳群）であることが明確になった（註14）。

131 天神山古墳 標高49 mの小さな独立丘陵の頂部に構築された南向きの前方後円墳で、墳丘測量の結果、全長約35 m、後円部径約20 m、前方部幅約17 m、くびれ部幅約12 m、後円部高約3 m、前方部高約2 mの小型のものであることが判明した。後円部には横穴式石室があるらしく、天井付近が一部開口している。前方部に2段、後円部に3段の段築がみられる。前方部南西側に半壊した円墳1基がある（註19）。

135 須玖古墳群 春日市大字須玖字野藤 1844の1番地の無量寺境内の墳丘は現在確認できないが、円筒埴輪片が散布しているものを1号墳とする。無量寺の西側入口の両側に古墳の周溝らしい断面が露出しており、この中に多くの円筒埴輪片が含まれている。周溝のカーブから相当大きな古墳であることがわかる。さらに納骨堂のところに畳3～4枚敷の花崗岩の巨石があったというから石室の石材と思われる。2号墳は山の神と称し、1号墳の南側にあり、四方を道路、宅地により削平されているが、その断面によると盛土であることがわかる。主体部は不明であるが大きな玄武岩の板石が削られた墳丘横に置いてあったが、近年破壊されてしまった（註14）。

139 塚原古墳群 御笠川の支流である牛頸川の左岸に面した舌状丘陵の尾根線上に構築された

序 文

古墳群であるが、発見した時は3基のみであるが、地名のとおり多数の古墳が存在したものと
思われる。丘陵の先端から1～3号としたが、現存しているものも著しい盗掘を受けている。

1号は全長約37m、後円部径約19mの小型の前方後円墳である。横穴式石室であつたらしい。

2号・3号墳は円墳で、3号は半分削平されているが、両方共径約20m前後のものである（註
19）。

（柳田康雄）

（4）歴史時代の遺跡

歴史時代の遺跡は、先史時代の各時期の遺跡にくらべて分布がきわめて少ない。この地域の
東方約7kmの地に大宰府がおかれ、政治・経済・文化の中核として諸施設が集中したためか、
顕著な遺構を残しているのは3ヶ所の小水城跡のみである。

小水城跡は、特別史跡である水城跡に連続する大宰府防衛の施設の一部として、春日丘陵の
中の開析谷を仕切る形で建設され、上大利・大土居・天神山小水城跡が残っている。また、上
大利と大土居の間に2ヶ所、天神山の南に1ヶ所、かつて土塁があつたことが知られている
が、これらは文化財の保護が社会問題としてとりあげられる前に姿を消した。近年、水城跡と
大土居小水城跡の発掘調査が行なわれ、土塁の外側に堀跡が発見されて、日本書記の記事にみ
える「貯水」の実態が明らかにされた。いうまでもなく、水城は664年に築造されたもので、
小水城も一連の事業としてほぼ同じ時期に築造されたものであろう。

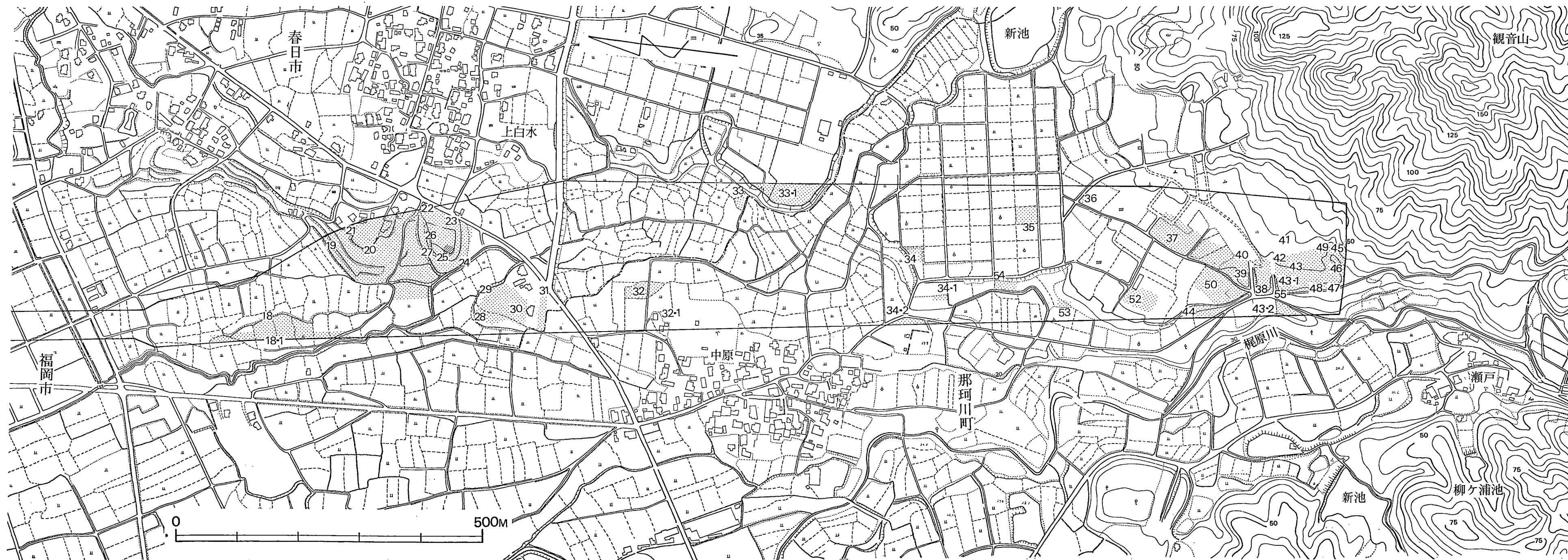
次に、古瓦出土地がある。牛頸窯跡群の大浦2号窯跡出土の平行条線印文をもつ古瓦は、共
伴の須恵器から7世紀中葉を下らないと位置づけられる。同種の古瓦は、春日平田窯附近や那
珂川町片縄でも採集されており、牛頸窯跡群中の窯跡からの出土も伝えられているが、まだ報
告されていない。また、春日市上白水字ウトロの丘陵斜面で、道路建設中に2基の窯跡が発見
され、同種古瓦が採集されており、原2号墳の周溝からも出土した。この地域の古瓦は、遺構
を伴わず散発的に出土する場合が多いので、この瓦窯の本格的な調査が望まれる。春日市上
白水遺跡は、かつて上白水廃寺と呼ばれていたが、筑紫野市塔原廃寺と同種の山田寺系と見ら
れる軒丸瓦を出土している。同種の古瓦は、北西に約300m離れた門田遺跡から軒丸瓦、これ
に西接する柏田遺跡からは軒丸瓦・軒平瓦とも発見されたが、3地点とも遺構を伴わず、い
まのところ性格は判然としない。これに引続いて盛行した大宰府系古瓦は、この地域の北西部
から出土しており、那珂川左岸の老司瓦窯跡とやや下流の三宅廃寺跡・三宅瓦窯跡が古くから
著名である。また、須玖・岡本遺跡から単弁瓦の出土が知られている。

平安時代以降の遺跡は殆んど知られていない。春日市大字須玖字地ノ内で護岸工事により井
戸跡が発見され平安前期の土師器が出土した。他には、那珂川平野南端にのぞむ城山に安徳城
跡、その北東麓の上梶原に板碑・五輪塔等の中世関係遺跡が目立つくらいである。（鶴久嗣郎）

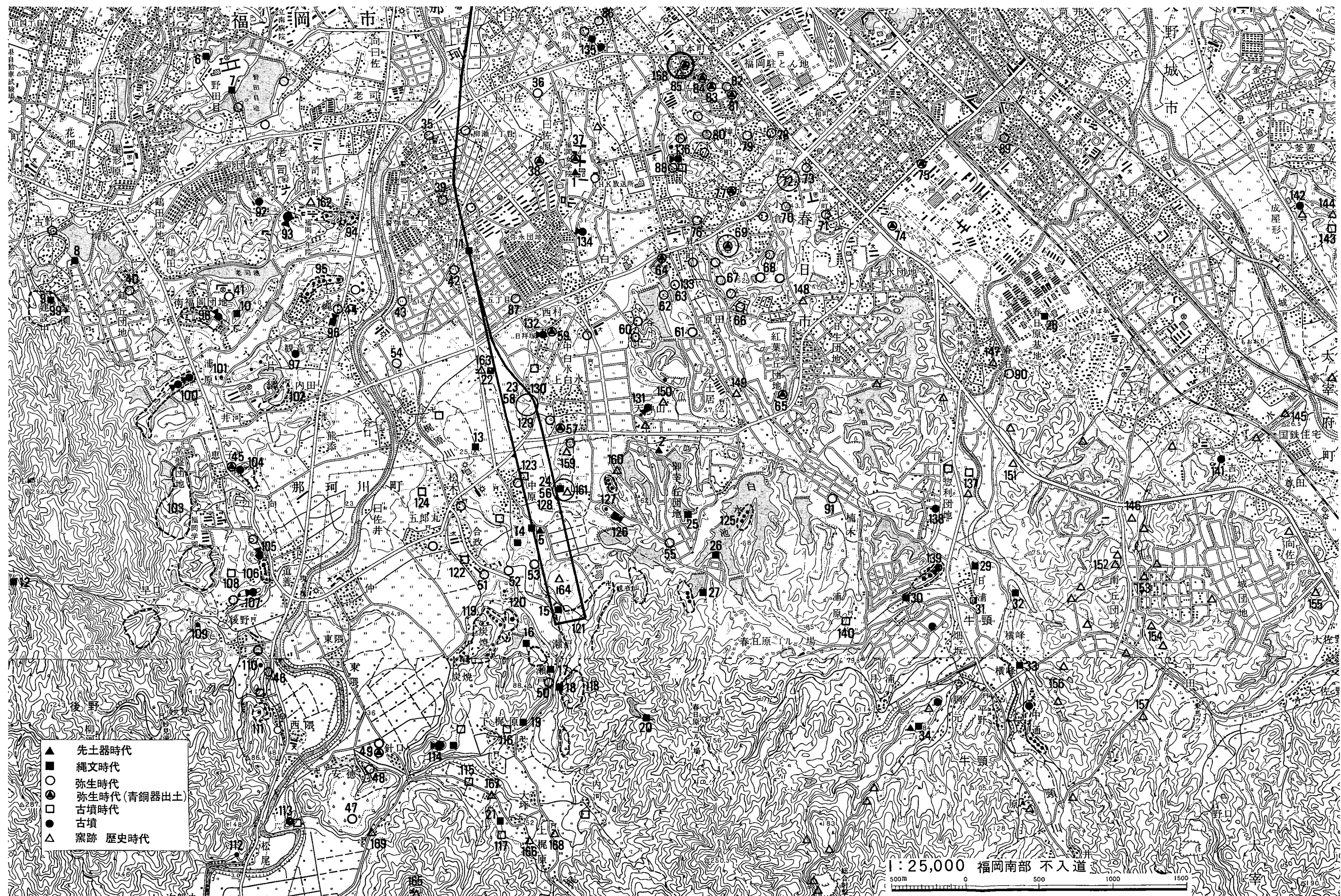
表 2 山 陽 新 幹 線 関 係 遺 跡 一 覧 表

地点番号	遺 跡 名	所 在 地	内 容	調 査 終 了 面 積					備 考
				46年度	47年度	48年度	49年度	50年度	
3	小田山墓地	鞍手郡鞍手町中山	近世墓地	m ²	—m ²	m ²	m ²	m ²	
4	下松尾墓地	〃 〃 〃	近世墓地		—				
5	京尾遺跡	〃 〃 室木	中世配石遺構		—				
6	若宮条里	〃 若宮町	条里遺構		229				
6—0		〃 〃 金丸	近世墓地			—			調査前に工事のため改葬。
6—1	田尻遺跡	〃 〃 金丸、水原	古墳・歴史時代：住居跡		2,035		3,000		
6—2	別当塚	〃 〃 竹原	古墳		146				遺構・遺物なし。
6—3	八幡塚	〃 〃 〃	古墳		16			300	
7	杉園遺跡	〃 〃 稲光	土師：散布地		—				遺構なし。
8		粕屋郡久山町山田			100				調査の結果条里ではなかった。
18	柏田遺跡	春日市上白水	先土器～歴史時代：住居跡8軒・円形遺構・溝状遺構			790			
18—1							2,100	1,000	昭和49年度は、別府大学に一部調査委嘱。
18—2		〃 〃							
19～27及び周辺	門田遺跡	〃 〃	先土器～歴史時代：住居跡、貯蔵穴・甕棺墓・石棺墓・土壇墓・古墳5基		予備調査(4,500)	7,170	9,700	4,570	昭和48年度に、門田2号墳の調査を平安博物館に委嘱。
28—31	下原遺跡	〃 〃	古墳時代：住居跡	2,784					
32	油田遺跡	筑紫郡那珂川町中原	古墳時代：散布地		690				
32—1	〃	〃 〃 〃	古墳時代：甕棺墓				300		
33		春日市上白水				197			
33—1	原古墳群 原遺跡	〃 〃	円墳3基・周溝墓8基・土壇墓4基 縄文時代早期・弥生時代甕棺墓			1,725	800	400	一部保存。
34		筑紫郡那珂川町中原	弥生時代：散布地		135				遺構・遺物なし。
34—1					267				
34—2	鳥ノ巣遺跡	〃 〃 〃	先土器・縄文時代：散布地			288			別府大学に調査委嘱。
35		〃 〃 〃	中世：散布地			200			
36		〃 〃 〃	近世：道標（かんのん道）			—			
37, 39 50, 55	井手ノ原遺跡	〃 〃 〃	中世：方形区画遺構・溝状遺構	1,814	1,515	1,500			
38, 40～43 45～49 49-1～4,51	観音山古墳群 中原支群	〃 〃 〃	古墳31基	707	6,400	220			
43—1	深原遺跡	〃 〃 〃	縄文時代：石組炉跡32基・円形竪穴遺構		1,840	2,540			昭和47年度は、別府大学に一部調査委嘱。
43—2						140			
44		〃 〃 〃	中世：散布地		271				
52		〃 〃 〃	中世：散布地		452				
53		〃 〃 〃	古墳時代：散布地		123				遺構なし
54		〃 〃 〃	弥生・古墳時代：散布地		150				
54—1		〃 〃 〃	古墳時代：散布地			95			
合 計				5,305	14,369	14,829	15,900	6,270	

註 1. 地点番号1・2は北九州市教育委員会、9～17は福岡市教育委員会が調査を担当した。
2. 路線以外の付帯施設にかかわる調査地点は上表に含めてある。
3. 面積欄に（―）で示したものは、調査面積としてあげないが当該年度に調査したことを示す。



第 5 図 山陽新幹線博多総合車輛基地付近地形図及び遺跡分布図 (1/5,000) //// 印は本報告書掲載遺跡を表わす



第 6 図 春日・那珂川地区遺跡分布図 (1/25,000)

序 文

表 3 春日・那珂川地区遺跡地名表

先 土 器 時 代							
番号	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 期	遺 構	出 土 遺 物	註
1	日 佐 原	福岡市南区・日佐原	台地	先 土 器	散布地	ナイフ	20
2	天 神 池 前	春日市上白水・天神池前	丘陵	〃	〃	マイクロコア	1
3	柏 田	〃 上白水・柏田	微高地	〃	〃	マイクロコア, マイクロブレイド	3.4
4	門 田	〃 〃 門田	台地	〃	包含層	ナイフ, トラピゾイド, スクレイパー, マイクロコア, マイクロブレイド	2~5
5	鳥 ノ 巢	那珂川町中原・鳥ノ巢	〃	〃	〃	ナイフ	5
縄 文 時 代							
6	浦 の 池	福岡市南区野多目浦の池	池畔	後 期	包含層	土器	20
7	野 多 目 池	〃 野多目池	〃	〃	〃	〃, 石鏃, 石斧, 搔器	20
8	箱 の 池	〃 柏原・古野	〃	早・後期	〃	〃 〃 〃 石匙	20
9	大 牟 田	〃 大牟田	丘陵谷	前・晩期	散布地	土器	20
10	老 司 池	〃 老司・老司池	池畔	前期	〃	土器, 石鏃	20
11	弥 永	〃 弥永町4丁目	微高地	後・晩期	包含地	土器, 石鏃, 搔器, 石錘	21
12	早 口	那珂川町後野・早口	池畔	前期	散布地	土器	23
13	中 原	〃 中原	段丘	晩期	包含地	〃	24
14	鳥 ノ 巢	〃 〃 鳥ノ巢	丘陵	早・後・晩期	pit群	押型文, 土器, 石匙	5
15	深 原	〃 中原・深原	扇状地	早~晩期	石組炉32, 円形堅穴遺構	押型文, 手向山, 塞の神, 西平式土器, 石器	2.5
16	瀬 戸 (1)	〃 松ノ木・瀬戸	丘陵	後・晩期	散布地	条痕文土器	
17	〃 (2)	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	22
18	〃 (3)	〃 〃 〃	〃	早期	包含地	押型文土器	25
19	〃 (4)	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	22
20	内 河	〃 上堤原・内河	〃	〃	散布地	土器, 黒曜石製石鏃	23
21	大 坪	〃 〃 大坪	〃	〃	〃	石鏃	23
22	柏 田	春日市上白水・柏田	微高地	後・晩期	住居跡 6軒, 円形遺構	北久根山・夜臼式土器, 石鏃, 石斧, つまみ形石器	2~4
23	門 田	〃 〃 門田	台地	早・前・後期	包含地	爪形文土器, 石鏃, 石斧, スクレイパー	4
24	原	〃 〃 原	〃	早期	石組炉	押型文土器	2~4
25	ヒシャテガ池	〃 〃 ヒシャテガ池	池畔	〃	散布地	石匙	25
26	白 水 池	〃 〃 大堤	〃	早・前・後期	〃	押型文, 曾畑, 西平式土器, 石匙	25
27	東 浦 池	〃 〃 東浦	〃	早期	〃	押型文土器	25
28	春日原基地内	〃 春日原基地内	台地	晩期	〃	〃	6
29	日 ノ 浦	大野城市牛頸・日ノ浦	丘陵	〃	〃	石鏃	26
30	下 ノ 原	〃 牛頸・下ノ原	微高地	〃	〃	〃	26
31	塚 原	〃 塚原	〃	〃	〃	〃	26

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 期	遺 構	出 土 遺 物	註
32	花 無 尾	大野城市牛額・花無尾	丘陵		散布地	石鏃	26
33	横 峰	〃 〃 横峰	〃		〃		26
34	胴 ノ 元	〃 〃 胴ノ元	〃		〃		26
弥 生 時 代							
35	高 原	福岡市警弥郷・高原	低台地	前期	甕棺墓		25
36	上 ノ 山	福岡市上日佐・上ノ山	低丘陵	後期	包含地	土器, 鉄鏃	25
37	日 佐 原	〃 日佐・日佐原	低台地	〃	箱式石棺墓, 石蓋土墳墓, 甕棺墓	玉, 長宜子孫内行花文鏡 (箱式石棺)	27
38	弥 永 原	〃 弥永原	〃	〃	住居跡 空壕, 土墳墓	土器, 石器, 内行花文仿製鏡 ガラス製勾玉, 鋳型, 銅鋤	7
39	背 振 神 社	〃 警弥郷字	微高地	前期末	甕棺墓		25
40	鶴 田 池	〃 尾形・鶴田	池畔	後期	散布地	土器, 黒曜石	20
41	老 司 池 弥 生	〃 老司・老司池	〃	〃	〃	土器	20
42	警 弥 郷	〃 警弥郷	沖積地	前期	包含地	土器, 石器	20
43	莞 牟 田	〃 警弥郷字莞牟田	微高地	前～後期	〃	土器, 石斧	20
44	片 縄	那珂川町片縄観光堂	台地		甕棺墓		14
45	恵 子	〃 恵子	〃			銅矛, 单独	43
46	堂 ノ 前	〃 後野・堂の前	〃	後期			
47	安 徳 台	〃 安徳・上ノ原	〃		甕棺墓, 散布地	土器, 石庖丁	23
48	安 徳 台	〃 安徳	〃	中期	甕棺墓		22
49	原 田	〃 安徳・原田	丘陵	後期		銅矛 (10本)	43
50	瀬 戸	〃 松ノ木・瀬戸	〃	〃	箱式石棺		22
51	合 政	〃 松ノ木・合政	台地		甕棺墓		23
52	合 政	〃 〃 〃	〃	後期	〃	土器	23
53	カ イ ネ	〃 中原・カイネ	〃	中期	散布地	〃	23
54	松 ノ 木	〃 今光・松ノ木	沖積地		〃	石庖丁	23
55	ヒシャテガ浦	春日市上白水・ヒシャテガ浦	台地	中期	甕棺墓		23
56	原	〃 上白水・原	〃	〃	土墳墓, 甕棺墓		2
57	上 白 水	〃 〃 門田	水田			銅矛 (1本) 单独	44
58	門 田	〃 〃 〃	台地	先土器, 縄文弥生, 古墳	甕棺墓, 土墳墓, 石蓋土墳, 住居跡, 袋状竖穴, 柱穴群, 古墳	土器, 石器, 鉄器, 勾玉, 管玉, 小玉, 銅鏡, 木器, 自然遺物	2～5
59	日 拝 塚	〃 中白水日拝塚	〃	中期	甕棺墓	細形銅剣	28
60	一の谷団地①	〃 下白水一の谷	丘陵	〃	〃		25
61	一 の 谷 南	〃	〃	〃	〃		25
62	寺 田 池	〃 下白水	池畔	前～後	〃		8
63	一 の 谷	〃 〃 一の谷	丘陵	中～後	甕棺墓, 土墳墓, 石蓋土墳, 木棺墓, 箱式石棺, 方形周溝	磨製石ノミ, 鉄剣	8
64	宮 の 下	〃 〃 金塚	〃	中期	甕棺墓	内行花文鏡	29
65	紅 葉 丘	〃 紅葉ヶ丘	〃			銅戈 (27本) 单独出土	28
66	原 田	〃 小倉・原田	〃	中期	甕棺墓		30
67	〃	〃	〃	〃	〃		30

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 期	遺 構	出 土 遺 物	註
68	高 辻	春日市小倉・高辻	丘陵	中～後	甕棺墓, 土墳墓		9
69	大 南	〃 〃 大南	〃	〃	住居跡, V字溝, 甕棺墓, 袋状竪穴	小銅鐸, 鉄器, 砥石, 土器, ガラス勾玉, 小玉, 青銅器鋳型	10
70	ナ ラ イ	〃 伯玄町・ナライ	〃	前期	甕棺墓		25
71	平 塚	〃 〃 平塚	〃	中期	〃		28
72	伯 玄 社	〃 〃 伯玄社	〃	前, 中, 後期	甕棺墓, 木棺墓, 土墳墓, 石蓋墓, 住居跡, 袋状竪穴	土器, 磨製石鏃, 砥石, 磨製石剣片, 貝釧	11
73	伯玄二丁目	〃 〃 二丁目	低地	中期	包含地, 甕棺墓, 石棺墓	土器	28
74	立 石	〃 原町・立石	丘陵	〃	甕棺墓	鏡, 銅鋤, 銅剣	25
75	原 町	〃 〃 基地内	微高地	時代		銅戈(48本)単独出土	25
76	豆 塚	〃 昇町・豆塚	丘陵	中期	甕棺墓		28
77	西 方	〃 竹ヶ本・西方	〃	後期		銅矛(10本)単独出土	13
78	坂 口	〃 坂口町・坂口	〃	中期	甕棺墓		28
79	柚 木	〃 岡本・柚木	〃	中～後期	住居跡	土器	28
80	平 若	〃 竹ヶ本・平若	〃	中期	甕棺墓		28
81	辻	〃 神明町・辻	〃			銅矛(10本)単独出土	12
82	野 添	〃 岡本・野添	〃	中期	包含地		25
83	バンジャク	〃 〃 バンジャク	〃		〃	銅矛(9本)単独出土	45
84	岡 本	〃 〃	〃	後期	〃	銅矛鎧笥	12
85	須 玖・岡 本	〃 須玖・岡本	〃	中期	支石墓(甕棺), 甕棺墓, 土墳墓	前漢鏡, 細形銅剣, 銅戈, 銅矛, 鉄刀, 鉄戈, ガラス璧勾玉, 管玉	12
86	御 陵	〃 須玖・御陵		後期	甕棺墓		25
87	弥永団地西南	〃 弥永団地西南	沖積地	前期	包含地	土器, 石器	25
88	竹 ケ 本	〃 竹ヶ本	丘陵	中期～古墳	住居跡, 空濠	土器, 石器, 鉄器	13
89	千 才	〃 千才町	低地		包含地		25
90	下 の 川	〃 春日・下の川	丘陵	中後～後期	甕棺墓		25
91	楠 木	〃 楠木	〃	中期	〃		28

古 墳 時 代

92	卯内尺古墳	福岡市南区老司・卯内尺	丘陵	前期	円墳, 粘土槨	三角縁神獸鏡, 銅鏃	15
93	老 司 古 墳	〃 〃 〃 大谷	〃	〃	前方後円墳, 古式横穴式石室(4基)	鉄器, 勾玉, 管玉, 小玉, 櫛鏡, 土器, 砥石, 霰玉, 金環	16
94	老松神社古墳群	〃 〃 〃 老松神社	〃	〃	低墳丘		14
95	野 口 古 墳 群	那珂川町片縄・野口	〃	〃	〃		14
96	観音堂古墳	〃 〃 観音堂	〃	〃	前方後方墳		14
97	権現塚古墳	〃 〃 〃	〃	後期	装飾古墳, 円墳, 周堤	須恵器, 消滅	14
98	浦ノ田古墳群	〃 〃 浦ノ田	〃	〃	前方後円墳, 円墳, 横穴式石室	埴輪, 須恵器, 陶棺	14
99	大牟田古墳群	福岡市南区屋形原・大牟田	〃	〃	円墳, 方墳, 横穴式石室	須恵器, 鉄器	20
100	小丸古墳群	那珂川町片縄・小丸	〃	後期	前方後円墳(2基)円墳, 横穴式石室	埴輪	14
101	うめぼし山古墳	〃 〃 下原	〃	〃	円墳, 横穴式石室	伝よろい, 鎧, 刀剣, 馬具	25

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 期	遺 構	出 土 遺 物	註
102	井河古墳群	那珂川町片縄・井河	丘陵	前期	低墳丘		14
103	白石古墳群	〃 後野・白石	〃	後期	円墳29基 3基道路にて半壊	新池東側は造成にて全壊	14
104	若山古墳群	〃 恵子・若山	〃	前期	円墳，方形周溝墓	鏡，土師器	31
105	妙法寺古墳	〃 〃 妙法寺	〃	後期	前方後円墳，横穴式石室		31
106	油田古墳群	〃 道善・油田	〃	前期	円墳，方墳，木棺直葬石棺	鏡片，鉄器，土師器	14
107	大万寺前古墳	〃 後野・大万寺前	〃	後期	前方後円墳，横穴式石室		14
108	大万寺北	〃 〃 〃	扇状地	〃	散布地	須恵器，土師器	14
109	イボリ古墳	〃 〃 イボリ	丘陵		方墳，段築		22
110	堂の前古墳	〃 西限・堂ノ前	〃	後期			19
111	熊本古墳群	〃 〃 熊本	〃	〃	横穴式石室，墳丘裾列石		14
112	松尾古墳	〃 松尾	山裾		円墳，複室	現在は玄室のみ残る	23
113	風早古墳	〃 安徳・風早	台地				14
114	安徳大塚古墳	〃 安徳・大塚	丘陵	前期	前方後円墳，礫床，葺石	埴輪，鉄器，土師器	17
115	平 蔵	〃 上梶原・平蔵	台地		散布地	土師器，須恵器	19
116	大 戸	〃 下梶原・大戸	丘陵	後期	〃	土器	23
117	梶 原	〃 上梶原・梶原	山裾		〃		23
118	平石古墳群	〃 松ノ木・瀬戸	丘陵	後期	円墳，横穴式石室		23
119	炭焼古墳群	〃 仲・炭焼	〃	前期	方形周溝墓，石棺，木棺，石蓋土壇	鉄器，土師器	18
120	エゲ山古墳群	〃 松ノ木・エゲ	〃	後期	円墳，横穴式石室		19
121	観音山古墳群	〃 中原・深原	山裾	終末	円墳，方墳，横穴式石室，石棺，土壇墓	鉄器，金環，須恵器，土師器	2.5
122	合 政	〃 松の木・合政			散布地	土器	23
123	油 田	〃 中原・油田	微高地	弥生～古墳	甕棺墓，溝状遺構	消滅	4
124	瀬 戸 口	〃 松ノ木・瀬戸口	台地		散布地		23
125	大堤古墳群	春日市上白水・大堤	丘陵	後期	横穴式石室		25
126	ウトロ古墳	〃 〃 ウトロ	〃	前期	前方後方墳		19
127	ウトロ古墳群	〃 〃 〃	〃	〃	低墳丘，甕棺墓		19
128	原 古 墳 群	〃 〃 原	〃	〃	円墳，横穴式石室，木棺，土壇	土師器 短甲，鉄剣，勾玉，小玉 勾玉，丸玉，小玉，管玉	2
129	門田古墳群	〃 〃 門田	台地	後期	円墳2基，横穴式石室	埴輪，鉄刀，鉄斧，轡	2
130	辻田古墳群	〃 〃 辻田	台地	前・後期	円墳4基，竪穴式，横穴式石室	鉄斧，勾玉，管玉，丸玉，小玉，鉄鏃，須恵器	2
131	天神山古墳	〃 〃 天神山	丘陵	後期	前方後円墳，横穴式石室		19
132	日拝塚古墳	〃 下白水・日拝塚	台地	〃	前方後円墳，横穴式石室	鏡，金製垂飾付耳飾，単竜環柄，武器類，輪鏝，轡，雲珠，馬鈴，須恵器等	32
133	一 の 谷	〃 〃 一の谷		前期	方形周溝墓	土師器	8
134	下白水大塚古墳	〃 〃 下の原	微高地	後期	前方後円墳	土製人形	28
135	須玖古墳群	〃 須玖・野藤	〃			埴輪	14
136	竹ヶ本古墳群	〃 小倉・竹ヶ本	丘陵	後期	前方後円墳，円墳	鏡	13

序 文

番号	遺 跡 名	所 在 地	立地	時 期	遺 構	出 土 遺 物	註
137	円 入	春日市春日・円入		後期	散布地		22
138	惣 利 古 墳	〃 〃 惣利	丘陵	〃	円墳	須恵器	25
139	塚原古墳群	〃 〃 塚原	〃	〃	前方後円墳, 円墳, 横穴式石室	須恵器	22
140	浦 ノ 原	〃	段丘		散布地	須恵器	22
141	吉 松 古 墳	大野城市下大利・吉松	丘陵		円墳		33
142	成屋形古墳群	太宰府町水城・成屋形	丘陵	前～後	方形周溝墓, 箱式石棺 横穴式石室, 円墳	鏡, 土師器, 鉄器, 埴輪	34
143	裏 ノ 田	〃 〃 裏ノ田	〃	後期	住居跡	須恵器, 滑石製品	35
144	裏の田窯跡	〃 〃 〃	〃	〃	2 基	須恵器	35
歴 史 時 代							
145	水 城 跡	大野城市太宰府町	平地	奈 良	土塁, 門跡, 木樋・堀	瓦	36
146	上大利小水城	〃 上大利	谷間	〃	土塁		36
147	春日小水城	春日市春日	〃	〃	土塁		36
148	小倉小水城	〃 小倉	〃	〃	土塁		36
149	大土居小水城	〃 下白水・大土居	〃	〃	土塁		36
150	天神山小水城	〃 上白水・天神山	平地	〃	土塁		36
151	平 田 窯 跡	〃 春日・平田	丘陵			須恵器・瓦	32
152	野添窯跡群	大野城市上大利・野添	〃	古墳～		須恵器	32
153	大浦窯跡群	〃 上大利・大浦	〃	〃		須恵器・瓦	32
154	平田窯跡群	〃 牛頸・平田	〃			須恵器	37
155	長 浦 窯 跡		〃			〃	33
156	東浦窯跡群	〃 牛頸・東浦	〃	古墳～		須恵器	33
157	上平田窯跡群	〃 牛頸・上平田	〃			須恵器	33
158	岡 本	春日市岡本町	〃	奈 良		瓦	38
159	上 白 水	〃 上白水・天神木	段丘	〃		瓦	39
160	ウトロ窯跡群	〃 〃 ウトロ	丘陵	〃		瓦	22
161	原	〃 〃 原	段丘	〃		瓦	2
162	老 司 窯 跡	福岡市南区・老司	丘陵	〃		瓦	40
163	柏 田	春日市上白水・柏田	段丘	奈良～		瓦・青磁	3
164	井 手 ノ 原	那珂川町中原	〃	室 町		青磁・陶器・瓦質土器	2
165	安 徳 城 跡	〃 安徳・城山	山頂	中 世			41
166	板 碑	〃 上梶原	段丘	〃	板碑（伝梶原景時墓）		28
167	古 墓	〃 〃	〃	〃			28
168	八 龍	〃 〃	〃	〃		青磁・白磁	22
169	列 田 溝	〃 安徳・竜頭	台地		溝		42

序 文

- 註 1 山口譲治氏の原因による。
- 2 柳田康雄編「昭和48年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」 福岡県教育委員会 1975
 - 3 木下修編「昭和49年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」 福岡県教育委員会 1975
 - 4 小池史哲編「昭和50年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」 福岡県教育委員会 1976
 - 5 井上裕弘編「昭和47年度山陽新幹線関係埋蔵文化財調査概報」 福岡県教育委員会 1973
 - 6 中原志外顕・渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町米軍板付基地内出土の縄文土器」『九州考古学』10 1960
 - 7 福岡県教育委員会編「福岡県弥永原遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書』32 1965
 - 8 宮小路賀宏編「一の谷遺跡」『春日町文化財調査報告書』2 1969
 - 9 井上裕弘「高辻遺跡」『春日市文化財調査報告書』3 1972
 - 10 鈴木元親・渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町出土の銅鐸」『九州考古学』10 1960
福岡県教育委員会「大南遺跡」『教育福岡』 1974
 - 11 松岡史他「福岡県伯耆社遺跡調査概報」『福岡県文化財調査報告書』36 1966
 - 12 島田貞彦「筑前須玖史前遺跡の研究」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』11 1930
中山平次郎「明治年における須玖岡本発掘物の出土状態其一」『考古学雑誌』12—10 1922
中山平次郎「須玖岡本出土の鏡片研究」(一)(二)『考古学雑誌』18—10・11, 19—2 1928~29
 - 13 渡辺正気「筑紫郡春日町竹ヶ本遺跡調査報告」『福岡県文化財調査報告書』22 1961
 - 14 渡辺正気・柳田康雄「油田古墳群」『福岡県文化財調査報告書』42 1969
 - 15 森貞次郎「老司古墳—I 老司古墳の発見—I」 福岡市教育委員会 1969
 - 16 九州大学文学部考古学研究室編「老司古墳」 福岡市教育委員会 1969
 - 17 井上裕弘「安徳大塚古墳の発掘調査」『教育福岡』No. 260 1971
 - 18 宮小路賀宏・柳田康雄「炭焼古墳群」『福岡県文化財調査報告書』37 1968
 - 19 1975年福岡県教育委員会実測
 - 20 福岡市教育委員会編「福岡市埋蔵文化財遺跡地名表総集編」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』12 1971
 - 21 塩屋勝利・折尾学編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』32 1975
 - 22 1975年福岡県教育委員会実査
 - 23 那珂川町教育委員会編「那珂川町文化財遺跡調査」 1970
 - 24 森田勉氏教示
 - 25 亀井勇氏教示
 - 26 福岡県教育委員会文化課「大野城市遺跡分布図」 1973
 - 27 鏡山猛・渡辺正気「福岡市日佐原の弥生式墳墓」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』1959
 - 28 文化財保護委員会「全国遺跡地図（福岡県）」 1968
 - 29 梅原末治「日本出土の中国の古鏡(一)」『考古学雑誌』47—4 1962

- 30 鏡山猛・森貞次郎・岡崎敬・渡辺正気・小田富士雄「福岡県須玖・岡本遺跡」『福岡県文化財調査報告書』29 1963
- 31 岩崎二郎編「恵子若山遺跡」 恵子遺跡調査会 1975
- 32 中山平次郎・玉泉大梁・島田寅次郎「日拝塚」『福岡県史跡名勝天然記念物調査報告書』5 1930
- 33 柳田康雄編「野添・大浦窯跡群」『福岡県文化財調査報告書』43 1970
- 34 山本博・山本嘉蔵「福岡県成屋形の古墳について」『史淵』2 1930
- 35 酒井仁夫「裏ノ田遺跡」『教育福岡』 1972
- 36 鏡山猛『大宰府都城の研究』 風間書房 1968
- 37 坂詰秀一編『筑前平田窯跡』 雄山閣 1974
- 38 九州歴史資料館編「九州の古瓦と寺院」 1974
- 39 小田富士雄「九州に於ける山田寺系極先瓦の発見」『歴史考古』6 1961
- 40 小田富士雄「九州に於ける大宰府系古瓦の展開(二)」『九州考古学』2 1957
- 41 貝原益軒『筑前統風土記』
- 42 日本書紀
- 43 中山平次郎「新発見の銅鐸」『考古学雑誌』1—5・6 1930
- 44 中山平次郎「銅鐸銅剣発見地の遺物追加」『考古学雑誌』8—10・11 1918
- 45 中山平次郎「須玖新発見の広鐸銅鐸」『考古学雑誌』12—12 1922

Ⅱ 小田山墓地の調査

鞍手郡鞍手町大字中山字小田山

本文目次

1. はじめに	35
(1) 調査の経過	35
(2) 遺跡の立地	35
2. 遺構	36
(1) 遺構の概要	36
(2) 墓標	37
(3) 小結	39
3. おわりに	39

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 小田山墓地遠景（鶴久嗣郎撮影）	35
(2) No. 8 墓標（鶴久撮影）	37

挿図目次

第 1 図 小田山墓地位置図（国土地理院地形図 1：25,000，中間，木下修作成）	35
第 2 図 小田山墓地付近地形図（日本国有鉄道原図 1：1,500，三津井知廣製図）	36

表目次

表 1 小田山墓地墓標一覧表（鶴久作成）	38
----------------------------	----

Ⅱ 小田山墓地の調査

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

この墓地の調査は、昭和47年11月8日から同月20日の間におこなった。現地は立入りも困難なほどの密叢におおわれており、しかも、作業員が土木工事などに出払っていて現地周辺では集まらず、遠く若宮町から乗用車で4人だけ運ぶという状態であったために、調査期間の大部分が伐採期間であった。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶務主事 小川 浩一郎

嘱託 吉村 源七

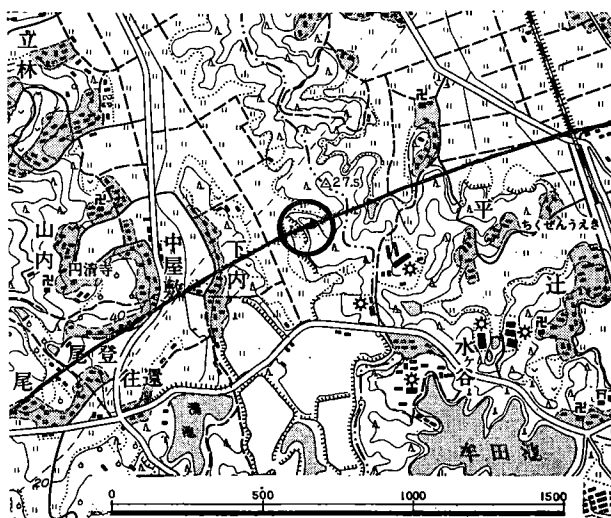
発掘調査 技術主査 鶴久 嗣郎

調査補助員 有吉 朋行（西鞍手高校教諭）

また、この調査には若宮町在住の方々の協力をえた。

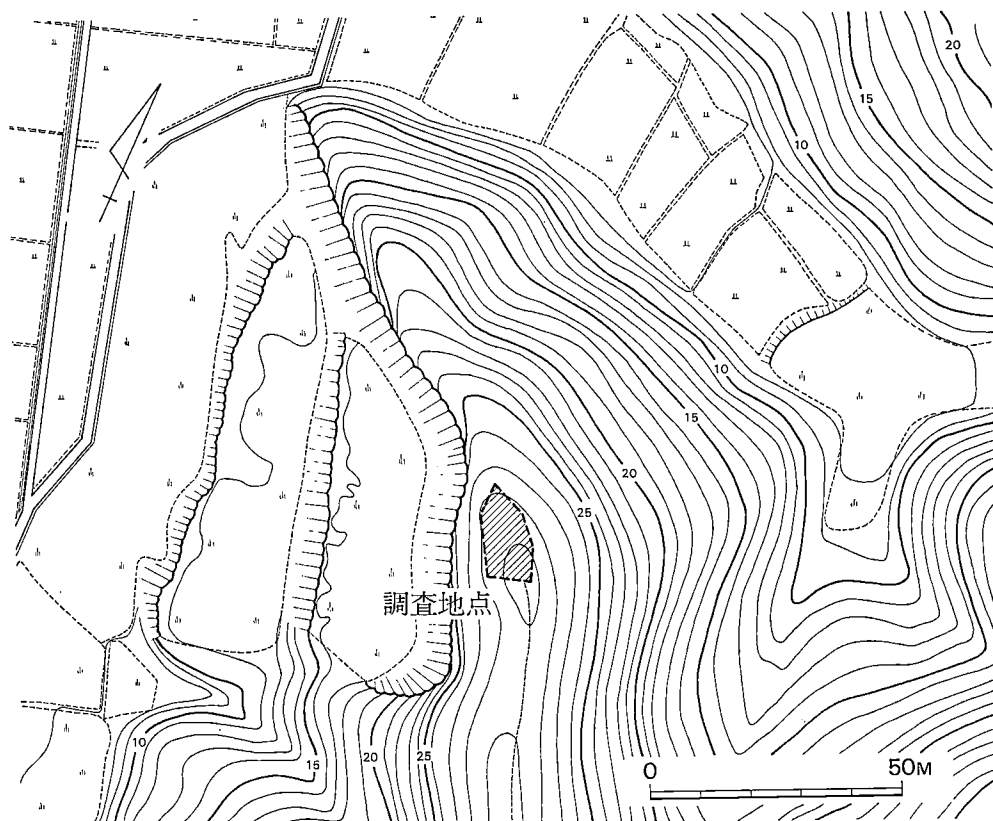
(2) 遺 跡 の 立 地

この墓地は、福岡県鞍手郡鞍手町大字中山字小田山 1,008 番地にある。直方市西郊の六ヶ岳から北東にのびる尾根が、高度を低めながら遠賀川左岸ぞいに方向を北北西にかえるあたりの、標高約29mの丘陵の上に位置する。この丘陵地域は、多くの開析谷によって樹枝状に分岐しており、この墓地は、その一支陵の先端頂部に営なまれている。水田面との比高は約23mで、墓地の両側は古



第 1 図 小田山墓地位置図 (1/25,000)

小田山墓地



第 2 図 小田山墓地付近地形図 (1/1,500)

い造成によって急崖をなし 2 段の平坦地が設けられている。

南側を東西に走る道路からこの墓地にいたる小径があるが、通過困難なほどに藪におおわれており、数年来ほとんど使用されていないようである。

2. 遺 構

(1) 遺構の概要

遺構は、墓標 11 基である。原状を保っているのは元文元年 (1736) と思われる 1 基のみで、他は 10 基とも倒伏し、台石まで転倒したものが 4 基もある荒廃ぶりである。立っているものの東側から南・西とまわって北西側まで、直径約 10m の範囲に石材が散乱しているが、台石の見当らぬ 1 基以外は復原が可能である。

(2) 墓 標 (表1)

墓標は11基とも角石塔形で、そのうちでも角碑ばかりである。角碑は9形式に分類されているが、この墓地で用いられたのはそのうちの5形式で、1形式1基のものが3基ある。

a. 形 式

角山形(1・2・4・5) この形式のものは、4基とも花崗岩を用いており、他の7基とは歴然と石材が区別できる。いずれも、竿石の断面は正面の辺が長い長方形で、他のものがほぼ正方形の断面をもつものに対して、4基とも薄形である。頂部中央を前後に走る稜は、1のみが水平で他の3基は後傾しており、当然両側面上辺の稜も後傾する。

楕 形(6・10・11) これは、角山形の頂部をカマボコ形に盛上げたものである。後記の下松尾墓地では頂部の後傾するものが1基みられたが、この墓地の3基は、いずれも水平で一般的傾向に合致している。

丸山形(3) この形式は、楕形のものの両側面上辺の稜をなくして、側面から上面へ丸く移行するものである。正面と背面は、ともに楕形と同様に平面である。

角 型(7) 最も簡素な形式で、頂部の平坦な方柱形をなす。後記下松屋墓地にも見られず、7が唯一の例である。

兜巾形(9) 上記の角形頂部を、低い四角錐に成形する形である。後記下松尾墓地に2例みられるが、極めて少数で特殊な形式とみてよい。形式不明のもの(8)(図版1—2) 竿石上部が欠失していて形式は不明である。

b. 銘

戒名・没年銘 墓標の竿石正面には、戒名は当然として、1～8の8基には没年銘が左右に分けて彫られている。9～11の3基は、正面に戒名のみを記して、他の8基と画然とした違いをみせている。戒名は、1・2のみが最上部に阿弥陀如来を示す卍(キリク)を彫り、続けて戒名を記しているが、他は戒名のみである。また、戒名は9基が1行におさめているが、3は碑面下部に充分余裕があるのに区画を短かく切り、後尾の「灵位」を右横書きとしている。5も同様に余裕があるが、「禪」までを縦1行に書き、「定」を「禪」の右に、「尼」を左に書いている。なお、1・2・8の3基には、正面の戒名などを書く区画の下側に、蓮華文受花が陰刻されている。

没年銘は、戒名の左右に分けて書く8基は、右に年号・年次、左に月日となっている。9・10は左右側面に分けており、11は右側面にまとめている。干支ともに記しているのは5・6・9の3基、全くないものが3・4・8・10の4基、他の4基が十二支のみである。

略字もいくつか用いられているが、全体として画数の多い字をそのまま刻しているといえる。「霊」を「𩇑」に作る3、「誉」と「円」を用いた6の2基のみが略字を用いている。他には、「年」を「天」に作るのが6基あるが、1は「霜月」とわざわざ画数の多い字を用いる

表 1 小 田 山 墓 地 墓 標 一 覧 表

番号	戒 名	没 年 銘	干支	西暦	形式	俗名ほか	備考 (台石について記さな いものは台石1段)
1	歎譽妙願信女靈位	明暦二申年霜月廿三日	丙申	1656	角山形	渡邊□□	花崗岩、竿石背面不整形 竿石正面下端に蓮華受花陰刻
2	□□□□信士靈位	□文五巳□十月□三日 (寛) (天) (廿)	乙巳	1665	角山形	□□□□	花崗岩、竿石背面不整形 竿石正面下端に蓮華受花陰刻
3	□元信譽妙川禿位	宝永四天六月十三日	丁亥	1707	丸山形		台石2段
4	涼心院本譽誓願居士	宝永七年四月十八日	庚寅	1710	角山形		花崗岩、竿石背面不整形
5	治本院覺譽妙貞禪定尼	正徳二壬辰天二月二十四日	壬辰	1712	角山形		花崗岩、竿石背面にノミ跡多し
6	然譽円廊信士	享保二十乙卯天正月七日	乙卯	1735	櫛 形		竿石背面にノミ跡多し 台石2段
7	□紫屋妙雲	元文元辰天七月四日	丙辰	1736	角 形		
8	寂一譽心可信士靈位	元□ □年十二月七日 (文)(元)	丙辰	1736	(不明)	□ □	河原石積上に台石2段 両側面背面にノミ跡多し、 竿石下端に蓮華受花陰刻
9	本譽来空信士	寛政三辛亥天三月廿六日	辛亥	1791	兜巾形	渡辺儀七父	台石不明
10	客譽向顔信女	文化九□七月十八日	壬申	1812	櫛 形	儀七妻	
11	成譽顯道信士	文化十四年丑十月二十五日	丁丑	1817	櫛 形	俗名 渡辺儀七	台石2段

など、全般的にみて略字を用いる傾向は少ない。

被葬者を示す銘は、1・2が正面の月日の下に4字の姓名、8は背面に浅い枠取りがあるが字数が不明、9・10は左側面に系累で被葬者を示し、11は「俗名」を冠して姓名を記している。

c. 台 石

台石で特徴的なのは8である(図版1-2)。ひと抱えもある硅化木片や人頭大の河原石を直径3mほどの円形に積み、平坦面をもつ巨石を頂部に据えて台石をのせている。ただし硅化木片はほとんど埋まっておらず、後に運んで来て積み加えられた可能性がある。

他の10基のうち2段の台石をもつものは3・6・11の3基であるが、3は平たい自然石と拳大の河原石の上に台石をのせるものである。他は、台石の見当らぬ9を除いて1段であり、1・2・4・5・8の5基の台石には、線香を置くための隅丸長方形の穴が浅く彫られている。

(3) 小 結

この墓地は、墓標がわずか11基であるが、いくつかの傾向をみせている。竿石の整形からみていくと、正面を平滑に仕上げるのは当然で、花崗岩の4基はノミで、他は磨きあげて仕上げられているが、1～8のうち3と7を除く6基は背面にあらいのノミ跡を残している。これらはいずれも18世紀前半以前のもので、後記の下松尾墓地と同様である。3と7は、下松尾墓地にも1例しかみられぬ丸山形と、唯一例である角形という、一般的でない形式である点からは、例外とみることもできよう。下松尾墓地でも、何らかの点で特殊なものを除けば18世紀前半以前で全面を平滑に仕上げているものは元文四年（1739）のもの1例のみである。花崗岩を用いた4基も、古いものばかりである。

竿石の形式をみると、角山形は18世紀初頭までしかみられない。兜巾形は例が少ないが、18世紀末から19世紀初頭の短い期間に集中するらしいことが、下松尾墓地の2例とあわせてみるとわかる。丸山形・角形とも特殊な部類に入る形式である。楕形は早くから出現するが、近世後半には墓標のほとんどがこの形式となるようである。

正面に戒名のみを記し、没年銘を側面にまわすのは、最も新らしい3基のみで、8と9の間に55年のブランクがあることを考えれば、この間に一線を描くことができる。また、被葬者を何らかの形で記したものは、最も古い2基と後尾の3基であるが、1・2が戒名の頭に梵字を入れ、17世紀中葉のものであることを考えれば、下松尾墓地での、特殊な4例を除いてすべて18世紀後半から被葬者を記入するようになる傾向と一致する。

3. お わ り に

この墓地の被葬者のうち4名が渡辺姓である。没年をみていくと2と3の間に42年、8と9の間に55年の間があるが、他は数年から最大23年の間隔である。以上二点と、現地権者が渡辺姓であることをあわせれば、この墓地は、渡辺家1家族を対象に営なまれたものであろう。この点は、地権者なり菩提寺なりに尋ねればすぐに分かることであるが、双方とも不明なために確認はできなかった。

墓をめぐる風習などについては、後記下松尾墓地の項で簡単にふれたので重複をさける。なおこの墓地は、地権者が行方不明で買取できないことから、新幹線の設計変更によって破壊をまぬがれている。

図 版

小 田 山 墓 地



1 小田山墓地遠景(南西から)



2 No. 8 墓 標(西から)

Ⅲ 下松尾墓地の調査

鞍手郡鞍手町大字中山字下松尾

本文目次

1. はじめに	41
(1) 調査の経過	41
(2) 遺跡の立地	41
2. 遺構	42
(1) 遺構の概要	42
(2) 墓標	43
(3) 自然石墓標	46
(4) 積石墓	46
(5) 小結	49
3. おわりに	49
付金丸墓地	51

図版目次

本文対照頁

図版 1	(1) 下松尾墓地遠景（靄久嗣郎撮影）	41
	(2) 第1群全景（靄久撮影）	42
2	(1) 第1群22・23・24墓標（靄久撮影）	42
	(2) 第5群全景（靄久撮影）	42
3	(1) 第1群8笠石形墓標（靄久撮影）	45
	(2) 第1群7笠石形墓標（靄久撮影）	45
4	(1) 第1群23仏像形墓標（靄久撮影）	43
	(2) 第7群116笠石形墓標（靄久撮影）	45
5	(1) 第1群12仏像形墓標（靄久撮影）	43
	(2) 第1群25積石墓（靄久撮影）	46

挿 図 目 次

第 1 図	下松尾墓地位置図（国土地理院地形図 1：25,000，中間 木下修作成）	42
第 2 図	下松尾墓地付近地形図（日本国有鉄道原図 1：1,500，井上裕弘製図）	43
第 3 図	下松尾墓地墓標・積石墓分布図 （薮久・有吉朋行実測，薮久・木下製図）	44
第 4 図	金丸墓地位置図（国土地理院地形図 1：25,000，直方 木下作成）	51

表 目 次

表 1	墓標一覧表（薮久作成）	47
2	没年不明の墓標（その 1）（薮久作成）	48
3	没年不明の墓標（その 2）（薮久作成）	48

Ⅲ 下松尾墓地の調査

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

この墓地の調査は、昭和47年11月22日から12月9日の間におこなった。現地は、明治以降ほとんど埋葬がおこなわれておらず、北西端の一面にのみ踏跡があるきりで他は灌木や篠竹におおわれて、墓標の存在も定かでない状態であった。このため、小田山墓地の調査と同様な事情となり、しかも、伐採中に地権者から立入りを禁止されるという事態が生じた。これは、調査と伐採について地権者の了解を得ていたのであるが、国鉄との間が立木補償のことでこじれて、調査も伐採も出来なくなったのであった。幸い1週間ほどで了解ができたが、調査期間の大半を伐採でしめることとなった。

なお、本来ならば墓標の実測・採拓および下部埋葬遺構の調査を行なうべきであったが、年度内は、後記の京尾・田尻・杉園の3遺跡の調査スケジュールが詰まっており、改葬の行なわれたのが、翌年度に車輛基地内の井手ノ原遺跡の調査中であったために、これらの調査を行なうことができなかった。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務 主 事 小 川 浩 一 郎

嘱 託 吉 村 源 七

発掘調査 技術主査 薮 久 嗣 郎

調査補助員 有 吉 朋 行（西鞍手高校教諭）

また、この調査には若宮町在住の方々の協力をえた。

(2) 遺 跡 の 立 地

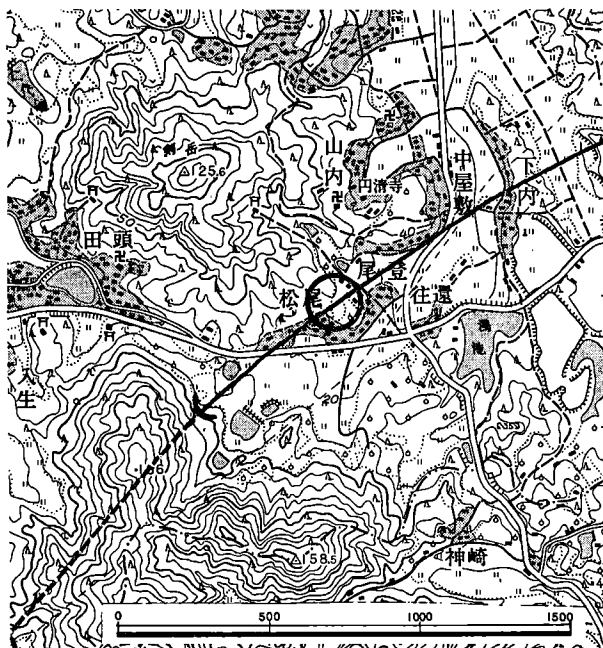
この墓地は、福岡県鞍手郡鞍手町大字中山字下松尾 685 番地にある。鞍手郡北部を北流する西川の右岸ぞいに、直方市西方の六ヶ岳からの尾根が北にのび、その中途に中世山城跡をのせる剣岳がある。この南側鞍部に近く、南東に張り出した小丘の頂部から南斜面にかけて、この墓地は営なまれている。この小丘は、頂部から比較的緩傾斜で下り縁辺が急傾斜の逆鍋底形を

下松尾墓地

なしており、下の集落から見ると、樹木におおわれて如何にも墳墓を営むの地にふさわしい景観を呈している。墓地の北東側は大きく削平されて鶏舎が建てられている。

墓地の標高は、頂部で約31m、南斜面の最低部で29mあり、南東側の裾にある松尾部落との比高は10～15mである。

なお、前記の小田山墓地は、ここから小丘陵をひとつ隔てて東北東約1kmのところである。



第 1 図 下松尾墓地位置図 (1/25,000)

2. 遺 構

(1) 遺 構 の 概 要 (第3図)

剣岳の南東側から南にはりだした小丘の、頂部と緩い南斜面を、ほぼ平坦に5段に削平して営なまれた近世の墓地である。

近世墓は総数125基をかぞえ、ほかには、明治34年のものが1基あるのみで、近代以降は、ほとんど利用されていない。

近世墓は、墓標をもつもの50基、河原石を積みあげた積石墓75基である。墓標は、加工した石材を用いたもの42基と、自然石を用いたもの8基があり、積石墓は、自然石を墓標として立てたものが24基みられるが、他のものも、大小の差はあれ築造当初は立てられていたと思われる。ほかに、最近のものと思われる改葬穴が7ヶ所あった。また、直径2.4mもある河原石の集積が1ヶ所あるが、積石墓の他のものに比して大きすぎるので、単なる集石として扱った。

これらの近世墓は、平坦面の段落ちと群集のしかたで、7群に分けられる。第3図に付した一連番号で示せば、第1群(1～25)、第2群(26～48)、第3群(49～58)、第4群(59～



第 2 図 下松尾墓地付近地形図 (1/5,000)

65)，第5群（66～90），第6群（91～95），第7群（96～122）となる。

なお，第3図では，竿石の立っているものは台石を，竿石の倒れているものはそのまま，積石墓は外縁を図示した。台石の一辺の太い面が前面を示している。

(2) 墓 標（表1～3）

墓標は，整形加工したものと自然石を用いたものがある。加工したもののうち12の仏像形のもの以外にはすべてに何らかの銘がみられるが，自然石のものには8基とも銘はない。

形 式 整形加工したものの形式は，仏像形（4基）と角石塔形（台石のみの4基を除く38基）の2型式である。

a 仏像形（12・23・51・54） いずれも地藏菩薩像である。12（図版5—1）は2段の台石に，受花の蓮座に宝珠を手にした座像をのせているが，頭部を欠失している。23（図版2—

下松尾墓地



第 3 図 下松尾墓地 墓標・積石墓分布図 (1/300)

1・4-1) と51は、宝珠を持った丸彫りの立像で、23の台石には線香を置くくぼみが彫込まれている。54は舟形光背をもつ浮彫の立像である。以上のうち、12のみが無銘で、他の3体には背面に戒名ほか彫られている。

b 角石塔形 角石塔形の墓標はすべて角碑に属し、竿石上端の形によって6形式に分類さ

れる。34基のうち、10・53の2基は竿石の破損のため形式は不明である。

笠石形（図版3—1・2，4—2） 7・8・116の3基とも、唐破風形の笠石をのせている。116は、この墓地で最も古いもので、自然石1段の台石をもち、7と8は切石2段の台石にのっている。

櫛形 これは、竿石側面の長方形上端に稜をつけ、頂部をカマボコ形にしたもので、正面から見ると櫛形となるものである。角石塔形のうち、約3分の2の22基をしめ、最も一般的な形式である。このうち、49・52・56・74の4基は正面も平坦なままに枠を作らずに、戒名や没年銘を彫っている。また115—1は、頂部を後傾させている唯一の例で、背面は自然面をそのまま残しているため、上部に向かって竿石が約3分の2の厚さになっている。

角山形 側面は長方形で、頂部中央に前後方向に稜をつけ、正面は長五角形の平面となる。2・24・102—1の3基がこれである。

丸山形 これは櫛形のものの側面上端に稜をつけず、頂部にむけて丸く移行するもので、竿石のみ倒伏していた3—1の1基のみである。

兜巾形 竿石側面の4面とも長方形で、頂部が低い四角錐をなし、四隅から稜が頂部中央に集まる形である。27・63の2基である。

特殊形 65の1基のみである。四角柱をなす竿石の頂部を、低い宝形造の屋根状を作り、頂部に円形の露盤風の突起をのせている。その上に宝珠をつけた形跡はない。

形式不明のもの 10は人頭大の竿石片が、台石後方の石積の上に数片あるのみである。53は、竿石下半が3片のこっているが、頂部を欠失している。

戒名 当然のことながら、角石塔形墓標には正面に、仏像形墓標の54のみにはその性格上背面に戒名が彫られており、23・51には戒名はない。石に刻字するという技術上の制約から、金石文特有の略字体も用いられているが、画数の多い字をそのまま用いたものも多い。

略字体は4種みられる。「釋」は116のみで「釈」を用いたもの16基、「尺」と略したものが33・34・35の3基である。「歸」をそのまま用いたものではなく、1は扁の下半の「止」を「大」に、7は扁全体を「止」で表している。「譽」は1と3にみられるが、7は「誉」を用いている。「靈」は65・99の2基にしかなく、9基に「𠩺」を用いている。1は、戒名上半に画数の多い字をほとんど略せずに刻しているが、下半は画数が少なくなり「靈」を用いず「𠩺」と作ったのは、全体のバランスを考えてのことであろう。

没年銘 没年銘は、①正面の戒名の左右に年号・年次と月日を分けるもの、②右側面のみにまとめるもの、③左側面のみのもの、④右側面に年号・年次、左側面に月日と分けるものの4種がある。①は1・2・3・8・24・35—1・58・74・99・102—1・115—1・116の12基、②は3—1・52・64・65の4基、③は49・56の2基、④は残り全部である。②のうち64・65は左側面に俗名があるが、52は年号と年次のみで行を別にして俗名も同面に併記しており、左側

下松尾墓地

面は無銘である。

年号と年次のみのものが49・50・52の3基あるが、他は月日まで書かれている。

干支は、ともに入っているのは7のみで、これは「年」に「稔」を用い、形式も笠石形で入念に作られたものといえる。十二支のみを入れたものは15基あり、干支の全くないものは13基である。また十二支も、年の前に入れるものと後に入れるものがあり、後に入れるもののうちで、没年銘が左右側面に分けて書かれるものは、右側面のものと左側面の月の前に入るものがある。また「年」を「天」に作るものは13基あり、64・65は十二支のみを入れて「年」を略している。

なお、46は左右側面にわけて記しているが、他のものが平面に字のみを刻しているのに対し、4mmほど彫りくぼめた枠の中に彫っている。また、8は正面の剥離が基だしいが、両側面・背面とも無銘であるから、正面の戒名の両側に記す①のタイプと思われる。

俗名その他 被葬者の名を刻んだものは19基である。そのうち「俗名」を冠したものは5基で、35—1は通称を、56は姓名を記している。名前のみのもものは8基、系累を示すのみのもものが6基ある。施主を併記したものは2のみで、特殊なものとして、27は戒名が草書体のゆえか書者名が左側面にみえるが、被葬者の名はない。

台石 台石は通常1段であるが、1・3・7・8・12・65は2段である。台石のないものは、台石のみのもものと組むと思われる。至近距離に台石のみがないものは、3—1・35—1の2基、台石のみで竿石の見当たらないものは9・14の2基である。

(3) 自然石墓標

自然石墓標は8基であるが、22(図版2—1)が比較的大型で、他の7基は、50cm内外の細長い河原石を直接地上に立てたものと、数個の根固め石をもつものがある。

(4) 積石墓(図版5—2)

積石墓は75基を数える。ほとんどが直径1m内外で、高さ30cmほどに拳大から人頭大の河原石を積んだものである。中央に、墓標の竿石状に細長い石を立てたものが25基あるが、他のものも、当初立っていたものが倒伏したと思われる。最大のものは直径1.7mにおよぶが、積み上げた石が崩落して拡がった可能性が大きい。107は直径2mにおよぶが、第5群と第6群との間のものとともに、単なる石の集積であろう。

石材は、稜角が丸みをおびているが、比較的稜を残したものがほとんどである。河原石でも、かなり上流の谷で採取されたものと思われる。

表 1 墓 標 一 覧 表

番号	戒 名	没 年 銘	干支	西暦	形式	俗 名 ほ か	備考 (台石について記さな いものは台石1段)
116	皎元釋教順不退位	貞享四年十二月廿二日	丁卯	1687	笠石形	□□	台石は自然石1段 竿石両側面・背面ノミ跡多し
24	飯元釈尼妙慶灵	元禄十年丑十二月廿、九日	丁丑	1697	角山形		竿石背面整形不良
21	□□墓	元禄十□年十一月八□ (酉) (日)	辛巳	1701	櫛 形		竿石背面ノミ跡多し
16	加來道琢墓	元禄十五年八月三日	壬午	1702	櫛 形		竿石背面ノミ跡甚し
102 -1	釈尼妙光灵位	宝永二□天九月十日 (酉)	乙酉	1705	角山形		竿石背面ノミ跡多し 竿石のみ
7	婦入還譽理本信女	宝永七庚寅稔七月八日	庚寅	1710	笠石形		台石2段
51	—	享保八年八月十四日	癸卯	1723	仏像形	□元	丸彫地藏菩薩立像 背面に刻銘
74	釈道角信士	享保八卯天十月廿、三日	癸卯	1723	櫛 形	俗名勘四良	竿石背面平坦
3	飯本明譽光照信士灵位	享保十二未天十月二日	丁未	1727	櫛 形		台石2段 竿石両側面背面ノミ跡多し
1	婦真覺□宗本信女灵位 (葬)	享保十三申天十月二十六日	戊申	1728	櫛 形		台石2段
23	—	享保十四年九月十一日	乙酉	1729	仏像形	□□□	丸彫地藏菩薩立像 背面に刻銘
46	釈順知信士	享保十七年子八月八日	壬子	1732	櫛 形		
99	釈教意靈	元文四天二月十七日	巳未	1739	櫛 形		
58	釈吟應灵	宝曆五亥天三月十日	乙亥	1755	櫛 形		両側面・背面ノミ跡甚し
54	釈源花童子	宝曆八天四月五日	戊寅	1758	仏像形	三之介	浮彫地藏菩薩立像 舟形光背, 背面に刻銘
55	釈妙西灵	明和六丑天九月七日	己丑	1769	櫛 形	□九□□	
61	釈淨光灵	明和八天卯八月廿三日	辛卯	1771	櫛 形	俗名甚七	
60	釈尼妙光灵	明和八天卯九月八日	辛卯	1771	櫛 形	甚九良母	
62	□号釈廣山灵位	安永七戌天七月十一日	戊戌	1778	櫛 形	俗名源四郎	
35	尺淨入信士	安永九子年六月廿、二日	庚子	1780	櫛 形		

下松尾墓地

34	尺妙誓信女	寛政七卯年十二月廿八日	乙卯	1795	櫛形		
63	釈妙清晃	享和二戌天九月二日	壬戌	1802	兜巾形	貞右門母 マ	
50	釈岸□□ (秋)	享和□□	{辛酉 壬戌 癸亥}	1801 1802 1803	櫛形	□五□□□九良 (甚)(良)(父)(甚)	
57	釈妙證大姉	文化十三子天□□	丙子	1816	櫛形		
53	□□玄瑞□ (位)	□政六年□月五日 (文)	癸未	1823	(不明)	甚二郎	
64	春夢童子	天保二卯正月十四日	辛卯	1831	櫛形	源七男子	
65	釋西志靈	天保二卯十月九日	辛卯	1831	特殊形	貞右エ門	台石2段・上段に 蓮華受花陰刻
52	□□信女 (順)	天保九年	戊戌	1838	櫛形	甚四郎前妻	
56	法岸順道信士	嘉永二年五月十一日	乙巳	1849	櫛形	俗名久保甚四郎	
49	迎願信女	嘉永三年	丙午	1850	櫛形	甚四郎後妻	

表 2 没年不明の墓標(その1)

番号	戒名	没年銘	可能な 年号	干支	西暦	形式	俗名ほか	備考
33	尺祐□□ (古)	天□□寅年正月□	{天明2年 天保元年 天保13年}	壬寅 庚寅 壬寅	1782 1830 1842	櫛形		
27	釈妙恵晃	天□三□八月□日	天保3年	壬辰	1832	兜巾形	和五郎書	
115-1	□香信女	□保二年□月廿二日	天保2年	辛卯	1831	櫛形		

表 3 没年不明の墓標(その2)

番号	戒名	形式	俗名ほか	備考
2	(不明)	角山形	□吉 (次) 施主五八郎	竿石正面下端に蓮華受花浮彫 両側面無銘, 正面剝離
3-1	釈□□□	丸山形	□□	左側面無銘, 竿石のみ
8	□千□□	笠石形		両側面背面無銘, 台石2段
9	—	—		台石のみ
10	(不明)	(不明)		台石と竿石小片のみ
12	—	仏像形		地藏菩薩丸彫座像, 台石2段
14	—	—		台石のみ, 五輪塔火輪空輪をのせる
35-1	—	角山形	□九月□ 俗名桶屋戊平治	竿石のみ, 台石不明
102	—	—		台石のみ, 102-1と組か
115	—	—		台石のみ, 115-1と組か

(5) 小 結

いままで見てきた中で、多少特徴的にあらわれることをあげると、まず、竿石の整形があげられる。笠石形のもの以外は、少くとも正面は平滑に磨きあげられているが、笠石形は3基ともノミで仕上げられている。また、背面のみないしは正面以外の3面に甚だしくノミ跡を残したものが8基(116・24・21・16・102—1・3・46・58)あるが、年代の古いものから5基と前半に入る3基で、後半のものは、すべて背面まで正面同様に平滑な仕上げである。

次に、正面に杵どりをせず、平坦なままに戒名を彫った49・52・56・74の4基がある。いずれも形式は楕形で、古い74は戒名の両側に没年銘を記しているが、他の3基は、この墓地では最も新しいもので、久保基四郎本人と前妻および後妻のものである。前妻と後妻のものは没年銘に月日がなく、本人のものには月日まで記入しているのも興味ぶかい。

兜巾形のもの63の1基であるが、特殊形65の貞右エ門の母の墓標である。

墓標の形式全般をみると、楕形が最も一般的であるが、楕形以外のものは前半にほとんど現われ、前記の兜巾形・特殊形の親子関係のものを除けば、後半はすべて楕形である。

被葬者を俗名または系累で記入したもの19基のうち、時期不明のもの2基と、笠石形の116、仏像形の51・23という特殊なものを除けば、13基が18世紀後半以降に属する。唯一の例外は74で、楕形という一般的な形式をとりながら18世紀前半であるが、正面に杵取りをしない点ではやや特殊なものとみなすこともできよう。被葬者を戒名以外の記し方で墓標に併記するのは、18世紀後半に一般化したようである。

年代の確定できない墓標は3基である(表2)。33は、年号後半と年次が竿石の欠落によって不明であるが、年号に「天」のつく寅年で妥当な年は表に示したとうりである。唯一の判断の手掛りは「釋」を「尺」に作った点で、あるいは、35と34の「尺」を用いた2基の間の天明二年壬寅(1782)に入れてよいと思われる。27は、年号後半がイ(にんべん)のみで旁(つくり)を欠失している。天保3年(1832)しか妥当する年はないので、64と65の間に入れてよい。115—1は、年号の前半の字の右端が上下二点のみ残っている。上点は横棒を引いて止めた形、下点は右下にはねた形であるところから、この墓地の時期で年号後半に「保」が来る正保2年(1645)・享保2年(1717)・寛保2年(1742)および天保2年(1831)のうちで、最後のものが適当である。65の前か後に挿入することができよう。

3. お わ り に

墓とは、本来地中に遺骸または遺骨を埋めた部分を指し、地表に塔をたてて被葬者を供養する風習は、平安時代に始まって仏教思想の普及にともなって一般化していったといわれている。塔の形式は、層塔・宝塔・宝篋印塔・五輪塔・卵塔（無縫塔）・仏像形墓標・塔婆形墓標・角石塔形墓標のほか特殊な形をとるものなど多岐にわたるが、この墓地にみられる仏像形と角石塔形は、ともに近世以降、供養の意味を失なって、単なる墓の標石として石塔が立てられるようになってから用いられた形式である。また、角石塔形は、角柱の頭部を塔形に刻みだした塔婆形から発展したものである。

墓標は、通常一周忌法要の際に木製卒塔婆から石塔に建てかえられる。生前に墓を営む寿陵の場合は、戒名（法名）に朱を入れて死後の墓と区別し、死後に朱を黒に変えるのを例とする。この風習は逆修と呼ばれ、善根類なきものとして大いに流行しているが、この墓地には、戒名に朱または黒色の見られるものはなく、すべて没年ののち数年を経ずして建立されたものと見做すことができる。

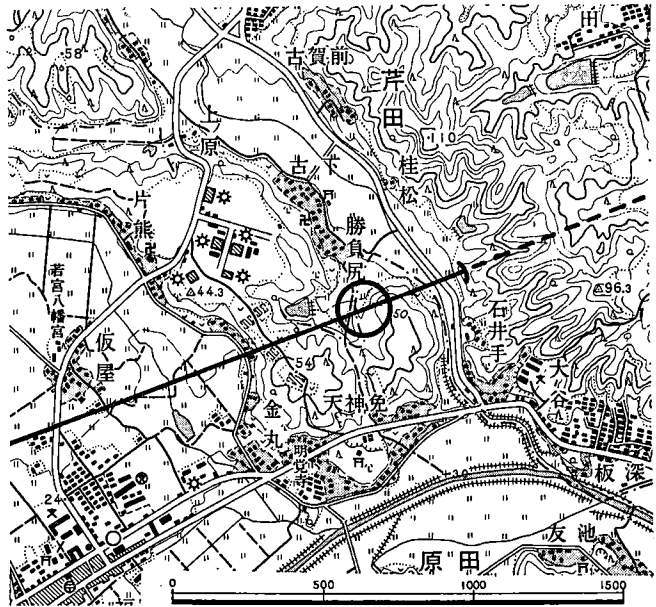
また、自然石を墓標とすることは血統を断絶させるという、墓相上の悪相にあたるものが8基みられる。墓相に関する最古の書物は、文化・文政期の国学者高田松屋が墓相を講じたのを門人が要記した「墓相小言」であるといわれるから、少なくとも18世紀には墓相について云々されていた筈であるが、この地方では無関心であったものであろうか。

最後に、この墓地の形成についてみれば、北西端の第一群に比較的早く建立されたものが多いほかは、一方から他方へ順に建立されていった形跡はない。積石墓については、建立の順序や時期を知るべくもないが、第1群に比較的古い墓碑が多いのは、この丘陵の頂部にあたるという条件によるほかはないと思われる。

（鶴久嗣郎）

付. 金丸墓地

昭和48年7月に、付帯工事にかかわる遺跡の分布調査を行なった際に、福岡県鞍手郡若宮町金丸において、近世墓2基が側道建設にかかることが分かった。ところが、同年9月に変電所建設にかかる田尻遺跡北半部の調査の打合せに現地に行った際ここに立寄ってみると、盛んに工事が行なわれており、近世墓は改葬されて墓標は廃棄され行方不明となっていた。この近世墓を管理していた人に来て尋ねたが、遠い祖先ということだけで詳細は不明である。分布調査の際メモした被葬者の没年銘のみを記しておく。

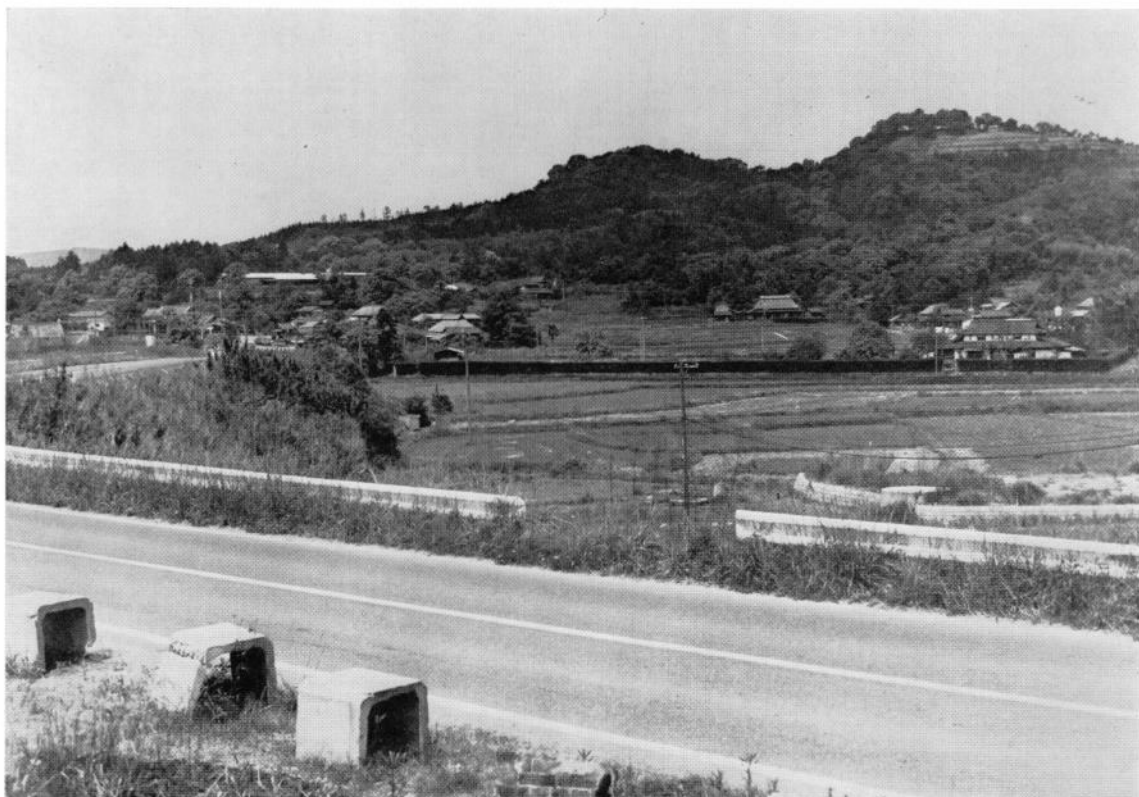


第1図 金丸墓地位置図 (1/25,000)

- | | | |
|----------------|---------|--------|
| 1. 明和九壬辰天五月十四日 | (1772年) | |
| 2. 文政十一子年八月九日 | (1828年) | (鶴久嗣郎) |

図 版

下 松 尾 墓 地



1 下松尾墓地遠景(南東から)



2 第1群全景(南東から)



1 第1群 右から22・23・24墓標（北西から）



2 第5群 全景（南から）



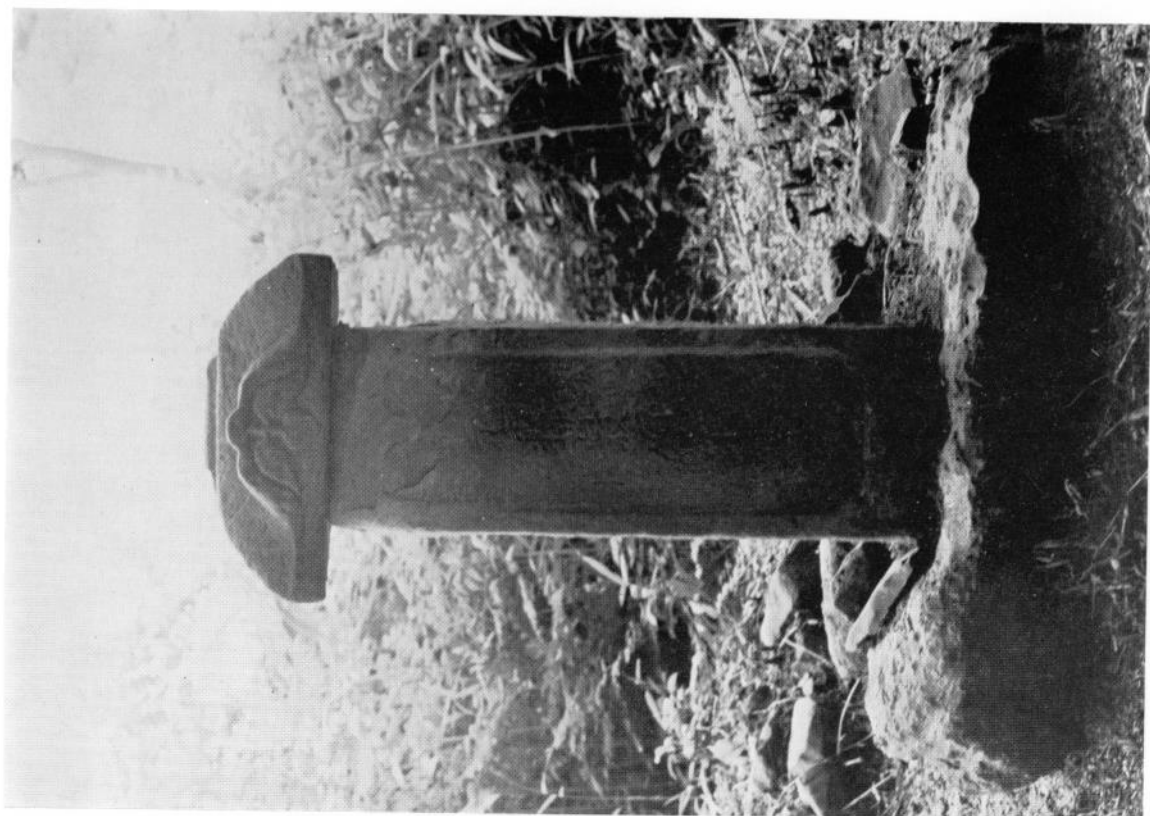
2 第1群7 笠石形墓標（東から）



1 第1群8 笠石形墓標（南から）



1 第1群23仏像形墓標（北西から）



2 第7群116笠石形墓標（南から）



1 第1群12仏像形墓標（南から）



2 第1群25積石墓（南東から）

Ⅳ 京尾遺跡の調査

鞍手郡鞍手町大字室木字京尾

本文目次

1. はじめに	53
(1) 調査の経過	53
(2) 遺跡の立地	53
2. 遺構と遺物	54
(1) 配石遺構	54
(2) 遺物	56
3. おわりに	57

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 京尾遺跡遠景（竊久嗣郎撮影）	53
(2) 配石遺構B全景（竊久撮影）	54
2 (1) 配石遺構A全景（竊久撮影）	54
(2) 配石遺構A中央部分（竊久撮影）	54

挿図目次

第 1 図 京尾遺跡位置図（国土地理院地形図1：25,000 中間・直方，木下修作成）	54
第 2 図 京尾遺跡地形図（竊久嗣郎・有吉朋行実測，丸山康晴製図）	55
第 3 図 配石遺構A実測図（竊久・宮崎貴夫・森田徹実測，竊久製図）	折込み
第 4 図 皇宋通寶拓影（竊久手拓）	57

Ⅳ 京尾遺跡の調査

1. は じ め に

(1) 調査の経過

この遺跡の調査は、昭和47年12月11日から23日の間におこなった。現地は丘陵上で、椋を主体とする雑木林の中であったが、建設工事をひかえて地権者による伐採が行なわれている最中であつた。遺構は落葉に埋もれた配石が頭を出す程度に露出しており、配石間の落葉と腐葉土を排除、写真撮影・遺構実測ののち下部遺構の検出にあたつた。この間に並行して地形実測を行ない、下部遺構が検出されなかったために調査は27日までの予定より早く終了した。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務	主 事	小 川 浩 一 郎
	嘱 託	吉 村 源 七
発掘調査	技術主査	齋 久 嗣 郎
	調査補助員	有 吉 朋 行（西鞍手高校教諭）
	同	宮 崎 貴 夫（明治大学学生）
	同	森 田 徹（ 同 ）

なお、この調査には若宮町在住各位の協力があつた。

(2) 遺跡の立地

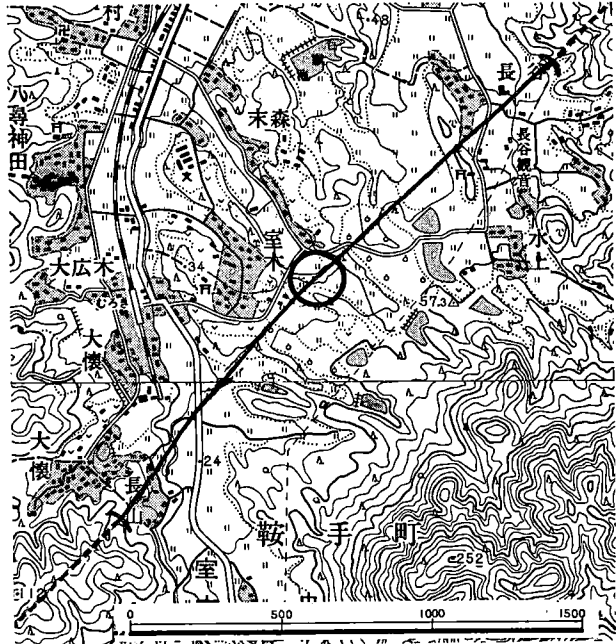
この遺跡は、福岡県鞍手郡鞍手町大字室木字京尾にある。ここは、鞍手郡北部を北流する西川の流域平野南端ちかくに当り、南東方の六ヶ岳の北西斜面が傾斜をおとして平野部に移行する部分である。この緩斜面は、かなり開析が進んで樹枝状に分岐する細い丘陵が並行して走っており、その間の開析谷は水田化されている。

京尾遺跡は、このような細長く北西方向に伸びる丘陵のひとつに立地し、標高40～45mの間の丘陵南西斜面を細長く削平して、河原石を配した遺跡である。

2. 遺構と遺物

この遺跡は、前述したように地表に一部が露出していた。この遺跡の立地する尾根は、全体として細長く北西方向に延びているが、遺跡のある地点で幅約50mである。稜線部は丸みをおびてやや平坦であるが、南西側斜面は約20度、北東側斜面は約30度にもおよぶ急傾斜である。尾根両側の水田面との比高は、西側で9m、東側で14mほどである。

遺跡は、この南西側斜面に2ヶ所みられる。尾根の頂稜部直下と斜面の中間部を、最大傾斜線に直角の方向に削平して細長い平坦地をつくり、河原石を多数配置したものである。石は多少重なりあってはいるが集積というほど積みあげられてはおらず、一面に配置した感が強いので配石遺構とした。尾根頂稜部直下のものをA、斜面中間のものをBとしたが、Aの方が規模が大きく、Bは短軸方向の傾斜がAよりやや大きい。Aの南寄りの石の間から、腐葉土に埋まった状態で古銭1枚が出土した。

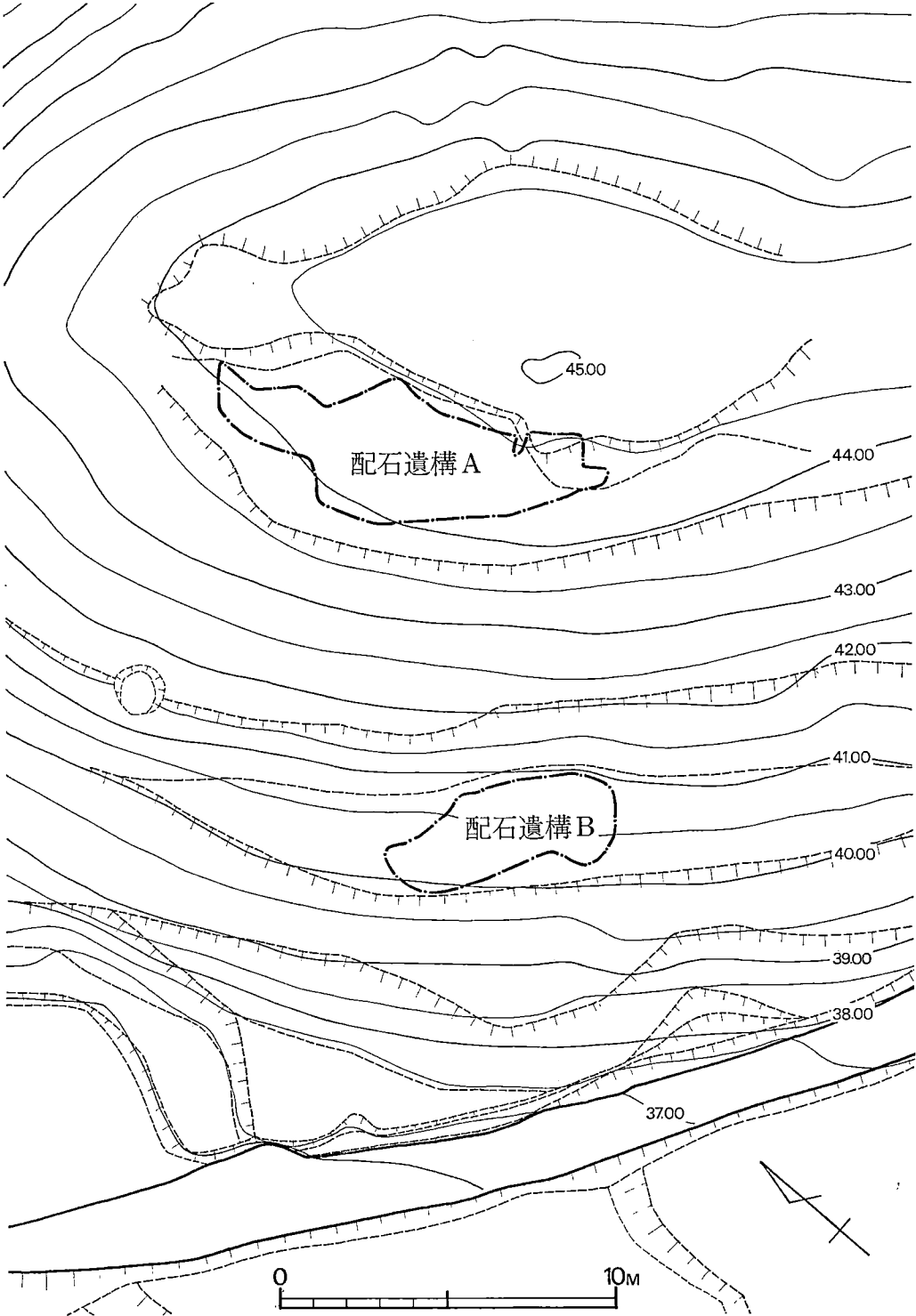


第1図 京尾遺跡の位置（1/25,000 中間・直方）

(1) 配石遺構

配石遺構A（図版2，第3図） この遺構は、尾根頂稜部直下を削平して石を配したものである。配石の範囲は、半月形または鳥の翼状の形を呈し、長軸方向は、尾根の走行方向とほぼ一致する。長軸方向の長さ12m、最大幅4mで、面積は20㎡をこえる。傾斜は、東南端より北西端が約50cm低く、横軸方向の上端と下端の差は30cmあまりである。全体としては、石の大小による凹凸のほかは平坦で、尾根の傾斜方向にやや傾いた感じである。

石塊は、大は長さ50cm、幅30cmのものから、小は隣寸箱大のものまで、大小さまざまのもの



第 2 図 京 尾 遺 跡 地 形 図 (1/200)

京尾遺跡

が混在している。稜の鋭いものも混っているがほとんどは稜がやや磨滅しており、かなり下流の河原で採取されたものである。

配石の中に、大きめの石を用いて囲いをしたように見える部分がある（図版2—2）。中央部の4ヶ所ほどに見られ、幅50cm・長さ70cmほどであるが、特別な下部遺構もなく、あるいは配石の偶然かもしれない。

下部遺構は全く見られなかった。表層の腐葉土は10～20cmの厚さであるが、この下はすぐに地山の層である。配石の大形のものは地山にまで達しているが、小形のものは表層に浮いた状態である。配石を排除した跡は、地山を配石の範囲とほぼ同じ広さで削平した平坦な面が見られたのみである。

配石遺構B（図版1—2） この遺構は、斜面の中間部を削平して石を配している。配石の範囲は長さ7m・幅2.5mほどで、長軸方向は尾根の走行方向に沿い南東～北西であり、ほぼ長楕円形を呈している。

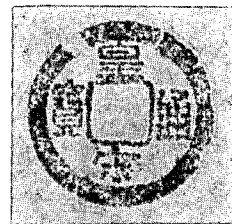
石塊は、Aよりもやや小さく、最大のもので長さ30cm・幅20cm程度である。斜面の中途にあるせいか傾斜はAより強く、長軸・短軸方向とも高低差は約80cmで、かなり外傾したものである。

下部遺構は、Aと同じである。斜面上部を切込んで、外傾した平坦面が配石の範囲とほぼ同じに広がっているばかりである。

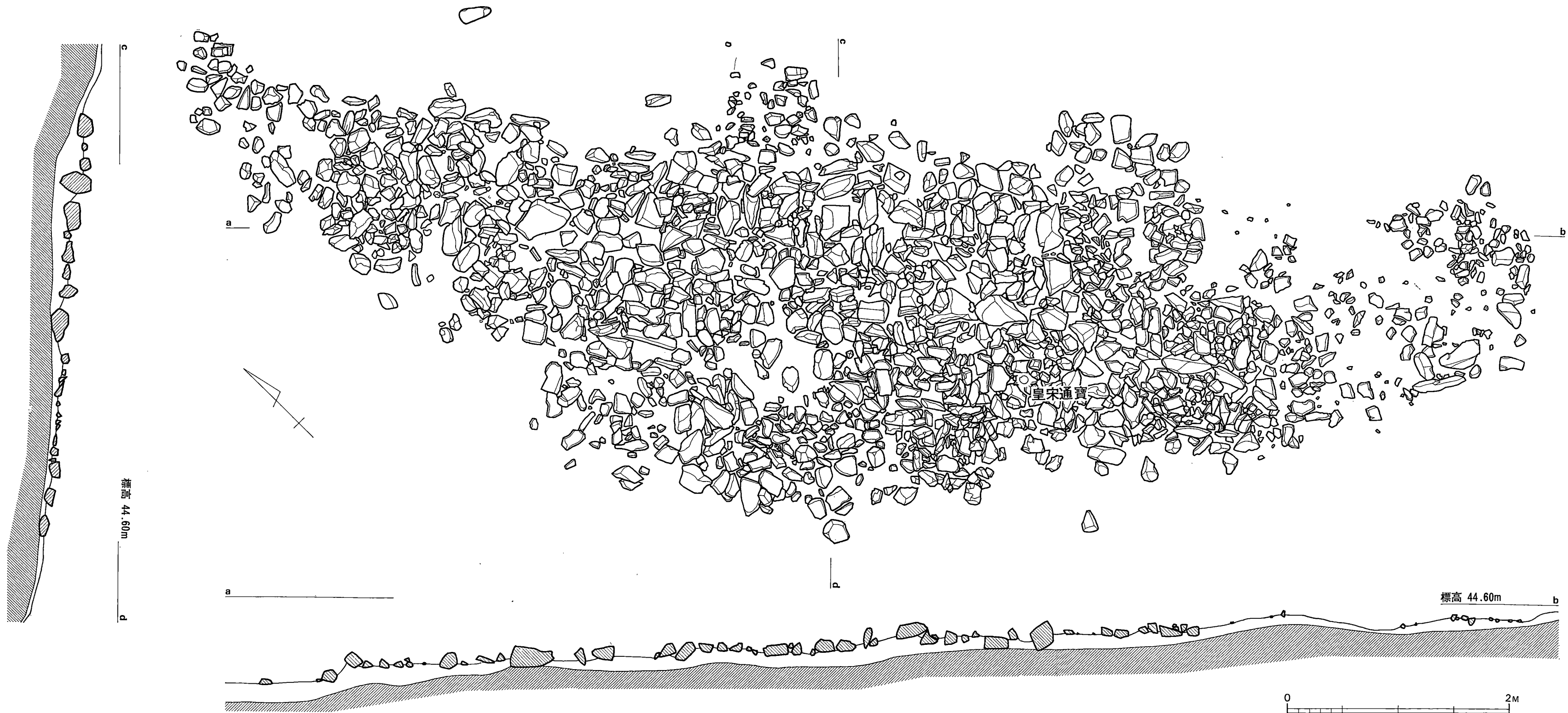
(2) 遺 物 （第4図）

配石遺構Aの石の間から「皇宋通寶」1枚が出土した（第3図）。地山より約5cm上の腐葉土内にあり、面・背とも緑錆におおわれていた。

大きさは、直径24mmで一辺7.5mmの方穿をもつものである。一面の緑錆にもかかわらず、面・背ともさして荒れておらず、質は良好である。



第4図 皇宋通寶拓影(1/1)



第 3 図 配 石 遺 構 A 実 測 図 (1/30)

3. お わ り に

これまでに見てきたように、この遺跡は、丘陵の斜面を削平して石を配しただけの、きわめて簡素なものである。配石にも特別の構造は判然とせず、下部構造もみられなかった。出土遺物も古銭1枚のみであった。

配石のなかでは、大形の石のみが地山面に密着していて、小形のものは腐葉土の表土にくいこんでいるだけである。このことは、地山面が削平整地された直後に石が配されたことを否定する。しかし、この削平は明らかに人為的なものであり、配石も附近の丘陵上には同様の石材が見られないところから人為的なものと見られる。しかも、削平地と配石の範囲が一致することは、両者の間に、密接な関連があることを意味している。削平した当初に、大形の石のみを配して腐葉土をおき、その上に小形の石を置いたとすれば辻褄があうが、そのわりには表面が揃っていない。当初は大形の石のみで、腐葉土が自然に堆積した後に小形の石を加えたと考えの方が、大形の石が面を揃えるとか判然とした区画を示すこともなく、配石全体の輪郭も整然としたものではないことをあわせても、まだ自然だといえるだろう。

出土した皇宋通寶は宋銭である。北宋仁宗の宝元元年（1039年）に初鑄され、日宋貿易で多量に輸入されて流通した。近世に入って国内で貨幣の鑄造が行なわれるまで流通したことを思えば、地山から浮いた状態で出土したものと合せて、配石遺構の時期を考える手掛りとはならない。皇宋通寶は、最近では太宰府近傍で出土した例がある（註1）。

配石を露出する過程で、腐葉土中から淡黄灰色の中世土師器片を思わせる小片が出土したが、これは自然物であった。この遺跡の地山は、朱色にちかいローム状土壌であるが、この中に含まれる風化した礫が層状に剝離して、地山を削平した際に小片となったものである。

（鶴久嗣郎）

註1 前川威洋・新原正典「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)」『福岡南パイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会 1975

版 図

京 尾 遺 跡



1 京尾遺跡遠景（南西から）



2 配石遺構 B 全景（北から）



1 配石遺構 A 全景 (西から)



2 配石遺構 A 中央部分 (南西から)

V 若宮条里遺構の調査

鞍 手 郡 若 宮 町

本文目次

1. はじめに	59
(1) 調査の経過	59
(2) 遺跡の立地	59
2. 遺構と遺物	60
(1) 遺 構	60
(2) 遺 物	62
3. おわりに	62

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 若宮平野中心部航空写真（竊久嗣郎撮影）	59
(2) 若宮平野稲光地区航空写真（竊久嗣郎撮影）	59
2 (1) C地点トレンチ中央部溝断面（竊久嗣郎撮影）	60
(2) E地点トレンチ全景（竊久嗣郎撮影）	61
3 (1) F地点トレンチ全景（竊久嗣郎撮影）	61
(2) F地点トレンチ中央部溝断面（竊久嗣郎撮影）	61

挿図目次

第 1 図 若宮条里位置図（国土地理院地形図 1:50,000直方，木下修作成）	60
第 2 図 条里遺構調査トレンチ土層断面図（竊久嗣郎実測，井上裕弘製図）	61
第 3 図 A地点出土土器実測図（小池史哲実測，製図）	62
第 4 図 若宮平野条里復原案（国土地理院地形図1:25,000 筑前東郷・中間・脇田・直方，竊久作成）	折込み

V 若宮条里遺構の調査

1. は じ め に

(1) 調査の経過

この遺跡の調査は、昭和47年8月28日から9月10日までと、同年10月2日から28日までにおこなった。調査期間が二分されたのは、この間に後記の別当塚古墳と八幡塚古墳の調査をおこなったからである。

若宮平野は、集落の部分以外はすべて水田化されている。調査を行なう予定の期間が稲の作付期を避けられなかったために、調査予定地点を、当時おこなわれた減反政策（作付制限）の対象地として空閑地にしてもらっていたが、その一部に、農作業の都合から稲が作付けされた、この取扱いがすぐに決まらなかったで、引続いて行なう予定であった別当塚古墳と八幡塚古墳の調査を、この間に実施したものである。

条里遺構の調査は、地表の道路・水路・畦畔の走行からみて、それらを新幹線路線敷が切断する地点にトレンチを設定しておこなった。トレンチは8カ所に設定したが、これを西寄りの地点からA～F地点とした（第4図）。A・Bの2地点を前半に、C～Fの6地点を後半に調査したが、このうちF地点で古墳時代の溝を切断したのが、後記の田尻遺跡発見のきっかけとなった。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務 主 事 小 川 浩 一 郎

嘱 託 吉 村 源 七

発掘調査 技術主査 鶴 久 嗣 郎

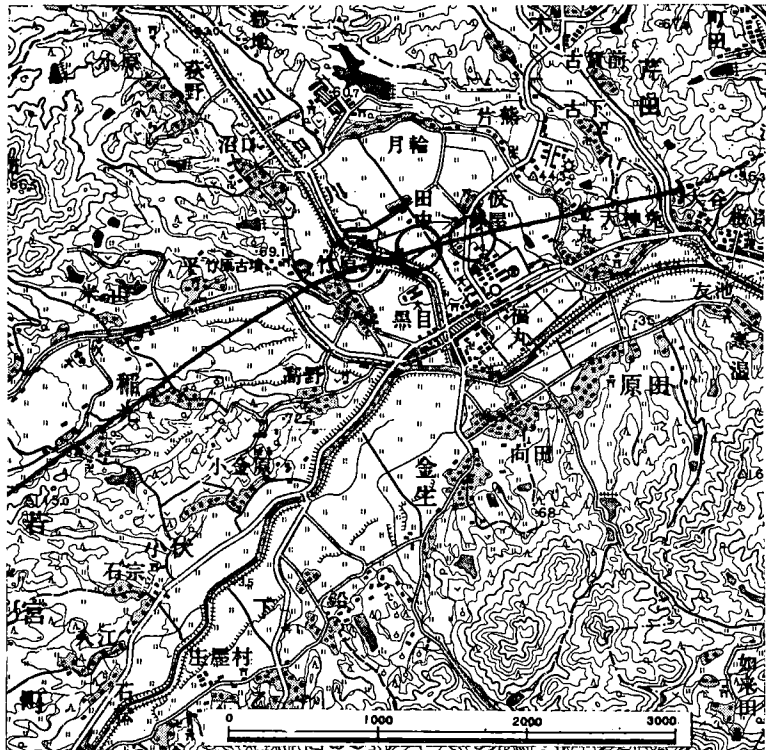
なお、この調査には若宮町在住各位の協力があつた。

(2) 遺跡の立地

若宮平野は盆地である。福岡県鞍手郡若宮町の中心部を占め、直方市で遠賀川に合流する犬鳴川の上流にあたる。この平野は、犬鳴川本流と黒丸川・山口川の二支流により形成されたもので、それぞれの川が作った幅 500m ないし 1000m の細長い平野が、下流部で合成されて広がっている。このため、平野は福丸あたりで最も広く、北西方向に山口川、西方に黒丸川、南

若宮条里

西方向に犬鳴川の流域平野が楔状にのびる楓の葉の形をなしている。西方と南方には犬鳴山地が広がり、東から北にかけては標高 100 m 前後の低平な山地にかぎられて、この平野は、板深・友池の集落あたりで終る。犬鳴川は、これから下流約 2 km に宮田の小盆地を作り、北東に流路をかえて遠賀川へ流下する。



第1図 若宮条里の位置 (1/50,000 直方)

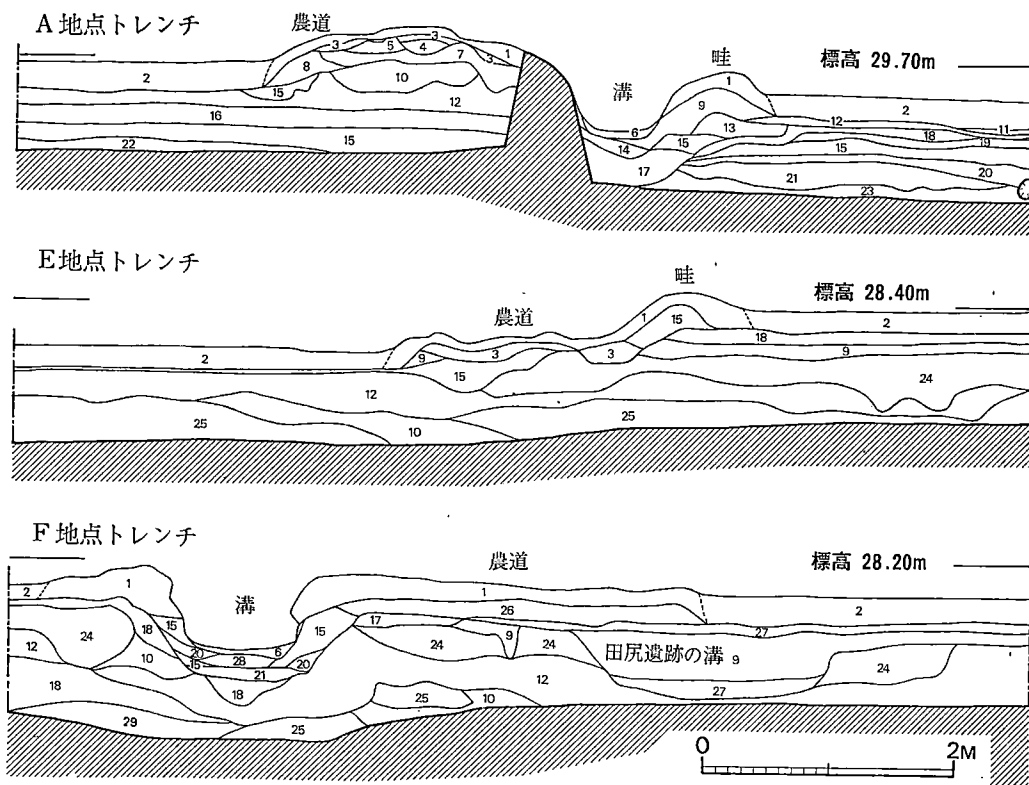
2. 遺構と遺物

遺構の調査は、8 地点にトレンチを設定して行なった。西よりの地点から A～F 地点としたが、A～C の 3 地点は山口川の氾濫原、D～H の 5 地点は若宮平野に 3 段みられる段丘のうちの低位段丘面にあたる。

トレンチ土層断面からは埋没条里の遺構は検出されなかった。また、時期を同じくする遺物の出土もなく、縄文土器が 1 片出土したのみである。

(1) 遺 構

A～C 地点 (図版 2—1, 第 2 図) この 3 地点は、いずれも山口川の氾濫原にあたり似た様相を呈している。3 地点とも下部は砂利層で、現在用水路として使用されている溝の底から



第2図 条里遺構調査トレンチ土層断面図 (1/60)

5～10cmで粘土を混じえた砂利層が現われる。これと同レベルまたは下部には、砂まじりの砂利層や粘土層が互層をなし、氾濫による土砂や砂利の堆積の激しさを示している。

なお、A地点トレンチ東半部の水田面から約60cmの深さで、縄文土器片1点が出土した。この層は、灰色混砂粘土層で多量の流木や樹枝を含んでいた。

D～H地点 (図版2-2, 3-1・2, 第2図) これら5地点は、いずれも若宮平野中心部の北

土 層 名

- | | |
|---------------|---------------|
| 1 表土 | 16 黒灰色粘土層 |
| 2 耕作土 | 17 灰色粘土層 |
| 3 灰褐色混砂利粘土層 | 18 黄褐色粘土層 |
| 4 黄褐色混砂利粘土層 | 19 灰色粘土層 |
| 5 灰白色粘土層 | 20 灰色混砂粘土層 |
| 6 シルト層 | 21 灰褐色混砂細砂利層 |
| 7 灰褐色混砂質土砂利層 | 22 青灰色粘土層 |
| 8 黒褐色砂質土層 | 23 暗青灰色混砂細砂利層 |
| 9 黒褐色粘土層 | 24 褐色粘土層 |
| 10 茶褐色混砂利粘質土層 | 25 茶褐色混粘土砂利層 |
| 11 明灰褐色粘土層 | 26 暗灰色粘質土層 |
| 12 茶褐色粘土層 | 27 明灰色粘質土層 |
| 13 黄灰色粘土層 | 28 灰褐色細砂層 |
| 14 灰黄色混粘土砂利層 | 29 黄褐色混砂粘土層 |
| 15 灰褐色粘土層 | |

若宮条里

半に広がる低位段丘上にあたる。この低位段丘は山口川氾濫原との比高約1mで、上流部・下流部とも比高が小さくなるので殆んど目立たない。

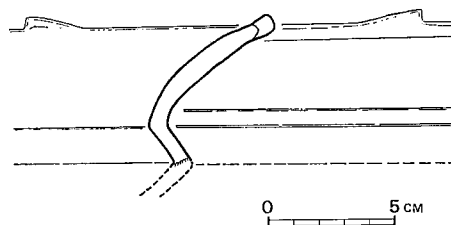
この5地点のうち、E・Hの2地点のみが条里想定線の北西～南東方向を切断するもので、他はA～C地点も含めてこれに直交する方向を切断するものである。D～H地点トレンチ土層もほぼ共通の傾向を示し、水田耕作土と床土の下は粘土層、その下の深さ約40cmあたりから粘土・砂・砂利が混在する層となる。

これらの中で、F地点トレンチの用水路切断部は現在の溝底から約40cm下まで溝状の断面を示し、粘土または細砂利・細砂の堆積がみられたが、全く遺物が検出されずに終り、時期をつかむ手掛りは全くない。

なお、F地点トレンチ東半部で粘土層に切込まれた逆台形断面をもつ溝を検出し、この中からのみ古墳時代の土器が出土したが、これは、後記する田尻遺跡の遺物と一括して取扱うことにした。
(薨久嗣郎)

(2) 遺 物 (第3図)

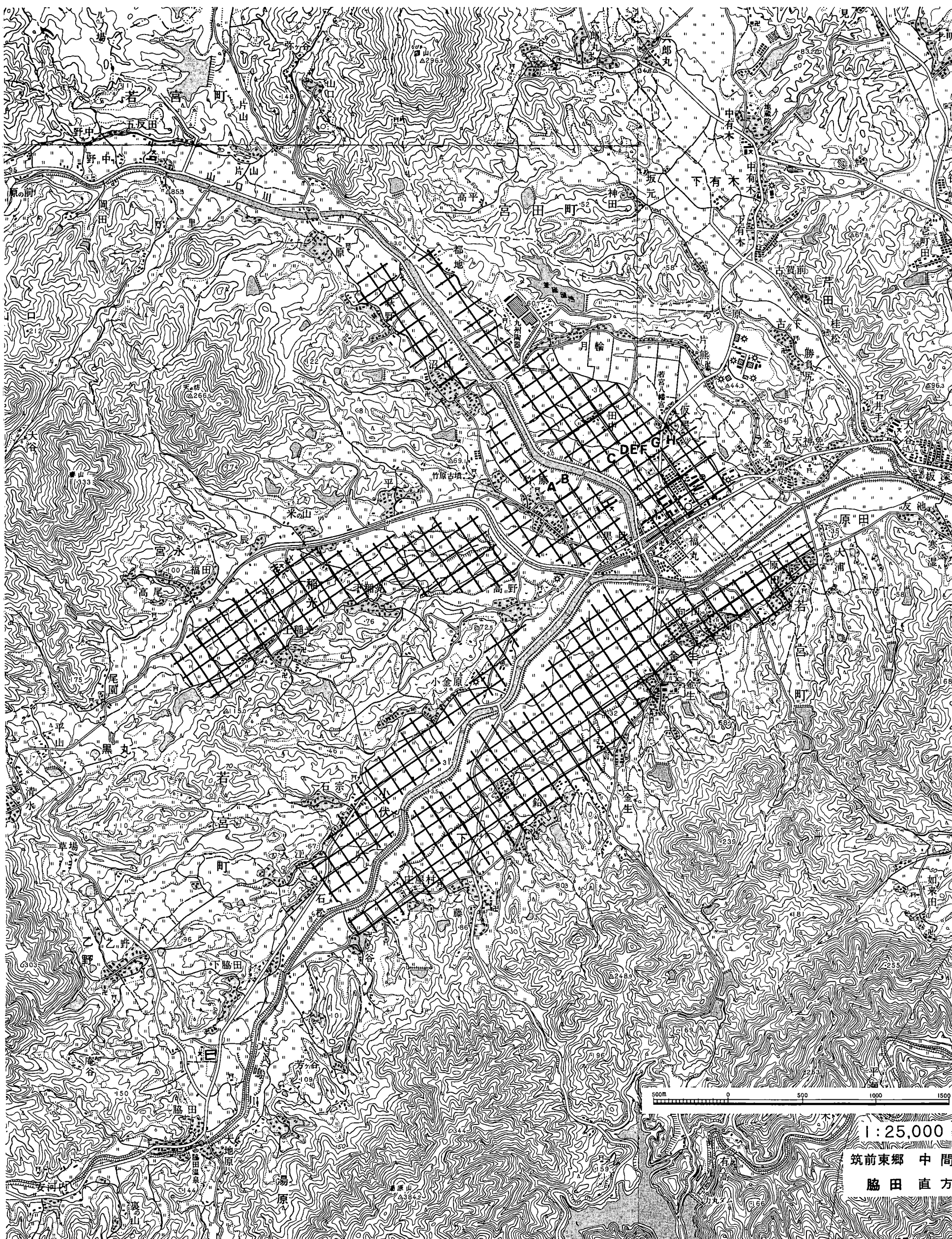
A地点トレンチの混砂粘土層(20)より流木に混じて土器片1点が出土した。縄文時代晩期前葉の所謂黒色精製研磨土器の範疇に入れられるもので、浅鉢形土器の口縁部から胴部にわたる破片である。色調は黝黒色を呈し、胎土は良好でかつ調整研磨を施しているが、焼成はやや不良である。口縁部は著しく外反して上面に鱗状の突起を有し、胴部は菱線をなして折れ底部へと続くが、口縁部・頸部の円弧から約60cmの口径を有するものと推定される。(小池史哲)



第3図 A地点出土土器実測図(1/3)

3. お わ り に

今回の調査では、埋没条里遺構はおろか条里関連遺物の一片すら発見されなかった。道路・水路・水田の畦畔・小字界からみて、条里制の行なわれたことは明らかであるが、少なくとも今回調査した8地点付近には、古代班田の対象となった水田その他の遺構が埋没している形跡はみられない。これは、この平野が上流部と下流部の間の距離約4kmで標高差が50mを越える傾斜をもつことで、平野の半分以上を占める中・下位段丘の開析が、現在も僅かずつではあるが進行していることによると思われる。したがって、条里線の想定は現地表にみられる諸表徴



第4図 若宮平野条里復原案 (1:25,000)

に頼るほかはない。

この平野は、炭坑もなくあまり大規模な開発もうけていないために、比較的旧状をよく保っている。道路や水路なども、一町あるいはその倍数の間隔をおいて平行している所は多く、字界線がこれらと一致する部分も少なからずある。これらによって条里線を想定してみると、西偏34度とこれに直交する線が、谷頭部を除いて平野のほぼ全面にわたって復原できるようである（第4図）。犬鳴川・黒丸川の上流には同方位をとる道路がみられるが、字界線が乱れるのでとらなかった。また、福丸集落の南側や若宮八幡宮の北・東側一帯は、区画整理が実施されているので保留したが、整理前の地図（註1）でみると、同方位の道路があるので条里線は丘陵裾まで延長できる。河川の氾濫原にあたるA・B・C地点付近にも、現在の堤防直下まで水路や農道が同方位を保っており、土地区画の保守性の強さには改めて驚かされる。稲光平野の東部には、比高5mをこえる中位段丘が突出しているが、この段丘上にも条里線は想定でき、水利と平坦面とが条里制施行の条件であったことを物語っている。なお、条里坪付名は字名には遺存していない。

「和名抄」にみえる鞍手郡六郷のうち、この平野の北半に十市郷、南半に金生郷が比定されており、平野北側を限る丘陵地帯では奈良時代の集落が発見されている（註2）。この平野では古墳群の分布が比較的密であるが、これらの中には相当に時期の下る古墳の存在も考えられ、若宮平野の古代像の解明は今後の調査をまつほかはない。

なお、A地点で発見された縄文土器は若宮平野では初めてのものであるが、流木にまじって粘土中から出土したものであり、山口川上流に遺跡の存在が考えられる。（龜久嗣郎）

註1 「大正五年特別大演習地図」 大正五年九月製版 1916

2 福岡県教育委員会「鞍手のむかし」『若宮町内遺跡発掘調査説明会資料』 1974

図 版

若 宮 条 里 遺 構



1 若宮平野中心部航空写真（南から）



2 若宮平野稲光地区航空写真（南西から）



1 C地点トレンチ中央部溝断面（南東から）



2 E地点トレンチ全景（東から）



1 F地点トレンチ全景（東から）



2 F地点トレンチ中央部溝断面（南東から）

Ⅵ 田尻遺跡の調査

鞍手郡若宮町大字金丸・水原字田尻

本文目次

1.	はじめに	65
	(1) 調査の経過	65
	(2) 遺跡の立地	68
2.	遺構と遺物	68
	(1) 竪穴住居跡	68
	(2) 竪穴住居跡出土遺物	69
	(3) 溝	72
	(4) 溝内出土遺物	73
	(5) 掘立柱建物	87
	(6) その他の遺構と遺物	89
3.	まとめ	90

図版目次

本文対照頁

図版 1	(1) I—A区全景 北東から（竊久嗣郎撮影）	65
	(2) I—A区東半部 西から（竊久撮影）	65
2	(1) I—A区溝全景 北東から（竊久撮影）	65
	(2) 溝内土器出土状態 南東から（竊久撮影）	65
3	(1) 溝北半部 南から（竊久撮影）	72
	(2) I—B区溝全景 西から（竊久撮影）	72
4	(1) I—A区南東部 北から（竊久撮影）	65
	(2) I—A区北東部不整形落ち込み 東から（竊久撮影）	65
5	(1) 掘立柱建物A 北から（竊久撮影）	87
	(2) 掘立柱建物B 南西から（竊久撮影）	87

6	(1) 掘立柱建物C 南西から(竊久撮影)	87
	(2) 掘立柱建物D 北東から(竊久撮影)	87
7	(1) II—B区全景 北から(宮崎貴夫撮影)	67
	(2) II—A区全景 東から(宮崎撮影)	67
8	(1) II—A区近景 南から(柳田康雄撮影)	67
	(2) 竪穴住居跡 北東から(宮崎撮影)	68
9	(1) 竪穴住居跡 北東から(宮崎撮影)	68
	(2) 掘立柱建物E 南東から(宮崎撮影)	87
10	竪穴住居跡出土土器(1)(宮崎撮影)	69
11	竪穴住居跡出土土器(2)(宮崎撮影)	69
12	溝内出土土器(1)(宮崎撮影)	73
13	溝内出土土器(2)(宮崎撮影)	73
14	溝内出土土器(3)(宮崎撮影)	75
15	溝内出土土器(4)(宮崎撮影)	78
16	溝内出土土器(5)(宮崎撮影)	80
17	溝内出土土器(6)(宮崎撮影)	82

挿 図 目 次

第 1 図	田尻遺跡付近地形図(日本国有鉄道原図 1:1500 宮崎貴夫製図)	66
第 2 図	田尻遺跡全体図(竊久嗣郎・有吉朋行・柳田康雄・松村恵司・ 宮崎実測, 宮崎製図)	折込み
第 3 図	1号竪穴住居跡実測図(柳田・宮崎実測, 宮崎製図)	折込み
第 4 図	竪穴住居出土土器実測図(1)(宮崎実測, 製図)	70
第 5 図	竪穴住居出土土器実測図(2)(宮崎実測, 製図)	71
第 6 図	溝東西土層断面図(森田徹・宮崎実測, 宮崎製図)	73
第 7 図	溝内出土土器実測図(1)(宮崎実測, 製図)	74
第 8 図	溝内出土土器実測図(2)(宮崎実測, 製図)	76
第 9 図	溝内出土土器実測図(3)(宮崎実測, 製図)	77
第 10 図	溝内出土土器実測図(4)(宮崎実測, 製図)	折込み
第 11 図	溝内出土土器実測図(5)(宮崎実測, 製図)	79
第 12 図	溝内出土土器実測図(6)(宮崎実測, 製図)	81
第 13 図	溝内出土土器実測図(7)(宮崎実測, 製図)	83

第 14 図	溝内出土土器実測図(8) (宮崎実測, 製図)	84
第 15 図	溝内出土土器実測図(9) (宮崎実測, 製図)	85
第 16 図	建物A～D実測図 (靏久・森田・宮崎実測, 靏久製図)	折込み
第 17 図	建物E実測図 (柳田・宮崎実測, 宮崎製図)	88
第 18 図	表土層出土磁器 (宮崎実測, 製図)	89
第 19 図	たちあがり高と角度の関係模式図 (宮崎作成, 製図)	90
第 20 図	たちあがり高と角度の関係 (宮崎作成, 製図)	91

目 次

表 1	建物A計測表 (靏久嗣郎作成)	87
2	建物B計測表 (靏久作成)	87
3	建物C計測表 (靏久作成)	87
4	建物D計測表 (靏久作成)	87
5	建物E計測表 (宮崎貴夫作成)	89
6	掘立柱建物一覧表 (宮崎作成)	92

Ⅵ 田 尻 遺 跡 の 調 査

1. は じ め に

(1) 調査の経過

この遺跡の調査は、昭和47年度と49年度の2回行なった。第1次調査は、新幹線路線敷にかかる部分の調査であったが、その後この地点に北接して変電所と住宅が建設されることになったために、付帯施設にかかわる遺跡の調査として第2次調査を実施したものである。

a 第1次調査

前記した若宮平野条里遺構の調査を行なった時に、F地点トレンチで古墳時代の遺物を包含する溝を発見したことから、この遺跡の存在が知られて調査を行なうことになった。

この調査は、昭和48年1月8日から3月20にわたって行なった。この地点付近はきわめて緩やかではあるが南に向かって傾斜していることから、溝に関連する遺構は溝の北西側に分布すると考えて、路線敷幅で西側を中心に調査した。溝の南東側は、溝で区画された区域の外側に当ると思われたことと、水路・農道を隔てた東側水田の調査承諾が得られなかったために、調査地区南東隅に当る部分と、無理に頼んで調査した溝北端部の東側小部分の調査にとどめた。

その結果、溝の外側部分からは僅かに柱穴跡が発見されただけであったが、溝の中からはかなりの量の土器が出土し、溝の内側部分では多数の柱穴跡が検出されて4棟の建物が確認された。

なお、調査は溝から西に120 mほどまで行なったが、西半部には全く遺構がみられなかった。

調査関係者

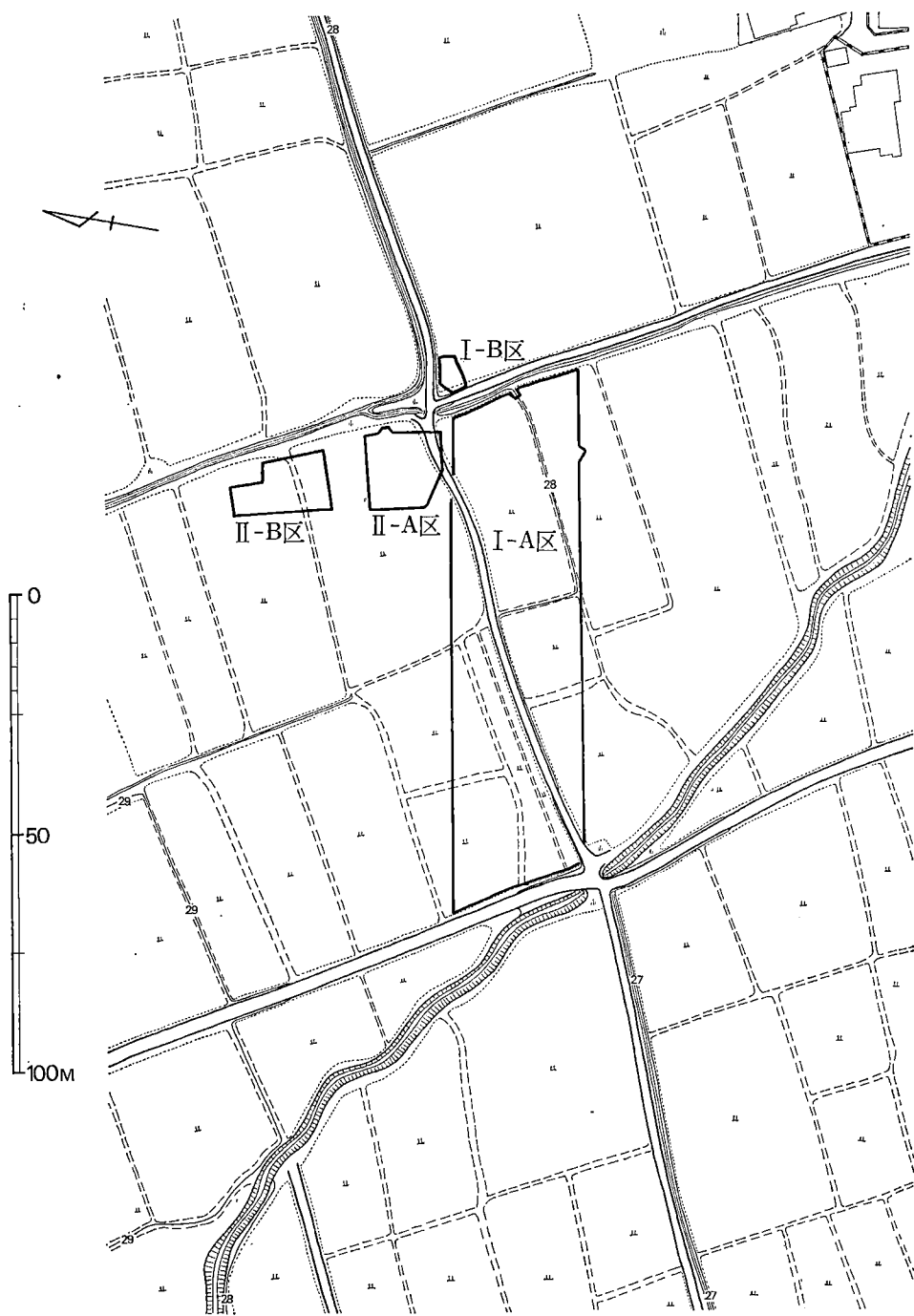
福岡県教育委員会文化課

庶務	主事	小川	浩一郎
	嘱託	吉村	源七
発掘調査	技術主査	鵜久	嗣郎
	調査補助員	有吉	朋行（西鞍山高校教諭）
	同	宮崎	貴夫
	同	松村	恵司

なお、この調査には森田徹（明治大学）と若宮町在住各位の協力があつた。

（鵜久嗣郎）

田尻遺跡



第 1 図 田尻遺跡付近地形図 (1/1500)

b 第2次調査

前回の路線内調査に於いて、古墳時代後期の溝状遺構と掘立柱建物群（4棟）が確認され、遺跡は東と北側、現在の水原集落と若宮八幡宮付近に拡がる可能性をもつことが予想されていた。前回調査北側に新幹線のための変電所と職員住宅が建設されることになり、第2次調査を昭和49年4月9日～6月19日にわたって行なった。その結果、溝遺構と関連すると思われる古墳時代後期の竪穴住居跡（1軒）、および総柱建物跡（1棟）などの遺構が検出された。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶務	主事	加藤俊一
	嘱託	吉村源七
発掘調査	技師	柳田康雄
	嘱託	宮崎貴夫

4月9日 新幹線若宮工事区岡村助役に会い現地で調査の打ち合わせを行なう。

4月15日 ブルドーザー及びユンボで埋土の除去を行なう。

4月19日 器材運び。

5月22日 発掘開始。Ⅱ-A区を設定し表土剥ぎを行なう。発掘区北東隅に柱穴状の落ち込みが数個並ぶことが確認される。

5月23日 Ⅱ-A区南東隅に隅丸長方形の黒色土の落ち込みが確認され、竪穴住居跡であることが予想される。

5月26日 Ⅱ-A区北側にⅡ-B発掘区を設定し、表土剥ぎを開始する。

6月1日 Ⅱ-A区北東隅の柱穴群は2間2間の総柱掘立柱建物跡であることが地山面で確認され、柱穴を掘り下げる。

6月2日 Ⅱ-A区南東隅の隅丸長方形の黒色落ち込みを掘り下げる。覆土から須恵・土師器片が出土し、周溝・床面の一部が検出される。またⅡ-B区中央に三日月状の黒褐色土の落ち込みと、北隅に細い溝状遺構、南隅に数個のピットの他に遺構は確認されず、集落は東方に拡がるものと思われた。

6月7日 竪穴住居跡の床面・周溝の検出。

6月8日 竪穴住居跡の柱の検出。貼床であることがわかった。掘立柱建物跡の写真撮影。

6月10日 Ⅱ-A区の清掃。

6月11日 Ⅱ-A・B区の全体写真及び竪穴住居跡の写真撮影。

6月13日 Ⅱ-A区の1/20平面実測。

6月14日 Ⅱ-B区の1/50平板実測。

田尻遺跡

6月15日 II—A区の平面実測完了。

6月16日 エレベーションを行なう。

6月17日 実測終了。

6月18日 教育庁へ器材を運ぶ。

(宮崎貴夫)

(2) 遺跡の立地

この遺跡は、福岡県鞍手郡若宮町大字金丸・水原字田尻にある。ちょうど遺跡の中を大字界が走るが、小字は双方とも田尻である。

若宮平野は、その中心たる福丸の集落付近で合流する犬鳴川・黒丸川・山口川の流域平野が下流部で合成された、不規則な盆地である。この遺跡は、そのほぼ中心部に位置しており、福丸集落から北方約 500 m の距離にある。

若宮平野には 3 段の段丘が認められるが、この遺跡は低位段丘上に位置し、標高約 28 m である。遺跡の南西側には、約 50 m 離れたあたりにこの段丘と山口川氾濫原との境界をなす段落ちが見られるが、その間の比高は 1 ～ 1.5 m で段丘崖というほどのものではなく、目立たない。周辺はすべて水田化されており、北から東にかけては比較的低い丘陵または山地、南から西にかけては犬鳴山系を望んで遺跡は好位置を占めている。新幹線はこの平野を二分する形で建設され、様相は一変した。

(竊久嗣郎・宮崎貴夫)

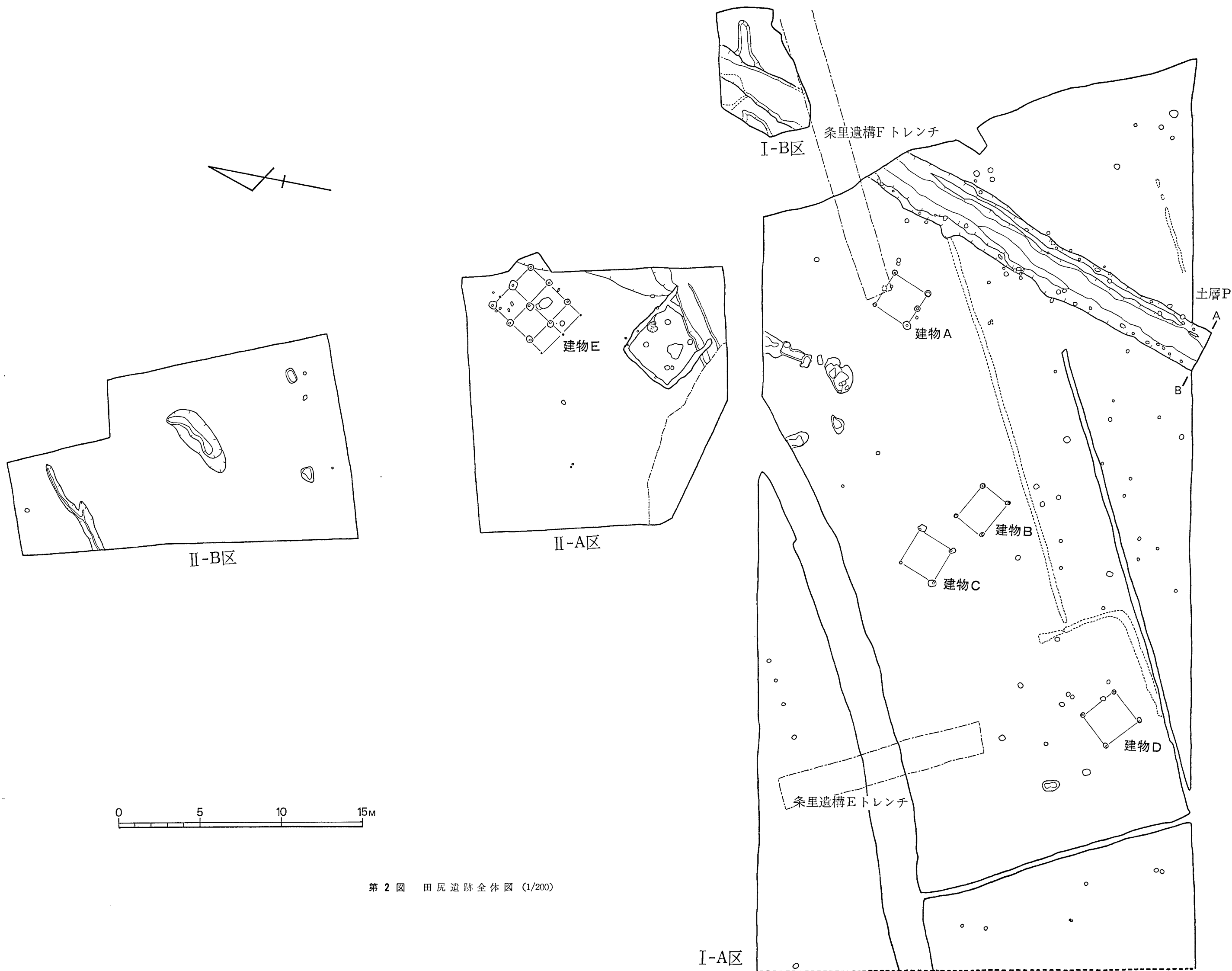
2. 遺構と遺物

この遺跡は、竪穴住居跡・溝・掘立柱建物跡その他の遺構から成っている。竪穴住居跡と溝からは相当量の土師器・須恵器が出土し、表土からは磁器が検出された。また掘立柱跡の組合わせから、5 棟の建物が確認された。

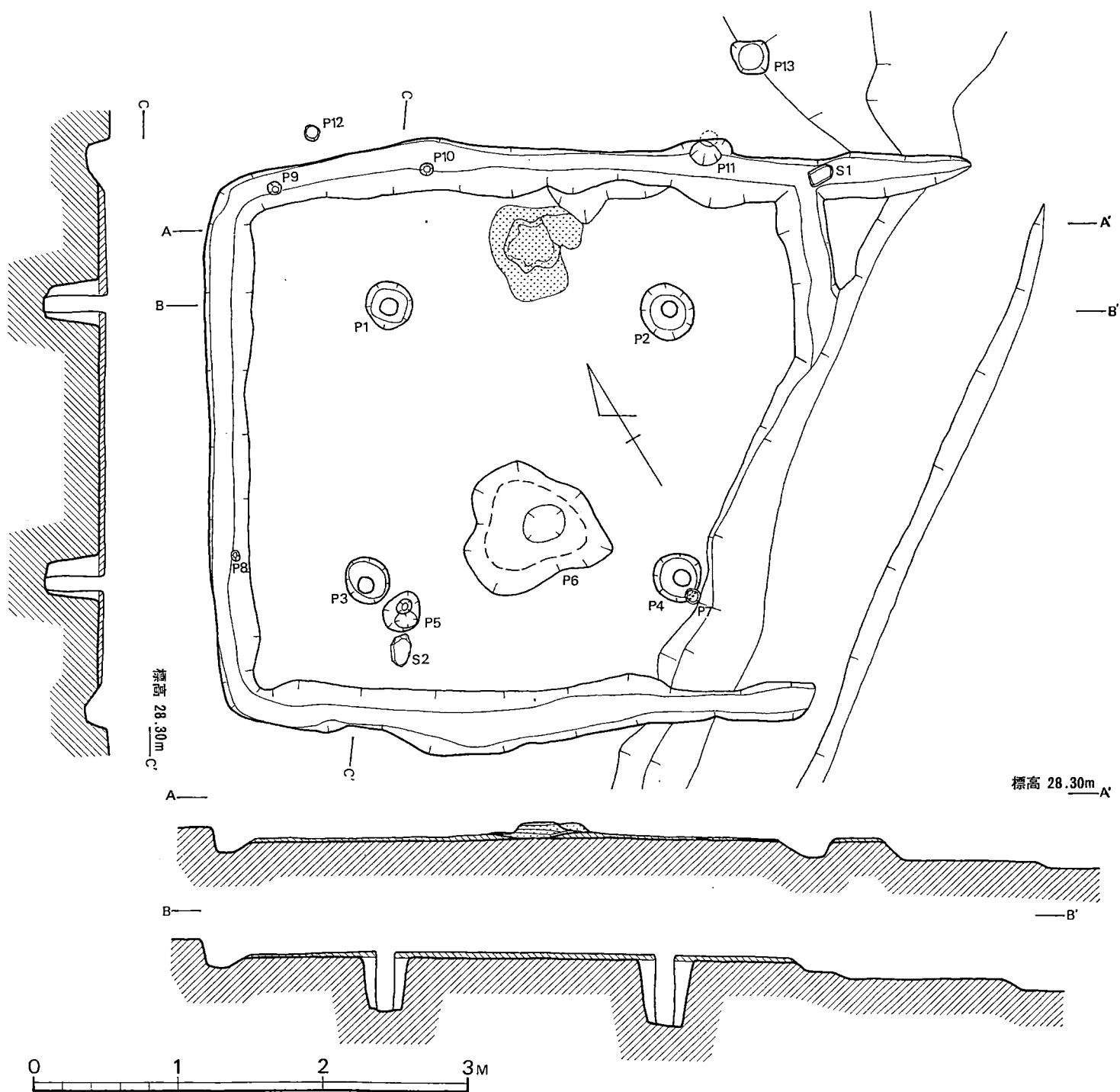
なお、発掘区の区分は、第 1 次調査分を I—A・B 区、第 2 次調査分を II—A・B 区とした(第 2 図)。

(1) 竪穴住居跡 (図版 8—2・9—1, 第 3 図)

II—A 区北東隅に存在する。形状は隅丸長方形を呈し、長軸を N 59° W の方向にとる。床面と壁上端との比高は 6 cm 前後の状態、上面はかなり削平をうけていると思われる。また住居



第 2 図 田尻遺跡全体図 (1/200)



第 3 圖 1 号住居跡実測図 (1/40)

南東側は斜めにカットされ旧状をとどめていない。住居内の溝は「コ」の字状に残るが、本来は一周していたと思われる。また南東側カット面には三角形にわずかに床面が残り、住居は南北の溝によって東西に区分されていたと思われる。

住居の規模は長辺5.2m以上、短辺4.3mを測る。主柱穴は4本で、すべて暗赤褐色粘質土を掘り込み、混礫黄褐色粘質土でもって根じめとし、柱を立てた後に暗茶褐色粘質土を4cm前後貼床していることがわかった。柱間寸法は、P1～P2は1.94m、P1～P3は1.95m、P3～P4は2.19m、P2～P4は1.87mを測る。東側部分に柱穴を求めたが、削平は4本柱の底部レベルまではなされていないにもかかわらず、検出することができなかった。元来存在しなかったのであろうか。他には床面南側に2個のピット（P5・7）と凹状のピット（P6）、周溝内に4個の小穴（P8～11）、住居外に2個のピット（P12・13）が検出された。床面北東側には焼土塊・炭化物・灰などが拡がっており、カマドと予想されたが、削平が著しくその形状は明確でなかった。あるいはカマドの片袖部分の残滓とも考えられよう。南東側床面と北東側周溝に平たい石が存在する。床面に据えられたものは作業台とも考えられるが、その性格は明確でない。

（2） 竪穴住居跡出土遺物 （図版10・11）

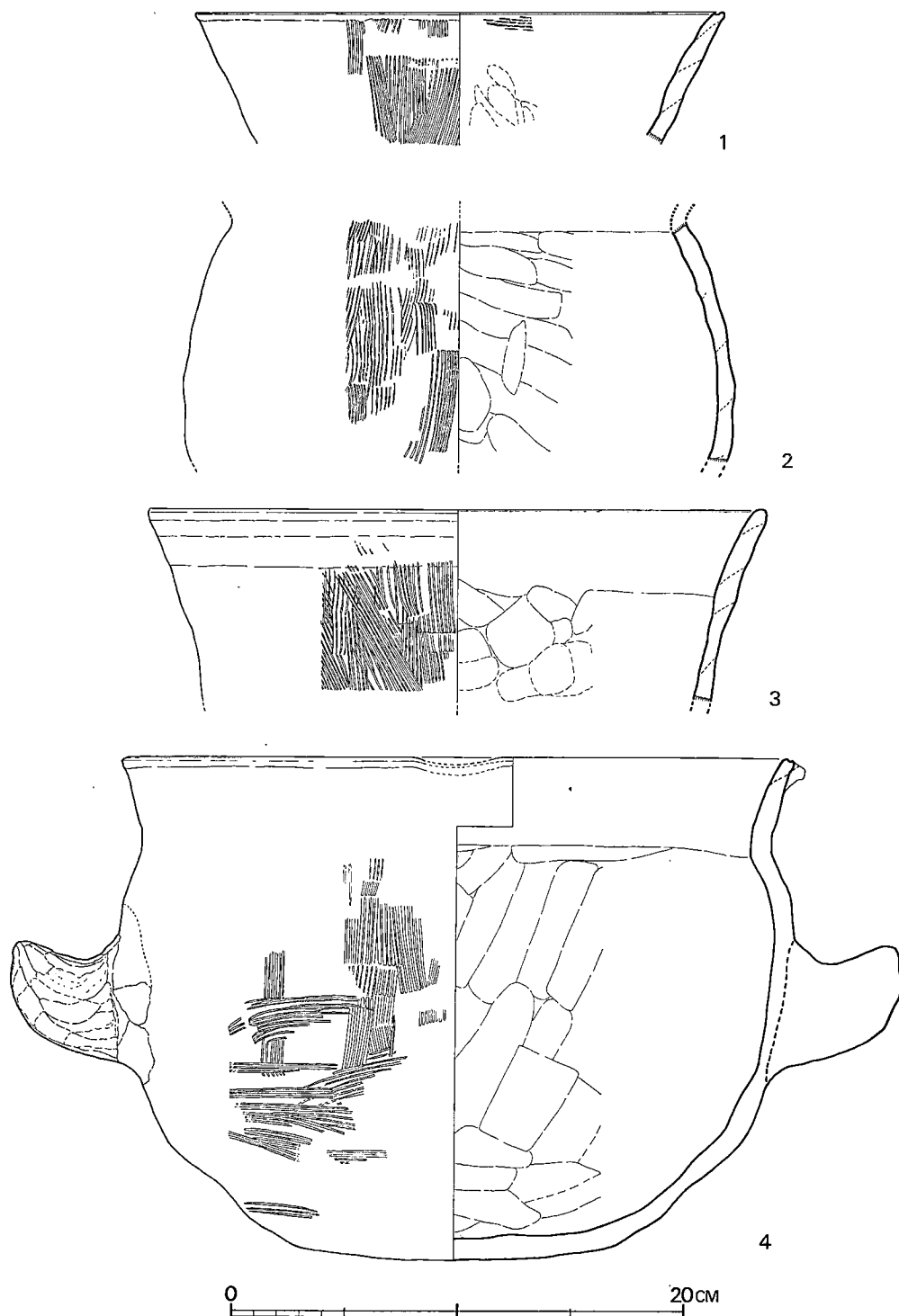
住居内からは土師器・須恵器が出土したが、削平をかなり受けているためかその量は多くない。残りのよいものは周溝から出土した。土師器は甕・甗・把手付甕・壺など、須恵器は杯身・杯蓋・甕破片などが出土した。

a 土師器 （第4図、第5図5・6・10）

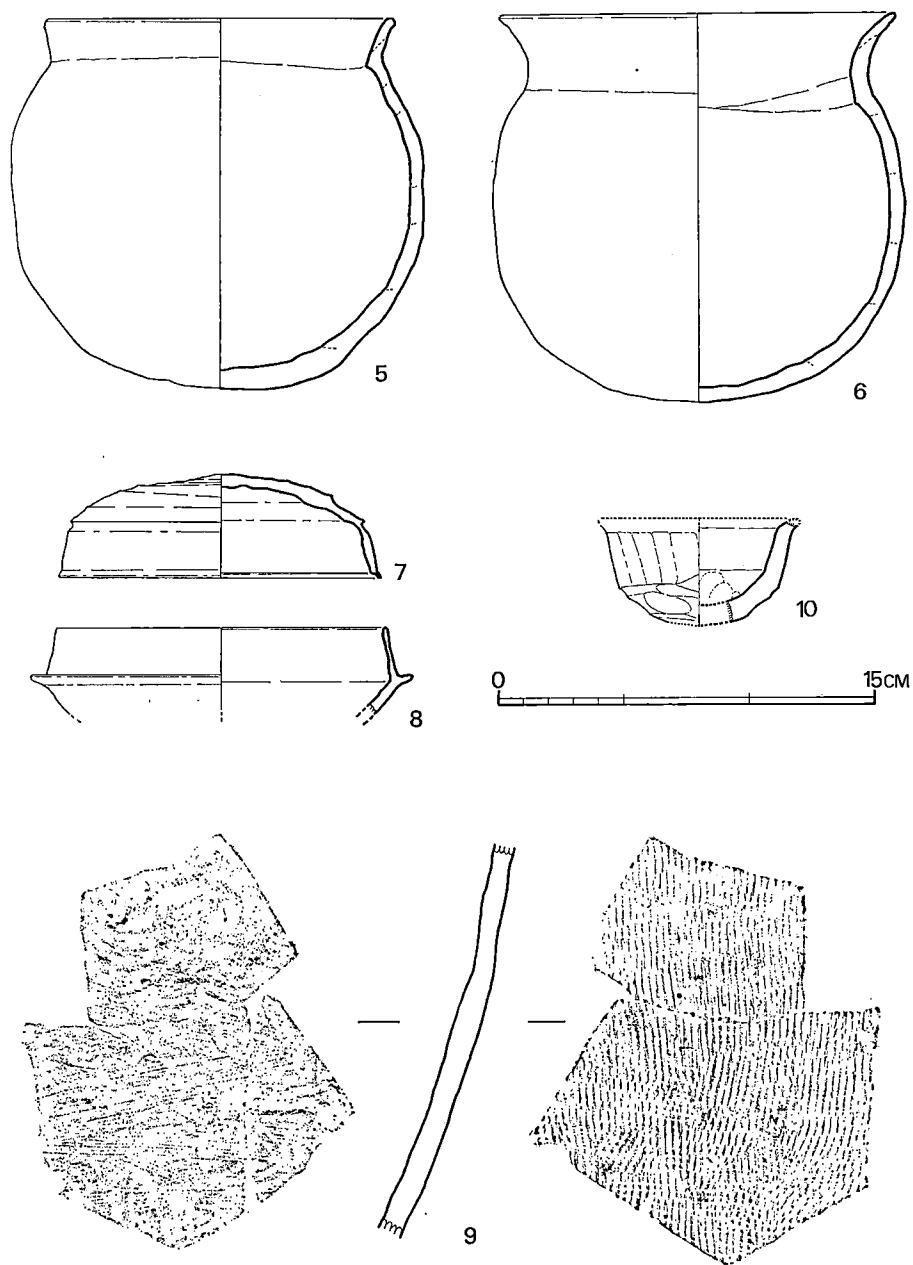
甕形土器（1・2） 1は外傾する口縁部破片で、2は弱い張りをもつ胴上半の破片である。1の口縁端部はわずかに肥厚され、平坦な上面には沈線がはいる。1・2とも外面は下向縦位の刷毛のあと、一部ナデ仕上げている。内面の調整は、1は上端に横位の刷毛が不明瞭に残るところから、刷毛のあとさらに指ナデ及び横ナデで仕上げられ、2は上向する篋削りである。1・2とも茶褐色を呈し、1は胎土・焼成とも良好堅緻、2は若干石英粒子を含むが焼成は比較的良好である。1は焼土塊北東の周溝から、2は床面から出土した。

甗形土器（3） 体下半を欠くが、口縁部は外傾し、体部はゆるやかにすばまる形態をとるものと思われる。外面は斜・縦位の刷毛のあと口縁上半を横にナデ仕上げ、内面は下半を篋削りのあと指ナデ調整し、上半は横ナデ仕上げである。石英粒子などの砂粒を含み、焼成はあまり良好でない、色調は灰味をおびた黄褐色を呈する。床面から出土した。

把手付甕（4） 片口を有する把手付甕形土器で半欠する。口縁部は外傾し、体部は若干肩が張り丸底に近い平底へつづく。口縁端部は肥厚され上面には不明瞭な条線がはいり、片口は



第 4 図 竖穴住居跡出土土器実測図(1) (1/3)



第 5 図 竪穴住居跡出土土器実測図(2) (1/3)

田尻遺跡

大部分を欠くが、指頭でつまみ気味に折りだしたものである。体部は縦位の刷毛のあとと横位の刷毛、それをナデすり消す。口縁内外面は横ナデ、体内面は上向する篋削りで整形され、口縁部との境には稜がつく。把手はしぼりと指ナデ整形され、把手基部の周囲に粘土片をもちい接合している。床面から出土。胎土には石英粒子を含むが、焼成は良好で、黄茶褐色を呈する。頸部から胴上半にかけ黒斑が認められる。

壺(5・6) 5は短い口縁で外傾し、体部は肩と胴下端が張りをもつびつな球状を呈する。6は短い頸部から口縁部は外弯し、体部は球形を呈する。両者ともほぼ完形で、5は口径13.9cm・器高14.6cm、6は口径15.8cm・器高15.3cmを測る。両者とも外面は体部を篋削りしたあと、体上半から口縁外面にかけ横にナデ仕上げる。体内面は篋削りで、5の底部は指頭による整形であろう。両者とも胎土には石英粒子を含むが、5は焼成不良、6は比較的良好である。5は外面黒褐色、内面茶褐色を呈する。6は淡赤褐色を呈し、底部には黒斑、胴部には二次的熱変の痕跡が認められた。5・6とも周溝内のピット11から出土した。

碗(10) 住居外東側のピット13から土師器の小形碗の小片が出土したので図示した。口縁端部と底部を欠落するが、体上半は縦位の篋削りのあと内面まで横ナデ調整を行ない体下半は横位の篋削り、内面は指頭による整形である。石英粒子を含むが、焼成は割りと良い。黄褐色を呈する。

b 須恵器 (第5図7～9)

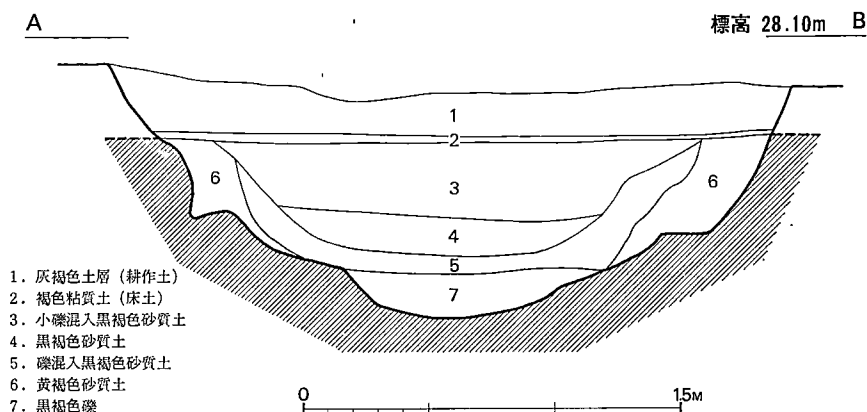
杯蓋(7) 完形の杯蓋で、口径12.8cm・器高4.1cmを測る。天井部と体部との境には明瞭な稜をもち、口縁部内面には段を有する。天井部はろくろ左廻りの篋削りで整形し、頂部はナデすり消されている。他部分は回転ナデで調整され、天井部内面は仕上げナデ調整を行なっている。色調は灰白色で、胎土・焼成とも良好堅緻である。溝内出土のI類と比較される。周溝北東部分から出土した。

杯身(8) たちあがりは1.9cmを測り、細く内傾する。蓋受けは外上方へのび、先端はかすかな稜をもつ。残部は回転ナデで仕上げられている。灰白色を呈し、胎土・焼成は良好である。覆土から出土した。小片であるため形態を比較することは困難であるが、たちあがりが高く古式須恵器の特徴を残すものと考えられる。

甕(9) 大甕の胴下半の破片と考えられる。外面は平行条線叩き、内面は青海波文を櫛状の刷毛でナデすり消している。石英粒子を少量含むが、焼成は良好、外面暗灰色、内面灰白色を呈する。I区溝内出土の30と色調・焼成・手法とも一致しており、同一個体と考えられる。

(宮崎貴夫)

(3) 溝 (図版2・3, 第2・6図)



第 6 図 溝東西土層断面図 (1/30)

溝はⅠ—A・B区で発見された。両区間の未発掘部分も含めて、延長35mを直線状に延びている。走向はN20°Eである。幅は、南端で2.7m、中央部が最大で3.1m、Ⅰ—B区では輪郭が攪乱で乱れているが約1.9mと狭くなっている。深さは、地山面が多少の高低差をもつために位置によって差があるが、南端で70cm、Ⅰ—A区北端で65cmを計り、Ⅰ—B区では極度に浅くなって約25cmである。

断面はおおむね半円形を示すが、東側壁面中位に、Ⅰ—A区間のほぼ全長にわたって幅約30cmの傾斜の緩い段が走っている。また溝底のレベルは、極度に浅くなるⅠ—B区を除いて、Ⅰ—A区北端と南端で約10cmの差があるが、この地域が全般に南に低く傾斜しているのに反して、北が低くなっている。Ⅰ—A・B区を隔てる農道が、農作業の関係で切断できなかったのも、この間の状況は知ることができなかった。

土層の堆積状況は第6図の如くである。単純な様相を呈しているが、6の黄褐色砂質土層は地山と類似した土壌であり、堆積の状況からは溝を埋めて狭めたことが想像される。

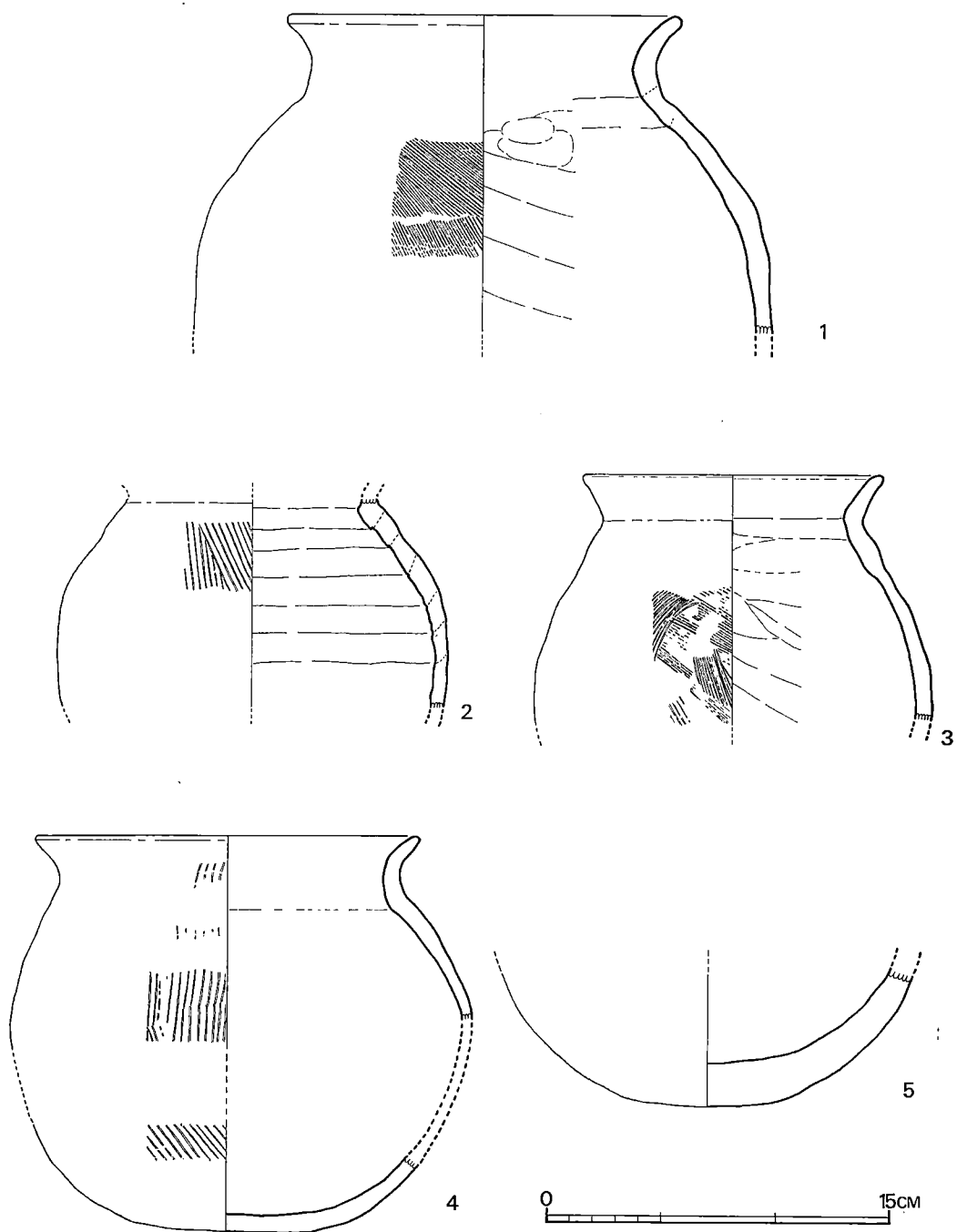
溝の内部からもかなりの柱穴跡が検出されたが、これは溝が埋まったのちに掘込まれたものである。(竊久嗣郎)

(4) 溝内出土遺物 (図版12~17, 第7~15図)

溝内からは多量の土師器・須恵器が出土した。遺物は覆土全層にわたったが、特に3~5層に集中した。図示したものは実測可能なものである。

a 土師器 (図版12~15, 第7~11図)

土師器は、甕・把手付甕・甗・壺・碗・高杯・手捏ね土器などが出土した。いずれも器面は風化をうけたものが多く、二次的熱変の痕跡を残すものや、外面に煤が付着するものも存在す



第 7 図 溝内出土土器実測図 (1) (1/3)

る。

甕形土器（第7・8図1～11）器形はバラエティに富み、Ⅶ類に分けることができる。胴外面は刷毛のあとナデられるものが大半であるが、篋調整されるものもある。口縁部はいずれも横ナデ、胴内面は上向する篋削りで整調される。胎土には石英粒子を含む。

Ⅰ類（1・5・9）1は若干内傾する頸部から口縁部は外弯し、胴下半を欠失するが9のような長胴で丸底の形態と思われる。胴内面は篋削りのあと上端を指ナデで調整している。淡黄褐色を呈し、焼成は割りと良好である。

Ⅱ類（2・3）3は上半のすぼまる球状の胴部で、口縁は「く」の字状に外反する。胴内面は篋削りのあと上端を指ナデで調整し、稜がはいる。外面黄褐色、内面赤褐色を呈する。2は赤褐色を呈し、内面には輪積み痕が認められ、胴下半には煤が付着する。焼成はいずれも良くない。

Ⅲ類（4）口縁部は外弯し、胴部は器高の中程で屈折し丸底に近い平底につづく。口辺基部内面には甘い稜線がはいる。二次的熱変がうかがわれ器面は剝落し、胴下半には一部煤が付着する。内面の篋削り痕は明瞭でない。焼成は悪く、赤味をおびた茶褐色を呈する。

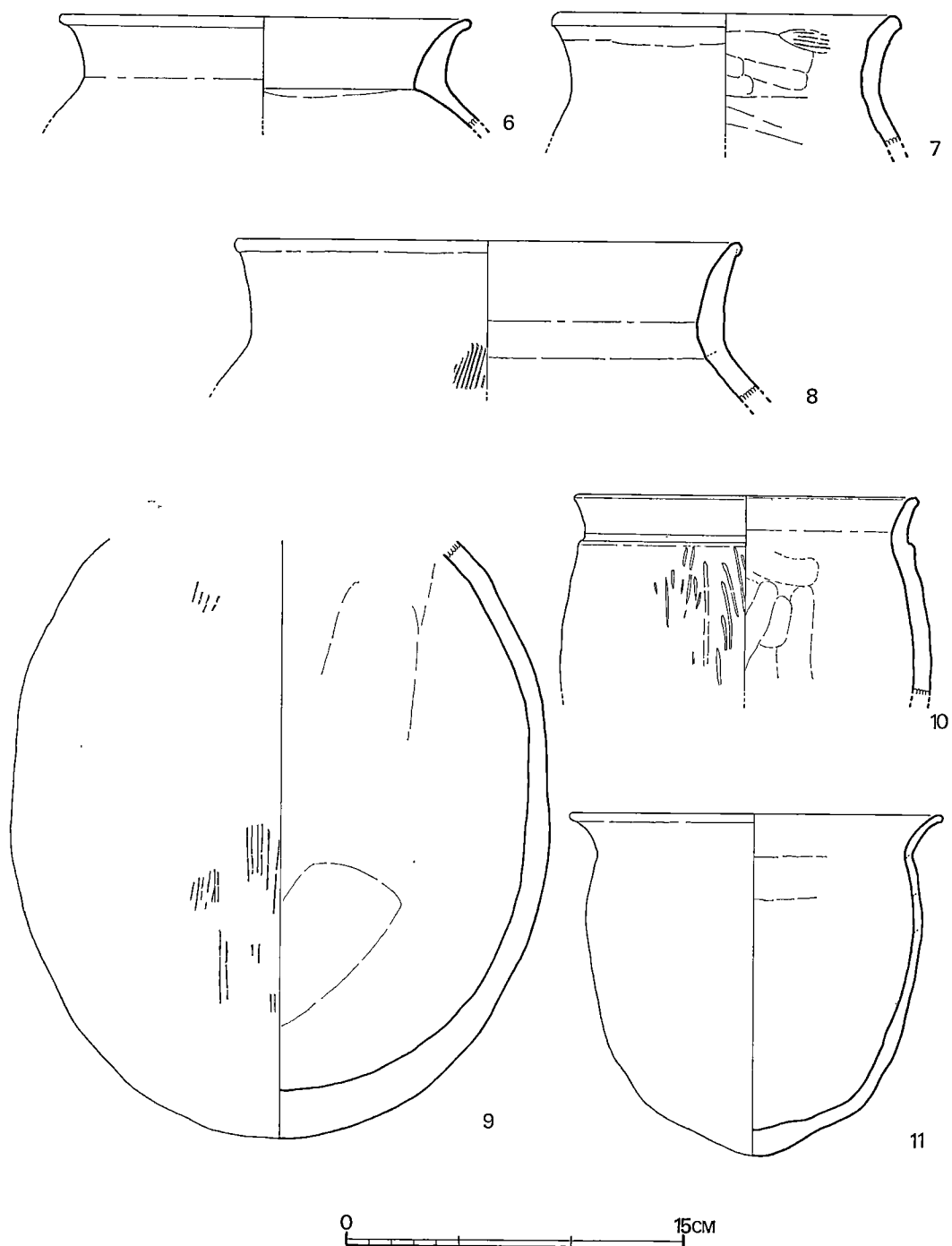
Ⅳ類（6・8）頸部は直立気味にのび口縁部は外傾し、口縁端部は肥厚される。口辺基部は厚く、内面は篋削りの際の稜線がはいる。8は刷毛のあと横ナデで仕上げられ、頸胴部境界付近には指頭による整形がなされている。6は横ナデで仕上げられる。6は外面暗茶褐色、内面赤味をおびた茶褐色を呈し、8は赤味をもつ茶褐色を呈する。相方とも器壁の石英粒子は細かく、焼成はあまり良くない。

Ⅴ類（7）口辺部は外弯し、口縁上端には指ナデによる稜線がはいる。頸部付近は横位の篋削り、胴外面と口縁外面は横ナデ仕上げである。内面は上向する篋削りで整形され、上端には荒い櫛状器具による調整が認められる。外面は茶褐色、内面は淡茶褐色を呈し、器壁の石英粒子は細かく、焼成は良くない。

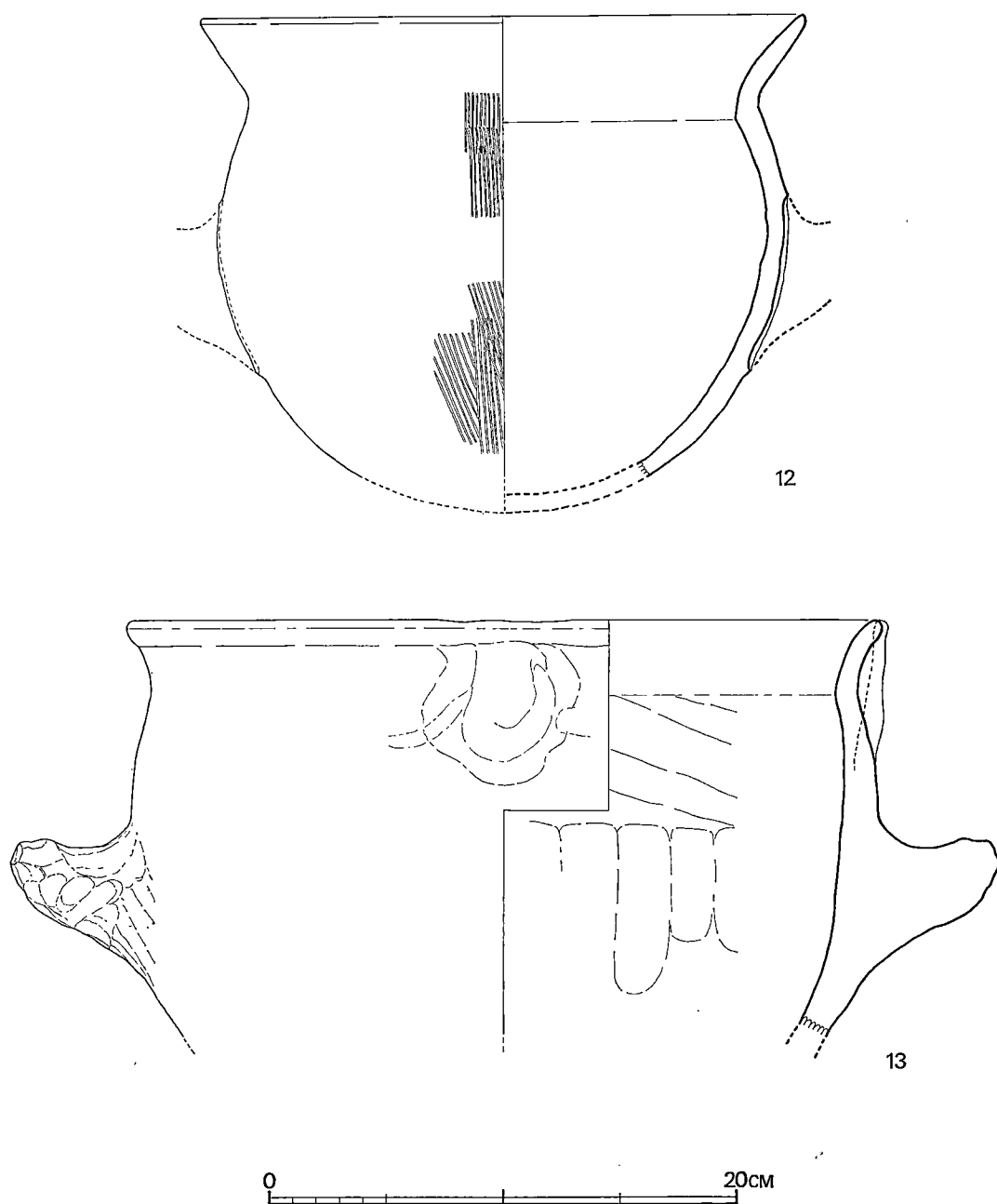
Ⅵ類（10）胴部は張りをもたず口縁部との境には沈線を有し、口縁部は外傾する。胴外面は荒い篋状器具による整形、内面は篋削りのあと上端は指ナデで調整される。焼成は不良、赤褐色を呈する。

Ⅶ類（11）最大径を外弯する口縁部にもち張りの弱い肩部はすぼまり、尖り気味の底部へ移行する。体外面は下向する篋調整で、内面は篋削りのあと指整形・ナデで仕上げられる。内底面は指ナデで調整される。外面は赤味をおびた茶褐色、内面は下半が黄褐色で上半は灰味をおびる。胴部には黒斑が認められる。

把手付甕（第9図12・13） 2個体出土したが、両者とも胴外面は刷毛のあとナデ仕上げ、内面は篋削りで整形され、いずれも器壁には石英粒子を含む。12は球状の体部で、口縁部は「く」の字状に外反し口縁基部内面には稜がはいる。把手は欠失しているが、接合面には縦位



第 8 図 溝内出土土器実測図(2) (1/3)



第 9 図 溝内出土土器実測図 (3) (1/3)

の刷毛目痕が残る。焼成は割りと良好で淡黄褐色を呈する。片口の有無は不明である。13は片口を有する。弱い張りをもつ肩部から口縁部は外弯し、口縁端部はわずかに肥厚される。口縁基部内面には甘い稜線を有する。片口部は外方に突き出したあと内面を篋削りし、指ナデで仕上げている。外面は赤褐色、内面は赤味をもつ茶褐色を呈する。

甔形土器（第10図14・15・16） 把手を有するもの（14・15）と把手を有さないもの（16）がある。いずれも胎土には石英粒子を含む。14は体部がゆるやかにすばまる形態で、頸部はわずかに外傾し口縁部は直立する。体部は縦位のナデで仕上げられる。焼成は割りと良好で、赤褐色を呈する。15は体部が急速にすばまる形態で、口縁部はふくらみ気味に外傾し、上半には浅い凹線がはいる。口縁上半内外面は横ナデ、他外面は下向縦位の荒い刷毛を縦位のナデですり消し、さらに把手先端へむけてナデ調整している。胴内面は篋削りのあと上半を指ナデで調整している。焼成は割りと良好、赤褐色を呈する。16はほぼ完形で、把手を有さない。口縁部は外弯し、わずかに張りをもつ肩部から焼成前穿孔された底部へ移行する。口縁端部上面は平坦である。肩部以下は刷毛を一部ナデすり消し、胴内面上半は篋削り、下半は指頭による整形か。淡黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

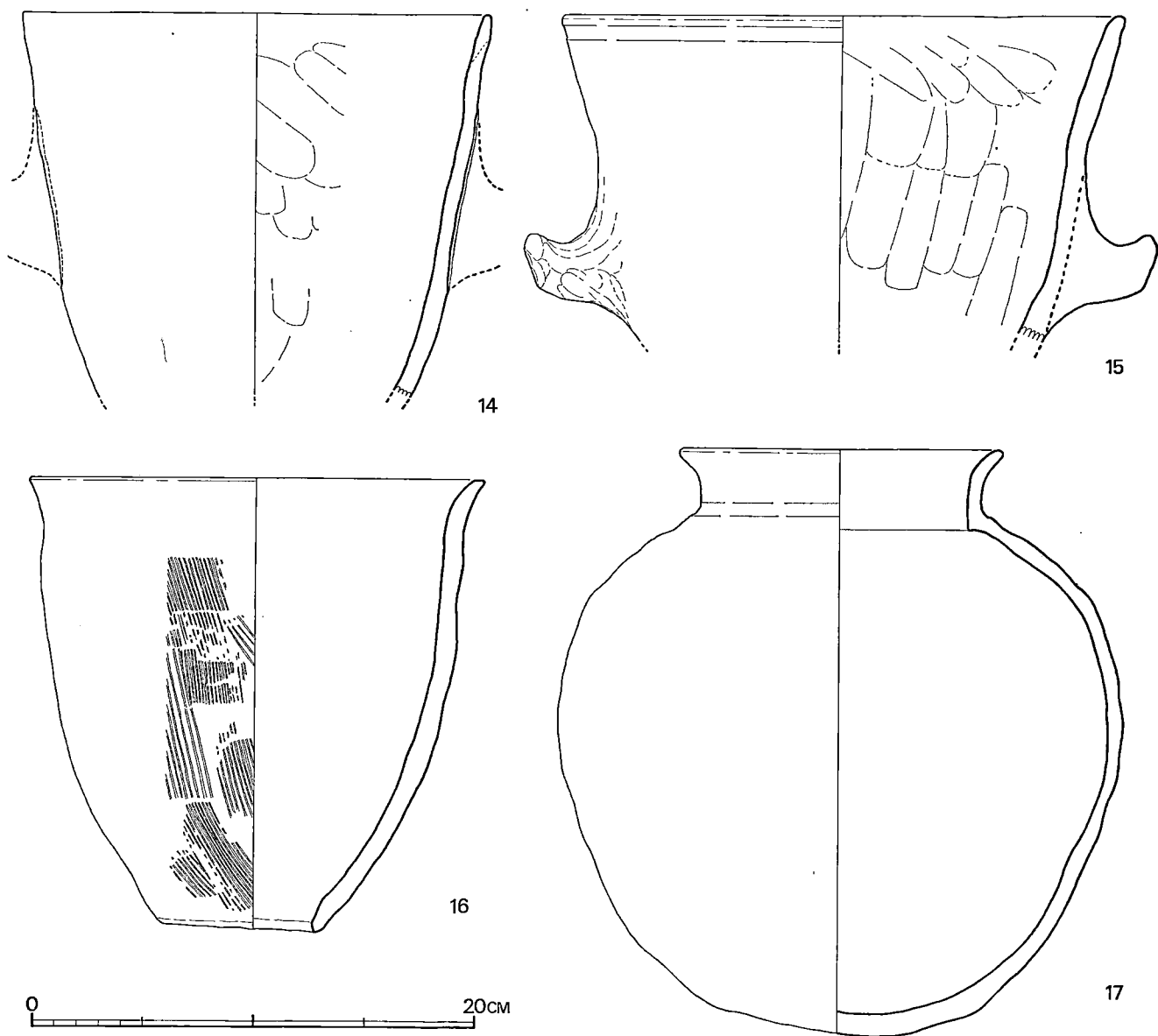
壺（第10図17） 体部はいびつな球形を呈し、頸部と胴部との境界には指頭による浅い凹線がはいる。短い頸部は直立気味にのび、口縁部は外弯する。内面では頸部と胴部の境に稜線を有する。体部は不定方向のナデか。体内面は篋削りされ、口頸部内外面は横ナデ仕上げである。石英粒子など含み、焼成は普通、暗茶褐色を呈する。

碗（第11図18～25） 碗形土器はその形態からⅠ～Ⅳ類に分類できる。須恵器杯を模倣した杯形土器の出土はみなかった。器壁にはいずれも石英粒子を含む。

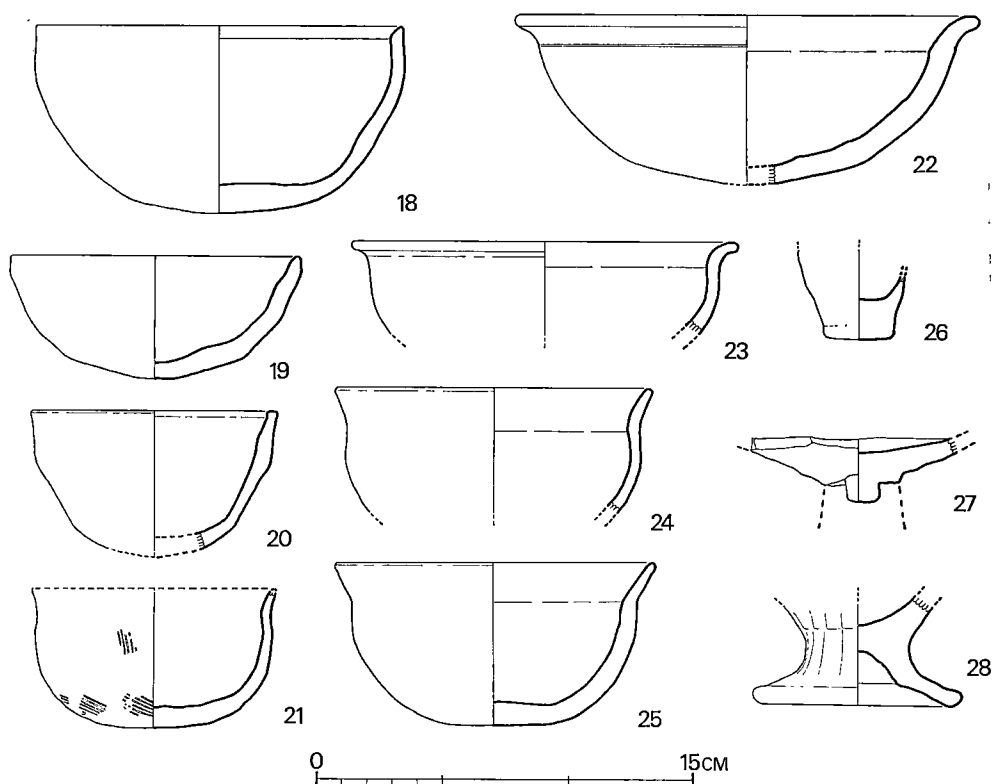
Ⅰ類（18・19）半球状の形態のもので、18はわずかに口縁部は外弯し、19はわずかに内傾する。前者をⅠa類、後者をⅠb類とすることができよう。両者とも口縁端部は尖り、18は内面に段をもつ。18の外面は横ナデ、内面は横位の篋削りのあとナデすり消したものと思われる。19の内面は指頭による整形が見られる。18は赤褐色を呈し、焼成はあまり良くない。19は外面が赤味をおびた黄茶褐色、内面は淡赤褐色を呈し、焼成は普通である。

Ⅱ類（20）頸部は直立気味にのび口縁部はわずかに外傾する。口縁先端上面は平坦で端部はわずかに肥厚される。体部は挟れたように屈折し、底部は丸底を呈すると思われる。頸胴部は下向斜位のナデ、口頸部及び内面上端は横ナデ仕上げ、体内面は斜位のナデ仕上げであろう。焼成普通、赤褐色を呈する。

Ⅲ類（21・24・25）体部は半球状を呈し口縁部が外傾するもの。21のように口縁部の外傾度の弱いもの（Ⅲa類）から、24・25のように強く外傾するもの（Ⅲb類）がある。21は外面を斜・縦位の刷毛のあとナデすり消し仕上げ、内底面は指ナデ調整している。24は体部を横位の篋削りのあと全面をナデ仕上げしたものか。21は茶褐色、24は赤褐色、25は外面黄褐色、内面



第 10 图 溝内出土土器実測図(4) (1/3)



第11図 溝内出土土器実測図(5) (1/3)

赤褐色を呈する。焼成は、21が普通、他は悪い。

Ⅳ類(22・23) 体部は半球状で、口縁部は強く外弯する形態である。22は口縁下に一条の沈線がめぐる。体部内外面は篋削りのあとナデ仕上げしたものと思われ、内面には篋削りの際の稜線がはいる。口縁部内外面は横ナデ仕上げである。焼成は普通で、赤褐色を呈する。23は外面明茶褐色、内面赤味をもつ茶褐色を呈し、焼成はあまり良くない。

高杯(第11図27・28) 27は高杯杯部下半の破片で、出べそ状に突出をもつところから、柱状部との接合はソケット式と思われる。風化磨滅が著しく調整は明瞭でない。胎土は精製され砂粒をほとんど含まず、色調は橙色に近い明茶褐色を呈する。28は杯部を欠く高杯で、形態は台付碗状を呈すると思われる。筒部から脚裾は屈折し拡がり、脚端部は丸くおさめられる。脚上半は下向する縦位の篋削り、脚裾内外面はナデ仕上げで、内面上方は指頭による整形である。石英粒子を含み、焼成は普通、赤褐色を呈する。

手捏ね土器(第11図26) 上半を大半欠失する手捏ね土器である。器壁には細かい石英粒子を少量含み、焼成は普通、色調は赤褐色を呈する。

b 須恵器 (図版16・17, 第12～15図)

須恵器は杯蓋・杯身・高杯・器台・短頸壺・壺・甕などが出土した。

杯蓋(第12図1～5) 杯蓋はその形態からⅠ・Ⅱ類に分類できる。

Ⅰ類(1・2) 天井部と体部との境に稜を有し、つくりは全体的に直線的で、口縁部内面には段をもつ形態である。1は天井部を回転篋削りで整形し、他の部分は回転ナデで仕上げている。外面紫灰色、内面灰白色を呈し、焼成は割りと良好である。

Ⅱ類(3・4・5) 天井部と体部との境には沈線がめぐり、口縁部内面には段を有するがつくりは全体的に曲線的である。4はほぼ完形で、焼けひずみが強い。天井部上半はろくろ左廻りの篋削りの後、上面はナデすり消されている。他部分は回転ナデ仕上げである。天井部内面は仕上げナデ調整がなされている。外面は黄灰色、内面は灰白色を呈し、焼成は良好である。

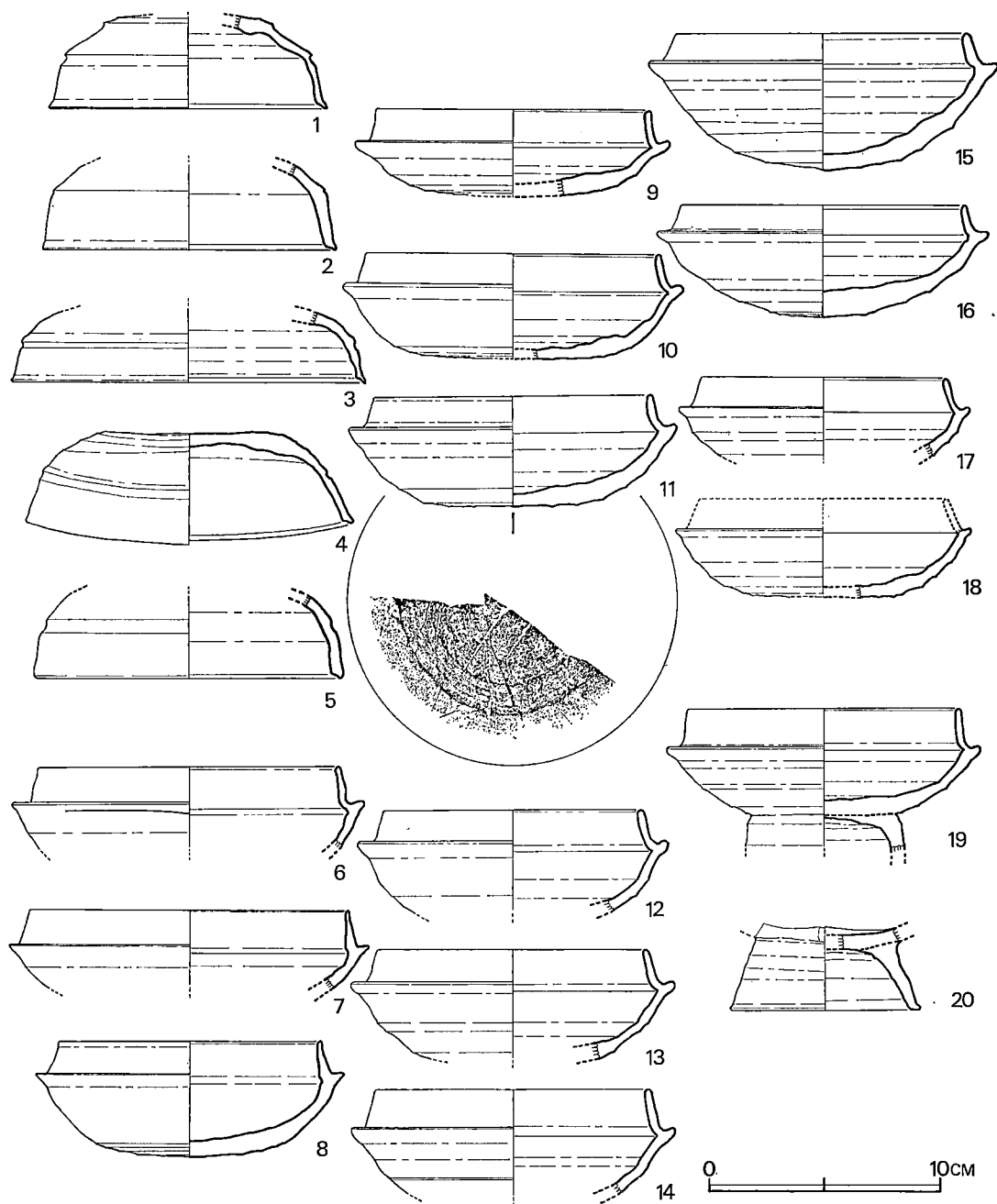
杯身(第12図6～18) 杯身はたちあがりと受部の形態、及び器形からⅠ～Ⅵ類に分類した。

Ⅰa類(6) たちあがり基部は丸く屈折して直立気味にのび、上半は若干内傾する。たちあがりと内傾斜面との境には条線を有する。蓋受けは水平に近い。器面は回転ナデで丁寧に仕上げられ、体部上端には爪先による沈線が走る。色調は灰白色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

Ⅰb類(7・8) たちあがり基部は厚く、尖り気味の端部へむかって細まり直立する。蓋受けは篋で水平に削られ、先端は鋭い。8はたちあがりと内傾斜面との境に条線がはいり、復原口径11.5cm、器高4.9cmを測る。天井部はろくろ左廻りの篋削りで丸く仕上げられ、他部分は回転ナデで丁寧に調整される。内底面は仕上げナデ調整を行なっている。器壁には砂粒を含むが焼成は良好で、外面灰色、内面灰白色を呈する。

Ⅱa類(9) たちあがりは直立気味にのび端部内面には段を有する。蓋受けは外上方へのび先端にはかすかに稜がつく。口径に比較して器高は低く、底部はろくろ左廻りの篋削りで調整される。他部分は回転ナデで仕上げられ、内底面は仕上げナデ調整がなされている。色調は灰白色を呈し、胎土は精製され焼成良好で、つくりは丁寧である。

Ⅱb類(10・11) たちあがり基部は内弯し上半で内傾する。端部はかすかに稜をもつ。蓋受け上面には浅い条線がはいる。器高は口径に比較して低く、10は復原口径12.9cm、器高4.5cm、11は復原口径12.9cm、器高4.7cmを測る。底部は平坦で11には篋記号が認められる。天井部はろくろ右廻りの篋削りを11は荒く、10は丁寧に行なっている。他部分は回転ナデで調整され10の内底面には仕上げナデ調整がなされている。両者とも砂粒を含むが焼成は良好で、10は青味をもつ灰白色、11は体部が青灰色の他は灰白色を呈する。



第 12 図 溝内出土土器実測図(6) (1/3)

Ⅲ類（12～14）たちあがり基部は内湾し上部で内傾する。蓋受けは外上方にのび、上面には浅い凹線がめぐる。復原口径は11.4～12cmを測り、口径に比較すれば器高は高い形態と思われる。13は体下半をろくろ左廻りの篋削りを行なっている。12・14も同様と思われるが、全体にわたって回転ナデで仕上げられ、つくりは丸味をもつ。12は体部青灰色で自然釉が付着し他部分は灰白色を呈する。13は体部黄灰色、他は灰白色を呈する。14は灰白色を呈し、たちあがりには一部煤が付着する。体部下半には条線がめぐる。いずれも胎土・焼成は良好である。

Ⅳ類（15）たちあがりは厚く内傾が強い。蓋受けは外上方にのび上面には浅い凹線がはいり、先端は丸くおさめられる。ほぼ完形で口径13cm、器高5.9cmを測り、器高は高い。底部はろくろ左廻りの篋削りで丸く調整される。他部分は回転ナデで調整され、さらに内底面には仕上げナデ調整がなされている。全体につくりは粗雑な感をうける。器壁には石英粒子をかなり含むが、焼成は普通、灰色を呈する。内底面には煤の付着が認められる。

Ⅴ類（16）たちあがりの内傾度はⅣ類に近いが、蓋受けは外方にほぼ水平に突出し、先端は丸くおさめられている。たちあがり内傾斜面との境には条線を有する。底部はろくろ右廻りの篋削りで丸く調整され、内底面には仕上げナデ調整がなされている。ほぼ完形で、口径12.5cm、器高4.8cmを測る。器壁には石英粒子を多く含み、焼成は非常に悪く軟質である。体部・底部は小豆色、他部分は灰色を呈する。器面は著しく風化をうけている。

Ⅵ類（17・18）17は復原口径10.8cmを測り他類に比較し小形である。たちあがりの内傾は強く、先端は丸くおさめられている。蓋受けは外上方へのび、上面には浅い条線がはいる。体下半以下をろくろ左廻りの篋削りで調整し、18は平坦な底部を有する。他部分は回転ナデで仕上げられる。17は体部青灰色、他部分は灰白色を呈し、18は灰白色を呈する。相方とも焼成は普通である。

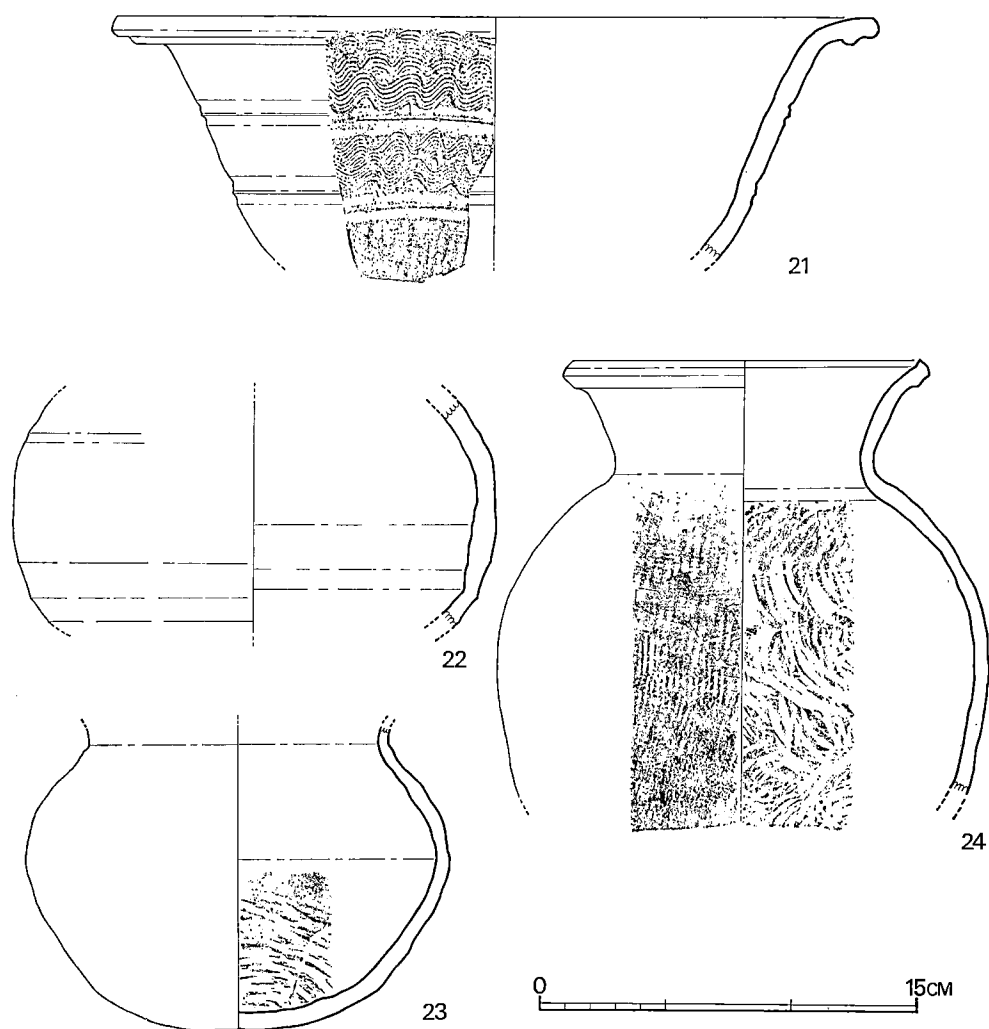
高杯（第12図19）たちあがりは1.7cmを測り、基部は内湾するが直立し、かすかな稜をもつ先端へつづく。復原口径11.9cmを測る。杯部体下半は回転篋削りで整形され、他部分は回転ナデで仕上げている。内底面には仕上げナデ調整がなされている。脚部は大半を欠失しているため透孔の有無は不明で、外面は回転篋削り整形、内面はナデ仕上げである。杯部整形後、脚部と接合したと思われる。杯部の形態はⅢ類に類似するが、たちあがりの内傾はⅢ類より直立する。胎土・焼成とも良好で、体部が黄灰色を呈する他は灰白色を呈する。

器形不明脚部（第12図20）上部を欠失し、脚部は低く透孔は無い。脚内面上端は篋削りのあとナデ調整を行なっている。他部分は回転ナデで仕上げられ、さらに上面には仕上げナデ調整を行なっている。焼成良好で灰白色を呈する。

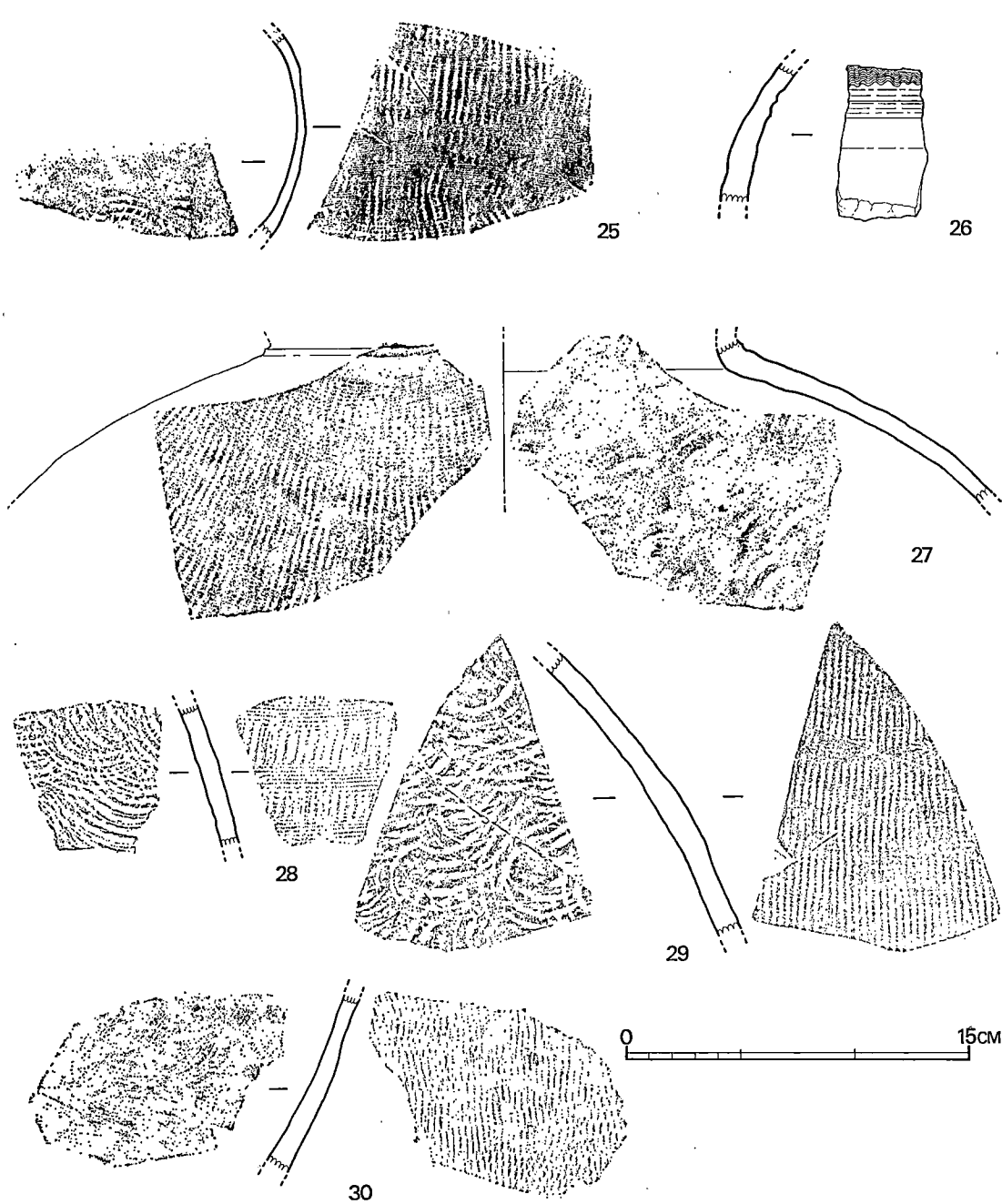
器台（第13図21）21は器台の上部破片である。口縁部は外湾し、端部下面には凹線がはいる。器面は回転ナデで調整され、外表面は沈線をはさんで上方には櫛描波状文を、下方には格子目叩文を施している。器壁にはわずかに石英粒子を含むが、焼成は良好堅緻で、灰色を呈す。

短頸壺（第13図23） 肩部にはカキ目調整，体部下半は刷毛整形を行なったあと，外面は丁寧な回転ナデで仕上げている。内面は，体部下半以下は青海波文，上半は回転ナデで仕上げられ，中央付近の青海波文はすり消されている。器壁には石英粒子を含み。焼成はあまり良くない，色調は灰白色で，器肉は橙色に近い茶褐色を呈する。

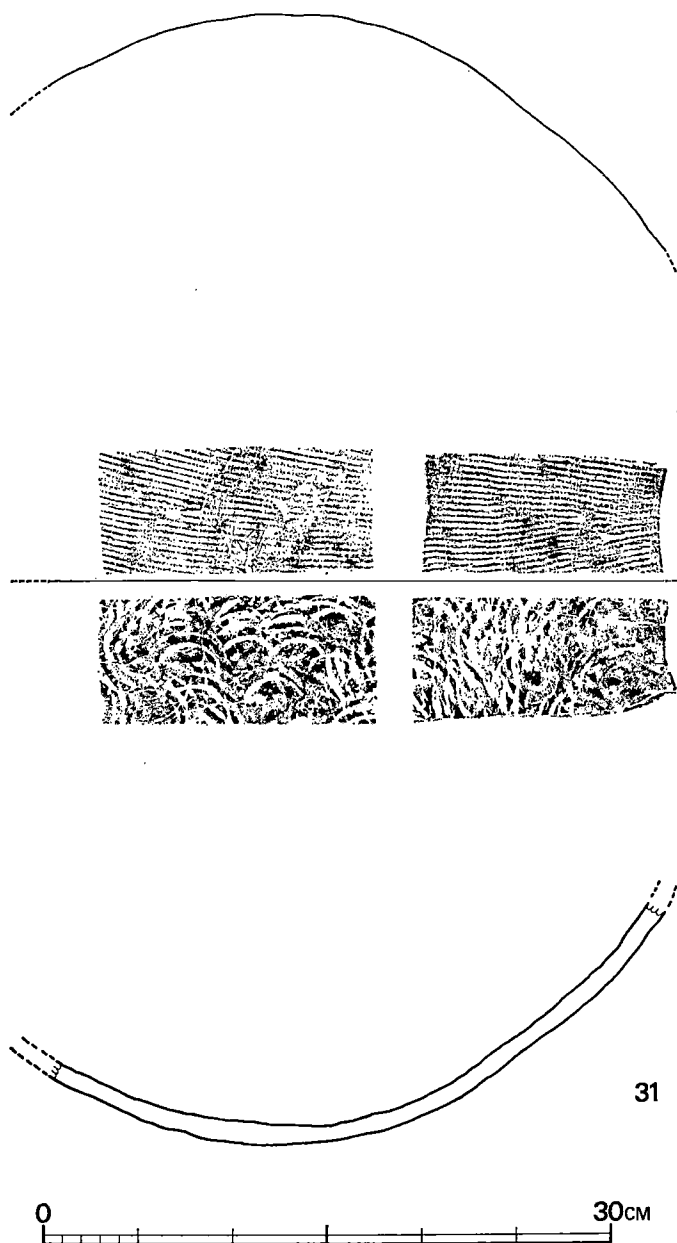
壺（第13図24） 頸部は外弯しながらのび，さらに口縁は外弯する。口縁端部は外方・



第13図 溝内出土土器実測図(7) (1/3)



第 14 図 溝内出土土器実測図(8) (1/3)



第15図 溝内出土土器実測図(9) (1/3)

田尻遺跡

下面に稜を有し、上方は鋭い突出をもつ。口頸部は内外面とも回転ナデで仕上げられる。体部は格子目ふう叩きで整えられ、上半は部分的にナデすり消されている。体内面は密な青海波文、頸部との境界付近はナデすり消される。器壁には石英粒子を若干含むが焼成は良好で、小豆色を呈する。

器形不明土器（第13図22，第15図25） 22は体部破片で、下半は回転篋削り，他の部分は内外面とも回転ナデで仕上げられる。細かい石英粒子をわずかに含み，焼成は普通で，外面青灰色，内面灰白色を呈する。平瓶か。25は体部破片で，外面は平行条線叩文を全面にわたってカキ目調整し，すり消している。内面の青海波文はナデすり消される。細かい石英粒子を若干含むが，焼成良好で，外面灰白色，内面青灰色を呈する。小形甕・壺などの可能性がある。

甕（第14図26～30，第15図31） 26は頸部破片で，2条の沈線の上方には細かい櫛状器具による波状文を施され，器面は回転ナデで仕上げる。細かい石英粒子を含むが，焼成良好で，灰白色を呈する。27は体部上半の破片で，外面は平行条線叩きのあと上部をカキ目調整，内面の青海波文はナデられ不明瞭である。器壁には細かい石英粒子など含み，焼成は普通，灰白色を呈し外面は黄味をもつ。28は平行条線叩きのあと，部分的にカキ目調整されている。小粒の石英粒子などを含み，焼成はやや甘い。灰白色を呈する。29は体上半の破片で，胎土には石英粒子を含み，焼成普通で，灰白色を呈する。30は胴下半の破片と思われ，内面は青海波文を櫛状の刷毛でナデすり消している。石英粒子を少量含むが，焼成は良好で，外面暗灰色，内面灰白色を呈する。Ⅱ一A区堅穴住居跡出土のもの（第5図9）と胎土・焼成・手法ともに酷似しており，同一個体と思われる。31は体上半の破片で，外面の平行条線叩き文は一部ナデられ，内面の青海波文は上半がナデられ不明瞭になっている。細かい石英粒子を含むが，焼成は良好，灰白色を呈し器壁は小豆色を呈する。（宮崎貴夫）

c その他の遺物

Ⅱ一A発掘区の溝底部砂利層より次の自然遺物が出土した。

ハマグリ，*Meretrix lusoria* (RÖDING) r.2, l.1。

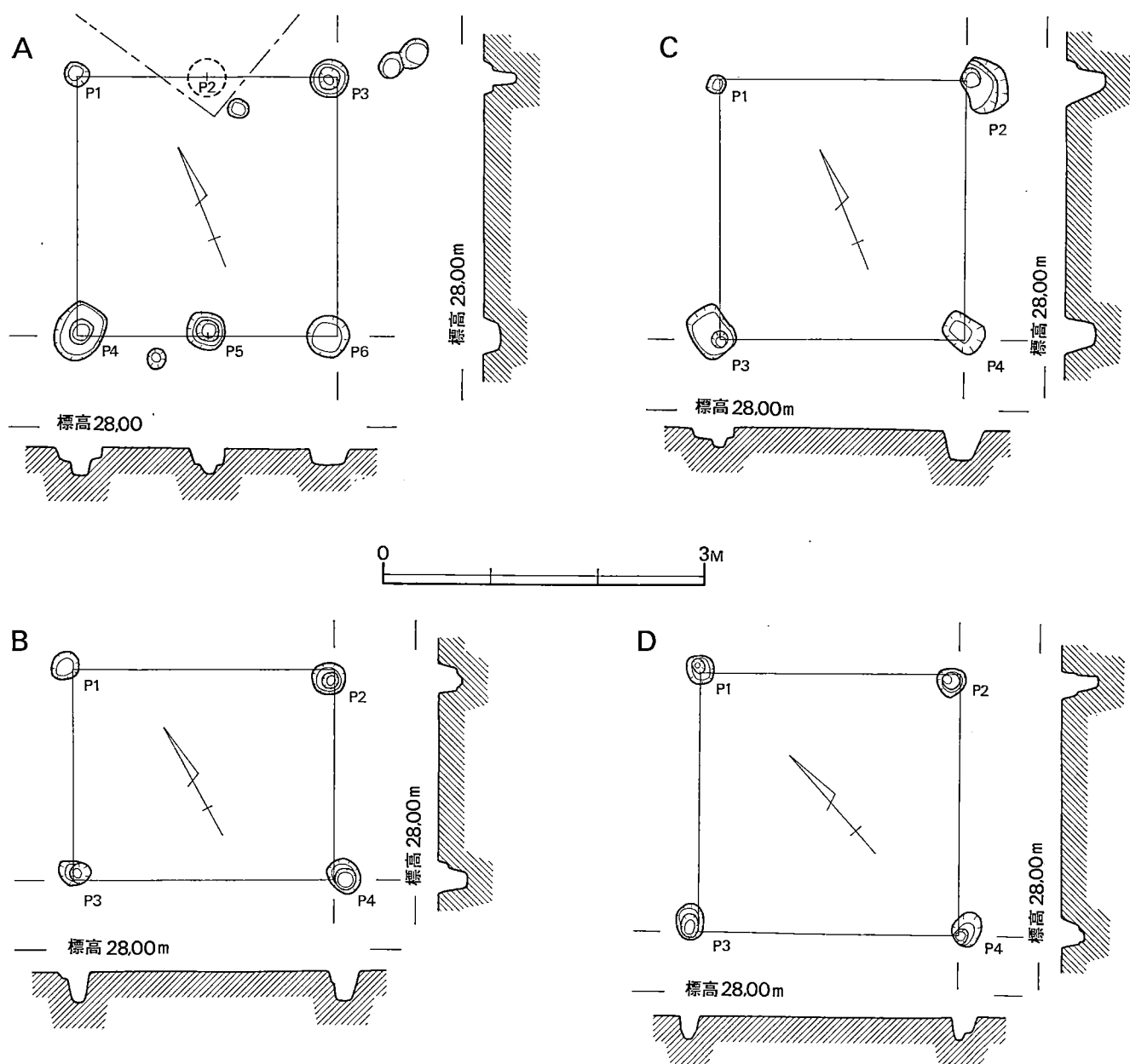
コタマガイ，*Gomphina* (*Macridiscus*) *melanaegis* RÖMER l.1。

マダイ，*Pagrus major* (TEMINK et SCHLEGEL) 左上顎歯骨片 1。

イワシ類，*Sardinia* sp. 背椎骨 1。

その他，風化の進行した魚骨片が多数出土しているが，硬骨魚類の背鰭棘等が多く特徴が不明瞭で同定し難い資料である。

これらの自然遺物は，ハマグリ，コタマガイという双殻類貝類の中に魚骨片が詰った状態で出土したもので，全て鹹水域に生息するものであることから海岸部から運びこまれて食用に供せられたものであろう。（小池史哲）



第 16 図 建物 A ~ D 実測図 (1/60)

(5) 掘立柱建物 (第2図, 表6)

I—A区の柱穴状ピット群のなかで、4棟の建物が確認された。1間×2間が1棟、1間×1間が3棟である。東寄りのものから建物A～Dとした。また、II—A区から2間×2間の総柱建物1棟が発見され、建物Eとした。

建物A (図版5—1, 第16図, 表1)

表1. 建物A計測表

(単位m)

I—A区で最も東に位置する

建物で、1間×2間である。溝と梁行方向がほぼ平行する。桁行方位はN 68° Wである。P 2

は、この調査の前に行なった条

里遺構調査のFトレンチに切られ消失している。

建物B (図版5—2, 第16図, 表2) I—A区中央部東よりにある1間×1間の建物である。桁行方位はN 29° Eで、長方形のプランをもっている。

建物C (図版6—1, 第16図, 表3) 建物Bの北西側に並ぶ建物で、1間×1間の正方形にちかいプランをもつものである。桁行方位はN 68° Wで、P 3からは中世の土師小皿片が出土した。

建物D (図版6—2, 第16図, 表4) I—A区で最も西寄りに発見された建物で1間×1間である。正方形にちかいプランを示し、桁行方位はN 48° Wである。

(鶴久嗣郎)

建物E (図版9—2, 第17図, 表5) II—A区北西隅に存在する2間×2間の総柱建物である。桁行方向はN 32° Eにとる。南側には梁行幅

を同じくして3個の小穴(P 1～3)が並らぶ。それは小さな杭がたたき込まれた状態のように思われ、縁束・土疵・工事穴などの可能性が考えられよう。平均梁行3.36m、桁行3.165mである。柱穴は12～17cmの円柱で、柱掘方の黒色土面で灰色粘質土の範囲としてとらえられた。掘方は35～50cmの大きさで、暗赤褐色粘質土を掘り込み、上部には黒色土が落ち込み、下部は混礫黄褐色粘質土で根がためを行っていた。P 9から少量の土師器片の出土をみたが、時期は不詳である。

梁間柱間寸法			桁行柱間寸法		桁行寸法
P 1—4 2.39	P 2—5 —	P 3—6 2.41	P 1—2 —	P 2—3 —	P 1—3 2.35
			P 4—5 1.19	P 5—6 1.11	P 4—6 2.30

表2. 建物B計測表

(単位m)

梁間柱間寸法		桁行柱間寸法	
P 1—2 2.37	P 3—4 2.50	P 1—3 1.94	P 2—4 1.87

表3. 建物C計測表

(単位m)

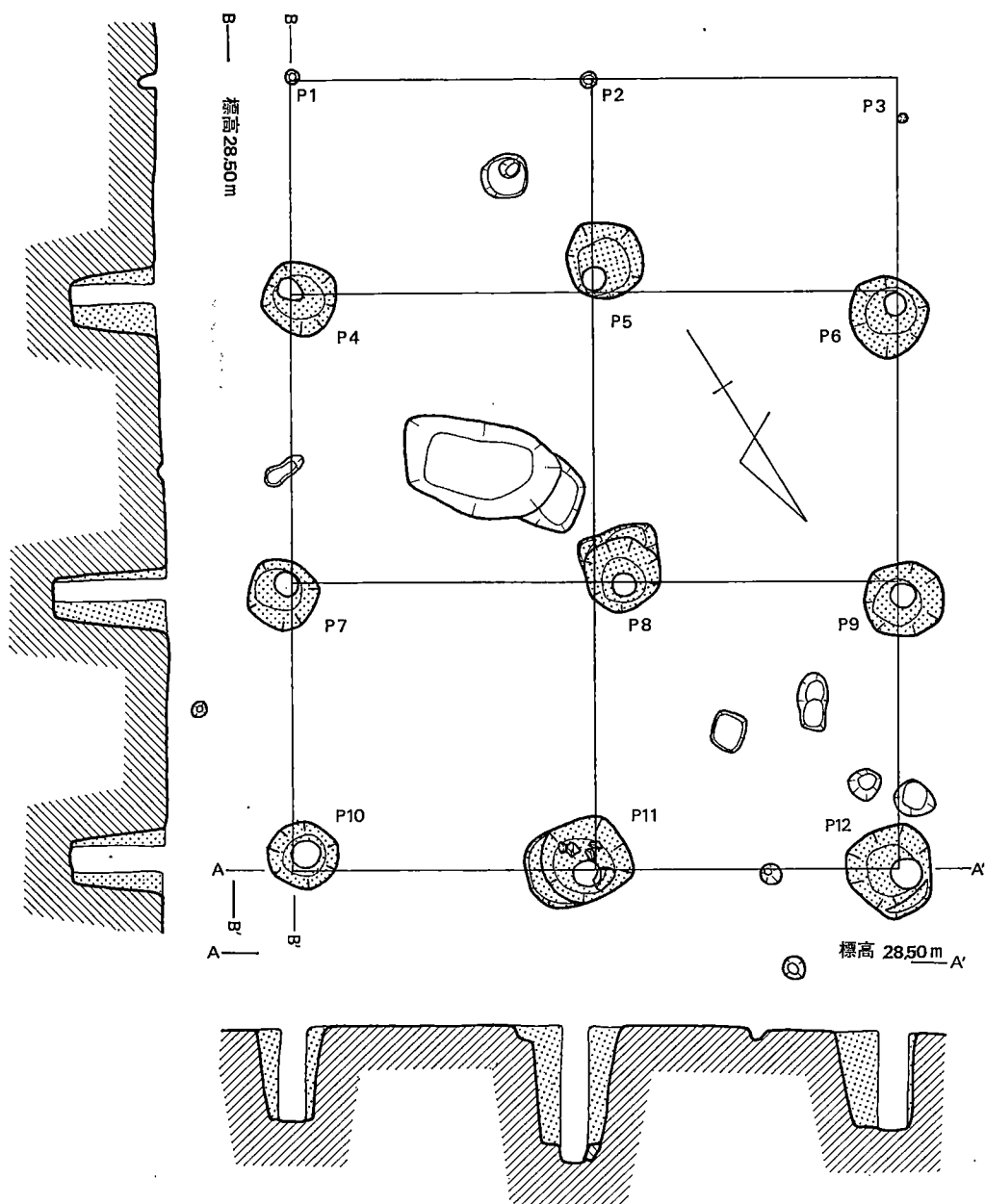
梁間柱間寸法		桁行柱間寸法	
P 1—2 2.37	P 3—4 2.24	P 1—3 2.38	P 2—4 2.35

表4. 建物D計測表

(単位m)

梁間柱間寸法		桁行柱間寸法	
P 1—2 2.33	P 3—4 2.51	P 1—3 2.45	P 2—4 2.41

田尻遺跡



第 17 図 建物 E 実測図 (1/40)

表 5. 建 物 E 計 測 表

(単位m)

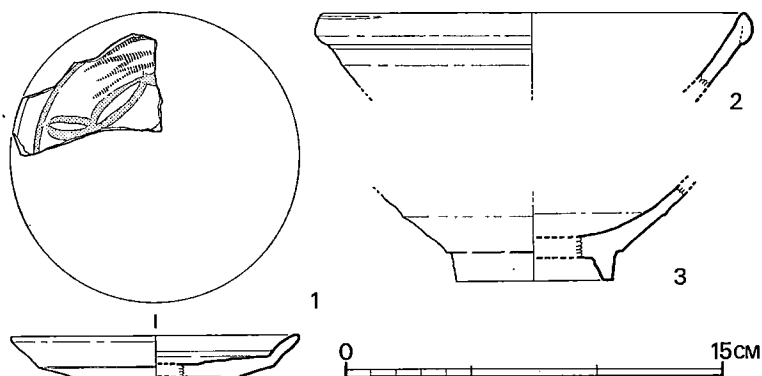
梁間柱間寸法			桁行柱間寸法			桁行寸法	
P 1—2 1.63	P 2—3 1.735	P 1—3 3.38	P 1—4 1.16	P 4—7 1.61	P 7—10 1.50	P 1—10 4.26	P 4—10 3.10
P 4—5 1.67	P 5—6 1.655	P 4—6 3.34	P 2—5 1.09	P 5—8 1.665	P 8—11 1.60	P 2—11 4.36	P 5—11 3.28
P 7—8 1.86	P 8—9 1.53	P 7—9 3.40	P 3—6 1.025	P 6—9 1.58	P 9—12 1.56	P 3—12 4.15	P 6—12 3.14
P 10—11 1.555	P 11—12 1.73	P 10—12 3.32					

(6) その他の遺構と遺物

遺構 (図版 4—2) I 区には 4 棟の掘立柱建物と溝の他に、多数のピットが検出され、全体図 (第 2 図) にはその限界までを示した。それより西側は皆無である。他に I—A 区北東隅には性格不明の不整形の落ち込みがあった。出土遺物は無い。II—B 区には南側に少数のピット、中央に三日月状の凹み、北側には細く浅い溝状遺構が確認され、中央の凹みからは少量の土器片が出土したが、いずれも時期、性格は不明である。遺構というよりはくぼみに暗褐色土が堆積したと考えたい。 (宮崎貴夫)

遺物 (第 18 図) 磁器破片 3 点のみで全て表土層出土のものである。1 はいわゆる珠光青磁とよばれる小皿で内面には篋による花文と櫛歯による文様が描かれている。器壁はやや外反し、底部を除く全面に緑灰色の釉がかかっている。胎土は淡灰色を呈している。2 は復原口径 16.6cm を測る胴上半部の破片資料で、口縁部を折りまげたようになった玉縁を持つ白磁碗である。器面には淡黄白色の釉がかかり、胎土は明灰色を呈す。3 は胴下半部の破片資料で、復原底径 6.2cm を測る高台付白磁碗である。器面には乳白色の釉がかかるが、外面下半部にはかけられていない。身込みの部分には 1 本の沈線がめぐっている。胎土は明灰色を呈し、あまりよくない。別個体ではあるが、上半部には 2 と同様の口縁部がつくものであろう。

(井上裕弘)



第 18 図 表土層出土磁器 (1/3)

3. ま と め

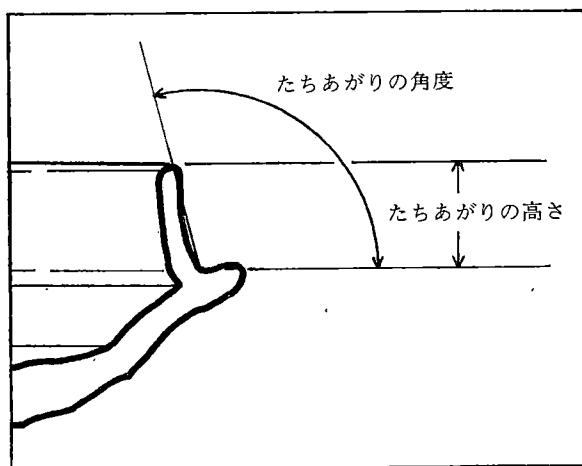
第1・2次調査を通じてかなりの土器が出土した。竪穴住居跡と溝とは15m以上離れているが、出土した土器は、相互にかなり関連性がある。

竪穴住居跡出土土器群は、Ⅰ区の溝内出土土器群と非常な共通性を示している。特に須恵器大甕(第5図9)は、溝内出土のもの(第14図30)と同一個体と考えられ、竪穴住居跡と溝は密接な関連をもって集落を形成していたことが判った。竪穴住居跡の須恵器杯蓋は溝内出土のⅠ類に相当し、杯身は古式の特徴を残すところから、Ⅲ期(註1)でも古い段階と考えられよう。それは溝内出土土器群でも古い部類に属し、本住居跡の時期は6世期中頃に位置づけられよう。

溝内出土土器群は、前記したように竪穴住居跡出土のものと強い関連性を示している。

土師器は、甕・把手付甕・壺・碗・高杯・手捏ね土器などが出土した。甕は大形のものと小形のものに分けられ、後者はバラエティに富む。1号竪穴住居跡の小形壺(第5図5・6)もこの範疇に含めて考えた方が良いかもしれない。把手付甕13は片口を有し、同様のものは竪穴住居跡からも出土している(第4図4)。溝のそれは胴の張りも少なく片口部のつくりも大雑ばで、竪穴住居跡のそれに比べると若干後出の感を受ける。甕は把手を有するもの(第10図14・15)と把手無しの形態に分けられ、後者と同様のものは筑紫野市野黒坂遺跡の20号住居跡から出土している(註2)。壺は溝から1個体の出土(第10図17)を見たが、この段階では土師器壺が減少する傾向をもち、機能的には須恵器が代行していくと考えられる。碗はⅠ～Ⅳ類に分けられ、器形的には杯に近いもの(Ⅰb類)、浅鉢に近いもの(Ⅳ類)も含まれるが、須恵器杯を模倣した土師器杯は出土していない。高杯27は杯部と脚部との接合をソケット式で行なったもので、若干時期が溯るものであろうか。

須恵器は、杯蓋・杯身・高杯・器台・壺・甕など器種は豊富で、土師器と伴にセットで使用されたことが明瞭である。とくに杯の出土量が多く、須恵器を模倣した土師器杯の出土を見ないのは須恵器の普及が要因とも考えられてくる。杯蓋・杯身の特徴は、小田富士雄氏編年(註3)のⅢ期の様相をもつと思われ大半はⅢA期的色彩が濃

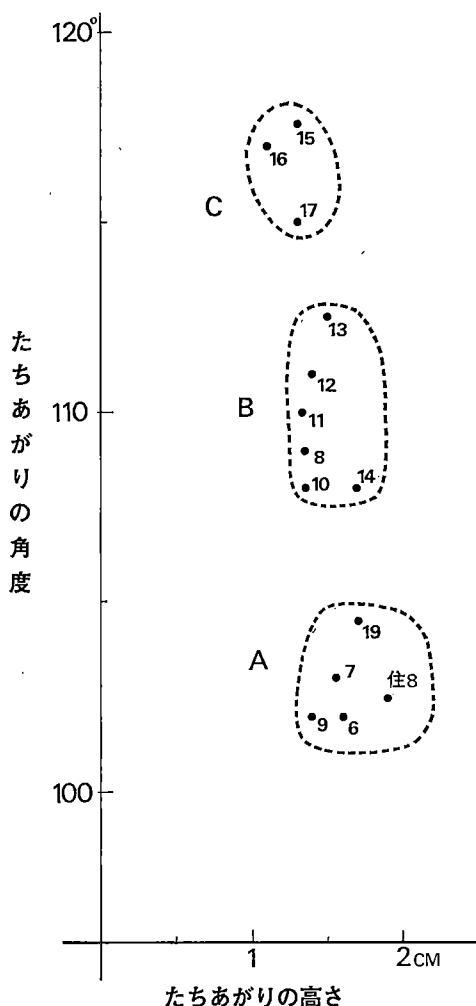


第19図 たちあがり高と角度の関係様式図

い。杯蓋はⅠ・Ⅱ類に区別でき、Ⅰ類はⅡ類より古い形制を保持している。竪穴住居跡のそれはⅠ類で、杯身とともにその土器群は溝内出土土器群でも古い部類に属すると思われる。杯身はⅠ～Ⅵ類に分類できる。第19・20図は杯身のたちあがりの角度と高さの関係を図化したものである(註4)。その結果、内傾度105度と115度前後を境としてA・B・Cの3群にグルーピングできる。それをⅠ～Ⅵ類の形態分類と比較すれば(第12図), A群にはⅠa類(6), Ⅰb類(7), Ⅱa類(9), 高杯(9), 竪穴住居跡のもの(住8)が含まれ、B群にはⅠb類(8), Ⅱb類(10・11), Ⅲ類(12・13・14)が、C群にはⅣ類(15), Ⅴ類(16), Ⅵ類(17)が含まれる。たちあがりの内傾度が強くなる(角度は大きくなる)にしたがって、時期が下ると考えることができるならば、A・B・C群の在り方はA→C群への時期的推移を示すと考えることも可能であろう。小田氏編年によればA・B群はⅢA期、C群がⅢB期に類似しているように思われ大ざっぱに、A・BとC群に区分することもできよう。しかしこの地域の須恵器の編年、製作工人集団と供給集団との関係などは未だ明瞭でなく、資料の増加をまって再検討する必要があると思われる。

以上の土器群にもっとも類似する遺跡例としては筑紫野市針摺野黒坂遺跡(註5)の9・10類土器群があげられよう。野黒坂遺跡のそれと比較すれば、田尻遺跡では須恵器杯を模倣した土師器杯の出土をみないことなどが指摘されるが、総体的にはほぼ同一の様相を示し同時段階のものとして把握されよう。

以上から溝及び竪穴住居跡出土土器群の年代は6世紀中頃を前後する時期で後半でもそうなる段階のものではないと思われ、溝内出土のものは竪穴住居跡のそれを時期的に包括し、それ



第20図 たちあがり高と角度の関係

田尻遺跡

より若干新しい時期のものを含んでいることが考えられる。それに加えて溝内出土土器の量から判断するならば、1号堅穴住居跡の他にも数軒の住居群が予想されよう。また溝内出土土器の時期幅が6世紀中頃前後に限定されることは、集落が比較的短期間に衰退してしまったことを暗示しているようにも考えられてくる。(宮崎貴夫)

この遺跡では、上記のほかに多数の柱穴状ピットが検出されて5棟の建物が想定された。これらのピットを埋めた土は、I—A区では3種に分けられるが、建物に関連するものは2種類である。建物A・

B・Dのものは粘土質の黒味があった褐色土であるが、建物Cの4ピットのものは、これらよりも明らかに黒味の強いものであった。このこと

表 6. 掘 立 柱 建 物 一 覧 表

(単位m)

建物	柱 間	平均柱間寸法		平均梁間	平均桁行	面 積 m ²	桁行方位
		梁 間	桁 行				
A	1×2	2.40	1.15	2.40	2.32	5.58	N68°W
B	1×1	2.44	1.91	—	—	4.64	N29°E
C	1×1	2.31	2.37	—	—	5.45	N68°W
D	1×1	2.42	2.43	—	—	5.88	N48°W
E	2×2 (2×3)	1.46 —	1.59 —	3.35 3.36	3.165 —	10.66 14.30	N32°E

は、これら建物に時期差のあることを示している可能性があると思われる(表6)。

また、建物CのP3から出土した土器片は土師器小皿である。復原口径8.4cm・底部径6.8cm器高13cmを測り、底は糸切りである。この法量は、前川威洋氏の分類(註6)のⅡ—3類にあたり、鎌倉時代前期後半に比定されている。表土層中に散在した磁器(第18図)の行なわれた期間は、この土師器の時期を包括するものであり、建物の時期を知るうえでの好資料である。

(薮久嗣郎)

註1 須恵器編年は小田富士雄氏編年による。

2 松岡史・前川威洋・副島邦弘「野黒坂遺跡」『南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1 福岡県教育委員会 1970

3 小田富士雄氏の編年による。小田富士雄編『八女古窯跡群調査報告Ⅰ～Ⅳ』八女市教育委員会 1969～1972

4 木下修氏の発案による。他、森田勉・岩瀬正信氏など多くの人々に教示を受けた。感謝の意を表したい。

5 註2と同じ。

6 前川威洋・新原正典「筑紫郡太宰府町所在御笠川南条坊遺跡(1)」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』2 福岡県教育委員会 1975

版 図

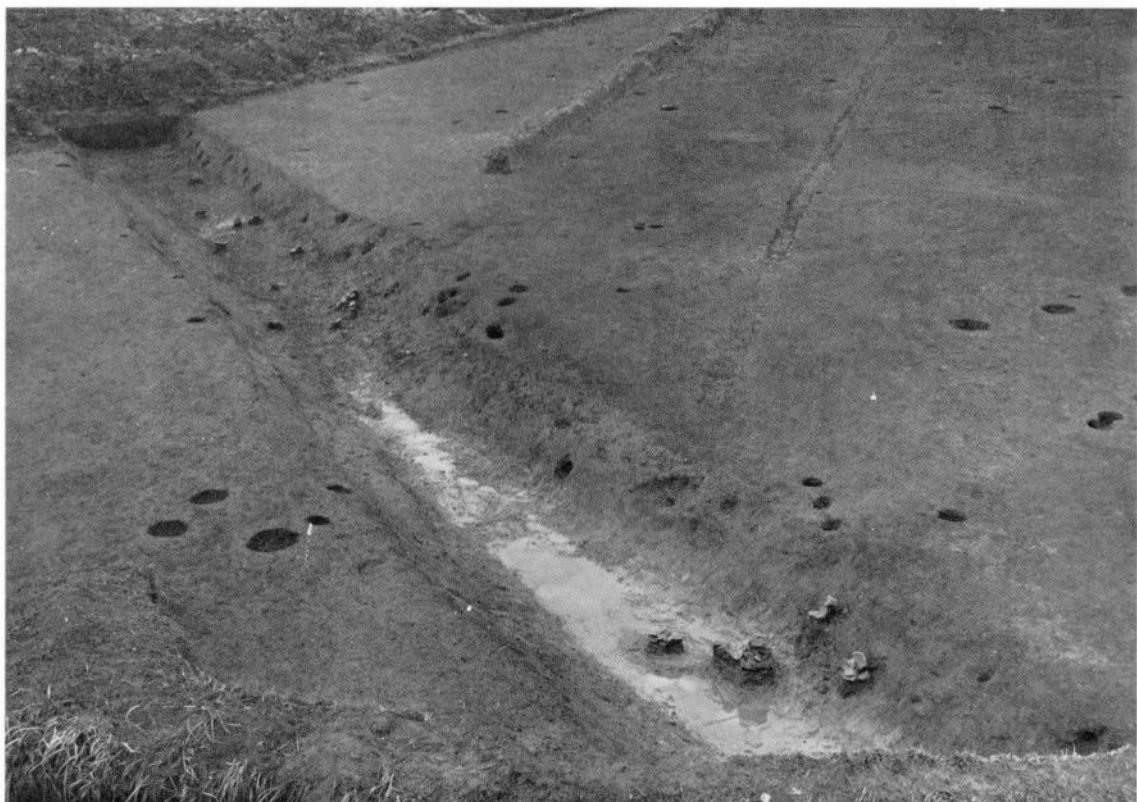
跡 遺 屍 田



1 1-A区全景（北東から）



2 1-A区東半部（西から）



1 1-A区溝全景(北東から)



2 溝内土器出土状態(南東から)



1 溝 北 半 部 (南から)



2 I - B 区 溝 全 景 (西から)



1 I-A区南東部（北から）



2 I-A区北東部不整形落ち込み（東から）



1 掘立柱建物 A (北から)



2 掘立柱建物 B (南西から)



1 掘立柱建物 C (南西から)



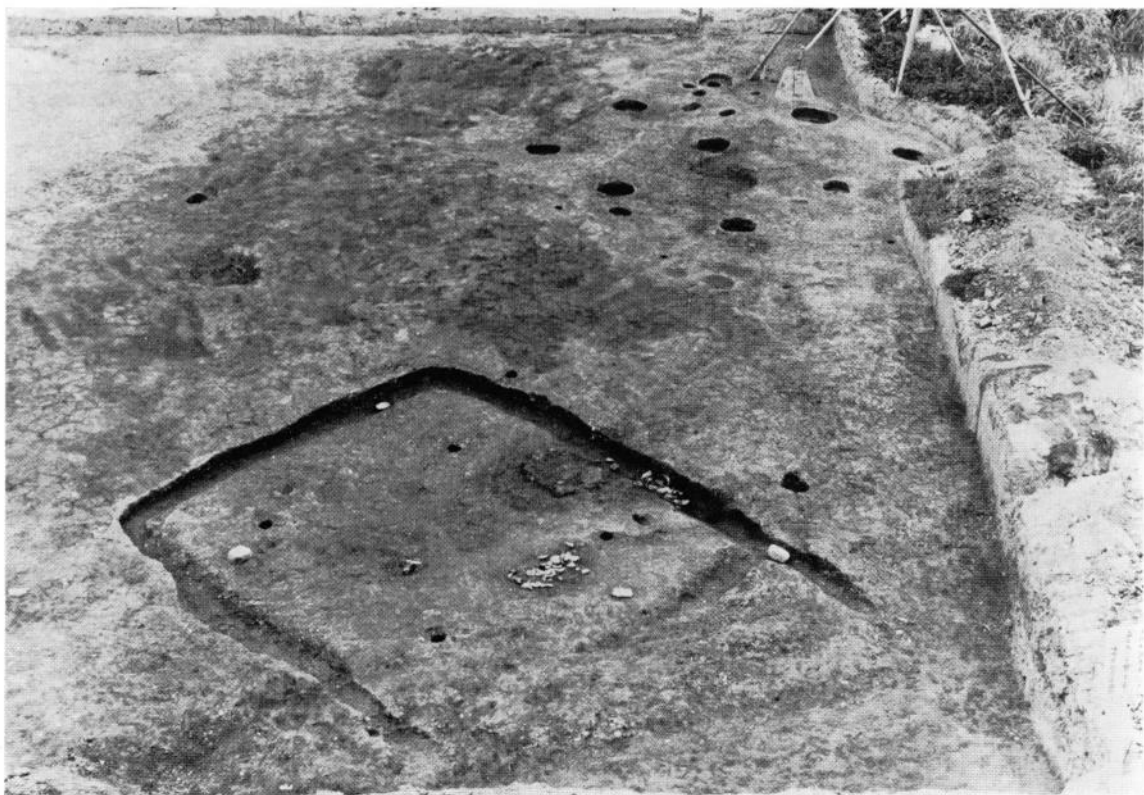
2 掘立柱建物 D (北東から)



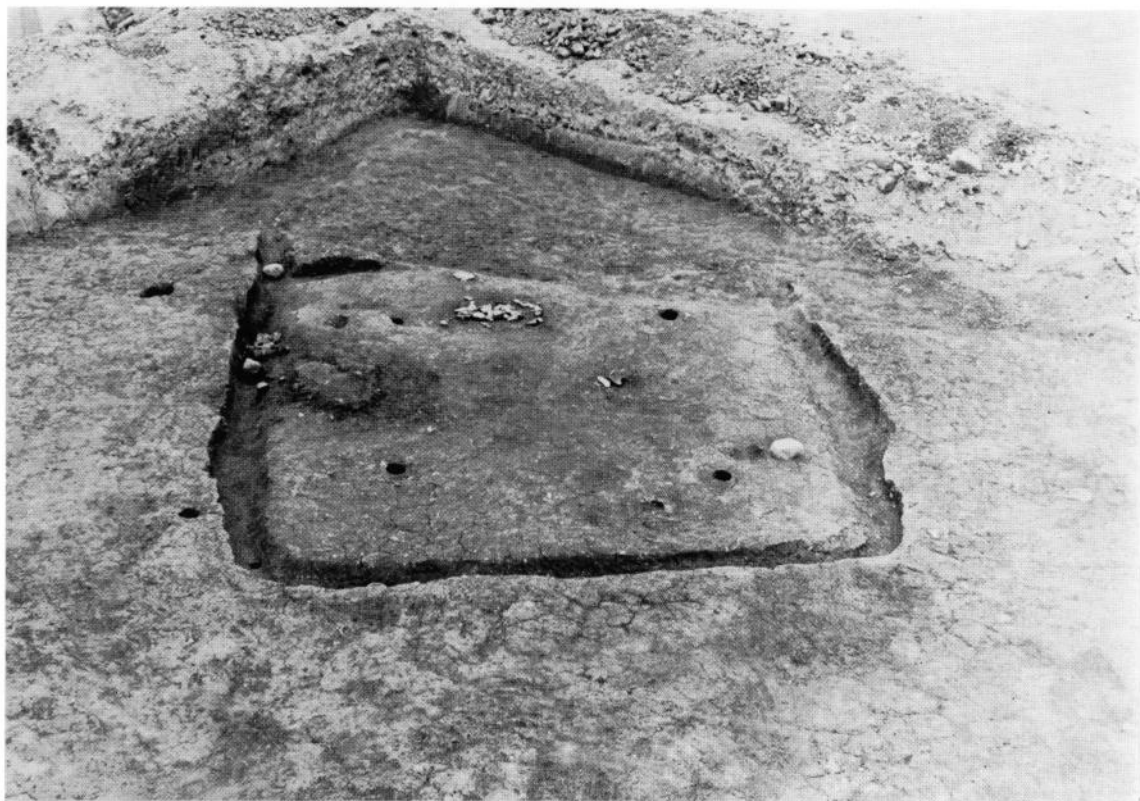
1 II - B 区 全景 (北から)



2 II - A 区 全景 (東から)



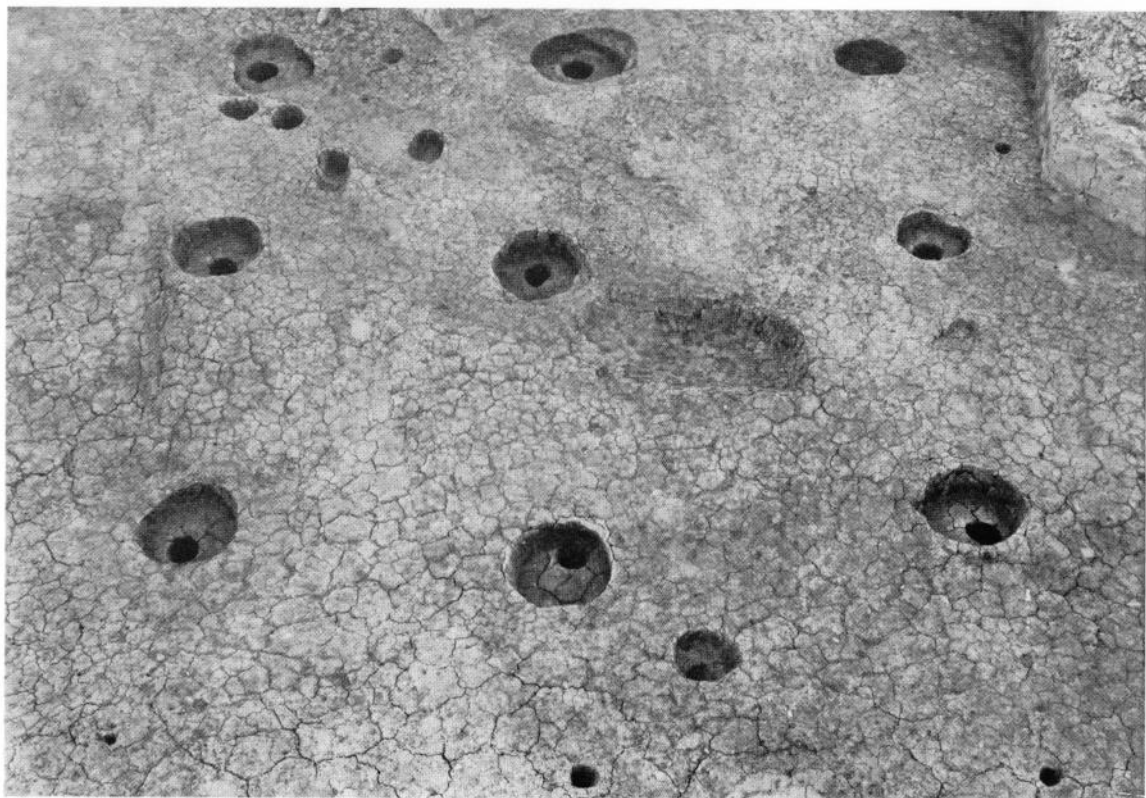
1 II-A区近景（南から）



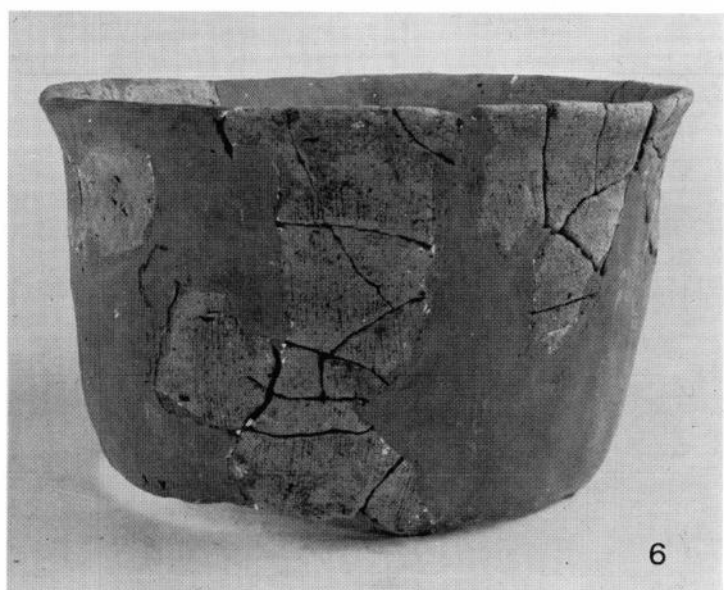
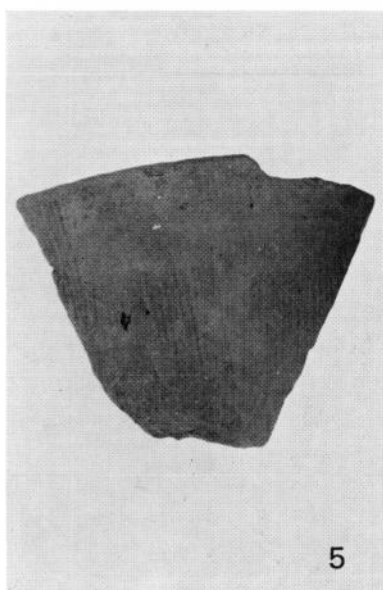
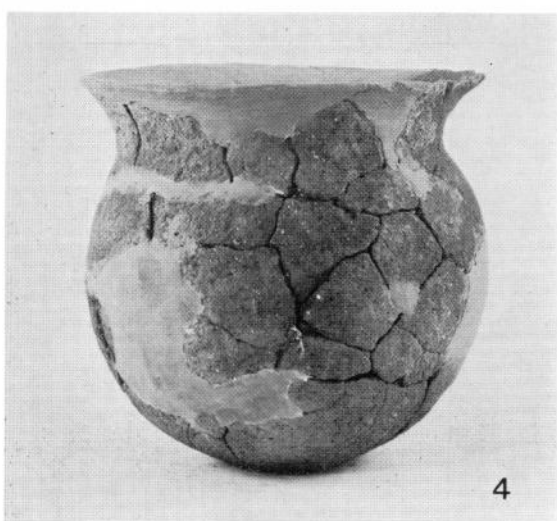
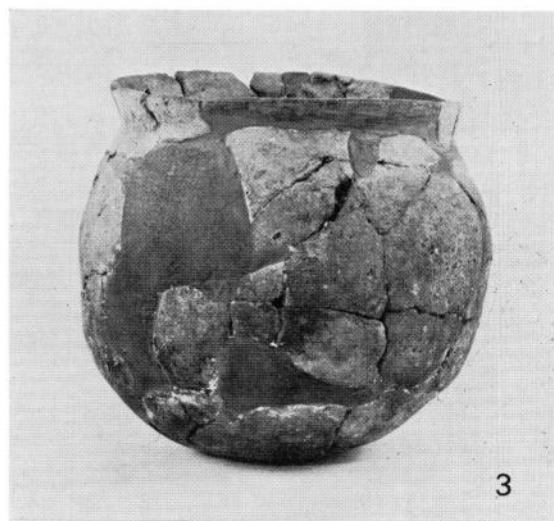
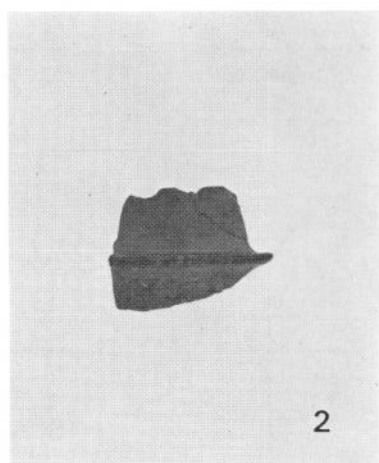
2 竪穴住居跡（北東から）



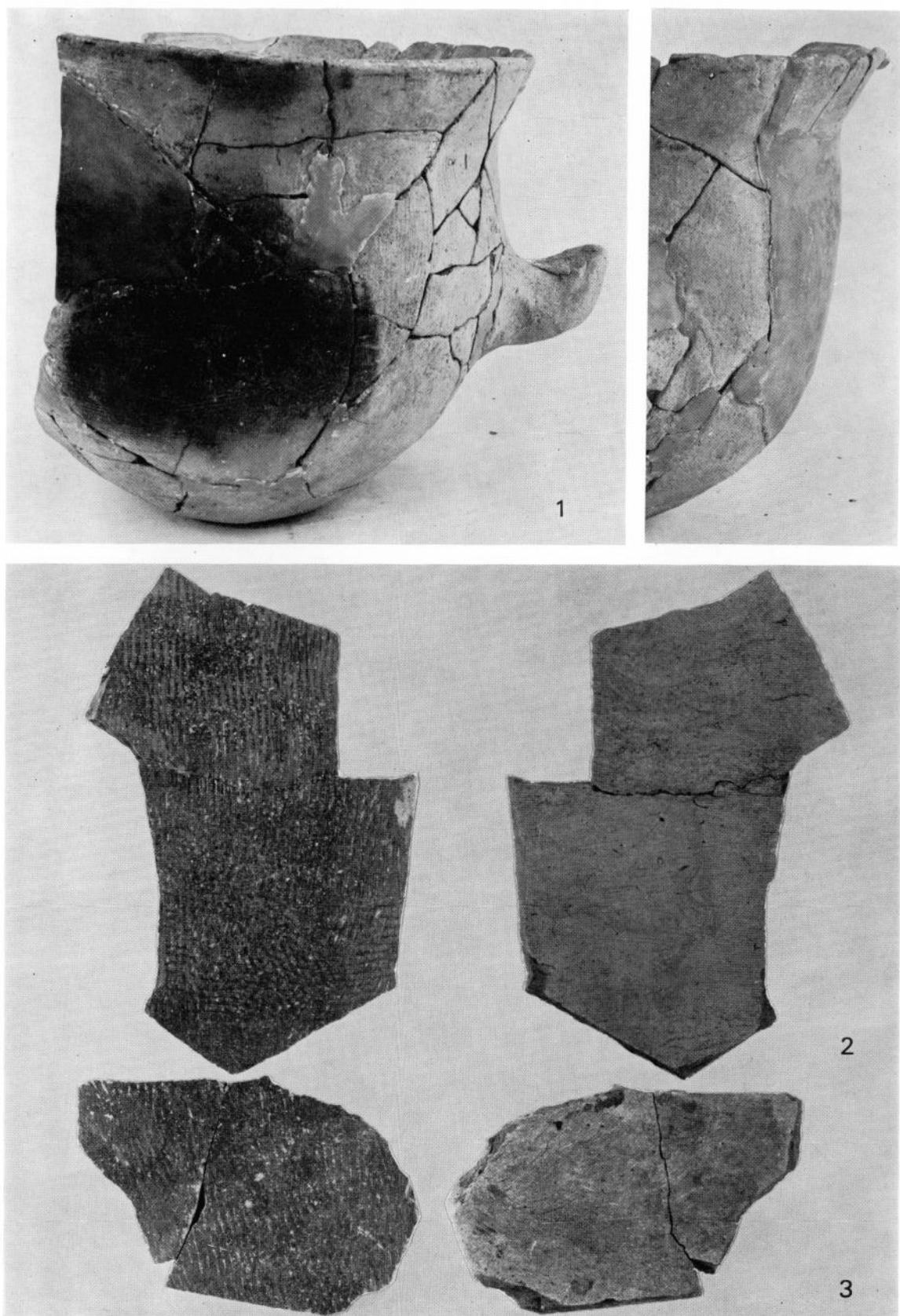
1 竪穴住居跡（北東から）



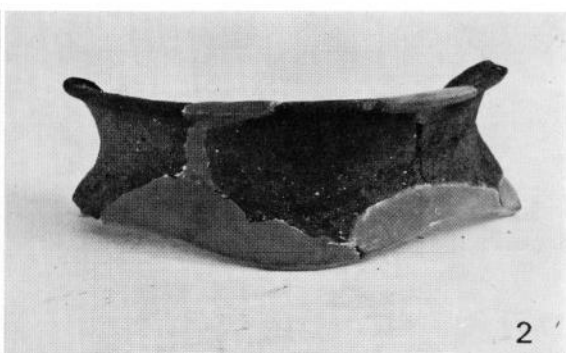
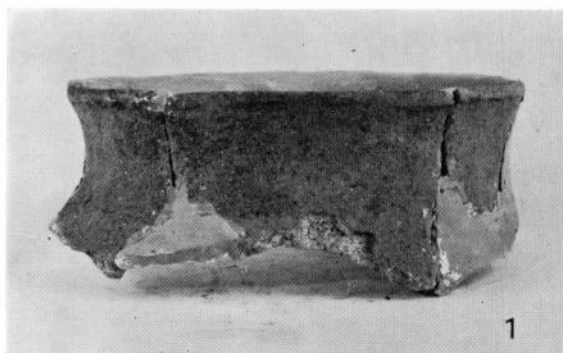
2 掘立柱建物 E（南東から）



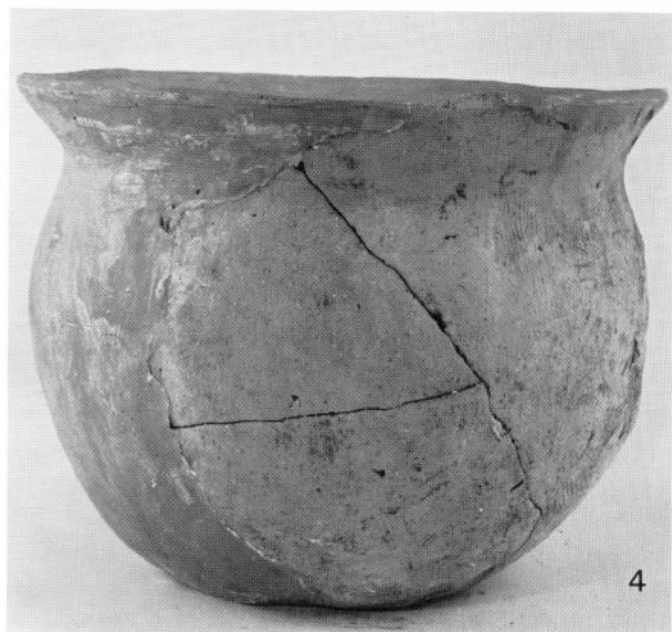
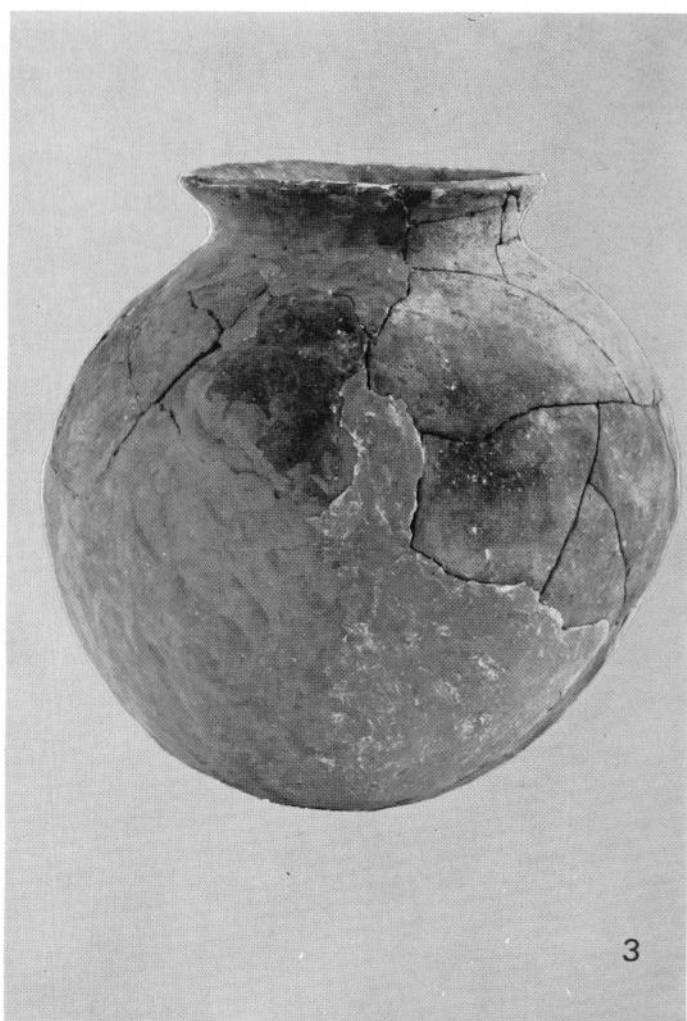
竖穴住居跡出土土器(1)



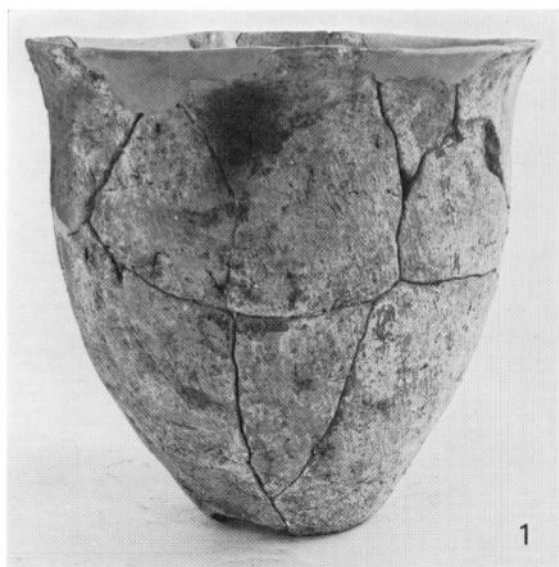
竪穴住居跡出土土器(2) 3は溝内出土



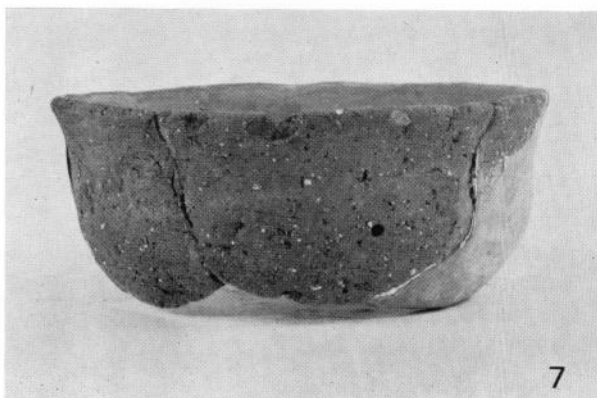
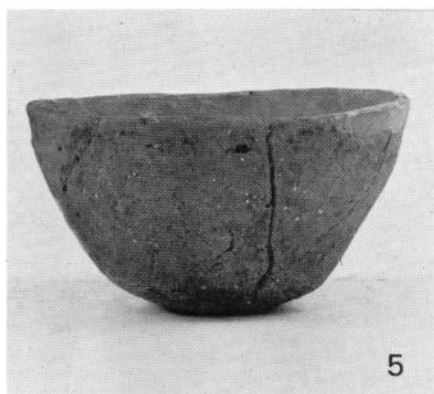
溝内出土土器 (1)



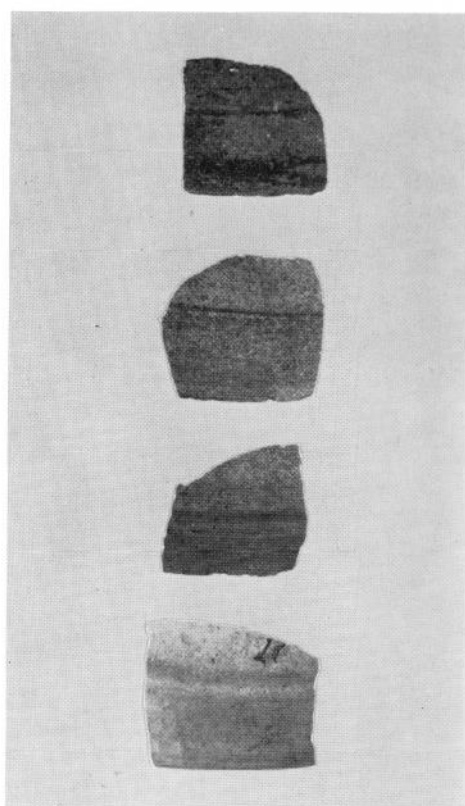
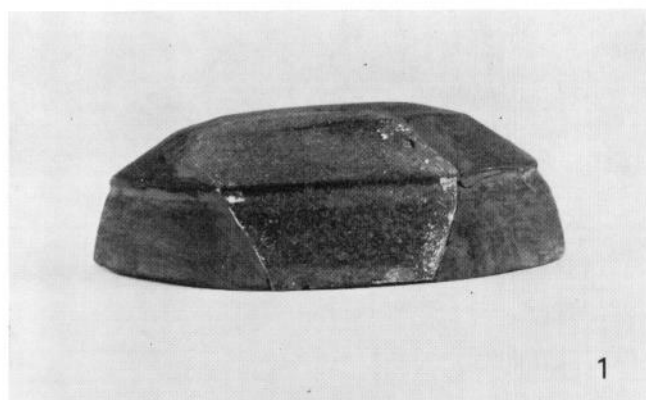
溝内出土土器 (2)



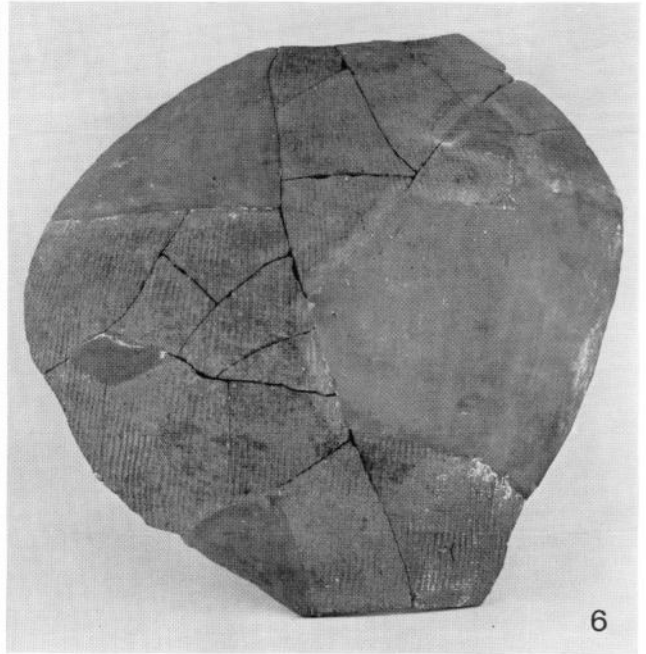
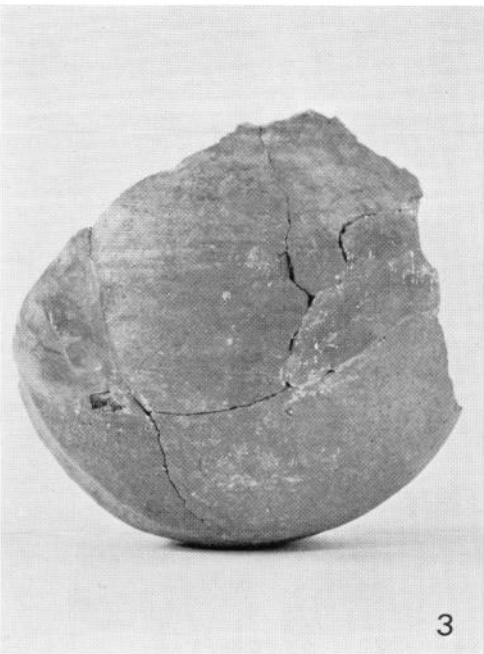
溝内出土土器 (3)



溝内出土土器 (4)



溝内出土土器(5)



溝内出土土器 (6)

VII 別当塚古墳の調査

鞍手郡若宮町大字竹原字塚ノ元

本文目次

1. はじめに	93
(1) 調査の経過	93
(2) 遺跡の立地	94
2. 発掘調査	94
3. おわりに	95

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 調査地域北東部（竊久嗣郎撮影）	94
(2) 調査地域東半部（竊久撮影）	94

挿図目次

第 1 図 別当塚古墳位置図（国土地理院地形図 1：25,000 脇田・直方，木下修作成） ...	94
第 2 図 別当塚古墳付近地形図（日本国有鉄道原図，小池史哲製図）	95
第 3 図 別当塚付近古地籍図（若宮町竹原地区所有原図，竊久嗣郎製図）	96

Ⅶ 別当塚古墳の調査

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

この遺跡の調査は、昭和47年9月22日から同月30日までの間に行なった。この調査の直前、若宮平野条里遺構の調査中に、竹原丘陵の八幡塚古墳の近くに別当塚と呼ばれる小円墳があったことを故老から聞いた。条里遺構調査の合間に調査してみると、現地は水田で遺物の散布もなく、地籍図にも記載されていない。ところが、現在の地籍図が調製される前の地籍図が保存されていることが分かり、紙の継目が離れ鼠や虫喰いで分離したものを継ぎあわせてみると、確かに話の通りに塚の記載があることがわかった(第3図)。また、作業員のなかに地元である竹原地区に住む人があり、幼時にこの塚で遊んだことがあること、耕作によっていつのまにか消滅したこと、地権者であった若宮八幡宮から苦情が出たのでほぼ元の位置に付近の土石を集めて塚を復原したことなどを記憶していた。

以上のような経過で、かってここに小円墳が存在したことが確実となり、新幹線路線敷にかかることから発掘調査を行なうことになった。

調査は、条里遺構の調査が一時中断せざるをえなくなった期間を利用して行なった。地点を確認するためにまず直交するトレンチを設定し、石の詰まった凹地が発見されたので東部を段丘面の東端まで拡張した。結局、遺構の残留は確認されず関連遺物の出土も見られないまま調査を終った。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務 主 事 小 川 浩 一 郎

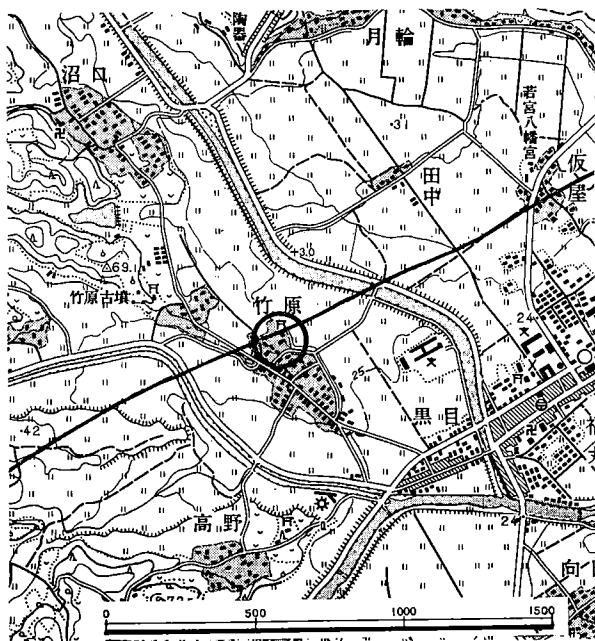
嘱 託 吉 村 源 七

発掘調査 技術主査 鶴 久 嗣 郎

なお、調査にあたっては若宮町在住各位の協力があつた。

(2) 遺 跡 の 立 地

この遺跡は、福岡県鞍手郡若宮町大字竹原字塚ノ元にある。若宮平野の中央部に向かって北西から延びてきた丘陵が高度を下げ、史跡竹原古墳あたりから平坦となって竹原の集落をのせる。この竹原集落の北西のはずれにあたる段丘面東縁に、この遺跡は立地する。この段丘は、東側の山口川氾濫原との間に急傾斜の段丘崖をつくり、比高は8.5mにも達する。標高は、遺跡のある水田面で38.5mを示し、史跡竹原古墳から東南東約500mの地点である。



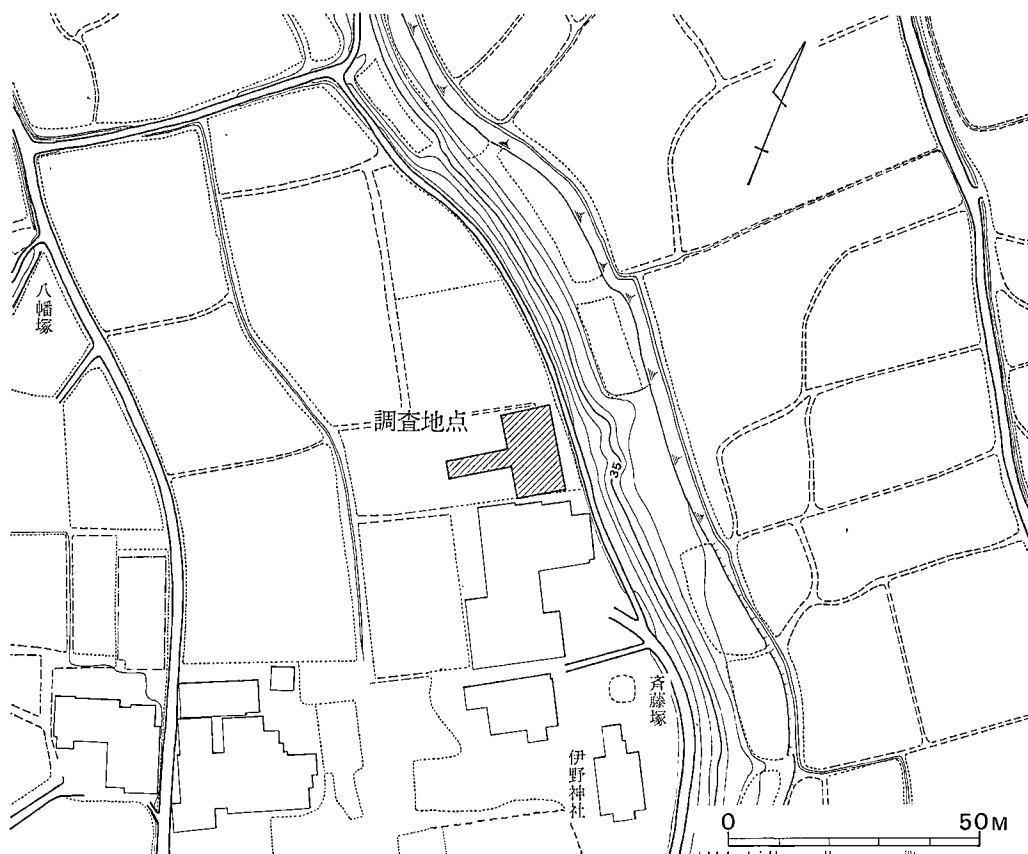
第1図 別当塚古墳の位置 (1/25,000 協田・直方)

2. 発 掘 調 査

発掘調査は、古地籍図と現地とを照合してトレンチを設定し、この東西方向トレンチの東半部に石の詰まった凹地が検出されたので、この部分を拡張した。この凹地は、古地籍図の記載地点よりもむしろ南寄りに拡がり、古墳の存在したと思われる発掘区の北半部は、深さ30cm・幅50cmほどの半月形に曲る長さ3.5mの溝となって消滅している。この石の堆積は水田床土層のすぐ下面に分布している。

石は、大きなもので人頭大、小さなものは拳大で、この地点が水田であった関係からレベルはほぼ揃っているが、乱雑にならされた状況を示しており、区画性も整えられた形跡もみられない。

石を排除した跡は、凹地というよりは南東へ向かって広がる溝状を呈する。おそらく、台地縁辺に生じた亀裂状の溝に石を入れて整地したものと思われる。石の間からは、近世のものと思われる茶碗の破片が数片出土して、この整地が行なわれた時期を示すものと考えられ



第 2 図 別当塚付近地形図 (1/1,500)

る。

発掘区北半部では、石室掘方の遺存を考慮して検出につとめたが、茶褐色混砂粘土の地山が続くばかりであった。

3. お わ り に

別当塚と呼ばれた古墳は、発掘調査では全くその痕跡をつかむことができなかった。もともと故老の話に端を発した調査であったが、その存在を証拠づけるものは古地籍図しかない。

この地籍図（第 3 図）は、現在用いられている明治 22 年調整の地籍図の前に使用されたものである。この地籍の中で、左端上部にみえる塚は八幡塚である。右下部の五百号地の塚は齊藤塚と呼ばれ、現在も伊野神社の社殿背後に直径 5 m ほどの小丘がある。

別当塚古墳



第 3 図 別当塚付近古地籍図(約 1/1,200)

別当塚は、中央やや右上の四百九十七号地の中の塚である。この付近は、耕作地の区画がほぼ踏襲されているから、調査地点の南側の家屋が四百九十八号地にあたる。

なお、この古地籍図の右上は紙継目が剥がれており続きは見当らない。左上の部分は破損している。

(齋久嗣郎)

圖 版

別 当 塚 古 墳



1 調査地域北東部(南西から)



2 調査地域東半部(北西から)

VIII 杉園遺跡の調査

鞍手郡若宮町大字稲光字杉園

本文目次

1. はじめに	97
(1) 調査の経過	97
(2) 遺跡の立地	97
2. 発掘調査	98
3. おわりに	100

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 杉園遺跡付近航空写真（鶴久嗣郎撮影）	97
(2) 杉園遺跡全景（鶴久撮影）	97

挿図目次

第 1 図 杉園遺跡位置図（国土地理院地形図 1：25,000 脇田，木下修作成）	97
第 2 図 杉園遺跡付近地形図（日本国有鉄道原図，鶴久嗣郎製図）	98
第 3 図 トレンチ土層断面図（鶴久実測・製図）	99

VIII 杉 園 遺 跡

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

この遺跡の調査は、昭和48年3月22日から31日までの間におこなった。分布調査で、丘陵斜面に土師器の散布がみられることが知られたので、若宮平野の調査の一環として実施したものである。調査地点の上部は、既に削平されて民家があり遺物の散布は全くみられないので、斜面を中心に調査をおこなった。斜面上端から下端までのトレンチを設定して発掘したが、上部削平時に排出した土が堆積した下に旧地表面が現われ、遺物もほとんど検出されなかったことから、このトレンチのみで調査を打切った。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務 主 事 小 川 浩 一 郎

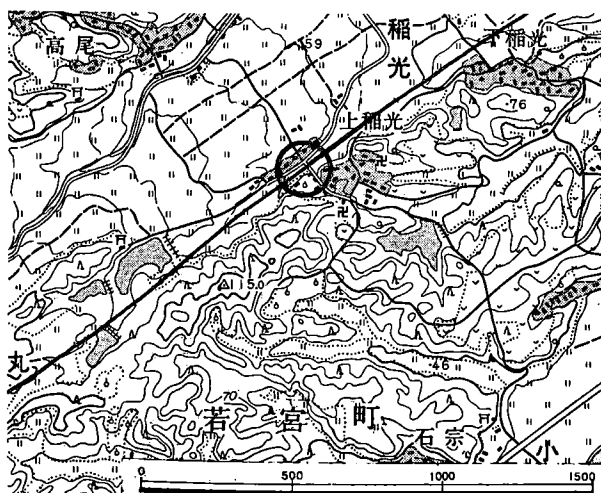
嘱 託 吉 村 源 七

発掘調査 技術主査 鶴 久 嗣 郎

なお、この調査には若宮町在住各位の協力があつた。

(2) 遺 跡 の 立 地

この遺跡は、福岡県鞍手郡若宮町大字稲光字杉園にある。若宮平野は、西半部で楔形に三分するが、この遺跡のある稲光の平野は、平野中心部から西方に分岐する黒丸川流域にあたり、南西方向の犬鳴川流域とは稲光丘陵によって隔てられている。杉園遺跡は、この丘陵の北縁斜面にあたり、背後丘陵上には稲光古墳群・高野古墳群が分布し、丘陵東端には剣塚前方後円墳がある。



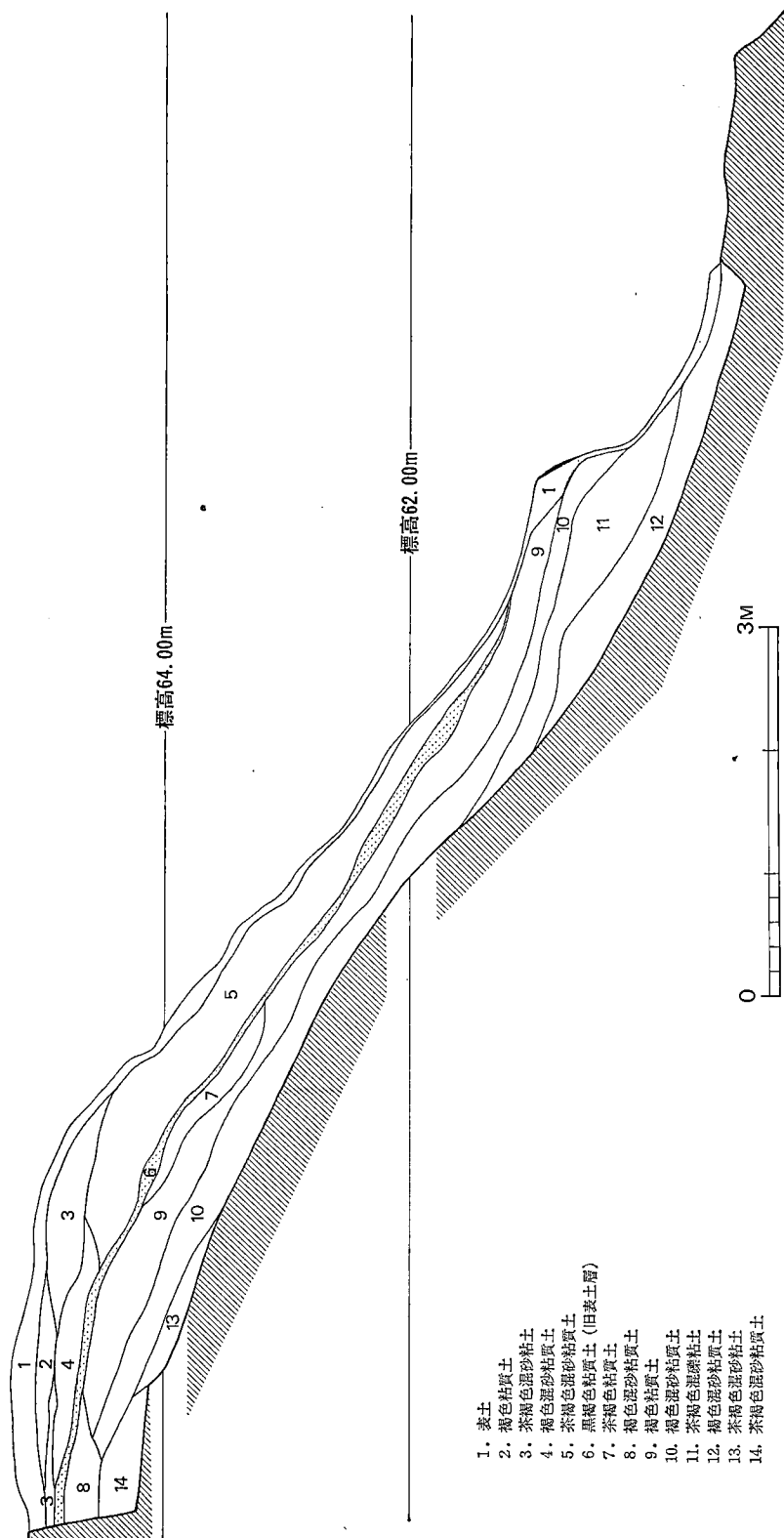
第1図 杉園遺跡位置図（1/25,000 脇田）

2. 発掘調査

稲光丘陵は、水田および宅地のために削平されて、この遺跡附近では段丘状を呈している（図版1—1，第2図）。遺物の散布地はこの最下段の段丘崖面にあたり、この崖面の比較的傾斜の緩い部分にトレンチを設定して調査をおこなった（図版1—2，第2図）。



第2図 杉園遺跡付近地形図(1/1,000)



1. 表土
2. 褐色粘質土
3. 茶褐色湿砂粘土
4. 褐色湿砂粘質土
5. 茶褐色湿砂粘質土
6. 黒褐色粘質土 (旧表土層)
7. 茶褐色粘質土
8. 褐色湿砂粘質土
9. 褐色粘質土
10. 褐色湿砂粘質土
11. 茶褐色湿砂粘土
12. 褐色湿砂粘質土
13. 茶褐色湿砂粘土
14. 茶褐色湿砂粘質土

第3図 トレンチ土層断面図 (1/60)

杉園遺跡

トレンチ土層断面の観察では、崖面上端附近の地表下約80cmに竹の切株の残留した黒褐色粘質土層がみられ、この層は斜面にそって徐々に浅くなって斜面下半部で現地表と合する（第3図第6層）。この層の表面には茶碗や七輪の破片がみられ、削平前の旧地表であることを物語るとともに、削平が極めて新しいものであることを示している。遺物は、この旧地表より上の層からのみ出土するが、発見された10点のすべてが一辺3cmにも満たぬ土師質土器の細片であった。

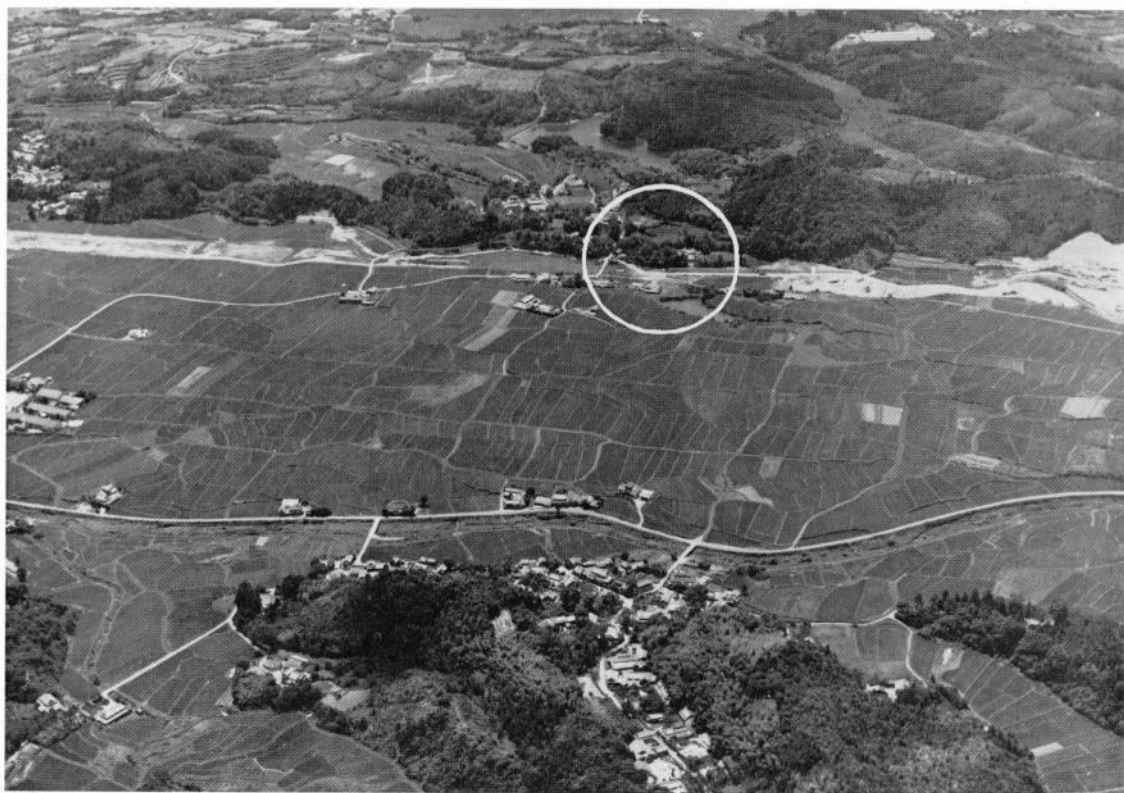
3. お わ り に

この遺跡は前述のように単なる散布地であった。発見された遺物も小片のみで器形も判然としないが、胎土の質や色からみて少くとも中世にまで下るものではない。斜面の土層中に旧地表がみられ、その上の掻出された土が堆積した中に遺物を包含することから、削平された部分に遺物の散布か遺構かが存在したことを想定するのみである。削平された宅地の周辺や上段の段丘崖にも遺物の散布はみられない。

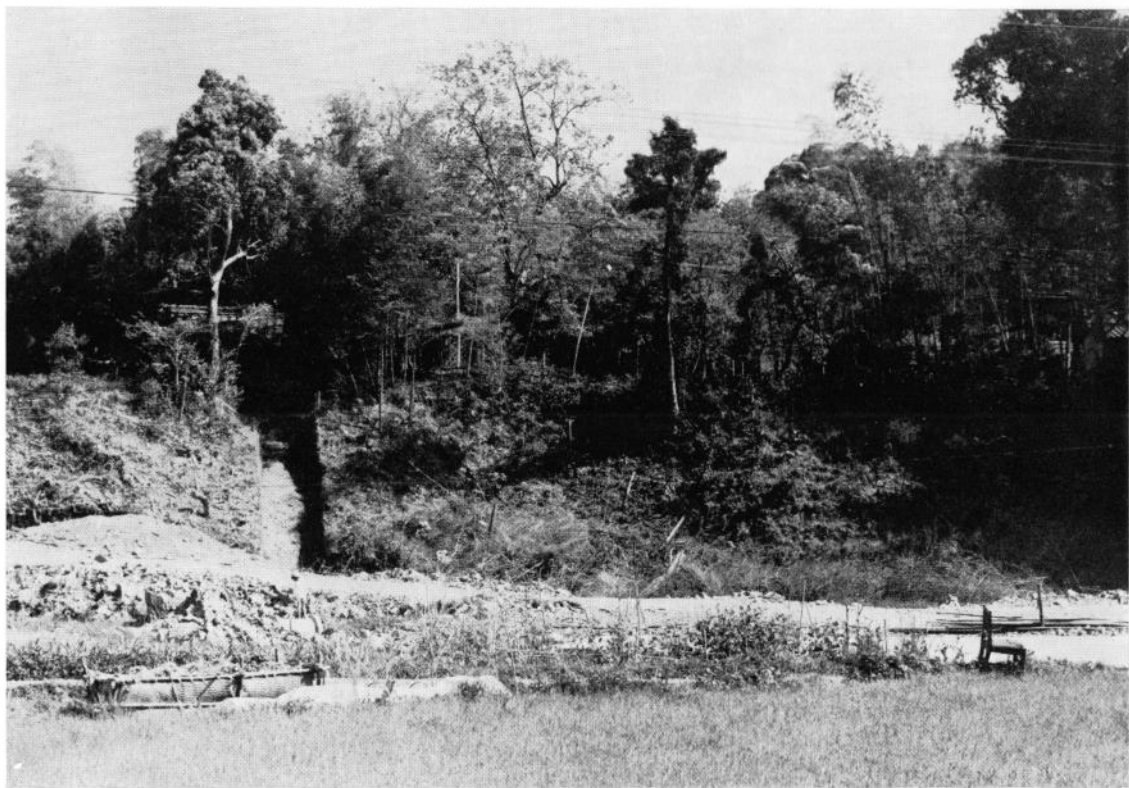
（薮久嗣郎）

圖 版

杉 園 遺 跡



1 杉園遺跡付近航空写真(北西から)



2 杉園遺跡全景(北西から)

Ⅸ 久山町下山田地区の調査

粕屋郡久山町下山田区

本文目次

1. はじめに	101
(1) 調査の経過	101
(2) 調査地点の立地	101
2. 発掘調査	102
3. おわりに	103

図版目次

本文対照頁

図版 1 (1) 久山町下山田地区調査地点遠景（鶴久嗣郎撮影）	101
(2) B地点トレンチ全景（鶴久撮影）	102

挿図目次

第 1 図 久山町下山田地区調査地点位置図 （国土地理院地形図 1：25,000福岡，木下修作成）	101
第 2 図 久山町山田地区調査地点付近地形図 （日本国有鉄道原図 1：1,500，三津井知廣製図）	102

Ⅸ 久山町下山田地区の調査

1. は じ め に

(1) 調 査 の 経 過

この地区の調査は、昭和47年5月17日から6月3日の間におこなった。この地区は福岡市近郊にあたり兼業農家が多く、専業農家は近郊園芸農業をおこなっているために農閑期がなく、作業員の確保が困難であった。結局、2～3人で調査を実施したが、トレンチの発掘が浅くてすんだために2週間余で調査を終えることができた。

調査関係者

福岡県教育委員会文化課

庶 務 主 事 小 川 浩 一 郎

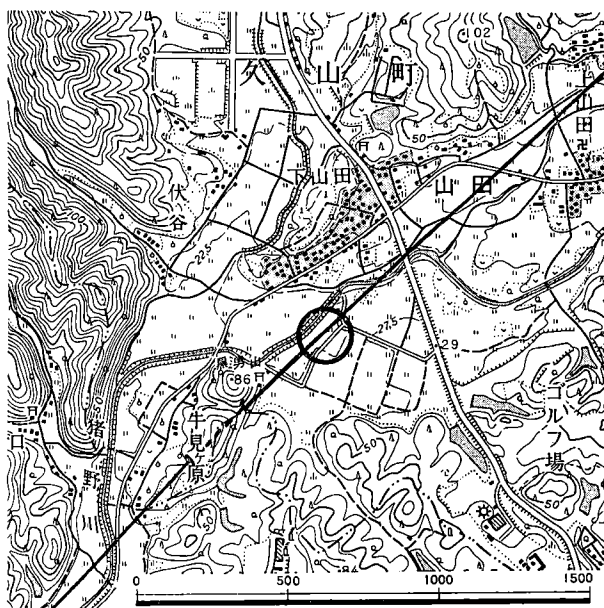
嘱 託 吉 村 源 七

発掘調査 技術主査 竊 久 嗣 郎

なお、この調査には久山町在住各位の協力があつた。

(2) 調査地点の立地

この地点は、福岡県粕屋郡久山町下山田区にある。福岡市北東部で博多湾に注ぐ多々良川流域にあたり、支流猪野川をつくる狭長な平野の下流部にある。南方は低平な丘陵、他の三方は犬鳴山地から西方にのびる山地に囲まれているが、南方は約1.5kmで福岡平野となるという極めて自然環境の良好な地域である。



第1図 久山町下山田地区調査地点位置図 (1/25,000)

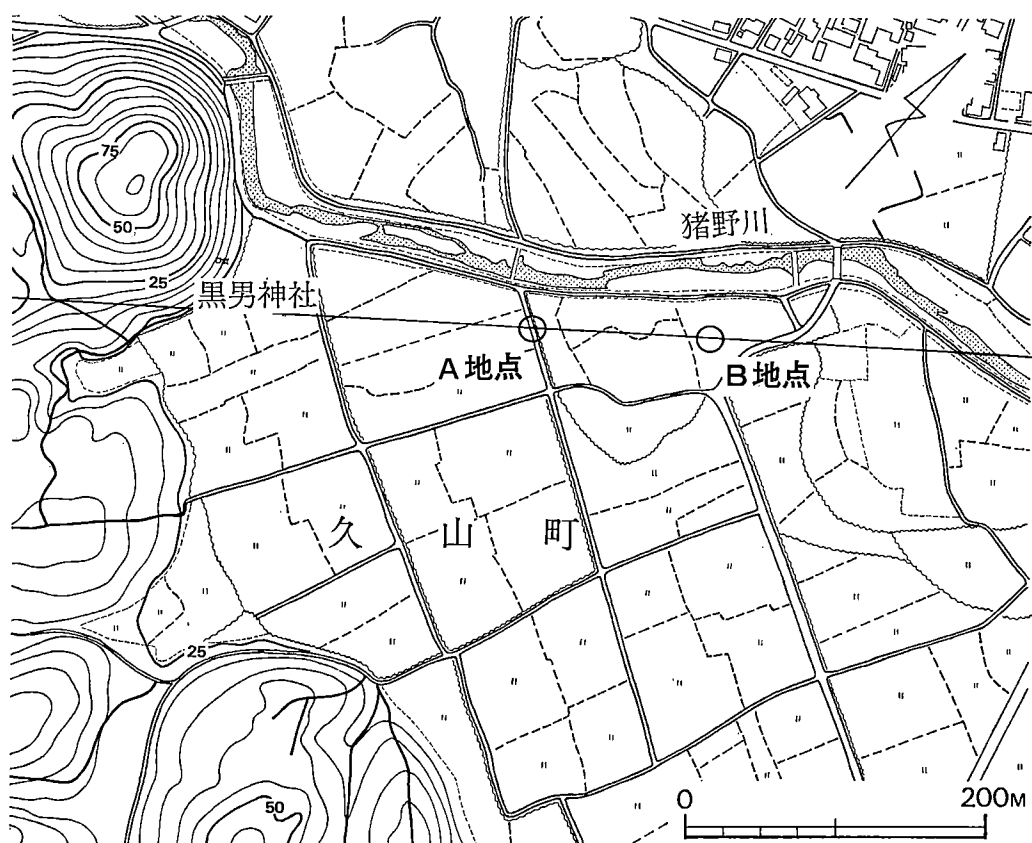
2. 発掘調査

この地域には、100m 余の間隔で道路・水路・水田畦畔が碁盤目状に交叉し埋没条里遺構の存在が予想されるところから、調査を行なった。調査は、これらの道路などの線を切断する形でトレンチを設定し発掘した。

トレンチはA・Bの2地点（第2図）に設定した。この付近では、新幹線路線が猪野川ぞいに予定されていた。この2地点は猪野川の氾濫原にあたるため、調査前からあまり遺構の存在は期待できなかったが、調査の結果はその通りであった。

A地点では、農道と水路を切断するトレンチで調査した。土層断面は極めて単純で、水田耕土・床土の下はすぐ小砂利が現われ、その下は地表から約60cm掘下げたがすべて粘土層であった。

水路を切断した部分は、この粘土層に水路が切込まれて底に水路に特有の細砂やシルトの堆



第2図 久山町下山田地区調査地点付近地形図 (1/5,000)

積がみられたのみである。遺物は1点も検出されなかった。

B地点では、直交する2本のトレンチを設定して二方向の予想線を切断してみたが、ここではA地点よりも更に単純であった。約20cmの耕土、約5cmの床土の下は直ちに砂利層で、地表から約50cmまで掘下げたが鍬も立たぬほどであった。砂利層面はほとんど水平で、高低差は20mのトレンチ内で10cm以内という平坦な層をなしていた。結局、何らの遺構も発見されず、表土中から弥生式土器と思われる土器片1片が出土したのみである。これは一辺4cmほどの小片で、器形もどの部分にあたるかも不明である。

3. お わ り に

この地区の調査は、全く遺構も関連する遺物も検出されずに終わった。調査地点が猪野川の氾濫原にあたったこともあるが、道路や水路の走行も大縮尺の地図で見れば必ずしも平行ではなく、間隔も実測してみれば1町を越えたり不足したりであった。字界線も全面的に不規則であり、条里制の施行された形跡は全くみられないと言ってよい。福岡平野とは丘陵地帯によって切断された平野であり、幅1kmにも満たぬ狭長な地域であるから、条里制施行の対象とはならないものであろう。

この平野の南側を限る丘陵地帯をこえた久原川の流域には、福岡平野から連続する条里制の遺構がみられる。

(齋久嗣郎)

図 版

下 山 田 地 区



1 久山町下山田地区調査地点遠景（南西から）



2 B地点トレンチ全景（南から）

X 門田 2 号墳の調査

春日市大字上白水字門田

本文目次

1.	はじめに	105
2.	調査の経過	106
3.	墳 丘	109
4.	石 室	111
	(1) 石 室	111
	(2) 羨 道	113
	(3) 墓 壙	114
5.	周 溝	114
6.	中 世 墓	115
7.	遺 物	117
	(1) 遺物の出土状況	117
	(2) 石室内出土遺物	117
	(3) 周溝内出土土器	134
	(4) 墳丘内出土土器	135
	(5) 墳丘内出土石器	137
	(6) 中世墓出土遺物	139
8.	ま と め	141

図 版 目 次

本文対照頁

図 版 1	(1) 門田 2 号墳遠景 西から（甲元真之撮影）	106
	(2) 門田 2 号墳遠景 南から（甲元撮影）	106
2	(1) 門田 2 号墳近景 北から（甲元撮影）	106
	(2) 門田 2 号墳近景 南から（甲元撮影）	106
3	(1) 墳丘頂上部試掘地点石室の奥壁（甲元撮影）	106
	(2) N区表土除去後の状況（甲元撮影）	107
4	(1) W区表土除去後の状況（甲元撮影）	107
	(2) E区表土除去後の状況（甲元撮影）	107
5	(1) 表土除去後の S 区・E 区（甲元撮影）	107
	(2) S 区の墳丘を除去した状況（甲元撮影）	107
6	(1) S 区石室の遺存状況（甲元撮影）	109
	(2) S 区石室の状況（甲元撮影）	109
7	(1) 西方よりみた W 区と S 区（甲元撮影）	109
	(2) S 区墳丘除去後の状況（甲元撮影）	109
8	(1) 北方よりみた W 区と N 区（甲元撮影）	109
	(2) 東方よりみた E 区と N 区（甲元撮影）	109
9	(1) N 区東壁断面（甲元撮影）	109
	(2) N 区西壁断面（甲元撮影）	109
10	(1) 一部墳丘除去後の航空写真（石山勲撮影）	109
	(2) 墳丘除去後の N 区の状況（甲元撮影）	109
11	石室の全景 西から（甲元撮影）	111
12	石室の全景 東から（甲元撮影）	111
13	石室の全景 南から（甲元撮影）	111
14	(1) 石室内遺物出土状況（甲元撮影）	117
	(2) 石室内遺物出土状況（甲元撮影）	117
15	(1) 石室内遺物出土状況（甲元撮影）	117
	(2) 石室内遺物出土状況（甲元撮影）	117
16	(1) 石室内耳環出土状況（甲元撮影）	117
	(2) 石室内銅釧出土状況（甲元撮影）	117

17	(1)	石室内鉄器出土状況（甲元撮影）	117
	(2)	石室内鉄器出土状況（甲元撮影）	117
18	(1)	石室内須恵器壺（甲元撮影）	117
	(2)	同上 中に容れられた土玉（甲元撮影）	117
19	(1)	周溝内埴輪片出土状況（甲元撮影）	117
	(2)	周溝内埴輪片出土状況（甲元撮影）	117
20	(1)	周溝内中世墓（甲元撮影）	115
	(2)	周溝内中世墓（甲元撮影）	115
21	(1)	周溝内墳石の状況（甲元撮影）	114
	(2)	周溝内墳石の状況（甲元撮影）	114
22	(1)	N区周溝と断面（甲元撮影）	114
	(2)	E・N区周溝 東から（甲元撮影）	114
23	(1)	W区周溝 南から（甲元撮影）	114
	(2)	W区周溝 北から（甲元撮影）	114
24	(1)	石室全景 南から（甲元撮影）	111
	(2)	石室近景 南から（甲元撮影）	111
25	(1)	石室全景 東から（甲元撮影）	111
	(2)	石室全景 東から（甲元撮影）	111
26	(1)	石室全景 北から（甲元撮影）	111
	(2)	石室近景 北から（甲元撮影）	111
27	(1)	石室内石敷 南から（甲元撮影）	113
	(2)	石敷下管玉・丸玉・小玉出土状況（甲元撮影）	113
28	(1)	石室内仕切石（甲元撮影）	113
	(2)	石室内仕切石（甲元撮影）	113
29	(1)	石室全景 南から（甲元撮影）	113
	(2)	羨道部側石（甲元撮影）	113
30	(1)	石室の側石残存部 外側から（甲元撮影）	113
	(2)	石室の側石残存部 内側から（甲元撮影）	113
31	(1)	側石残存部 外側から（甲元撮影）	113
	(2)	側石残存部 内側から（甲元撮影）	113
32	(1)	石敷撤去後の石室 南から（甲元撮影）	113
	(2)	石敷撤去後の石室 北から（甲元撮影）	113
33	(1)	掘り方と側石（甲元撮影）	114

	(2) 掘り方と側石（甲元撮影）	114
34	(1) 耳環・小玉（甲元撮影）	117
	(2) 小玉・丸玉・管玉（甲元撮影）	117
35	(1) 馬具類（甲元撮影）	130
	(2) 金槌・鉄斧・簀（甲元撮影）	128
36	(1) 鉄鏃（甲元撮影）	126
	(2) 刀子（甲元撮影）	128
37	須恵器・土師器・鉄刀・鉄鉾・銅釧・六花鏡（甲元撮影）	131
38	須恵器（甲元撮影）	131
39	須恵器（甲元撮影）	133
40	(1) 須恵器（甲元撮影）	131
	(2) 中世墓出土青磁（甲元撮影）	139
41	(1) 中世墓出土陶器・短頸壺・青磁皿（甲元撮影）	139
	(2) 中世墓出土青磁皿（甲元撮影）	139
42	埴輪片（甲元撮影）	142
43	(1) 墳丘内出土石器（甲元撮影）	137
	(2) 墳丘内出土石器（甲元撮影）	138

挿 図 目 次

第 1 図	門田 2 号墳付近地形図（日本国有鉄道原図 1：5,000 木下修製図）	折込み
第 2 図	墳丘実測図（伊藤玄三・甲元真之・植山茂・奥野都・大槻真純・谷口俊治・寺田行夫・内藤善史・三宅純子実測，甲元製図）	108
第 3 図	表土除去後の墳丘実測図（甲元・植山・奥野・大槻・谷口・寺田・内藤・三宅実測，甲元製図）	折込み
第 4 図	N区墳丘断面図（甲元・植山・奥野・大槻実測，甲元製図）	110
第 5 図	石室実測図（甲元・植山・奥野・大槻・谷口・寺田・内藤・三宅実測，甲元製図）	112
第 6 図	完掘後の平面実測図（甲元・植山・奥野・大槻・谷口・寺田・内藤・三宅実測，甲元製図）	折込み
第 7 図	石室内石敷下出土玉類実測図（甲元実測，甲元製図）	113
第 8 図	N区周溝断面図（甲元・植山・三宅実測，甲元製図）	114

第 9 図	中世墓遺物出土状態実測図（甲元・植山実測，甲元製図）	115
第 10 図	石室内出土遺物配置図（甲元・植山・奥野・大槻・谷口・寺田・内藤・ 三宅実測，甲元製図）	116
第 11 図	石室内出土小玉・丸玉・管玉実測図（甲元実測，製図）	117
第 12 図	石室内出土耳環・銅釧実測図（甲元実測，製図）	126
第 13 図	石室内出土鉄鏃実測図（甲元実測，製図）	127
第 14 図	石室内出土刀子・鉄斧・箆・金槌実測図（甲元実測，製図）	129
第 15 図	石室内出土馬具類実測図（甲元実測，製図）	130
第 16 図	石室内出土直刀・鉄鉾実測図（甲元実測，製図）	折込み
第 17 図	石室内出土須恵器実測図（甲元実測，製図）	132
第 18 図	石室内出土須恵器実測図（甲元実測，製図）	133
第 19 図	石室内出土土器実測図（甲元実測，製図）	134
第 20 図	周溝内出土土器実測図（甲元実測，製図）	135
第 21 図	墳丘内出土土器実測図（甲元実測，製図）	136
第 22 図	墳丘内出土石器実測図（甲元実測，製図）	137
第 23 図	墳丘内出土石器実測図（甲元実測，製図）	138
第 24 図	中世墓出土土器実測図（甲元実測，製図）	140
第 25 図	中世墓出土釘実測図（甲元実測，製図）	141

目 次

表 1	小玉計測表	118
2	丸玉計測表	125
3	管玉計測表	126

X 門田 2 号墳の調査

1. は じ め に

山陽新幹線博多車輛基地建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査について、福岡県教育委員会から平安博物館に依頼があったのは、昭和48年5月のことであった。車輛基地建設予定地である春日市の上白水から那珂川町一帯は、数多くの遺跡が密集していることで知られており、しかも調査が順次進行するとともに、当初予定していた遺跡数及びその広がりをはるかに凌駕することが知られるようになってきた。一方では昭和49年秋の開通をめざす国鉄の計画があり、他方ではこうした埋蔵文化財の問題が生じたため、福岡県教育委員会は調査の一部を外部に依頼する必要にせまられたのである。平安博物館では、主として平安京関係とりわけ平安宮の調査研究におわれている現状では、発掘調査の依頼を受けることが困難である旨解答したのである。しかし同年7月、県教育委員会文化課課長森英俊氏が上京されて、平安博物館々長角田文衛との話し合いの結果、これまでに3回にわたって調査の依頼を受けたこともあり、平安博物館は発掘の要請を受諾し、48年9月伊藤玄三と甲元の両名を当該遺跡の下見のために福岡県に派遣した。発掘調査の予定地としてあげられたのは、18地点と門田2号墳のいずれかであった。18地点は沖積地縁辺部小川の肩部にあって、現在は畑地として利用されていた。踏査の結果、古墳時代須恵器片や土器小片を多数採集しこれと立地を考えあわせて、この地点は古墳時代の住居跡の可能性が強いことが予想されたのである。門田2号墳はかつて銅鉾が出土したと伝えられる水田をとり囲むように、那珂川町に続く平野につきでた二つの丘陵の南側先端部にあり、畑地その他による開削のためその原形をかなり崩した小古墳である。墳丘の中央部は削平されしかも天井石と思えるものが、石室の中にたおれかかるようにして残されている事が想像されるような遺存の状況であった。試掘調査の結果かなり大きな周溝をめぐらし、福岡県ではめずらしく埴輪を有する横穴式の古墳であることが予想されていた。さらにこの古墳の周辺には甕棺墓や土槨墓それに石蓋土槨墓などで構成される弥生時代の墓地が営まれていて、一部に先土器時代の遺物もみられることが判明したのであった。このため県教委当局はまず古墳の調査をしてほしい旨両名に伝え、平安博物館は下見の結果と県当局の要望をいれ、門田2号墳の発掘調査を受諾した。

発掘調査は昭和48年11月5日から約1ヶ月の予定で行われた。調査団の編成は以下の通りである。

門田 2 号墳

調査団長	平安博物館館長	角 田 文 衛
調査主任	平安博物館考古第三課	伊 藤 玄 三
調査員	同	甲 元 真 之
調査補助員	植 山 茂・奥 野 都	(大阪市立大学)
	大 槻 真 純・寺 田 行 夫	(京都産業大学)
	谷 口 俊 治・三 宅 純 子	(大 谷 大 学)
	内 藤 善 史	(仏 教 大 学)

2. 調 査 の 経 過

発掘調査は11月5日より12月12日までの38日間にわたって行われた。以下作業の区切りごと
にわけて、その経過を記述する。

11月5日～7日 円墳とその周辺の草刈りを行い墳丘の現状をみる。須恵器や甕棺の破片採
集、改葬のための掘りこみが多数あることに気がつく。古墳の南・西・北の三方より、遠景と
近景の写真撮影。草刈り後の墳丘とその周辺の平面実測を行う。

11月8日～16日 墳丘の頂部付近にある盗掘坑（後に近世墓の掘りこみと判明）を中心として
1.8×1.6mの試掘坑を設け石室の方向と確認、堆積土の傾斜状態と石室の奥壁から石室が南に
開くものであることを確め、奥壁の中心上に基点を設けて、それを基準として墳丘全体を4分
割し、それぞれN区・S区・E区・W区と仮称する。台地の中央部に接するN区・E区は周溝
の保存状態が良好と考えられるため任意に幅0.5mの土手を設ける。とりわけ石室の外周に新
しい墓墳が集中し、石室の控え積も検出することができなかった。石室の西側約3.50mはなれ
て石列とも思える切石が3個並んで発見された。当初は古墳の石室をめぐる石とも思われた
が、他の場所ではみられない事や、石列の下はやはり新しい腐蝕土がはまり込んでいたために
レベルの位置を記録化した後、これらは除去して隅丸長方形の墓墳を確認し、灯明皿を検出
した。新しい時期の墓墳によって石室の周囲が壊されたため、天井石二枚と側石が多数石室内
におちこんだ状態で発見された。石室の奥壁と落ちこんだ天井石との間の石のない所では、石
室の床近くまで褐色の攪乱土が認められ、その土中には弥生時代から近世にかけての遺物が発
見されている。

石室の構成上“死んだ”とみなしうる石室内落ち込み石を除去してゆくと、袖にあたる部分
から須恵器の杯・壺・碗・土師質の高杯、それに鉄斧や磁器等、古墳の副葬品と考える遺物類
が検出された。これらの遺物類がおかれた所には石室の石敷はみられず、入口から1.2m離れ
て副葬品がきれた所から石敷がはじまっている。

石室の奥近く、奥壁から約1.6m離れた側石のそばには、一枚の平石が石室を区切るように



第1図 門田2号墳付近地形図 (1/5,000)

立てられていた。この平石の上面は側石の一部の重みをうけており、座部は他の所と比べて大きな床面の上面に立てられている。この屏風状の石の側で金環が2点出土した。

N区では墳丘はわりあい厚く堆積しており、白褐色の粘質土で構成される第一次墳丘の上下では土の堆積状態が異なることが指摘された。

周溝内の掘り込みでは、多数の埴輪片、とりわけ円筒埴輪の小破片が多く出土し、それらに混って少数の土師器の壺や杯片がみられたが、ほとんど復原するのはむずかしいほどである。N区の西側では周溝は立ち消えとなり、石室の掘り方上面からゆるやかに続く線がそのまま発掘区外へと至る。

N区ではN1と仮称した地区(第3図)に現代の改葬墓のあとがあつて、破壊が多いが、東側では殆んどそうしたものはみられなかった。厚さ20cmばかりの表土を除去して再度平板によって墳丘の実測をおこなう(以上第3図)。表土中よりはいぜんとして甕棺や須恵器片が多数出土する。S区ではことにそれが顕著であり、須恵器には宝珠形のつまみがついた杯蓋もみられる。

N区の仮設土手の東側で青銅製の六花鏡(胡州鏡)・鉄釘・カワラケが出土する。この周辺には花崗岩系の砂を主に明らかに他の場所とは異なる組成をした土が分布している。その輪郭を追うと長径2m弱、短径が1.5m前後の楕円形状に広がる中世墓であることがわかる。そして掘り方が一部で把握でき、その内部よりさらに青磁の長胴壺その他が発見された。

S区では甕棺の上半部を切りとられたものと、轡の一部が出土した。甕棺は写真撮影の後埋め戻すことにした。

11月17日～22日 S区及びN区の墳丘の切断と周溝の発掘を行う。S区側では墳丘が至る所近世以降の墓墳のために破壊されていて、プライマリーの状態で残されている所はほんのわずかであった。

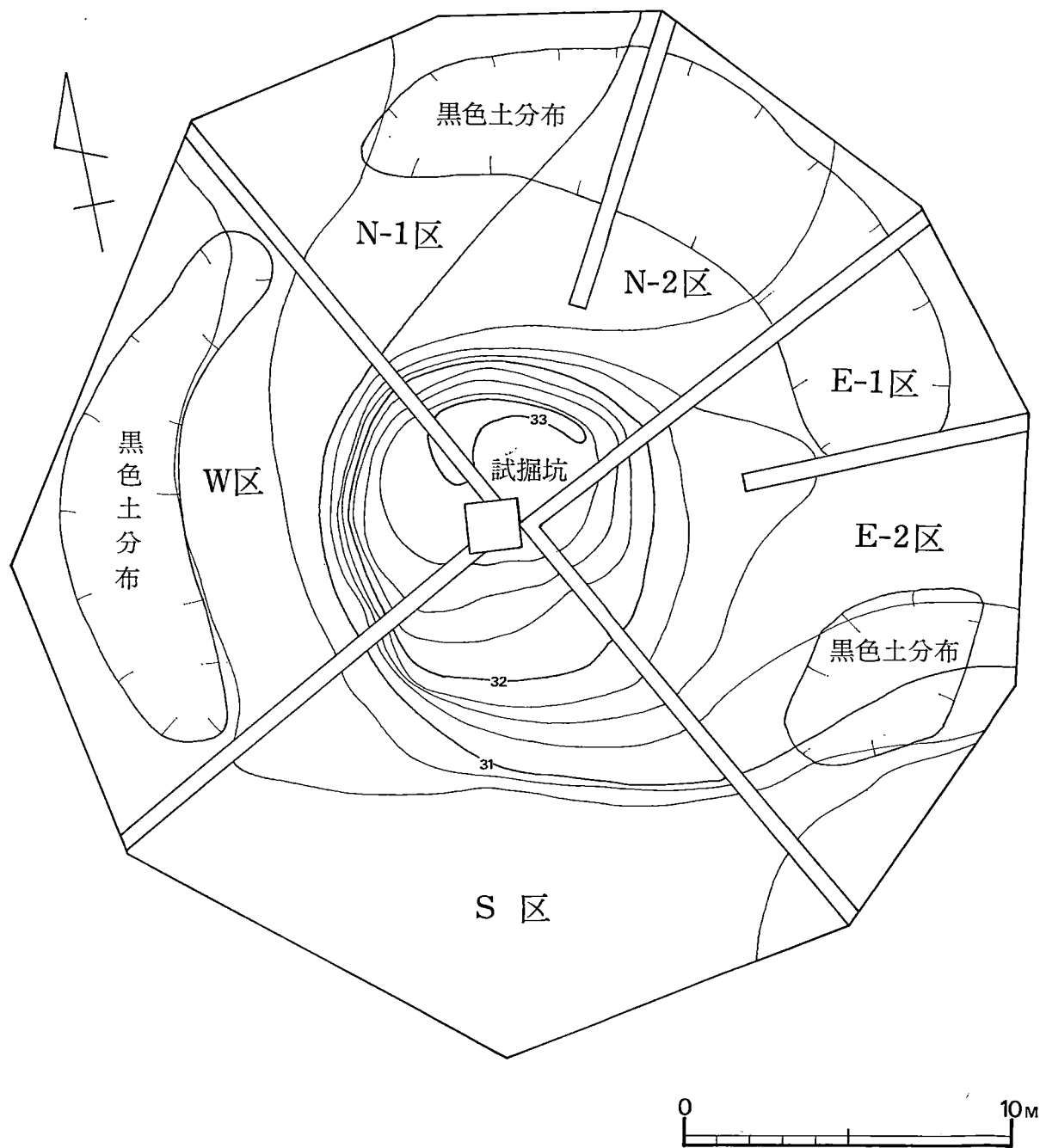
11月23日～30日 E区とW区の墳丘カット及び墳丘断面図の作成にあてた。E区はS区と同様に墳丘自体がけずられて薄く、しかも東側は現代の墓地による墓穴が存在した。E区ではN区周溝の延長線上で埴輪片と土器片をまじえる遺物が集中し検出されたが、周溝の輪郭はさほど明確には把握できない。E区にかかる石室の半分はS区以上に破壊が多く、S区と同様に新しい時期の墓穴のために側石は多く石室内に落ち込んでいる。石室の袖部には須恵器3個が並べてあるのが発見された(図版15-2)。

W区の墳丘は急角度に落ちこんでいるが、第一次墳丘もわずかではあるが確認された。この墳丘の切断によって採集された遺物類には黒曜石製の削器や西新式の高杯脚部等があり、甕棺の破片は相変らず多い。W区では墳丘のカットとともに周溝の発掘も行なった。埴輪片がかなりまとまって出土し中には形象埴輪とも思えるものも出土をみたが、完形にはほど遠いものばかりであった。周溝の外肩は予想以上に西に延びるため、一部発掘区の拡張を行った。

門田2号墳



第2図 墳丘実測図 (1/200)



第 3 図 表土除去後の墳丘実測図 (1/200)

12月1日～6日 この期間は石室内の清掃と石室外部の掘り下げ、断面図の補正にあてた。S区では地山面での清掃途中に甕棺墓の掘り方や、大半を削平された甕棺の残骸が発見されたので、これにビニールを被せて土でおおう。E区のN区よりの地点で周溝が終ることがわかる。石室の長軸とは直角の方向にいわばブリッジのように通路ができていたのである。この周溝の終る地点で、墳石の一部と思われる河原石が多数あり、また埴輪片も多数発見された。周溝と石室のちょうど中間あたりに、周溝と同様の曲率でまがる小溝があるのが判明した。そこをうめる土は、墳丘を造成する時と同じブロック状のそれで、墳丘作成時には埋められたものである。但しこの小溝中よりは遺物の出土はみなかったが、外の周溝が終るE区で同様に小溝もとぎれることから、外側の周溝を意識してつくられたものと考えられ、内周溝と仮称してW区、F区南側でその続きを追求。石室の内部の清掃は石敷を出す程度までおこない、順次南側から始めた。玄室の入口から約2mまでの間には石敷はみられず、石敷がはじまる地点から、左右の側石下に鉄器類が多数出土しはじめる。石敷は奥壁に向ってやや傾斜をみせ、ことに屏風石のある所から奥は一段と低くなり、石も小さくなるのが観察された。このあたりからは、遺物類の出土も多くなる。奥壁よりの左右側石近くでガラス小玉が多数まとまって出土し、直刀、鉾や銅釧も発見された。石室内の土をフルイにかける仕事も同時に進めていたが、この期間40個の小玉がそれによって検出された。

12月7日～12日 石室の全景写真を角度をかえて撮影、発掘区全体にわたる遺構図を作成、石室の平面図、断面見透図等をつくる。一部の調査員はプレハブにて出土遺物の荷造りをはじめめる。11日には石室内の石敷をはずし、鉄製品が少々発見さる。石室の奥よりでは石敷間におちこんだガラス小玉も少々みられた。屏風石の下では、あきらかに石敷の下から管玉や丸玉・ガラス小玉が多数出土、なかでも管玉と丸玉は交互に紐を通して埋められた状態で出土する（図版27—2、第7図）。写真撮影、実測図作成の後とりあげる。石敷を除去した後排水溝の検出に務める必要もないことが判明、石敷を除去した後、断面図の補正を行なう。

以上のように一通り調査が終了したあと奥壁をのこしてすべての石を撤去、側石下で石の据え方を観察、ただ単に土で石を固定させたものであることを知る。

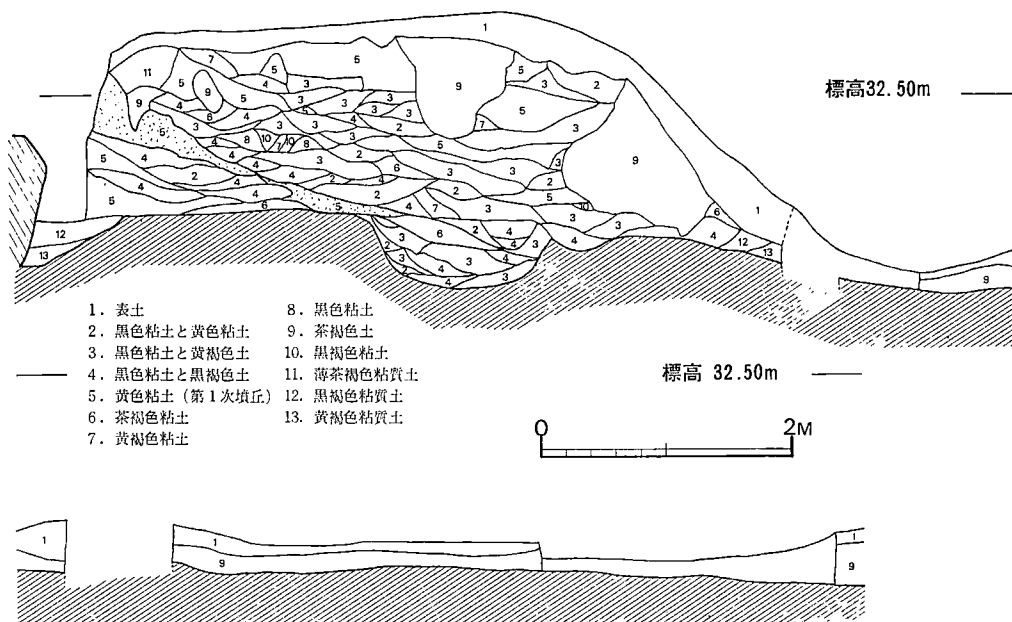
発掘終了後再度全景の写真撮影をおこない発掘のすべてを完了した。

3. 墳 丘

先述したように門田2号墳は丘陵の突端部にあり、その遠影は丘陵部を墳丘の一部と見わしめるようなありかたをなしている。とりわけ那珂川町の平坦部から眺む墳丘はかなりの壮大さを感じさせるのである（図版1・2）。墳丘は開削等によってかなり壊されており、墳丘の北側と西側の部分は急角度に傾斜している。東及び南側では、ゆるやかに墳丘が斜き、盛土をさ

門田2号墳

ほど感じさせないほどである（第2図）。墳丘の頂部は海拔33mの等高線でみられるように平に削平されており、最も落差のある墳丘の西側でも裾周りとの差は2mを測るにすぎない。墳頂の平坦部には天井石と思えるものの一部が顔を出し、また部分的に盗掘をうけたと思われる坑らしきものもみられた。墳丘の東側には墳丘に接して一本の等高線が方形状にはしるが、



第4図 N区墳丘断面図 (1/60)

これは本来的なありかたではなく、後に墓地として利用された折りに基壇状の盛土がなされたためであることがわかった。このように墳丘はかなりいたんではいるが、表土を除去した後の等高線の走りぐあいを見ると（第3図）、一部のみ極端に削り込まれていると考えがたく、直径12mばかりの小円墳として現況では把握される。墳丘のS区及びE区では、削平と近世以降の墓壇の掘りこみによって墳丘は殆んどこわされており、明確に墳丘構築の方法をとらえることができたのはN区とW区でのありかたからであった。N区とW区の間の断面でそれをみよう（第4図）。墳丘の構築は黄色粘土で構成される第一次墳丘の前後で異なる。石室の奥壁外側から約3m離れた場所からはじまる黄色粘土層は、石室に近づくとともに高く厚くなってゆく。この層はN区東壁の断面でみると（図版9）石室を覆うように分布していることがわかり、下関市岩谷古墳でみられたように、まず石室を覆うだけの形に墳丘をこしらえていることが知られる。この第一次墳丘の下は、黄色粘土層と黒色土及び黒褐色粘土層の互層となっており、それらは版築状にかたくたたきしめられている。この第一次墳丘下の土層は石室の背後に

まで延び、持ち送り状に構築された小口積石のような控え積みの役割りもかねている。

他方第一次墳丘より上部は、黒色粘土＋黒褐色粘土、黒色粘土＋黄褐色粘土、黒色粘土＋黄色粘土という組み合わせのかたまりが小単位に積みかさねられている（図版9）。そしてその際第一次墳丘近くの傾斜地には、黒色土とその他組み合わせる土が横向きに置かれ、第一次墳丘より離れた所では、必ず黒色土が下位にあるありかたをしめす。これらの層は決して堅くたたかれた痕跡はみあたらない。黒色土は墳丘構築時の表土で、黄色ないし褐色土は地山と考えられるから、墳丘をつくる折りに他の場所から持ち込んだ土の単位のままに築みあげられた状態にあることが知られるのである。こうした層中には、多く黒曜石の石器や弥生時代の土器片が含まれており、遺跡を一部こわして古墳がつくられたことを示している。第一次の墳丘はS区とW区の境からN区・E区の中ばまで確認されたが、S区とE区の一部では、後世の掘り込みが激しく確認することはできなかった。また第一次墳丘の上には他の古墳で多くみられる須恵器の大甕等もプライマリーな状態ではみることはできず、第一次墳丘上に特別におかれた状態で遺物が発見されることもなかった。

4. 石 室

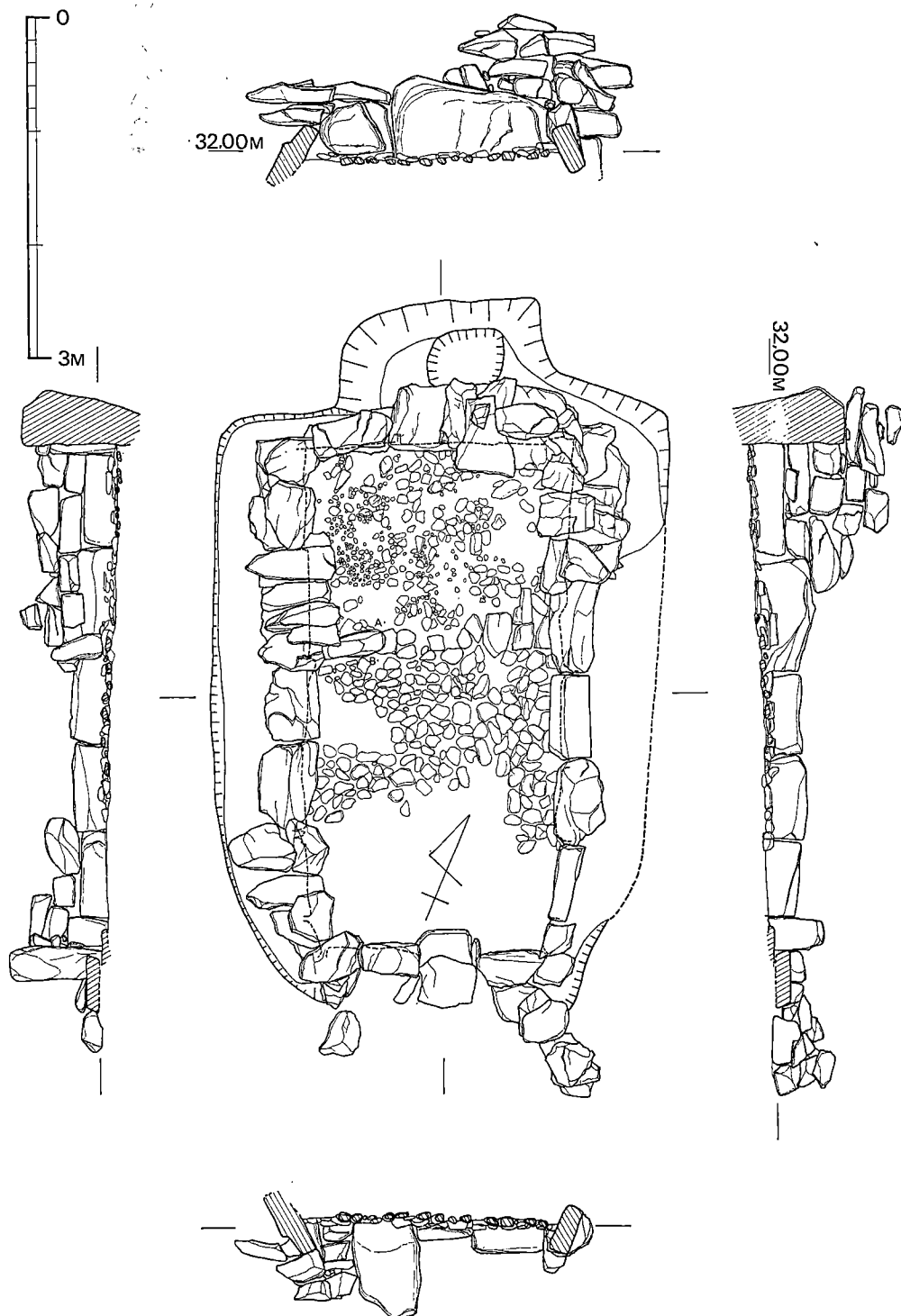
門田2号墳は、ほぼ南に開口した単室両袖形の横穴式のものである。石室は旧表土と若干の地山を掘り込んでつくられた墓壇内に築かれ、玄室及び羨道よりなる。石室の上部大半は既に破壊されていた。石室を構成する石材はいずれも花崗岩である。以下各部について記述を進めて行く（図版24～32、第5図）。

(1) 石 室

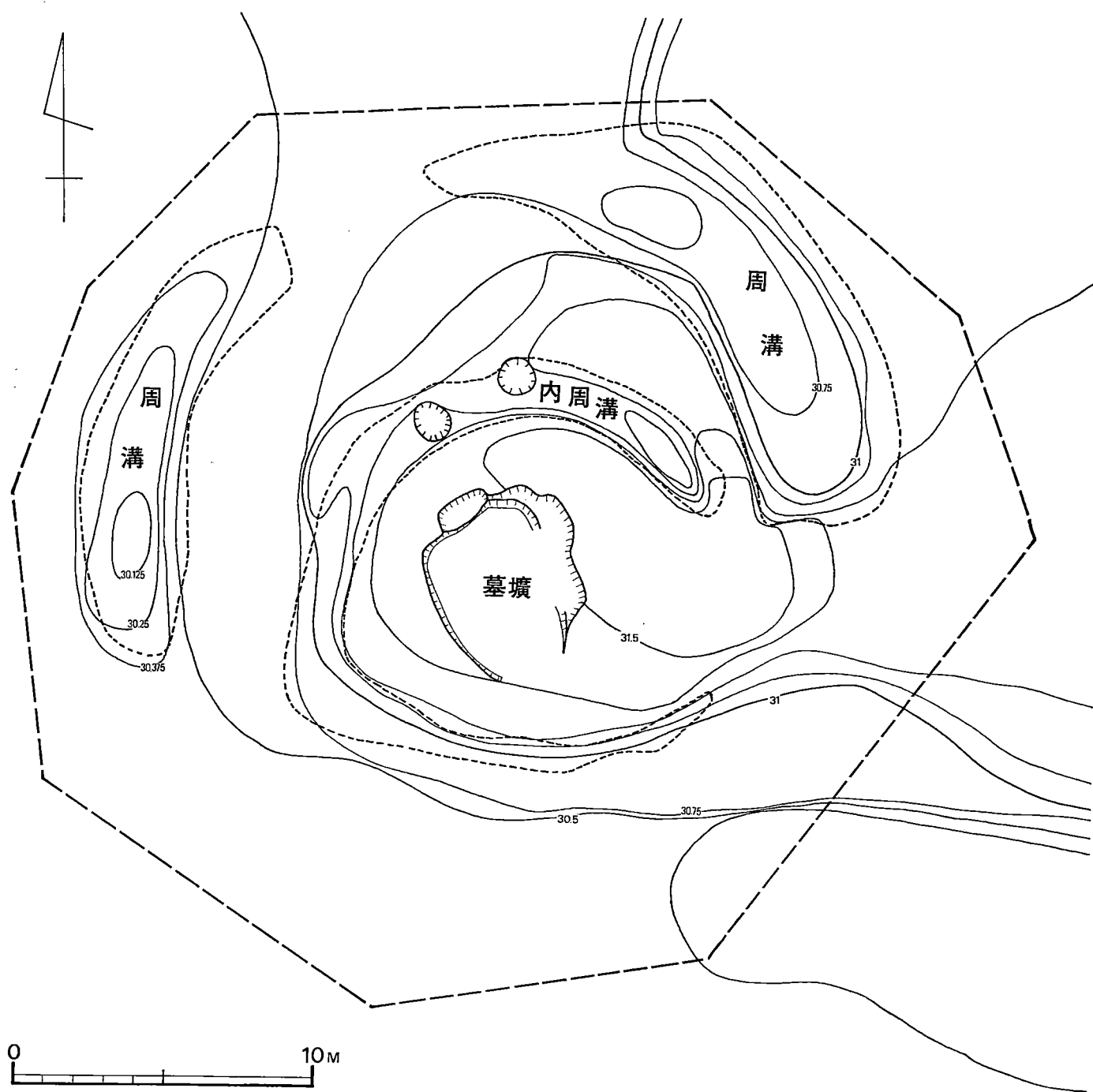
石室の平面は台形状の矩形をなし、内法は最大長4.40m、最大幅は奥壁近くで2.36m、最小幅は玄室入口付近で2mを測る。奥壁の基部は二枚の石で構成されており、うち東側と高さを同じくするために平石が置かれている。石室の基部はいずれも一枚の石を縦長に配したものでこの上にはすでに小口積をした石をみることができる。但し玄室入口の西の石は門を意識するように一つだけ立ちあがっている。石室の基部から上は、すでに小口積で多少持ち送り状に積みあげられているが、大半は破壊されているために詳細は不明である。石室の外囲には石室が持ち送り状に構築されるための控え積みはほとんどみられない。

玄室の床面には小円礫が敷かれている。玄室入口から1.20m内外の所までしかこうした円礫はみとめることができない。また入口から2.60mのところでは他とは異なって40cm前後の平石が一行におかれていて、ここを境として入口側では比較的大きなものが、奥壁よりでは小さな礫が敷かれている。しかもその前後では石敷の上面に落差を認めることができる。玄室を

門田 2 号墳

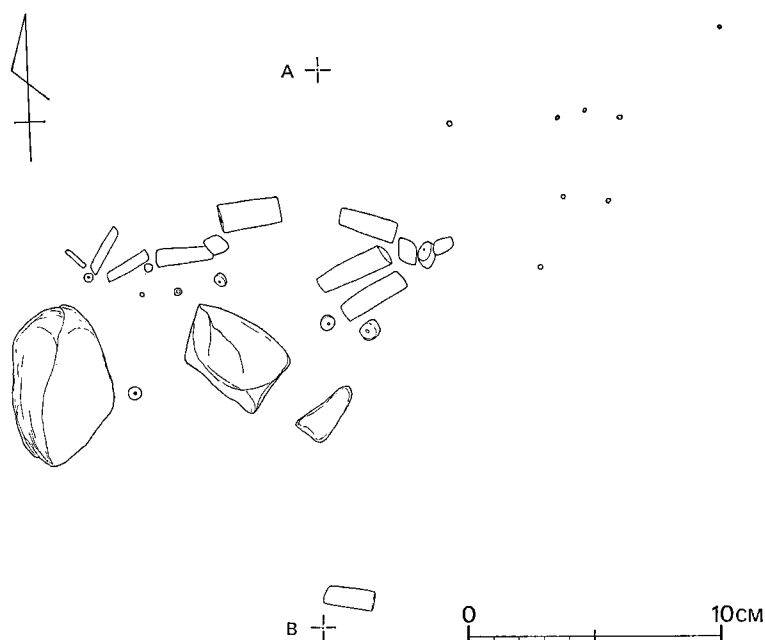


第 5 図 石室実測図 (1/60)



第 6 図 完掘後の平面実測図 (1/200)

二分するこの平石の西端には、平石に載りしかも持ち送り状に内側に出た側石の一部を受けとめるような形で一枚の平石が立てられている（図版28）。これとみあうような東側の位置には石はみいだせなかった。但し本来的に無かったか否かは確認できない。このことを併せて考えて、観念的にしろ玄室の区切りの意味をもつものと想像された。



第7図 石室内石敷下出土玉類実測図 (1/3)

この石敷の下は明らかに石を敷く以前の時期に属する管玉・丸玉・ガラス小玉が出土した（図版27—2，第7図）。ガラス小玉は石敷間より落ち込んだものと解しうるか、管玉はちょうど紐に通されたままで置かれたように、一つおきにつらなって出土している。

玄室内の他の場所ではこうした石敷下に遺物の出土することは認められなかった。石室を構築後、石敷をなす以前の祭りのあととも思える。石敷を排除した下には排水溝と思われる施設は何処にもみられなかった。但し玄室の前面と奥では19cmの傾きがあり、水は必然的に奥壁下に導かれるようになっている。玄室の入口は二枚の平石が階段状におかれ、羨道部上面との差は20cmを側る。玄室内では棺の存在を推定させるものは発見できなかった。木棺が置かれていたものであろうか。

(2) 羨道

羨道部は、46cm×44cmの平石を介して、玄室と通じているが、この平石に接近して新しい時期の墓壙があり、床面の様子はつかむことが出来なかった。羨道部西側にわずかに残された8個の側石では（図版29—2），胴張り状に開くものと推測される。塊状石を不規則に積みあげて、その底部は、当時の表土面と思える層に載せられており、羨道をめぐる掘り方はみられな

門田2号墳

い。羨道部西側の側石は1個残るのみであった。

(3) 墓 壙

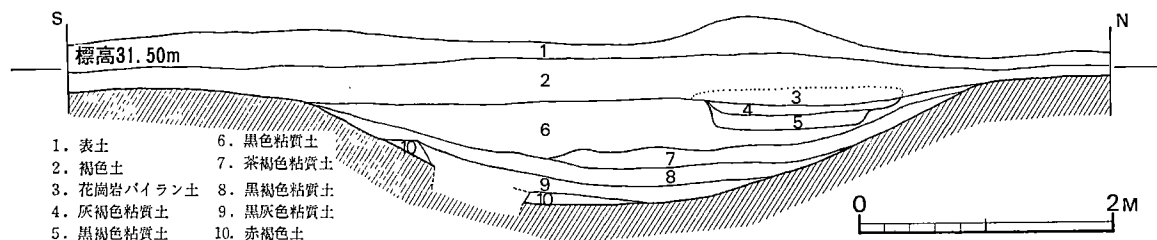
石室の基底部側石の外側には約45cm離れて、深さ20～25cmの浅い墓壙の掘り方がめぐらされている（図版33）。羨道部と玄室部の接点部では掘り方は「コ」の字形に拡張されており、一段と深くなる。石室の東側では浅く皿状に地山を掘り込んだ後に、再度これを埋めて、石室西側に通ずる掘り方をこしらえている。石室東側の掘り方大半は、近世以降の墓によって切断されその輪郭は把握することはできなかった。墓壙を埋める土は、上部では黒褐色土であるが側石の近くや、掘り方底部では黄褐色の粘質土で固められていた。側石と墓壙の間を埋めるものはこのようにすべて土で、石などは用いられていない。

5. 周 溝

古墳をめぐる周溝は石室の西側と北側で検出された。石室の東側、周溝がとぎれた南側では一部に黒色土が分布して周溝の存在を認めることができたが、浅い底のみ残存して図化することには至らなかった。

W区の周溝は長さ15m、幅は3.50mあるが浅い皿状のくぼみをなしている。周溝中に埋まる土は黒褐色土で埴輪の破片を多く混じえていた。N区とE区の一部では周溝は割合に良く保存されており、深い所では現在の表土から1.23mを測る。周溝中の堆積土は下部から順次黒灰色粘質土・黒褐色粘質土・黄褐色粘質土・黒色粘質土と変化し、浅くなるにつけて最下層から順次みられなくなる。この周溝はE区の北よりの所ではあきらかになくなる。この周溝が終るあたりには墓穴の小石が多数並んだ状態にあり、埴輪片も多数かたまっていた（図版21）。ところがこれはすべて周溝の下底から3～5cmの間層をはさんであり、周溝の縁に小石を並べたとみるよりも、古墳の封石が周溝に落ち込んだ状態であるとみられる。

幅は4mのブリッジをはさんでE区南側に周溝の底跡と思われる黒色土が分布し、一部に土



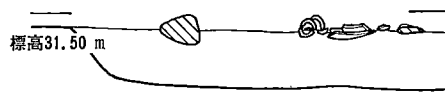
第8図 N区周溝断面図 (1/60)

師器壺を含む遺物類がまとまって出土したが、浅くその溝部は把みえなかった。S区では全体の地形が低すぎて周溝は検出できない。同様にN区とW区の境界近くで周溝がとぎれるのも、後世掘り込みのために消失したものと思われる。周溝の底部が海拔30.10mであるのに対し、N区では30.50m前後と差があり、一つは丘陵の傾斜によって掘り込みの深さが異なることが考えられ、また周溝の底部は場所によってはかなりの高低差があることを示している。

周溝はE区において幅4mのブリッジを形成するがそれ以外の場所では連って古墳をめぐるのが本来的であったと想像される。現状での周溝の外肩間の最大距離は27.50mである。

周溝と石室のちょうど中間には、幅2m以下、深さ25cm以下の小溝が周溝と同様に石室をめぐるのが検出された。しかも周溝がとぎれる所ではこの内周溝もなくなっている。石室の奥壁の外側には2個のピットが付設されているほかは何の施設と思えるものはみられず、遺物を発見できなかった。

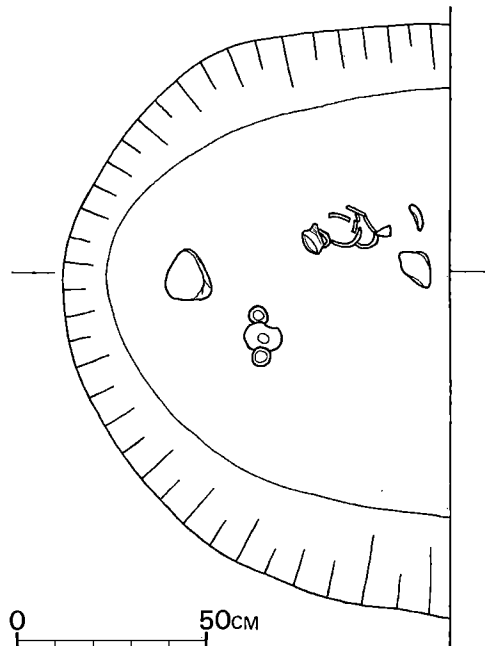
この内周溝は断面図(第8図)でみるようにあきらかに墳丘築造時にうめている。これが何を意味するものか手がかりは得られなかった。



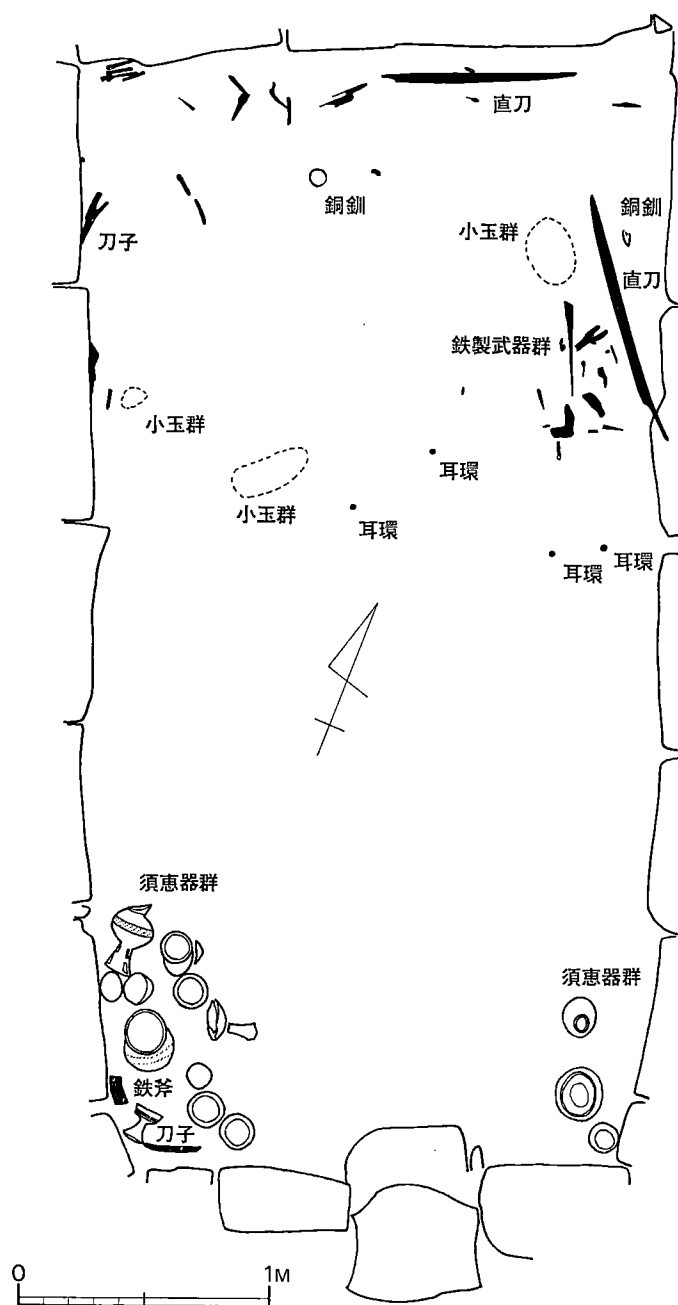
6. 中世墓

N区を二区に細分した折の土手にまたがり発見された。幅は約1.50mで長軸は土手にはさまれて確認できなかったが、ゆるやかにおち込む墓の掘り方であることが知られる。掘り込みの確認できる層の上面には厚さ10cmほどの範囲に花崗岩製の砂がばらまかれている。青銅製の六花鏡や短頸壺の磁器は土墳の比較的上面から、磁器の碗と杯、それに土師質の杯は底部から検出されている。この土墳中には鉄釘が14本出土しており、木棺がくちたものと想像されるが詳細は不明である(図版20, 第9図)。

(甲元真之)



第9図 中世墓遺物出土状態実測図(1/20)



第10図 石室内出土遺物配置図 (1/30)

7. 遺 物

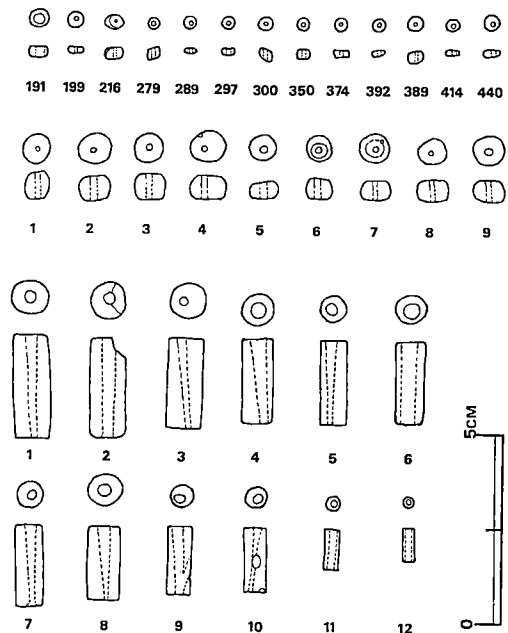
(1) 遺物の出土状況

今回の調査で採集した遺物は、その発見の場所によって分けて説明を加える。石室内出土遺物、墳丘中出土遺物、周溝内出土遺物は墳丘の攪乱によって本来墳丘に祭られていたものが原位置をうごいて、他のものと混じる例もないとは言えないが、一応この古墳とは関係ないものとして取り扱う。門田2号墳と直接関係のある遺物は石室内と周溝中より発見された類である。石室内より発見された遺物類は、まとまりをもって配置されていた（第10図）。すなわち、石室入口の両袖の部分には、須恵器や土師器の器物がおかれ、それに左袖口には鉄斧・刀子、砥石がみられる。一方鉄製の武器は屏風石があり、しかも石敷のレベルが一段と低くなった場所に集中し奥壁近くをコ字形にめぐらすようにある。うち直刀は側面に立てかけられた状態のものがたおれた姿をしている。装身具類は、鉄製武器の内側におかれている。

(2) 石室内出土遺物

小 玉（図版27—2・34，第11図）

個体数を数えることのできるものが470個出土している。破損がひどいものを加えると500個近くに達すると思われる。最大のものは直径4.5mm、厚さ4mm未満、最小のものは直径1.75mm、厚さ1mmのものである。いずれも小さな孔があるが、その大きさも一定せず、また形も斜に切りおとされていてびつな形をしたものもある。色彩はうす緑・うす紫・紺・黄緑色などもあるが、最も多いのは青色である。大部分がガラス製であるが、中に6点ほど滑石製のものがまじる（表1）。



第11図 石室内出土小玉・丸玉・管玉実測図（1/2）

門田2号墳

表 1 小 玉 計 測 表

(単位 mm)

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
1	3.40	2.60	0.95	ガラス	紺 色	
2	2.35	2.60	0.50	〃	〃	
3	3.90	2.40	1.00	〃	〃	
4	3.60	2.85	1.35	〃	青 色	
5	4.50	2.60	1.05	〃	〃	
6	3.20	2.85	0.95	〃	〃	
7	3.85	2.15	1.15	〃	〃	
8	3.95	2.35	0.85	〃	〃	
9	3.50	2.00	1.00	〃	〃	
10	4.15	3.20	1.20	〃	〃	
11	3.80	2.95	1.20	〃	〃	
12	3.35	2.20	1.10	〃	〃	
13	3.60	2.95	1.00	〃	〃	
14	3.35	1.90	0.90	〃	〃	
15	3.85	2.45	0.95	〃	〃	
16	3.40	2.80	0.75	〃	〃	
17	4.55	2.60	1.55	〃	〃	
18	4.40	2.35	1.15	〃	〃	
19	4.20	2.05	1.40	〃	〃	
20	3.55	1.05	1.10	〃	〃	
21	4.60	3.85	1.15	〃	〃	
22	3.50	2.60	0.95	〃	〃	
23	3.75	2.35	1.10	〃	〃	
24	3.70	1.95	1.00	〃	〃	
25	3.70	2.60	0.85	〃	〃	
26	4.35	2.00	1.25	〃	〃	
27	3.60	1.90	1.00	〃	〃	
28	2.50	2.00	0.65	〃	〃	
29	3.70	2.65	0.95	〃	〃	
30	3.55	2.00	0.80	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
31	3.50	3.20	1.20	ガラス	青 色	
32	4.10	2.25	1.20	〃	〃	
33	3.00	2.00	1.00	〃	〃	
34	3.35	2.10	0.50	〃	〃	
35	3.95	2.20	0.85	〃	〃	
36	3.90	3.80	1.00	〃	〃	
37	2.20	0.80	0.95	〃	〃	
38	3.10	1.90	0.75	〃	〃	
39	3.70	2.20	1.30	〃	〃	
40	3.90	1.95	0.95	〃	〃	
41	3.45	1.85	0.80	〃	〃	
42	3.85	1.90	1.00	〃	〃	
43	4.05	1.95	1.65	〃	〃	
44	3.00	1.25	0.85	〃	〃	
45	3.70	2.00	0.90	〃	〃	
46	4.20	2.00	1.60	〃	〃	
47	3.90	2.20	1.00	〃	〃	
48	3.35	2.35	0.90	〃	〃	
49	2.65	2.65	0.65	〃	〃	
50	3.40	2.30	0.80	〃	〃	
51	2.65	2.35	0.80	〃	〃	
52	3.00	2.65	0.80	〃	〃	
53	4.35	1.90	1.30	〃	〃	
54	3.60	2.20	0.90	〃	〃	
55	4.20	2.40	1.15	〃	〃	
56	3.80	1.95	1.20	〃	〃	
57	2.95	1.60	0.85	〃	〃	
58	2.65	0.85	0.85	〃	〃	
59	3.40	1.50	0.95	〃	〃	
60	3.75	2.10	0.80	〃	〃	

門田 2 号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
61	3.00	3.00	0.80	ガラス	青 色	
62	2.60	1.50	0.75	〃	〃	
63	3.10	2.15	0.70	〃	〃	
64	2.65	1.90	0.95	〃	〃	
65	3.15	1.55	1.10	〃	〃	
66	3.00	1.60	0.90	〃	〃	
67	2.95	2.00	0.55	〃	〃	
68	3.10	2.65	1.10	〃	〃	
69	2.90	1.70	0.70	〃	〃	
70	2.90	1.95	0.65	〃	〃	
71	3.55	2.50	0.95	〃	〃	
72	3.70	1.75	1.30	〃	〃	
73	3.15	2.15	1.05	〃	〃	
74	2.50	1.95	0.85	〃	〃	
75	2.90	1.10	0.95	〃	〃	
76	3.05	1.75	1.25	〃	〃	
77	2.45	0.90	0.55	〃	〃	
78	3.10	1.50	0.90	〃	〃	
79	2.95	1.60	0.90	〃	〃	
80	3.65	2.60	0.90	〃	〃	
81	2.75	2.40	0.75	〃	〃	
82	2.65	1.60	0.75	〃	〃	
83	3.70	1.85	1.10	〃	〃	
84	3.60	1.60	1.05	〃	〃	
85	2.55	1.00	0.75	〃	〃	
86	2.80	1.90	1.00	〃	〃	
87	2.40	1.10	1.20	〃	〃	
88	2.20	1.35	0.70	〃	〃	
89	3.80	1.80	0.95	〃	〃	
90	3.20	2.25	1.00	〃	〃	
91	2.50	2.35	0.95	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
92	2.95	2.30	0.90	ガラス	青 色	
93	2.65	2.85	0.75	〃	〃	
94	3.80	2.00	1.10	〃	〃	
95	3.25	1.75	0.80	〃	〃	
96	3.40	1.60	1.25	〃	〃	
97	2.60	1.20	1.10	〃	〃	
98	3.00	1.50	0.75	〃	〃	
99	3.10	1.50	0.85	〃	〃	
100	3.00	2.10	0.90	〃	〃	
101	2.80	2.30	0.80	〃	〃	
102	2.50	2.10	0.65	〃	〃	
103	3.80	1.95	1.00	〃	〃	
104	3.00	2.15	0.90	〃	〃	
105	3.50	2.00	1.00	〃	〃	
106	2.95	2.00	0.85	〃	〃	
107	3.60	1.75	1.15	〃	〃	
108	2.95	1.80	0.85	〃	〃	
109	3.20	1.95	0.95	〃	〃	
110	2.85	0.90	1.15	〃	〃	
111	3.00	1.75	0.90	〃	〃	
112	3.40	2.20	1.05	〃	〃	
113	3.25	1.75	0.90	〃	〃	
114	3.20	1.50	1.00	〃	〃	
115	2.90	2.35	0.80	〃	〃	
116	2.90	2.55	0.90	〃	〃	
117	3.00	1.35	1.00	〃	〃	
118	2.80	1.60	0.80	〃	〃	
119	2.25	0.90	0.60	〃	〃	
120	3.50	1.85	1.00	〃	〃	
121	2.15	0.85	0.65	〃	〃	
122	2.25	0.75	0.60	〃	〃	

門田 2 号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
123	3.00	2.25	0.90	ガラス	青	
124	1.85	1.50	0.45	〃	〃	
125	2.20	1.40	0.50	〃	〃	
126	2.95	1.40	0.45	〃	〃	
127	3.60	1.85	0.85	〃	〃	
128	2.45	1.80	0.70	〃	〃	
129	2.85	1.45	0.85	〃	〃	
130	2.00	1.30	0.40	〃	〃	
131	2.85	1.50	0.90	〃	〃	
132	3.50	2.25	0.95	〃	〃	
133	2.60	1.65	0.60	〃	〃	
134	3.10	1.35	0.80	〃	〃	
135	2.55	1.40	0.65	〃	〃	
136	3.60	1.50	0.85	〃	〃	
137	3.15	1.70	0.90	〃	〃	
138	5.55	4.45	1.20	〃	〃	
139	3.50	1.50	1.00	〃	うすむらさき	
140	3.30	2.80	0.75	〃	赤 茶	
141	3.60	2.00	1.20	〃	〃	
142	3.20	1.20	0.75	〃	〃	
143	3.60	2.00	1.55	〃	〃	
144	2.80	1.70	1.20	〃	〃	一部割れ
145	2.95	2.00	0.80	〃	〃	
146	3.10	1.80	0.95	〃	黄	
147	3.55	2.30	0.75	〃	〃	
148	3.60	1.80	1.00	〃	黄 緑	
149	3.50	2.20	1.10	〃	〃	
150	3.70	2.35	1.05	〃	〃	
151	3.50	1.85	1.00	〃	〃	
152	3.70	1.80	1.00	〃	〃	
153	3.00	1.70	0.85	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
154	3.95	3.50	1.00	ガラス	黄 緑	
155	3.35	1.25	1.30	〃	〃	
156	3.15	1.50	0.75	〃	〃	
157	3.65	2.70	0.75	〃	〃	
158	3.10	2.20	0.95	〃	〃	
159	3.40	2.15	1.25	〃	緑	
160	3.65	1.50	1.40	〃	〃	
161	3.15	2.90	0.90	〃	〃	
162	3.10	1.70	0.90	〃	〃	
163	2.85	1.45	0.95	〃	〃	
164	3.85	2.60	1.45	〃	〃	
165	2.90	1.90	0.90	〃	〃	
166	3.10	1.60	0.80	〃	〃	
167	4.20	2.00	1.30	〃	〃	
168	2.90	1.80	0.95	〃	〃	
169	3.30	2.00	0.85	〃	〃	
170	2.90	1.90	0.80	〃	〃	
171	3.10	1.75	1.25	〃	〃	
172	2.75	1.95	0.90	〃	〃	
173	3.60	2.75	1.50	〃	〃	透 明
174	4.15	3.60	1.20	〃	〃	
175	2.65	1.70	0.80	〃	〃	
176	3.80	1.80	1.35	〃	〃	
177	2.55	1.40	0.55	〃	〃	
178	3.95	2.55	1.00	〃	〃	
179	3.70	2.65	1.45	〃	〃	
180	3.50	2.20	1.20	〃	〃	
181	3.05	2.10	0.90	〃	〃	透 明
182	3.10	2.00	1.20	〃	〃	透 明
183	2.75	1.70	0.85	〃	〃	
184	2.40	1.75	0.75	〃	〃	

門田 2 号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
185	3.25	2.00	0.85	ガラス	緑	透 明
186	3.10	2.00	0.55	〃	〃	
187	2.95	1.75	1.10	〃	〃	透 明
188	3.11	1.55	1.10	〃	〃	
189	4.95	7.80	1.95	滑石	灰 色	
190	4.95	3.30	2.20	〃	〃	
191	4.95	2.85	2.20	〃	〃	
192	5.00	3.50	2.00	〃	〃	
193	5.10	2.90	2.20	〃	〃	
194	5.00	3.60	2.20	〃	〃	
195	3.15	2.80	1.15	ガラス	青	透 明
196	3.95	2.80	1.05	〃	緑	
197	4.65	2.70	0.95	〃	青	透 明
198	4.70	2.80	1.35	〃	〃	〃
199	4.30	2.20	1.40	〃	〃	〃
200	4.00	2.35	1.55	〃	〃	〃
201	3.30	2.80	0.95	〃	〃	〃
202	3.55	2.75	1.35	〃	〃	〃
203	4.20	2.30	1.20	〃	〃	〃
204	4.35	1.80	1.60	〃	〃	〃
205	4.20	1.95	1.60	〃	〃	〃
206	3.15	2.70	0.95	〃	〃	〃
207	4.50	2.35	1.20	〃	〃	透 明
208	4.00	2.60	1.15	〃	〃	
209	3.50	2.20	1.15	〃	〃	透 明
210	4.40	2.05	1.45	〃	〃	〃
211	4.55	1.95	1.60	〃	〃	〃
212	3.20	1.30	0.85	〃	〃	〃
213	3.10	1.45	0.90	〃	〃	〃
214	4.00	1.95	1.35	〃	〃	〃
215	3.45	1.80	0.80	〃	〃	〃

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
216	4.35	3.20	1.20	ガラス	青	透 明
217	3.20	2.15	1.10	〃	〃	〃
218	3.20	1.95	1.00	〃	〃	〃
219	3.65	2.05	0.80	〃	〃	〃
220	3.05	2.15	0.70	〃	〃	〃
221	2.90	1.80	0.85	〃	〃	〃
222	3.30	1.25	1.00	〃	〃	〃
223	3.35	1.85	1.00	〃	〃	〃
224	2.80	1.20	0.60	〃	〃	〃
225	2.80	1.60	0.90	〃	〃	〃
226	2.75	1.85	0.90	〃	〃	〃
227	3.85	2.25	1.20	〃	〃	〃
228	2.80	1.35	1.10	〃	〃	〃
229	3.15	1.85	1.20	〃	〃	〃
230	3.20	1.55	1.00	〃	〃	〃
231	3.50	2.00	1.15	〃	〃	〃
232	3.65	1.60	1.00	〃	〃	〃
233	3.65	2.20	1.00	〃	〃	〃
234	2.75	1.80	0.85	〃	〃	〃
235	3.85	2.55	1.10	〃	〃	〃
236	3.35	2.40	1.10	〃	〃	〃
237	2.95	1.10	0.95	〃	〃	〃
238	2.90	1.70	0.65	〃	〃	〃
239	2.90	1.50	0.90	〃	〃	〃
240	3.00	1.80	1.20	〃	〃	〃
241	3.25	1.55	0.75	〃	〃	〃
242	3.40	1.80	0.95	〃	〃	〃
243	2.95	2.40	0.60	〃	〃	〃
244	3.70	1.90	0.95	〃	〃	〃
245	3.60	2.20	0.80	〃	〃	〃
246	3.00	1.55	0.90	〃	〃	〃

門田 2 号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
247	2.60	4.30	0.70	ガラス	青	透 明
248	3.85	2.35	1.15	〃	〃	〃
249	3.25	2.25	0.90	〃	〃	〃
250	3.15	2.55	0.95	〃	〃	〃
251	2.95	2.55	0.75	〃	〃	〃
252	3.15	2.95	1.25	〃	〃	〃
253	3.70	1.80	0.90	〃	〃	〃
254	2.80	1.20	0.80	〃	〃	〃
255	3.45	2.35	0.80	〃	〃	〃
256	2.50	1.00	0.45	〃	〃	〃
257	3.00	1.90	0.95	〃	〃	〃
258	3.15	1.75	0.95	〃	〃	〃
259	3.50	2.90	1.20	〃	〃	〃
260	3.15	2.00	1.15	〃	〃	〃
261	3.20	—	0.95	〃	〃	〃
262	3.50	1.90	1.20	〃	〃	半透明
263	3.00	1.70	0.80	〃	〃	〃
264	3.20	2.25	0.95	〃	〃	〃
265	3.25	2.15	0.80	〃	〃	〃
266	2.80	1.35	1.10	〃	〃	〃
267	2.95	1.40	0.95	〃	〃	〃
268	2.80	1.45	0.90	〃	青	透 明
269	4.00	3.00	1.20	〃	黄 緑	
270	3.80	2.80	1.10	〃	〃	
271	3.40	1.40	1.20	〃	〃	
272	3.30	1.80	0.90	〃	〃	
273	3.70	2.40	0.90	〃	〃	
274	2.70	2.15	0.90	〃	〃	
275	3.40	1.80	1.10	〃	〃	
276	3.15	1.95	1.00	〃	〃	
277	3.00	2.30	1.00	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
278	3.10	1.90	0.95	ガラス	黄 緑	
279	3.20	3.00	1.05	〃	〃	
280	3.00	2.20	0.95	〃	〃	
281	2.90	2.15	0.75	〃	〃	
282	3.15	1.80	0.80	〃	〃	
283	3.00	1.50	0.75	〃	〃	
284	2.80	2.30	0.75	〃	〃	
285	2.85	1.80	0.55	〃	〃	
286	2.75	2.50	0.55	〃	〃	
287	2.95	1.30	0.95	〃	〃	
288	2.80	1.45	1.05	〃	〃	
289	3.30	1.65	—	〃	〃	
290	3.50	1.60	1.05	〃	〃	
291	2.95	1.40	0.85	〃	〃	
292	3.80	2.10	1.20	〃	うす緑	緑を帯びた水色
293	3.20	1.70	1.20	〃	〃	
294	3.15	1.20	1.20	〃	〃	
295	3.30	2.25	1.05	〃	〃	
296	4.50	3.35	1.20	〃	〃	
297	3.50	2.20	1.40	〃	〃	
298	3.25	2.95	1.30	〃	〃	
299	2.90	2.30	1.00	〃	〃	
300	3.50	3.60	0.80	〃	〃	
301	3.60	2.40	0.95	〃	〃	
302	3.35	1.80	1.20	〃	〃	
303	3.30	1.95	1.25	〃	〃	
304	3.45	1.95	1.25	〃	〃	
305	2.85	1.35	0.85	〃	〃	
306	3.30	2.25	1.05	〃	〃	
307	3.40	2.75	1.20	〃	〃	
308	2.90	1.95	0.70	〃	〃	

門田2号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
309	3.15	2.35	1.00	ガラス	うす緑	気泡
310	2.80	1.90	0.75	〃	〃	
311	3.35	2.90	1.40	〃	〃	
312	3.10	2.25	0.80	〃	〃	
313	3.10	2.20	1.10	〃	〃	
314	2.80	2.95	0.90	〃	〃	
315	3.50	2.30	0.90	〃	〃	
316	3.50	1.85	0.95	〃	〃	
317	2.90	2.00	0.90	〃	〃	
318	2.95	2.10	0.85	〃	〃	
319	3.00	1.80	0.55	〃	〃	
320	2.65	1.95	0.75	〃	〃	
321	3.35	2.30	0.95	〃	〃	
322	2.75	2.45	0.90	〃	〃	
323	2.65	2.80	0.90	〃	〃	
324	2.90	1.85	0.90	〃	〃	
325	3.00	2.85	0.85	〃	〃	
326	3.40	1.40	0.95	〃	〃	
327	3.25	2.55	0.75	〃	〃	
328	3.00	2.00	1.05	〃	〃	
329	2.85	2.15	1.00	〃	〃	
330	3.00	1.90	0.75	〃	〃	
331	3.50	1.80	0.85	〃	〃	
332	3.30	1.40	0.50	〃	〃	
333	3.75	1.75	1.35	〃	〃	
334	2.65	1.55	0.90	〃	〃	
335	2.90	1.60	1.10	〃	〃	
336	3.90	1.25	0.75	〃	〃	
337	3.00	1.55	0.65	〃	〃	
338	2.90	1.55	0.90	〃	〃	
339	3.00	1.40	0.90	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
340	3.20	1.30	0.95	ガラス	うす緑	
341	2.90	1.60	1.00	〃	〃	
342	2.75	1.80	0.95	〃	〃	
343	2.95	1.45	1.10	〃	〃	
344	2.60	2.34	1.00	〃	〃	
345	2.40	1.80	0.95	〃	〃	
346	3.35	2.40	0.80	〃	〃	
347	2.70	1.45	0.80	〃	〃	
348	2.80	3.10	0.45	〃	〃	
349	2.70	2.30	0.90	〃	〃	
350	2.75	1.50	0.90	〃	〃	
351	2.55	1.95	1.00	〃	〃	
352	2.70	2.55	0.85	〃	〃	
353	2.35	1.95	0.90	〃	〃	
354	2.50	1.60	0.95	〃	〃	
355	2.95	1.35	0.75	〃	〃	
356	2.75	1.70	1.00	〃	〃	
357	3.30	1.35	1.25	〃	〃	
358	2.95	1.85	0.85	〃	〃	
359	2.45	2.15	0.70	〃	〃	
360	2.95	2.40	0.80	〃	〃	
361	2.65	2.10	0.50	〃	〃	
362	2.50	1.00	0.85	〃	〃	
363	2.65	1.60	0.65	〃	〃	
364	2.55	1.10	0.60	〃	〃	
365	2.90	2.80	1.05	〃	〃	
366	3.45	1.30	1.00	〃	〃	
367	2.60	1.70	0.80	〃	〃	
368	2.55	3.20	1.10	〃	〃	
369	4.00	2.65	1.35	〃	〃	気泡
370	2.40	1.00	0.90	〃	〃	

門田 2 号墳

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
371	3.05	3.80	1.00	ガラス	うす緑	
372	3.60	1.80	1.00	〃	うす紫	
373	2.25	2.55	0.95	〃	紺	
374	2.90	1.95	0.75	〃	〃	
375	2.75	1.40	0.85	〃	〃	
376	3.25	1.85	0.95	〃	〃	
377	2.65	1.40	0.80	〃	〃	
378	2.80	2.30	1.00	〃	〃	
379	2.40	1.80	0.75	〃	〃	
380	2.45	2.60	0.90	〃	〃	
381	2.30	1.25	0.75	〃	うす緑	
382	3.10	1.80	0.95	〃	やゝ緑が かった青	透 明
383	3.25	1.70	0.80	〃	〃	〃
384	2.70	2.15	0.80	〃	〃	〃
385	2.80	2.85	0.95	〃	〃	
386	2.95	2.10	0.95	〃	〃	
387	2.95	2.20	1.00	〃	〃	
388	2.30	1.70	1.10	〃	〃	
389	3.00	2.00	1.15	〃	〃	
390	2.70	1.80	0.85	〃	〃	
391	3.15	2.40	0.85	〃	〃	
392	3.40	2.30	1.15	〃	〃	
393	2.80	3.10	0.85	〃	〃	
394	2.80	1.45	0.85	〃	〃	
395	2.80	1.70	1.10	〃	赤 茶	
396	2.70	2.15	1.10	〃	青	
397	3.10	1.50	1.10	〃	〃	
398	3.70	2.00	1.15	〃	〃	
399	2.90	1.90	1.05	〃	〃	
400	2.95	1.75	1.00	〃	〃	
401	2.45	2.15	0.80	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備 考
402	2.55	1.50	0.80	ガラス	青	
403	3.20	1.75	1.05	〃	〃	
404	2.75	1.45	0.95	〃	〃	
405	3.05	1.75	1.00	〃	〃	
406	3.15	2.25	0.90	〃	〃	
407	2.60	1.90	1.00	〃	〃	
408	2.95	2.40	0.75	〃	〃	
409	3.10	1.70	0.95	〃	〃	
410	2.70	2.00	0.85	〃	〃	
411	2.30	2.00	1.00	〃	〃	
412	2.95	1.60	1.00	〃	〃	気泡穴
413	2.30	1.30	0.75	〃	〃	
414	3.20	2.35	0.85	〃	〃	
415	3.00	2.55	0.85	〃	〃	
416	3.00	2.15	0.90	〃	〃	
417	2.55	2.05	0.55	〃	〃	
418	2.90	1.50	1.00	〃	〃	
419	3.20	2.70	0.95	〃	〃	
420	2.30	1.60	0.65	〃	〃	
421	2.90	2.65	0.80	〃	〃	
422	3.20	2.30	0.80	〃	〃	
423	2.65	1.20	0.95	〃	〃	
424	3.20	2.30	0.95	〃	〃	
425	2.70	1.80	0.90	〃	〃	
426	2.80	1.80	0.86	〃	〃	
427	2.75	2.20	0.80	〃	〃	
428	2.85	1.50	0.85	〃	〃	
429	2.45	1.15	0.70	〃	〃	
430	2.55	1.95	0.75	〃	〃	
431	3.00	2.65	1.15	〃	〃	
432	2.75	1.60	0.80	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
433	2.75	1.80	0.90	ガラス	青	
434	1.85	1.40	0.40	〃	〃	
435	1.75	1.35	0.45	〃	〃	
436	2.00	1.45	0.60	〃	〃	
437	2.00	1.75	0.50	〃	〃	
438	2.15	1.20	0.65	〃	〃	
439	1.75	1.35	0.60	〃	〃	
440	3.00	2.90	0.95	〃	〃	
441	2.95	1.45	1.10	〃	〃	
442	2.40	1.35	0.80	〃	〃	
443	1.50	1.40	0.80	〃	〃	
444	2.05	1.25	0.75	〃	〃	
445	2.40	1.30	0.90	〃	〃	
446	2.65	1.80	0.65	〃	〃	
447	2.15	1.10	0.75	〃	〃	
448	2.25	1.40	0.80	〃	〃	
449	2.40	1.40	0.80	〃	〃	
450	2.30	1.65	0.65	〃	〃	
451	2.05	1.20	0.80	〃	〃	

No.	径	厚さ	孔径	材質	色	備考
452	2.65	1.60	0.75	ガラス	青	
453	3.35	1.70	1.05	〃	〃	
454	2.15	1.05	0.75	〃	〃	
455	1.95	1.20	0.65	〃	〃	
456	1.95	1.30	0.65	〃	〃	
457	2.05	1.15	0.75	〃	〃	
458	2.05	1.20	0.60	〃	〃	
459	1.80	1.70	0.60	〃	〃	
460	2.15	1.25	0.85	〃	〃	
461	2.55	2.10	0.75	〃	〃	
462	2.85	1.25	0.90	〃	〃	
463	2.20	1.10	0.75	〃	〃	
464	2.60	1.20	0.90	〃	〃	
465	2.30	1.50	—	〃	〃	
466	2.10	1.05	0.75	〃	〃	
467	2.05	1.50	0.65	〃	〃	
468	2.55	1.20	0.75	〃	〃	
469	3.00	2.30	0.90	〃	〃	
470	1.95	1.10	0.70	〃	〃	

丸 玉（図版27—2・34—2，第11図） いずれも石敷の下から管玉と一緒に出土したものである。すべてガラス製でコバルトブルーの色調を呈する。かたちのうえでは，大差はない。中に気泡がこわれて孔となったものもみられる（表2）。

表 2 丸 玉 計 測 表

（単位 mm）

No.	径	長さ	孔径	材質	色	備考
1	7.25	7.40	1.20	ガラス	濃青色	
2	8.75	6.95	1.95	〃	〃	
3	8.40	7.15	1.80	〃	〃	
4	9.25	6.65	1.80	〃	〃	
5	7.75	4.85	2.40	〃	〃	

No.	径	長さ	孔径	材質	色	備考
6	7.15	5.30	1.75	ガラス	濃青色	
7	7.90	5.00	1.45	〃	〃	
8	8.00	6.10	1.20	〃	〃	
9	8.60	6.60	1.80	〃	〃	

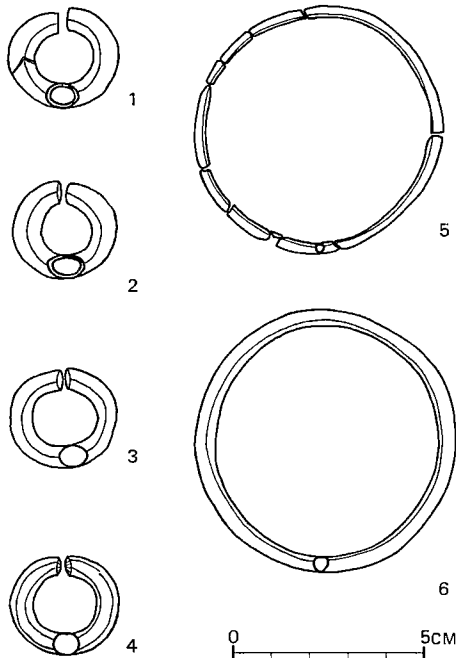
管 玉 (図版27—2・34—2, 第11図) 濃緑色を呈した碧玉製のもの10点と, 青白色のもろい石材でできたもの2点がある。大きさは変化にとみ, 長さは28.1mmから8.85mm, 幅は3.1mmから10mmまである。いずれも一方の側から主に穿孔され, ことに碧玉製の場合, 上端と下端ではその差が大きい (表3)。

表 3 管 玉 計 測 表

(単位 mm)

No.	幅	長 さ	孔 径		材質	色
			最大	最小		
1	10.00	28.10	3.05	1.25	碧玉	濃緑色
2	9.90	26.90	3.65	2.75		青白色
3	9.80	24.25	2.30	0.65	碧玉	濃緑色
4	8.70	22.80	3.85	2.00	〃	〃
5	7.20	22.80	2.90	0.95	〃	〃
6	8.05	22.75	4.25	3.50	〃	〃

No.	幅	長 さ	孔 径		材質	色
			最大	最小		
7	7.30	21.30	2.90	1.00	碧玉	濃緑色
8	9.20	19.60	3.15	1.25	〃	〃
9	6.30	18.00	3.10	2.15	〃	〃
10	6.10	16.95	2.50	1.10	〃	〃
11	4.00	10.45	1.75	1.70	〃	黄白色
12	3.10	8.85	1.70	1.60		青白色



第12図 石室内出土耳環・銅釧実測図 (1/2)

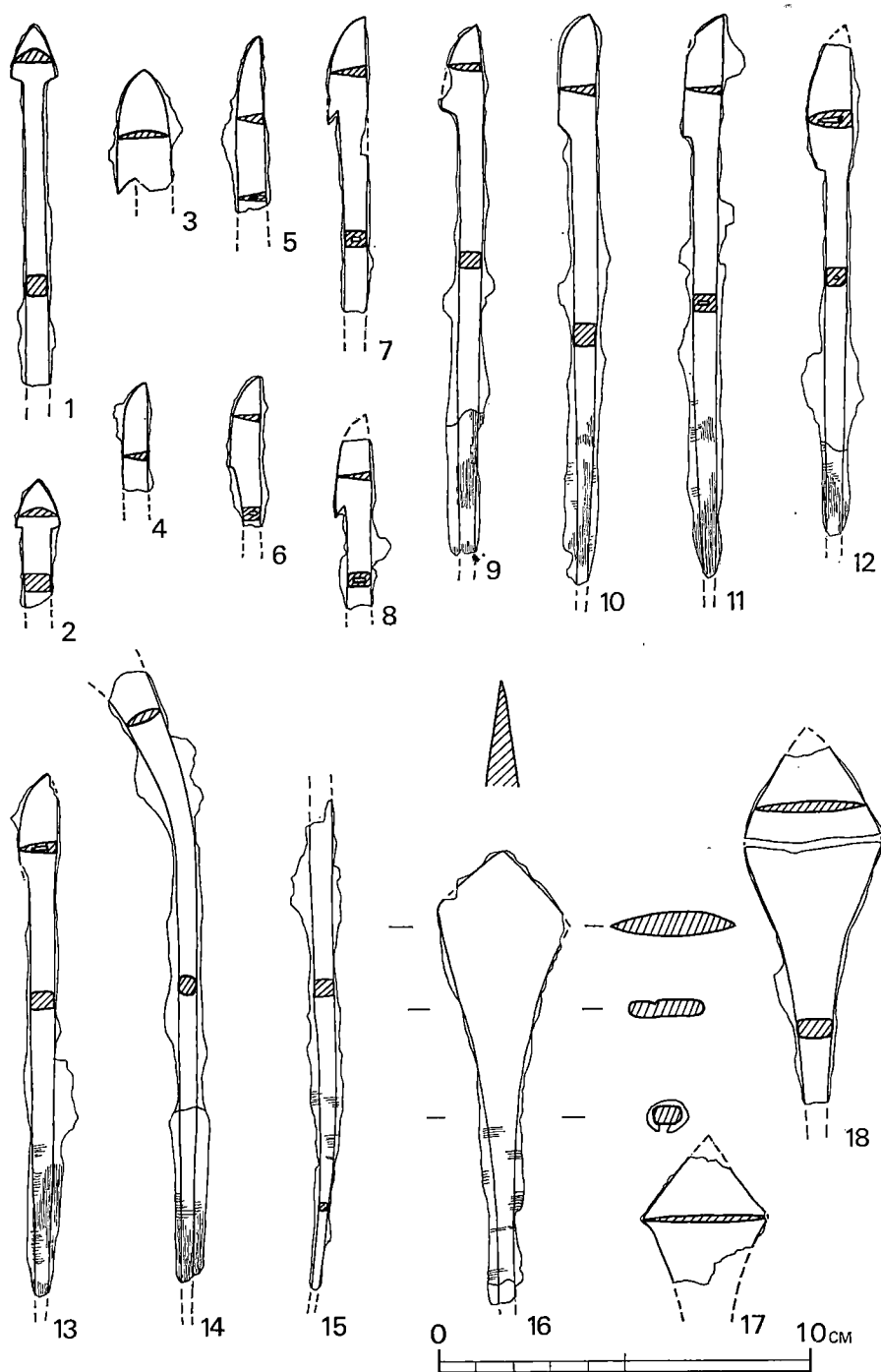
耳 環 (図版16—1・34—1, 第12図1~4)

第Ⅰ類 (第12図3・4) 銅地金張耳環で, 金の包有度が高くかなり重量がある。一つには鍔が表面にみられる。径は共に26×28mmで断面は楕円形を呈し, 5.5×7.5mmである。

第Ⅱ類 (第12図1・2) 中空の銅胎に金分を塗金しているが, 土中であって金分がかなり風化し, 剝離している。径は26.5×27~29mmで断面は楕円形を呈し, 各々6.5×9mm, 6×8mmを測る。

銅 釧 (図版16—2・37, 第12図5・6) 断面楕円形を呈する細身で一つは風化が甚しい。径69.5mm及び66mmを各々測り, 成人用であろう。断面は楕円形で3~4mmを測る。(甲元真之)

鉄 鏃 (図版17—2・36—1, 第13図) 鉄鏃は玄室内より出土したが完形品は一個体もない。尖根鏃と広根鏃に二分でき, さらに尖根鏃は鏃身の形態より二分される。



第13図 石室内出土鉄鍔実測図(1/2)

門田2号墳

第Ⅰ類（第13図1～3） 先端部が三角形に近い平面を呈し、一面が平坦で他面が盛り上がる断面を有す。篋被の部分は断面長方形をなす。

第Ⅱ類（第13図4～15） 鍔身の形態が片刃式で、断面は三角形を呈し中空のものもある。篋被の部分は断面長方形である。中茎を有するものである。

第Ⅲ類（第13図16～18） 3点出土しているが共に矢鍔が剣菱形を呈し超楕円形の断面を有す。ツカノギの部分は断面長方形ないしは円形をなす。

鉄 斧（図版14・35—2，第14図8） 刃物をつけた鉄板の上方を折り曲げて中空の袋部をつくり、木柄を着装し得るようにした鍛造品で有肩式に属する。刃部の断面は三角形をなすが刃先は夥しく損傷し、袋部の一方が欠損している。長さ約11.7cm，刃幅約6.2cmを測る。

刀 子（図版36—2，第14図1～6） 総計6点で、茎に鹿角を装するもの三口とそうでないもの三口である。鹿角装刀子は刃部の長さで二分類でき、計四分類に分かれる。

第Ⅰ類（第14図1・2） 茎に鹿角を装するもので、長さ10cm内外，刀幅最長部で14mmを測り、断面は中空三角形をなす。鹿角部表面と刀身の各部に木質が認められた。

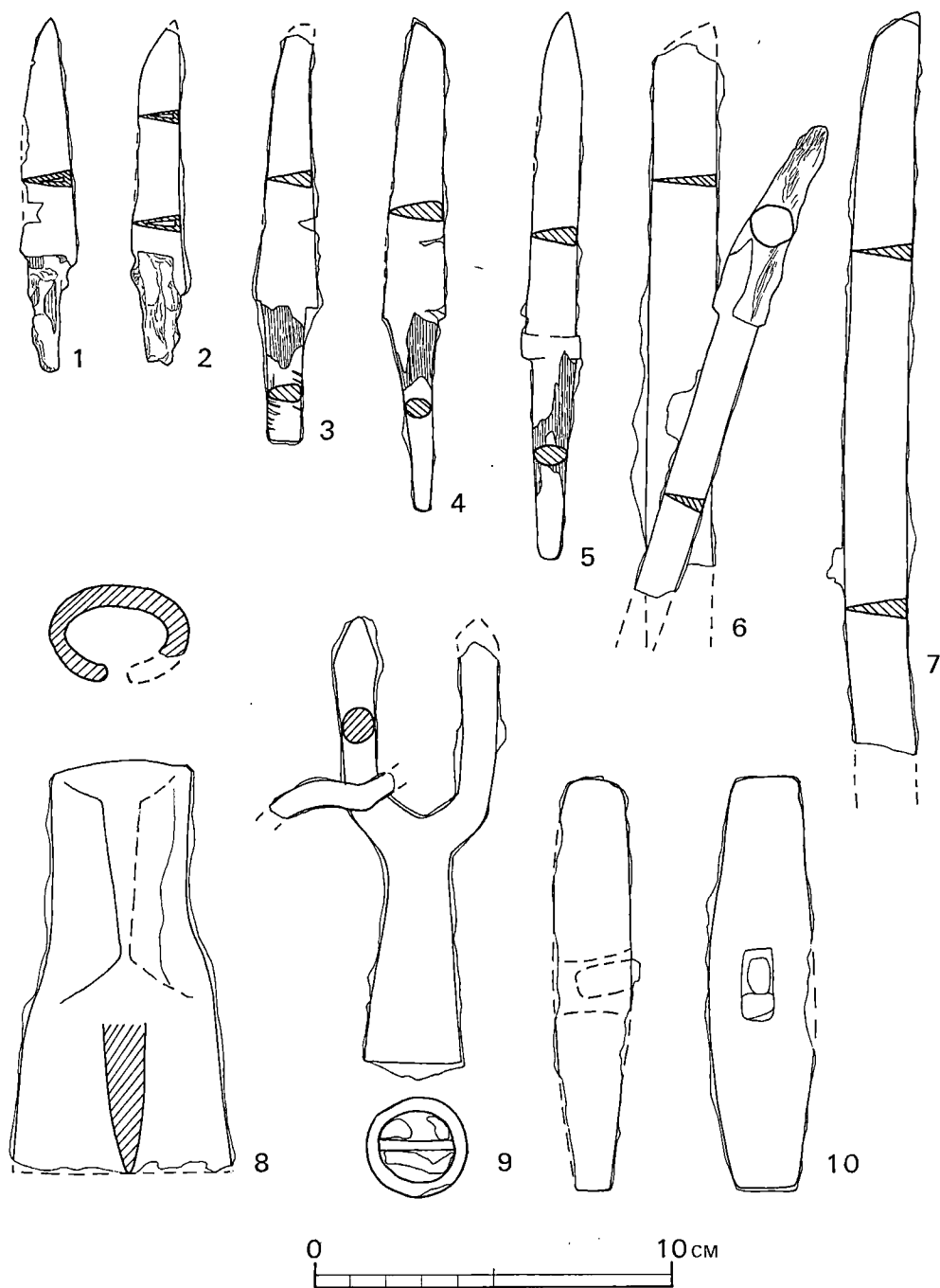
第Ⅱ類（第14図3） 第Ⅰ類の刀子と同様に柄に鹿角を装するが、刀身が第Ⅰ類よりも長く小形直刀の感を抱く。残存長8cm，刀厚4cmを測り、断面三角形をなす。

第Ⅲ類（第14図4・6） 刃部先端部が背より急に「く」の字形に折れ、関部が緩かに浅く切られている。柄は木質や糸目が観察される。断面は刃部が三角形を、柄部楕円形を呈す。4は刀身の長さ8.2cm，幅0.9～1.7cm，厚さ0.6cm，柄部の長さ5.3cm，幅0.4～4cm，厚さ0.5cmを有し，6は刀身の長さは刀身先端部が欠失している為知り得ないが，残存長が8.4cmで恐らく全長9cm内外と思われる。幅0.8～1.9cm，厚さ0.5cm，柄の長さは3.7cm，幅は0.9～1.4cm，厚さ0.5cmを測る。

第Ⅳ類（第14図5） 刀身と柄との境が一段高くなっており，柄部には木質が見られる。柄部の切先はふくらみ，刀身の断面は三角形であるが，柄部は楕円形である。刀身の長さ9.1cm，幅1.3cm，厚さ0.15cm，柄部の長さ5.6cm，幅0.6～1.3cm，厚さ0.5cmを測る。

金 槌（図版35—2，第14図10） 頭部のみで，中央に9×20mmの長方形の挿入部が穿たれている。その中にくさびが残存していた。表面は腐蝕が夥々しい。打面の一方は平たく，他面はふくらむ。全長11.6cm，厚さ1.0～2.1cmで断面は超楕円形を呈す。

直 刀（図版17—1・37，第16図1・2） 直刀は都合四振り出土しているが全長を知り得るものは1点にすぎない。1は57cmの刀身に木製の鞘や把とさらに装具が装着されている。把の木部は腐蝕しており，目釘がある。全長73.1cmで，刀身の幅2.4cm，厚さ1.0cm，茎部の長さ16.2cmで幅1.55cm，厚さ0.6cm，刀身の背は先端部ではやや内傾する。2は刃部先端部を若干欠損するが全長102cmを測る。茎の長さ17.9cm，幅1.2～2.7cm，厚さ0.8～1.3cm，刀身には鞘木が部分的に残存している。関部はゆるやかに切られている。三枚の鍛造による。



第 14 図 石室内出土刀子・鉄斧・簀・金槌実測図 (1/2)

門田2号墳

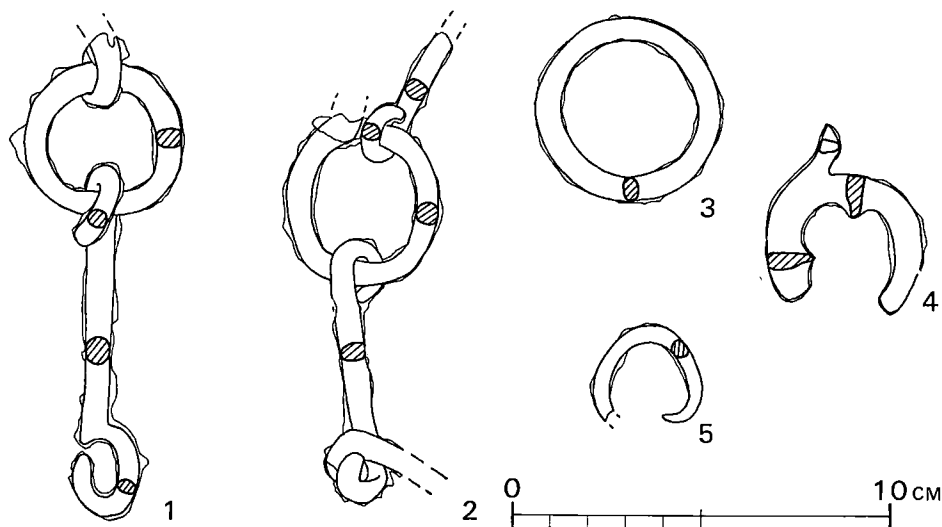
鉄 鋏 (図版17—1・37, 第16図3—3) 袋部が欠損している為全長を知り得ないが, 残存の長さは38.5cmで刃渡り32.5cm, 刃幅1.9cmを測る。断面菱形をなす両刃造りで袋部は基部に向って拡がり, 断面は六角形をなす。長径2.8cm, 短径2.4cmで, 内側には木質が付着している。

箆 (図版35—2, 第14図9) 刃部が二股に分かれて上方に5.5cm 立ち上がる。刃部の先端は平面三角形を呈し, 茎部の断面は, わずかな楕円形をなす。袋部は基部に向って漸次開き, 円筒形である。基部の径は28mmを計り, 目釘が残り, その周囲には木質が錆着している。刃部の一方には鉄片が付着している。

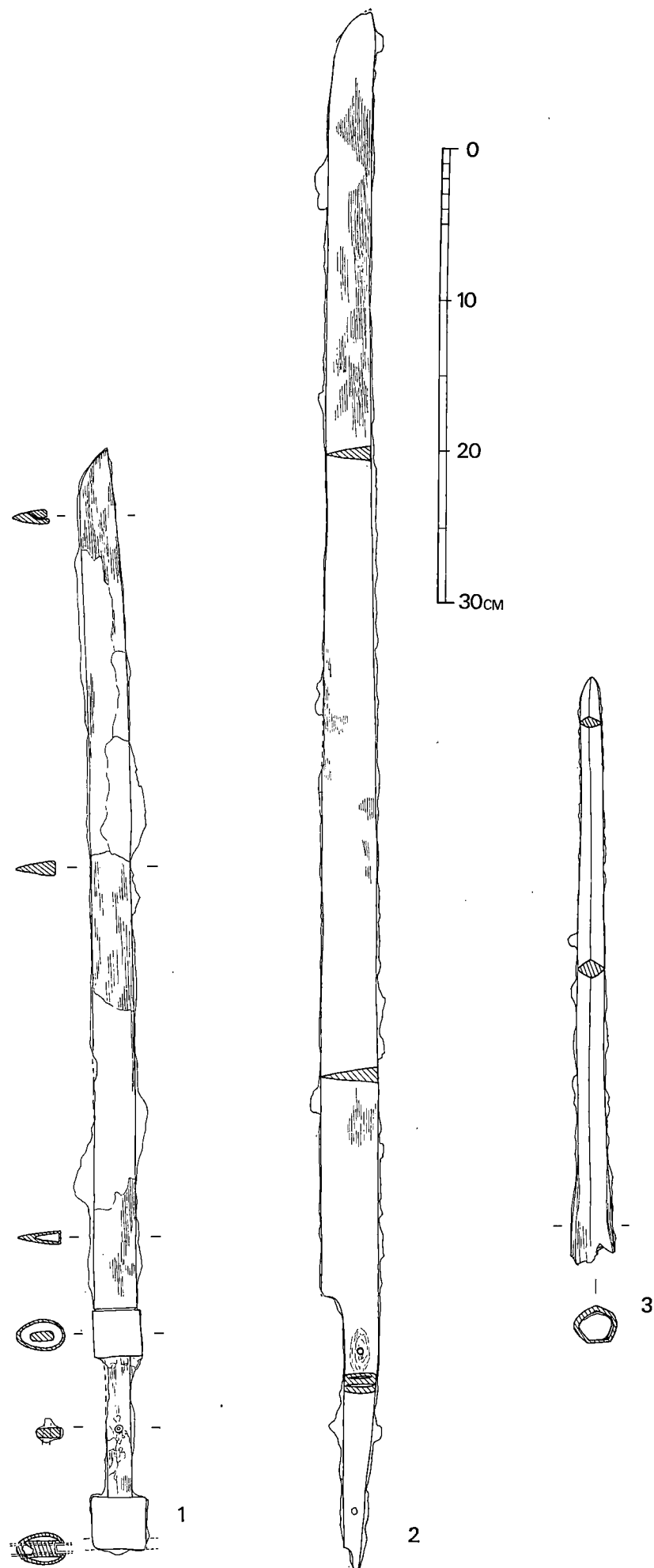
馬具類 (図版35—1, 第15図) 轡三個体が出土したがいずれも鏡板を欠いており, 引手金具のみである。金具は鉄環と鉄棒の両端を折り曲げて連結させている。断面は楕円形で, 鉄輪1の外径は4.2cm, 3は4.9cmを測る。

不明金具 (図版35—1, 第15図4・5) 半円形を呈し, 4の内側中央部及び左側は三角状, 又左肩から上方に舌状に高さ1.2cm 突出している。断面は一面が平坦で他面が中央部より内側に緩やかに弧を描く。厚さ1.5~4.5mmで外径は41mmを測る。5はやや不整形な半円形をなす細身のもので断面は楕円形を呈す。厚さ4mm。4は恐らく馬具の一種であると思われる。

(松井忠春)



第15図 石室内出土馬具類実測図(1/2)



第 16 図 石室内出土直刀・鉄鉾実測図 (1/4)

須 恵 器

杯 蓋 (図版14・15—1・38, 第17図1・3・5) 杯蓋はゆるやかな円弧を描いて口縁部にのび, 1・5の断面は厚く, 3はやや薄い。口径13.3~13.5cmを計り, 高さ4.2~4.6cmである。

3は堅く5は軟質に焼きしめられ, 灰青色ないし灰白色を呈す。いずれも天井部中央より頂部にかけて篋削りが行なわれ内面にはナデ痕が認められる。共に天井部外面にカマ印がある。

杯 身 (図版14・15—1・38, 第17図2・4・6) 杯身の立ちあがりは2では1cmを測り4では1.2cmである。口縁部から緩かに底部へと移行するもので, 直径11~12cm, 高さ3.7cm~4.9cmを測る。底部は丸くなるもの4・6とやや平直なもの2との二種がある。いずれも堅く焼かれているが砂粒を多く含む。6には自然釉が一部付着している。底部はいずれも篋削りされており, 2は赤褐色を呈す。全て外面底部にカマ印がある。

盥 (図版14・15—1・38, 第17図7) ほぼ直立する口縁部から胴部へ移り, 胴部からゆるやかに円弧を描きつつ底部へうつる。口縁部から胴部にかけてはカキ目が横走り底部は篋削りされている。内面にはクロ痕が観察され, さらに横ナデにより仕上げられている。器壁は厚くなく, 底部が深い。青灰色を呈し焼成は堅緻であるが胎土には砂粒が認められる。口径10.6cm, 器高6.9cm。

有蓋短頸壺 (図版15—2・18・38, 第17図8・9) ほぼ直立する口縁部から緩かに胴部へと移り少し張った肩部からは内折して底部にうつる。肩部と底部との間は篋によるカキ目が数十条横走り, 底部は篋削りされている。灰色を呈し, 焼成は良好である。胴部には指紋痕がある。口径8.1cm, 胴径13.8cm, 高さ9.4cm。

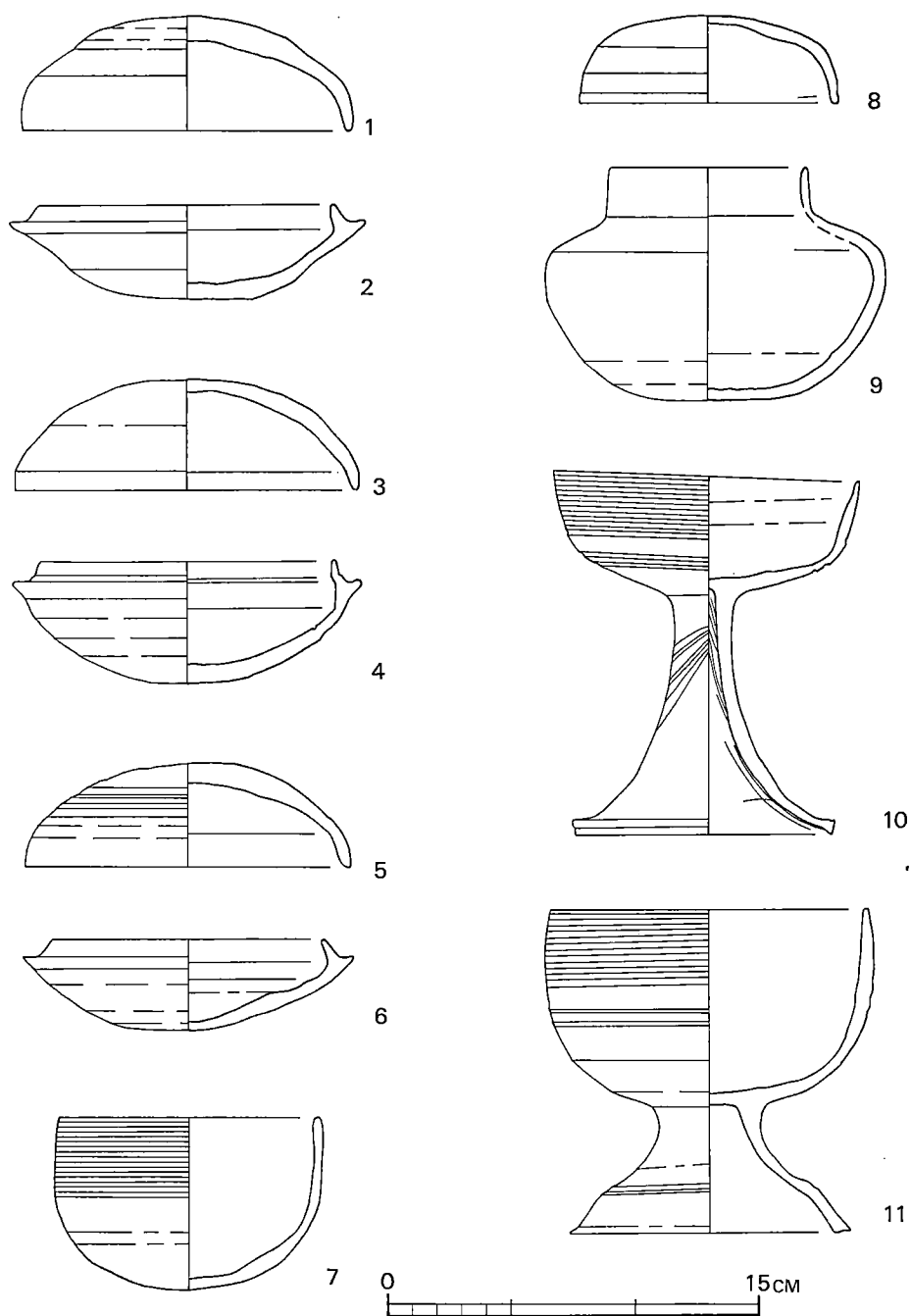
蓋はゆるやかな円弧を描いて口縁部にいたる。比較的薄手で, 口径10.4cm, 高さ3.5cmの小形品である。焼成は良好で灰黄色を呈す。天井部は篋削りされている。

この壺の中に土玉を41個を入れていた。内訳は直径5~9mmのもの10個, 9~18mmのもの31個である。形は不定形で泥を単に丸めて作っただけのもので, 出土当時は各々が密着していた。泥は何らの動・植物の遺骸をも見い出せない。

高 杯 (図版14・15—1・37, 第17図10) 直径12.3cmの外反する口縁部から円弧を描くように内傾し無孔の脚部へ移り, 緩かに外反しつつ端部にいたる。杯は比較的深く, 外面は底部にかけてカキ目が施され, 底部は篋削りされている。脚柱上部にもカキ目が認められ, しぼり痕が内, 外面とも観察出来る。脚部内面二ヶ所にカマ印がある。灰黒色を呈し焼成は良好で胎土には砂粒を含む。器形は片方に傾斜している。器高14.5cm。

台付椀 (図版37, 第17図11) ほぼ直立する口縁部から胴部をへて緩かに底部へ移り, 脚柱接合部より外反し段をなしつつさらに外開きする。口縁部から体部にはカキ目が数十条横走り底部は篋削りされているが, 内面はナデ調整により仕上げられている。脚柱下端面はやや内側に凹む。表面には自然釉がみられる。青灰色を呈し焼成は非常に堅緻で金属音を発する如くで

門田2号墳



第17図 石室内出土須恵器実測図(1/3)

ある。胎土は砂粒を含む。口径 12.3cm ，器高 13.2cm 。

壺（図版14・15・39，第18図1・2）

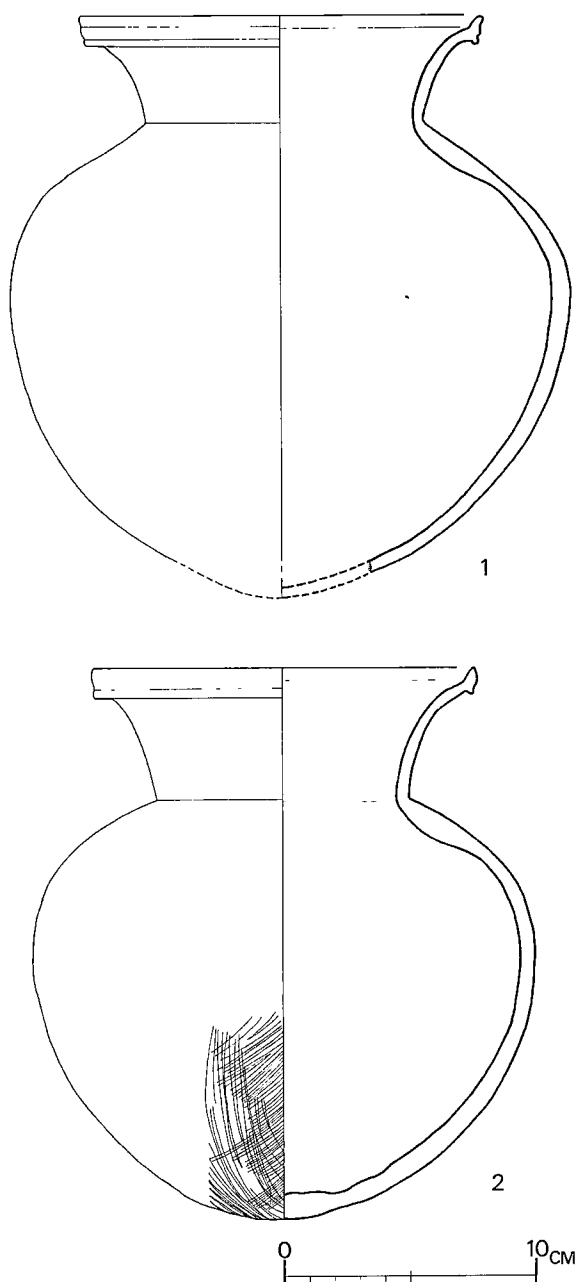
「く」の字形に外反する口縁を有し，口縁端部は 6mm 位外開きに立ち上がり端面には二条の沈線が横走する。少しすぼまった頸部は大きく外反する胴部へ続いている。胴部最大径は 22.3cm ，2は 19.9cm 測る。1は黄褐色，2は灰色を呈し焼成は共に堅緻である。胎土には砂粒を含んでいる。外面は斜方向の刷毛目で仕上げている。内面には全面青海波文がみられる。1は，口径 16cm ，器高約 23cm ，2は 15.1cm ，器高 2.9cm である。

平瓶（図版15—2・38，第19図2）

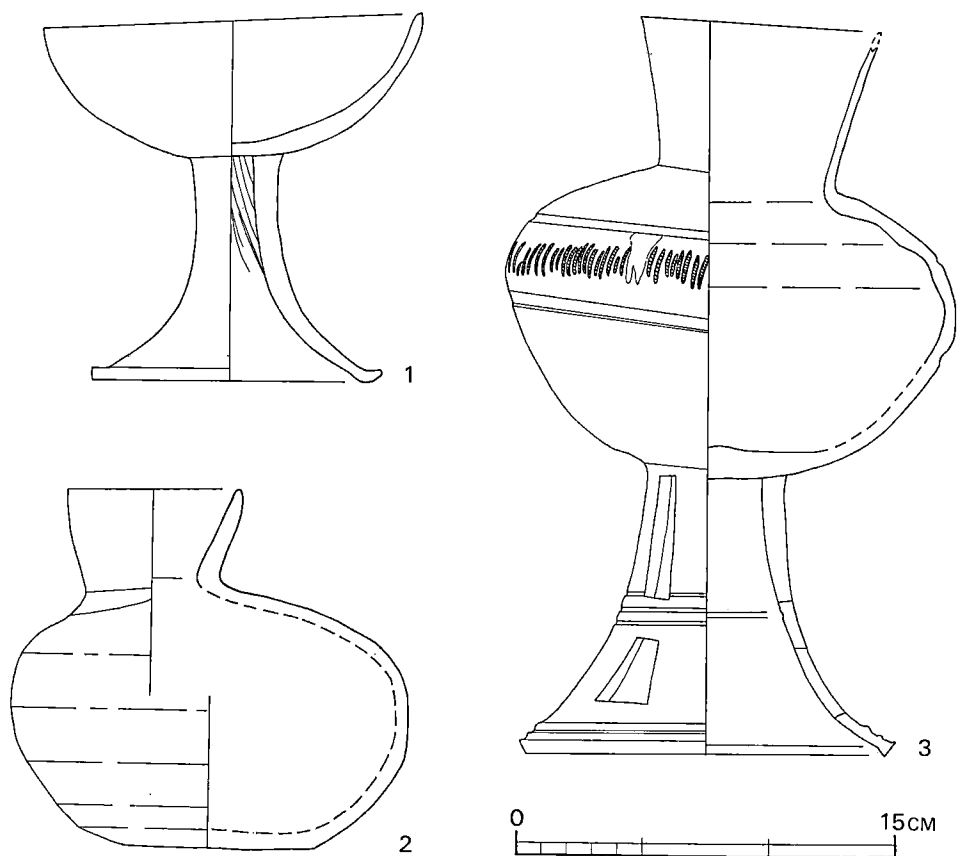
径 6.8cm の外反する口縁部は漏斗状を呈し注ぎ口がみられ，体部上面の中心から外に接合している。体部上面はやや扁平で底部は平面形をなすが器体は総じて丸味をもつ。底部は篋削りされており，他はナデ調整されている。灰色を呈し，胎土には砂粒を含み，焼成は堅い。体部二ヶ所が凹んでいる。器高 14.2cm を測る。

高台付長頸壺（図版14—2・15—1・40—1，第19図3） 裾広がりの脚部は横走する沈線により二段に区切られ，上端，下端共に梯形の透孔をもつ。脚部に載る壺は偏球形胴部の中央

部に一条の沈線，その下に斜行櫛歯押捺文を施し，下端に一条の沈線で区切る。口縁は比較的長く，外反する。壺の底部は篋削りされている。脚部下端には焼成時の須恵器片が二ヶ所に付着している。焼成は堅緻で表面に自然釉がみられる。口径 9.5cm ，器高 29cm 。（松井忠春）



第 18 図 石室内出土須恵器実測図 (1/3)



第19図 石室内出土土器実測図(1/3)

土師器(図版14—2・15—1・37, 第19図1)

高杯 やや高い杯部の下方向面が一段と厚くなっている。黄褐色を呈し砂粒を含むやや粗い粘土を用いているが脆い。脚部とは挿入される形をとらない接合法で、接合部から緩かに外反する。脚部内面にはしぼり目が観察され、全表面は横ナデで仕上げられている。口径15.0cm, 器高14.25cm。
(甲元真之)

(3) 周溝内出土土器

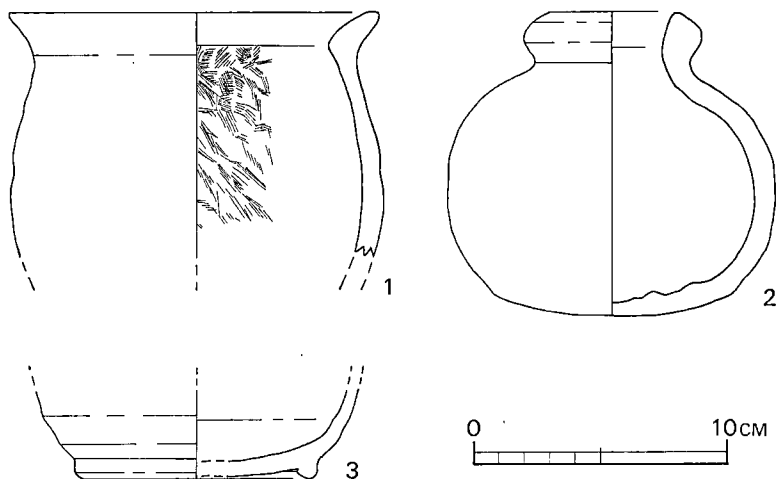
須恵器

甕(第20図1) 口縁部から肩部に至る「く」の字形にすばまった破片で、口縁部上半は欠損している。口縁内・外面には彫りが深くて大形の青海波文が施されている。灰色を呈し焼成

は堅緻で胎土は稠密である。

高台付椀（第20図3）

胴部下半から底部にかけての破片で、風化が夥しい。高台の接合部には条痕がみられ、内面には刷毛面痕がありロクロ整形による貼り付け



第20図 周溝内出土土器実測図（1/3）

高台である。色調は灰白色で胎土には砂粒を含み焼成はやや軟い。

（松井忠春）

土師器（第20図1・2）

短頸壺 2は外反して内側に折り曲げた口縁部を有す。小形の壺で器壁は厚い。表面は風化が夥しいが刷毛目痕が観察された。底部は整形されていない。色調は白黄色で胎土には少量の長石を混え、焼成も軟質である。口径5.1cm，胴部最大径13.05cm，器高12.0cm。

1の口縁部は「く」の字形に短く外反し、緩やかに胴部に移る頸部をもつ。口縁部の内・外面は横ナデ整形仕上げされ、胴部上半にはナデ痕がみられる。又条痕も僅かに残存している。内面は刷毛目を斜行、横走、縦走させている。黄褐色を呈し焼成はやや軟質で胎土には雲母を含んでいる。口径14.6cmを測るが底部欠失のため器高は知り得ない。

（甲元真之）

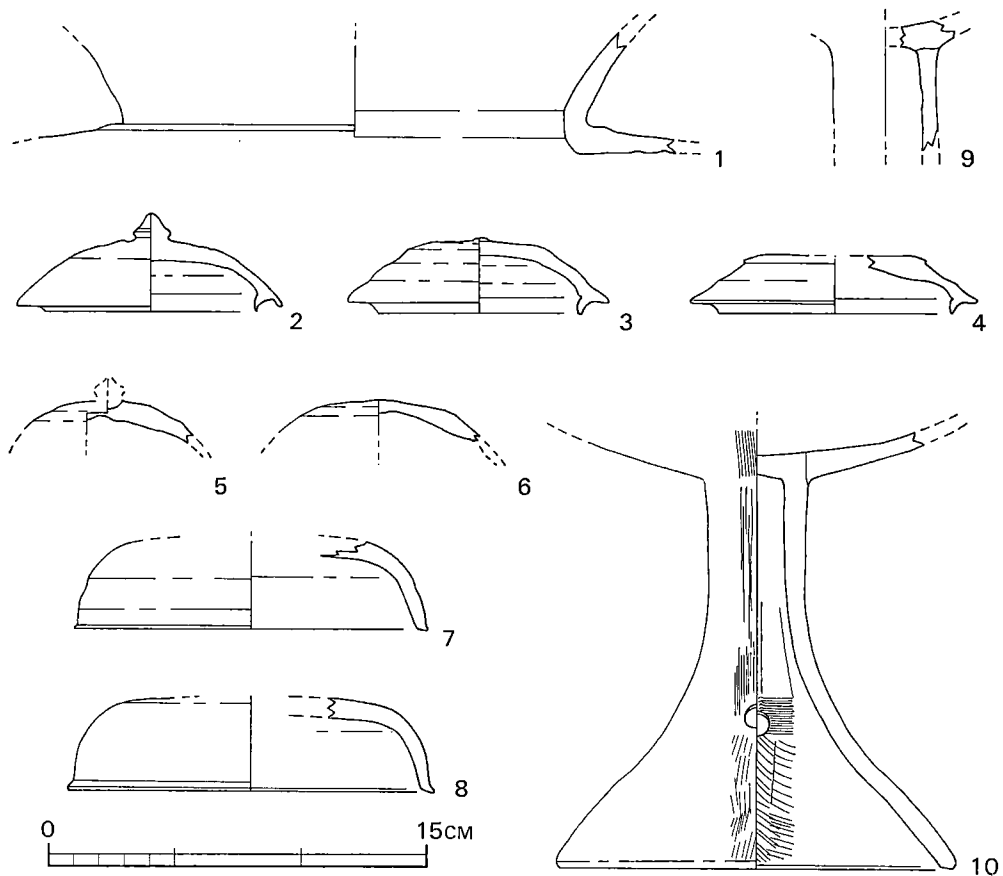
（4） 墳丘内出土土器

須恵器

杯蓋（第21図2～8）

第Ⅰ類（2・5） 宝珠形の鈕を有する蓋で、肩部は張り肩部から口縁部には緩やかに内傾する。かえりは内側に向かって外反する。鈕から肩部までは篋削りされ、他は刷毛目痕がみられ内面にも同様の刷毛目痕が観察される。肩部外面にカマ印がある。灰色を呈し焼成は堅く、胎土は稠密である。2は口径8.4cm，器高3.9cmである。

第Ⅱ類（3・5・6） 宝珠形鈕を有しない天井部のみの破片にすぎない。上面は篋削りされ、内面は刷毛で整形されている。灰色を呈し焼成良好で胎土には砂粒を含む。Ⅰ類同様にカ



第21図 墳丘内出土土器実測図(1/3)

マ印を有する。

第Ⅲ類(7・8) かえりを有しない口縁部から天井部にかけての破片で口縁部は小さく外反する。外面には篋削り痕や指紋痕がみられる。色調は灰黄色と灰白色で、胎土は砂粒を含む。焼成はやや軟質的である。7は口縁部径約14cm, 8は14.8cmを測る。(松井忠春)

土師器(第21図9・10)

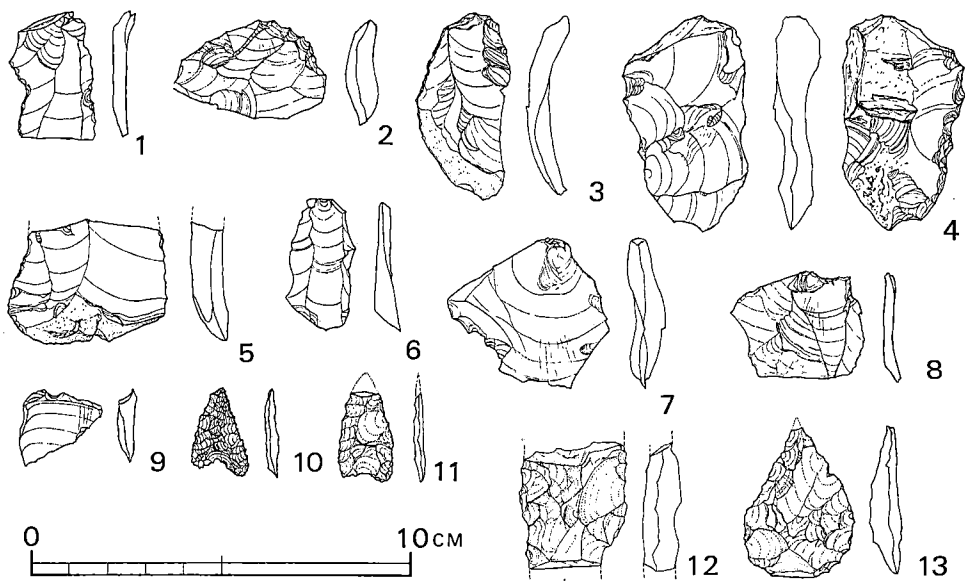
高杯 10は所謂西新式と呼ばれるもので杯は破損し形は知り得ない。脚部は緩やかに外反し脚底は篋削りされている。杯部外面には刷毛目痕が縦走し、脚部上半では平行刷毛目痕が縦走しその上から篋により磨消し整形されている。下半では斜行した刷毛目痕がみられる。脚部内面の上半には櫛目痕が横走し下半では斜行の刷毛目痕がみられる。絞り痕も観察される。杯部に挿入される形で脚部が連結する。穿孔は約1cmが対向二ヶ所に穿たれている。黄褐色を呈し焼成は良好で胎土は砂粒を含む。

9は杯部と脚部の接合部の破片にすぎないが、脚部外面には縦方向の刷毛目痕がみられる。黄褐色を呈し胎土には雲母・石英を含む。焼成は普通である。接合法は10とは異なり脚部に孔を穿たないものである。

(5) 墳丘内出土石器

黒曜石製の打製石器は10数点出土した。いずれも浮遊遺物である。第22図1～10がそれで、うち1～5は周囲に細かなリタッチが認められる。同図3・4は他のものと比べて風化がかなり進んでおり、古い時期のものかもしれない。10は凹基式の石鏃であり刃部には細かな凹凸がこくめいに施されている。11～13は安山岩製の石器で11は石鏃、12は石槍、13は尖頭状石器と考えられる。

黒曜石製と安山岩製の石器は恐らくは縄文時代後期のもので、後に出てくる打製石斧とともに縄文の包含層から、墳丘の土をもち込んだ折りにもたらされたものと思われる。石槍は破片のためよく分からないがあるいは3・4の削器等とともに先土器時代の所産かもしれない。



第22図 墳丘内出土石器実測図(1/2)

第23図は縄文時代から弥生時代にかけての石器類である。1は絹雲母片岩製の砥石と思われる。五角形ないしは六角形の薄い石器で表裏両面には幅8mm前後の溝がはしる。この溝の方向は上下では、ややずれているが、いずれもほぼ中央にある。玉砥であろうか。磨製石斧の形態



第23図 墳丘内出土石器実測図(1/2)

をしているが砂岩製の砥石である。3は打製石斧で左側面と上部を欠いている。4は殆んどこわされていて形状は判定しにくいが定角式の磨製石器と考えられる。上面に孔があるのは人工のものではない。5は片面のみ残存する頁岩製の石器で保存のいい面は中央に縞状となっている。ほんの小部分であるが磨製石剣の刃部とも思われる。6・7は片岩製の扁平折製石斧で、いずれも風化の度合がはげしい。7はその $\frac{1}{4}$ ほどを欠損しているが、6はほぼ完形で両側面にはわずかながら抉りが設けられている。

以上の石器のうち、3・4・6・7は縄文時代後期ころの遺物と思われる。1と5はその性格が充分には分からないが、一応上のように考え、弥生時代のものとしておく。

(6) 中世墓出土遺物

中世墓から出土した遺物には、青銅製六花鏡1、陶磁器7、それに土師質の灯明皿や鉄釘が出土している。

土 師 器 (第24図1～4)

皿 いずれも外開きする短い立あがりをもつもので、底部は大きく反って法量は小さい。底裏面にはいずれも糸切痕を残す。褐色の柔かい焼成で、胎土中には雲母を多数含む。

青 磁 (図版40・41, 第24図5・8～10)

皿 (第24図5・9・10) 5は灰色の地に青灰色のうわぐすりがみられる皿で、内面には卍状に彫り込みときり込みがみられる。口縁部はかなり外反し、胴部下位以下底裏面には篋削りの痕跡が認められる。底部はあげ底でその部分には釉薬はかからない。福建省同安窯系のものである。9と10はいずれもにたつくりの皿である。胎土は灰色にしてうす青色の釉薬が厚くかかる。内面には片彫りした文様が花文をえがき、見込みには一条の線が表出されている。小さな底部は釉がかからず、部分的に鉄分がでている。そして一部は乱雑な篋あとがみられる。南宋代龍泉窯系の産物であろう。

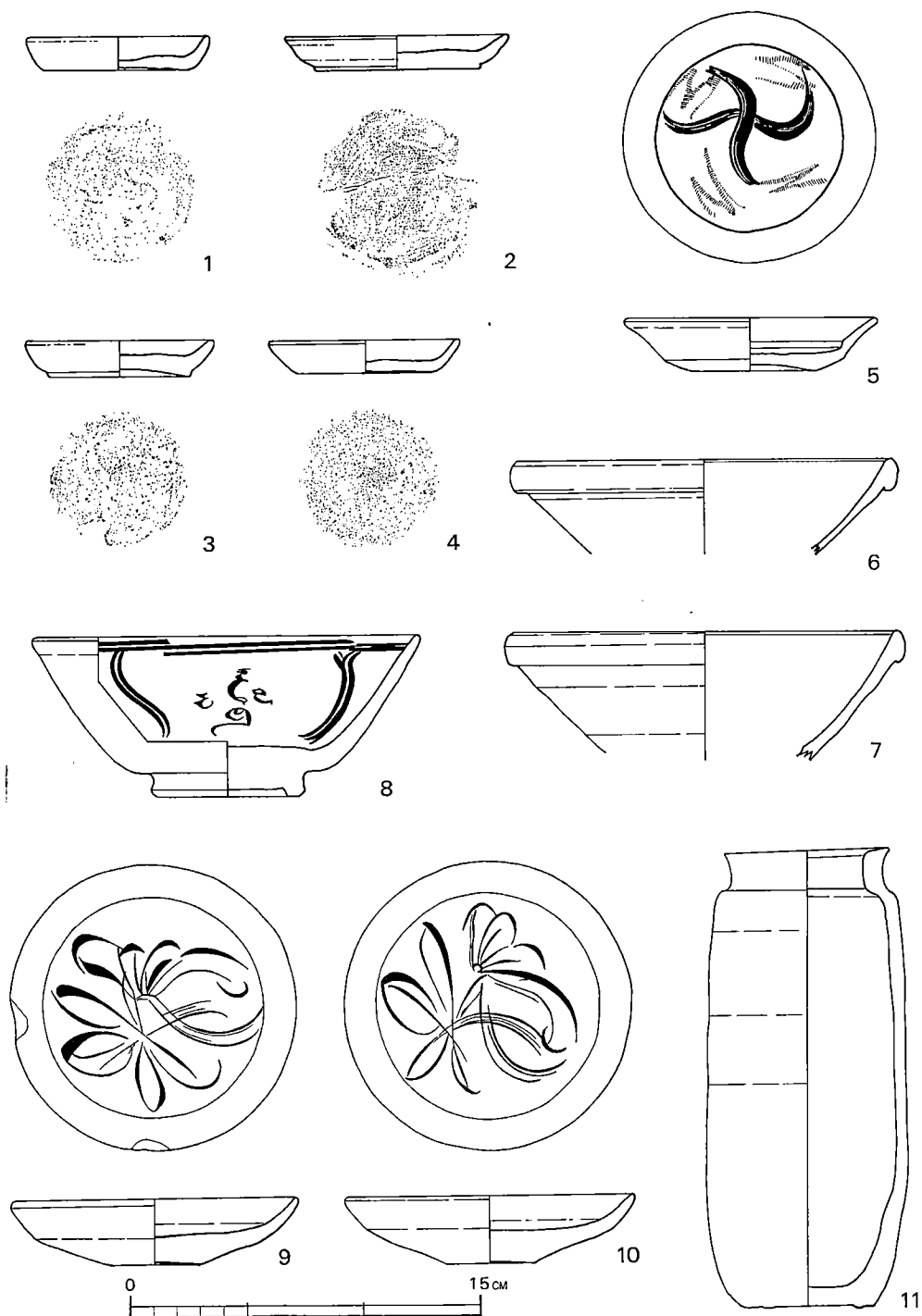
高台付碗 (図版40—2, 第24図8) 枯葉色の釉をかけた高台付の碗で内面には縦の線で5区画にわけられた中に退化した雲花文が片彫りされている。また底見込みにも同様の手法がみられる。高台は削り出してつくられ、一部には釉がかからず灰黒色の地がみられる。器外面にはロクロ痕が多少残り、胴下座近くには篋削りがなされていることがわかる。

白 磁 (第24図6・7)

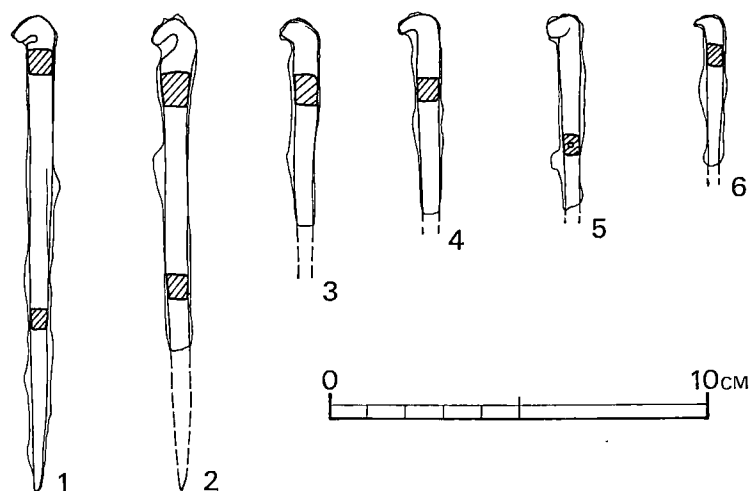
台付碗 折反し口縁をもつ台付碗の上半部である。玉縁状の口縁部外面には釉薬が部分的に厚くしたままのがみられる。いずれも胎土白色で中に茶・黒色の粒子を含み、小石も混入されている。器面には貫入及び気泡痕が多く、外面にはロクロ痕が調整されぬままに残っている。

陶器 (図版41, 第24図11)

門田 2 号墳



第 24 図 中世墓出土器実測図 (1/3)



第25図 中世墓出土釘実測図(1/2)

鉄釘(第25図)

頭部を屈曲させた断面方形のもので、完形品で長さは12.5cmを測る。

短頸壺 漆黒の釉がかけられた長胴の壺で、口頸部は短く急速に外反する。釉薬は上部にのみ厚くみられ、胴部にはたれて下ったものがみられるだけである。胴体は巻き上げによって作られたと思われる痕跡がある。越州窯系のものであるうか。

8. ま と め

1. 門田2号墳は春日市上白水にあって那珂川町の平野部を望む丘陵上の南端部に築かれた円墳である。
2. 門田2号墳の内部構造は単室両袖形の横穴式石室で、ほぼ南に開口する。
3. 石室は旧地表をわずかに掘り込んだ墓室内に築かれ、小形の花崗岩を基盤にして、上部に割石などを持ち送り状に積んで構成されている。床面には河原石が玄室前面を除いて敷かれている。
4. 石室はその殆んどを近世以降現代に至るまで墓地として利用されたり、畑地などによる開削のため壊されており、全体の構造はあきらかにしえなかった。
5. 羨道部はわずかに残された部分からみると胴張りのするものか、あるいは「ハ」字状に開くものである。
6. 玄室は長さ4.40m、最大幅2.36m、最小幅2mを測る特異なものであり、屏風状に立てられた石を境として、前後では石敷の状態や副葬品のありかたに差異をみいだしうる。
7. 埋葬施設はあきらかでない。しかし副葬品は両袖に須恵器や土師器の容器を主体として

門田2号墳

砥石・鉄斧等がおかれ、屏風石から奥に「コ」字形に鉄製武器が側石近くにあり、その鉄製武器類の内側に接して装飾品がおかれていた。

8. 門田2号墳は周溝をもち、その最大幅は5mを測り、周溝の外肩間は27.5mに達する。この周溝は丘陵の中央に向く石室の東側ではとぎれて約4m幅のブリッジを形成している。

9. 石室と周溝との間には周溝と同様に石室をめぐる幅1～2mの小溝があった。この内周溝は墳丘築造の過程で埋められており、特別な遺物類も検出しえなかった。

10. 墳丘の形成にあたっては、まず石室を被覆する第一次墳丘がつくられる。第一次墳丘は黄色の粘土で構成された石室周辺ではかなり厚く堆積している。第一次墳丘の下は黄色粘土と他の土質のものによる版築状の互層をなすが、それより上面は、硬く叩きしめられる事もなく、墳丘の形を整えるために土を置いた状態である。

11. 周溝中には古墳と関連する埴輪片・土器片が多く発見された。埴輪では円筒のものが大部分であるが、いずれも初期の段階で墳丘より転落した二次的な堆積状況下にあった。

12. 封土中には土師器・須恵器・弥生式土器をはじめ、先土器時代から弥生時代にかけての石器が発見された。墳丘築造時に周辺の遺物包含層よりもたらされたものが、大部分と考えられる。

13. 古墳の築造年代は、石室と墳丘の関連性及び副葬品の遺物類で示される。石室の奥壁中心が墳丘最高部と一致するプランを示し、横穴式石室墳の構築プランとしては6世紀代のものである。須恵器は杯の形態からⅢb式と思われ、6世紀後半の年代が想定できる。

14. 墳丘及び周溝中には石室内出土遺物よりも形式的に新しい時期の遺物もみられたが、石室中においては、追葬を示すものは何もなかった。

なお、報告にあたり、平安博物館 考古第三課 松井忠春氏の協力を得た。記して謝意を表したい。
(甲元真之)

図 版

門 田 2 号 墳



1 門田 2 号墳遠景(西から)



2 門田 2 号墳遠景(南から)



1 門田 2 号墳近景 (北から)



2 門田 2 号墳近景 (南から)



1 墳丘頂上部試掘地点 石室の奥壁



2 N区表土除去後の状況



1 W区表土除去後の状況



2 E区表土除去後の状況



1 表土除去後のS区・E区



2 S区の墳丘を除去した状況



1 S区石室の遺存状況



2 S区石室の状況



1 西方よりみたW区とS区



2 S区墳丘除去後の状況



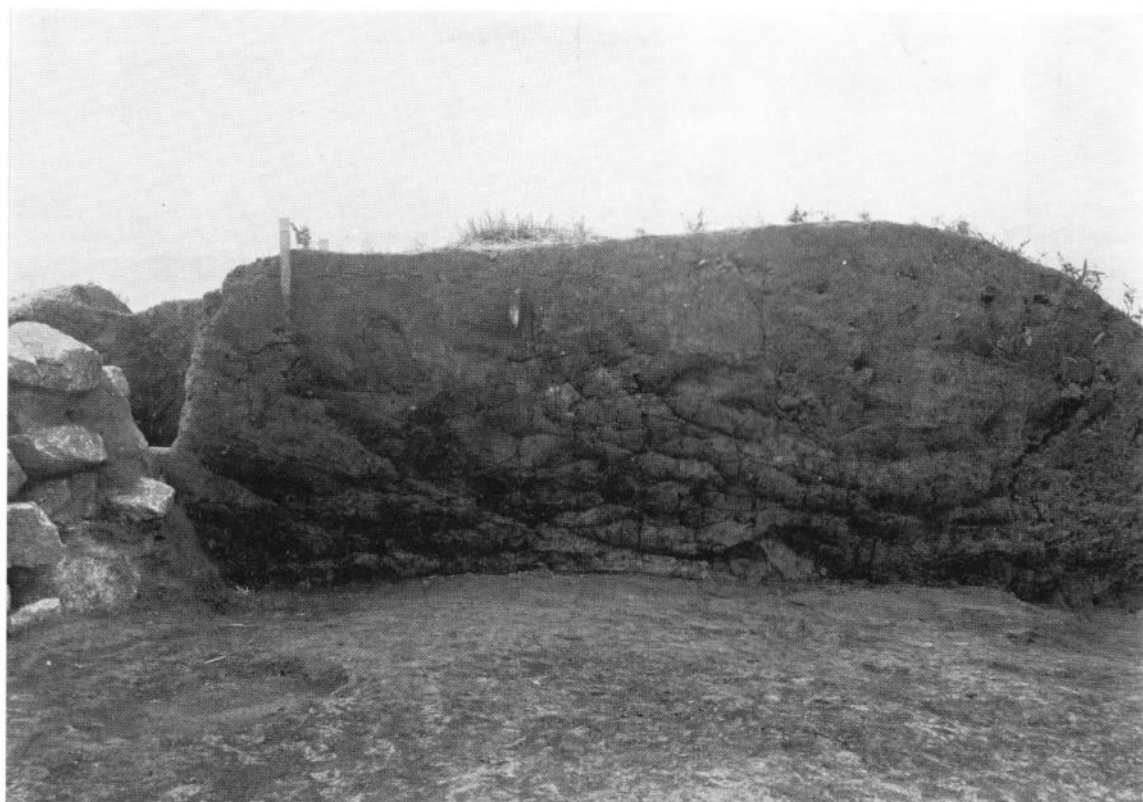
1. 北方よりみたW区とN区



2. 東方よりみたE区とN区



1 N区東壁断面



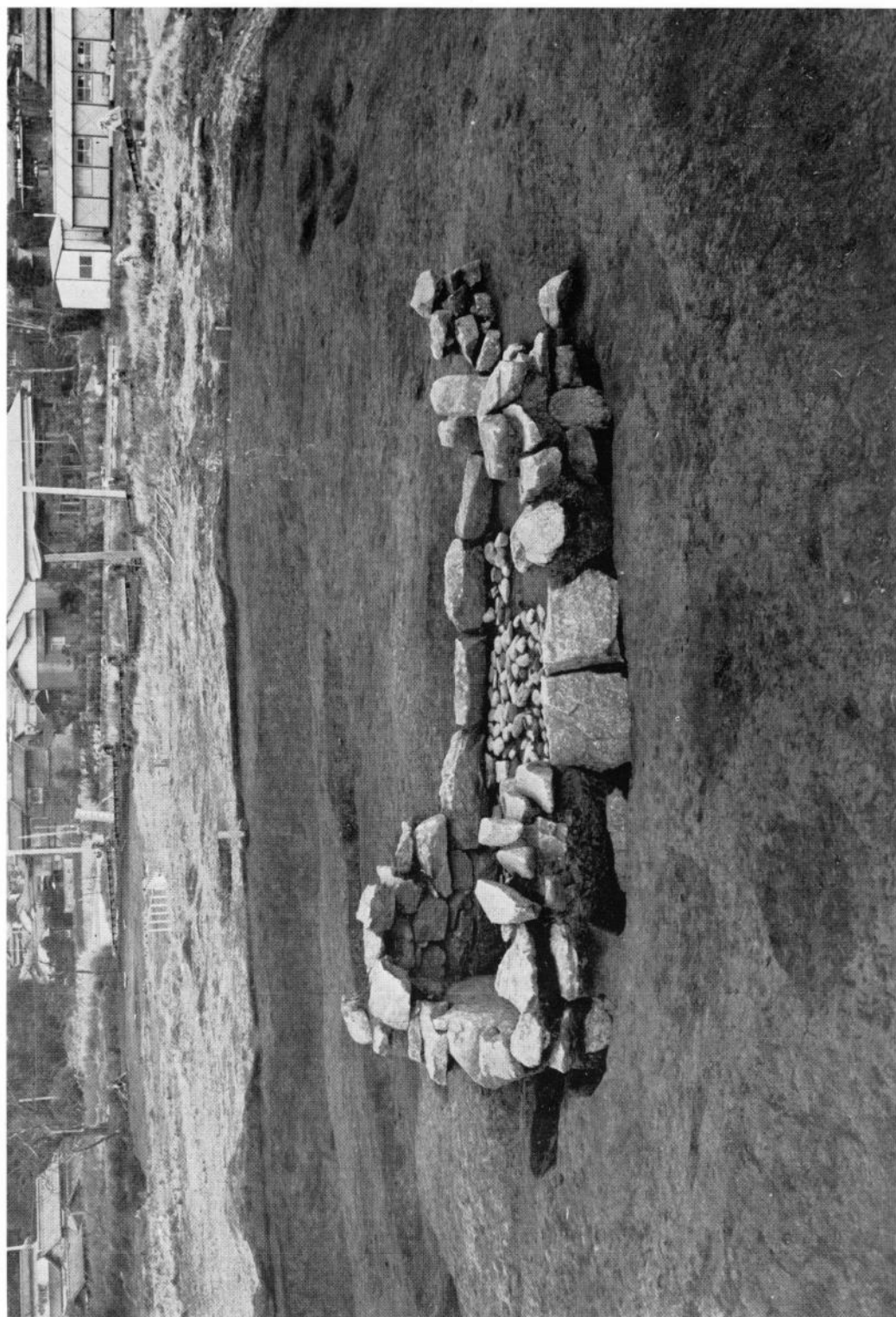
2 N区西壁断面



1 一部墳丘除去後の航空写真



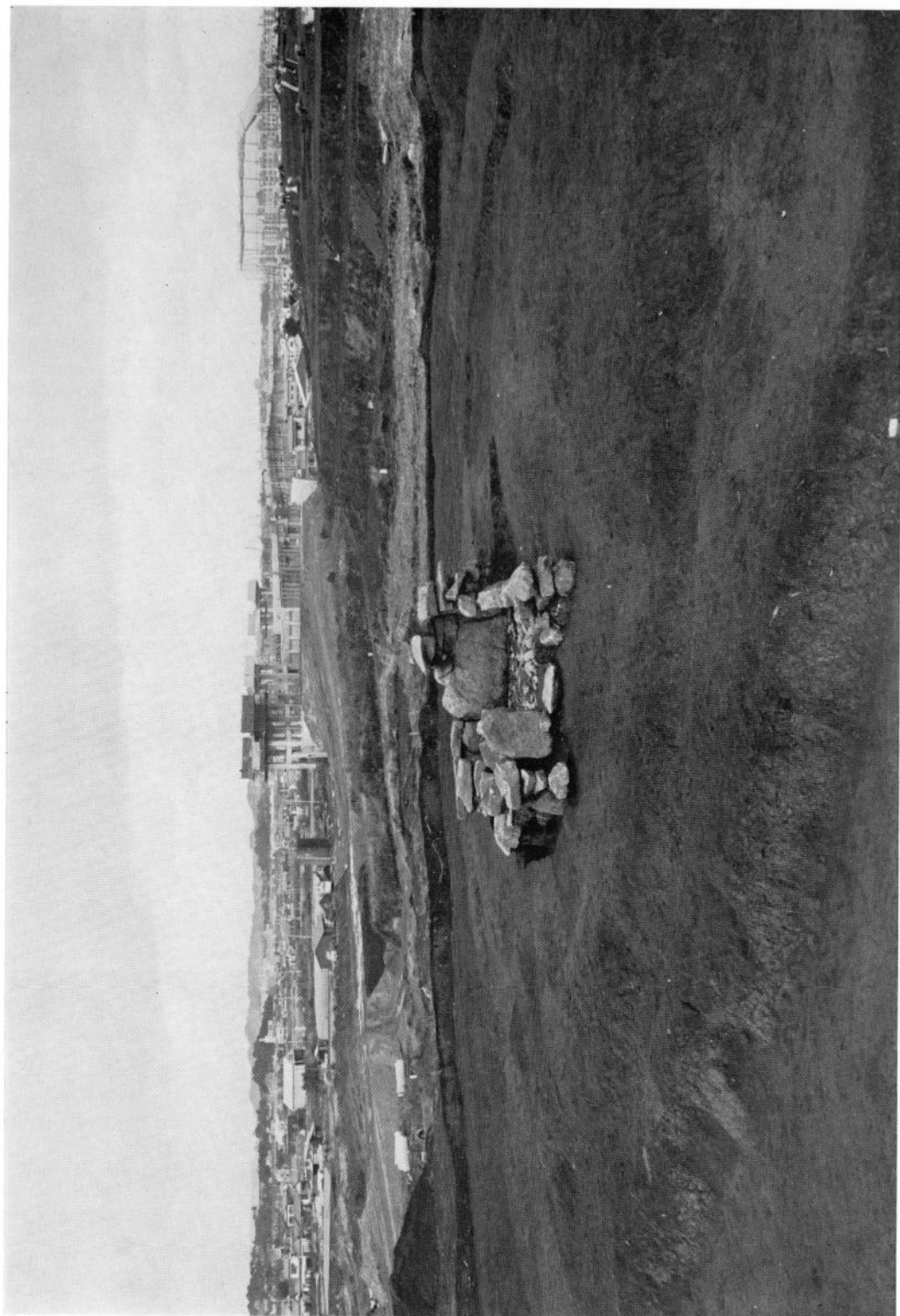
2 墳丘除去後のN区の状況



石室の全景（西から）



石室の全景（東から）



石室の全景（南から）



1 石室内遺物出土狀況



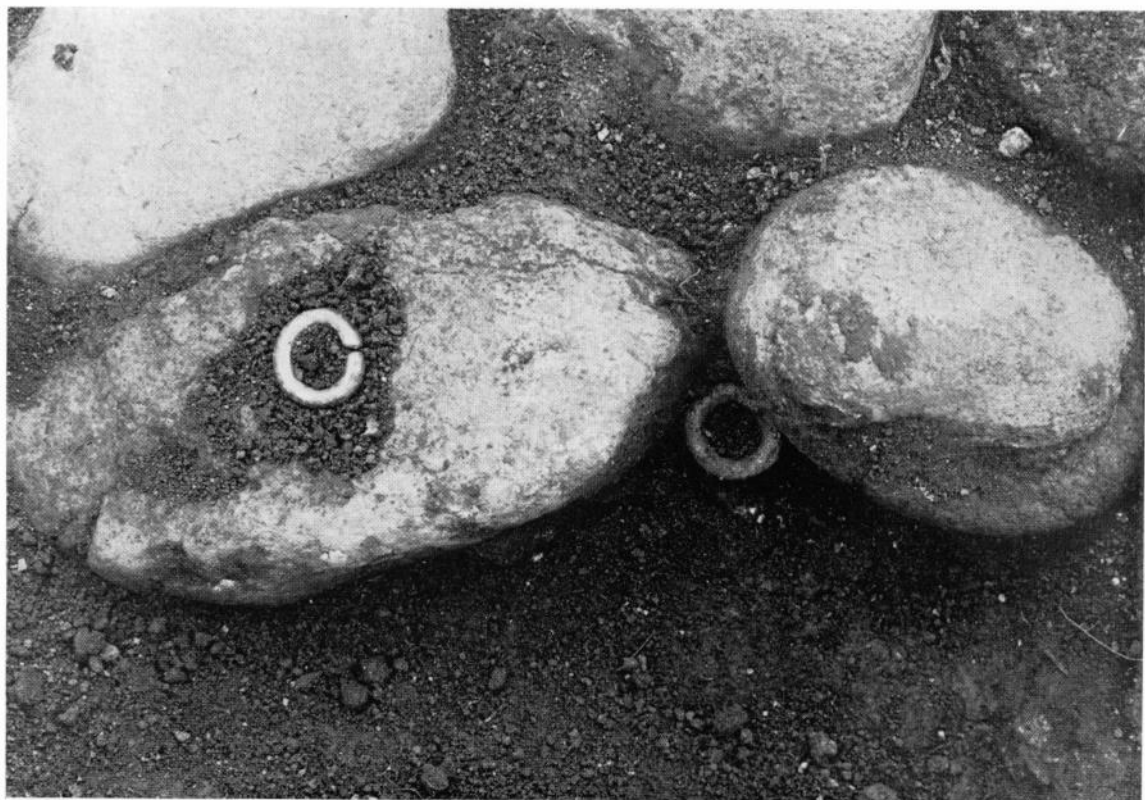
2 石室内遺物出土狀況



1 石室内遺物出土狀況



2 石室内遺物出土狀況



1 石室内耳環出土狀況



2 石室内銅釧出土狀況



1 石室内鉄器出土状況



2 石室内鉄器出土状況



1 石室内須恵器壺



2 同上 中に容れられた土玉



1 周溝内埴輪片出土状況



2 周溝内埴輪片出土状況



1 周溝内中世墓



2 周溝内中世墓



1 周溝内填石の状況



2 周溝内填石の状況



1 N区周溝と断面



2 E・N区周溝 (東から)



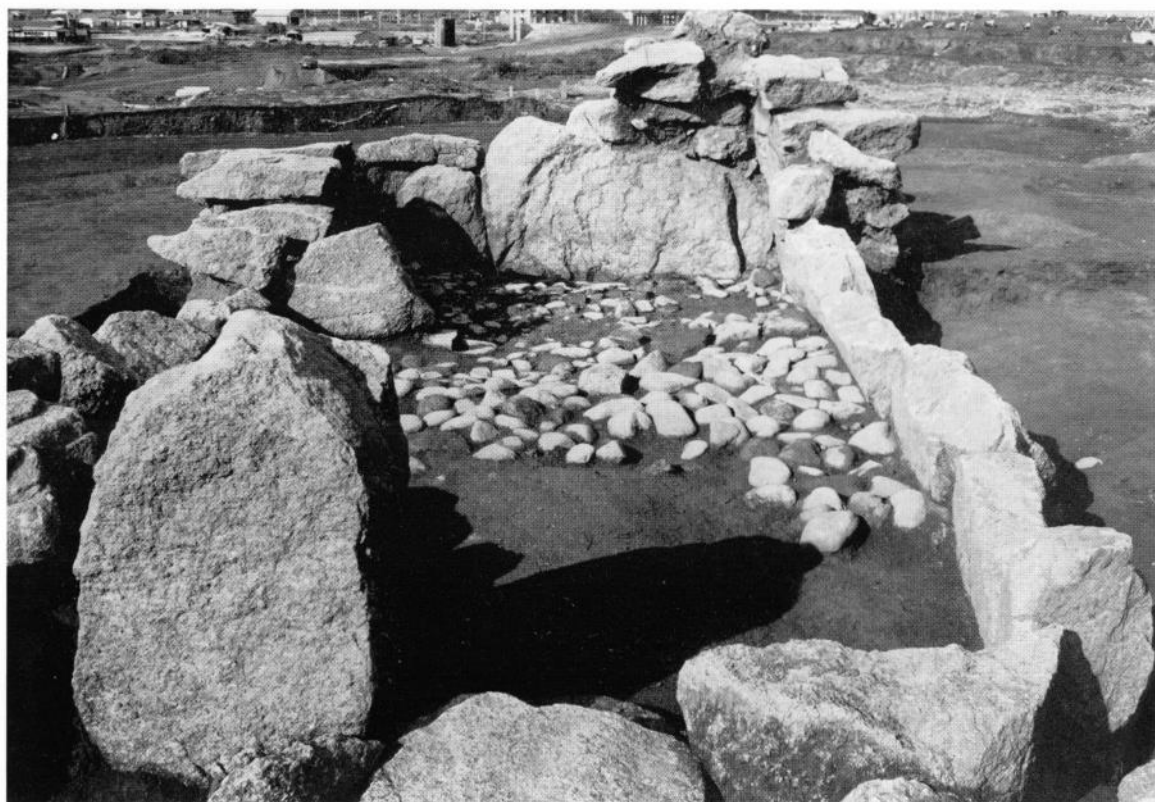
1 W 区 周 溝 (南から)



2 W 区 周 溝 (北から)



1 石室全景(南から)



2 石室近景(南から)



1 石室全景(東から)



2 石室全景(東から)



1 石室全景(北から)



2 石室近景(北から)



1 石室内石敷(南から)



2 石敷下管玉・丸玉・小玉・出土状況



1 石室内仕切石



2 石室内仕切石



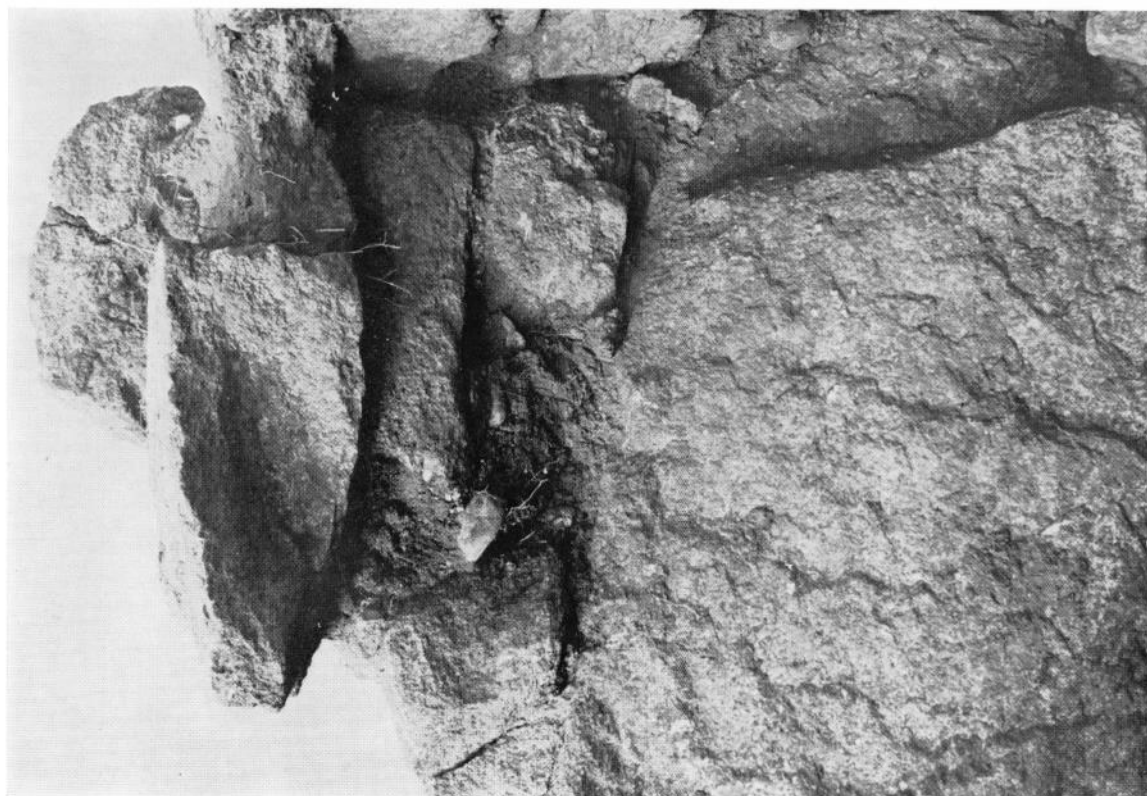
1 石室全景(南から)



2 羨道部側石



1 石室の側石残存部（外側から）



2 石室の側石残存部（内側から）



1 側石残存部（外側から）



2 側石残存部（内側から）



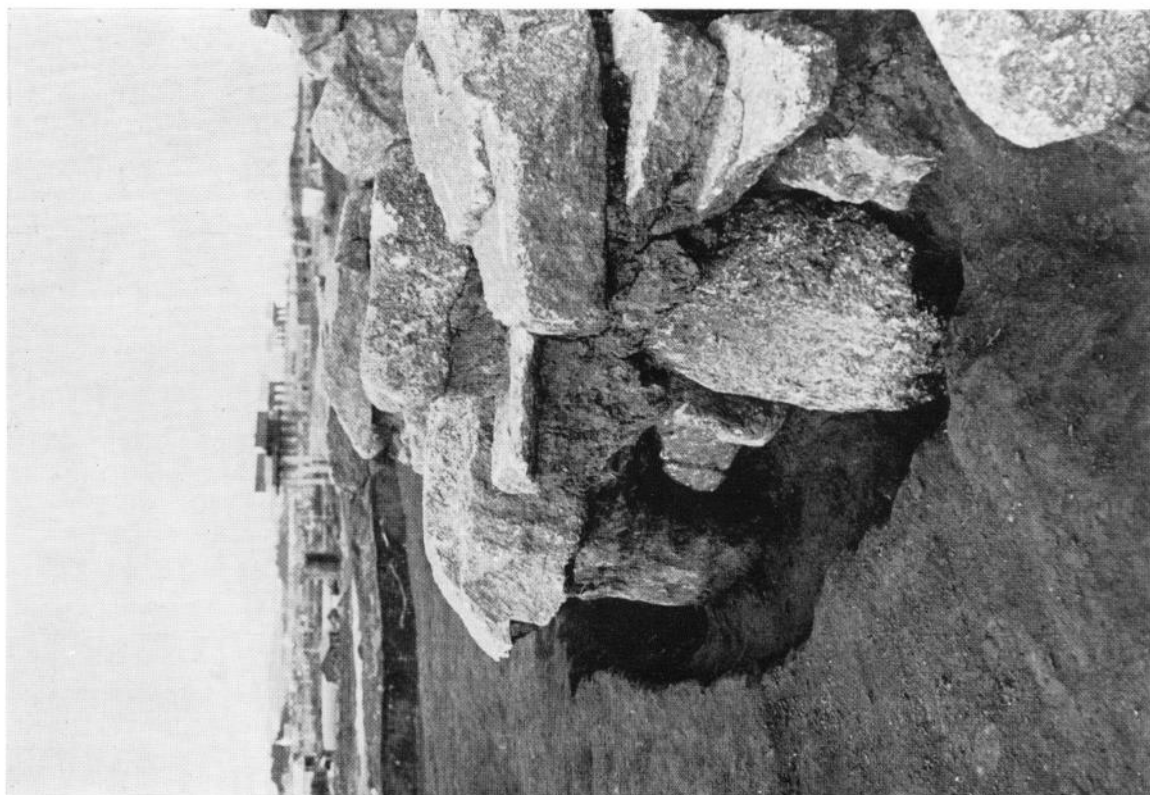
1 石敷撤去後の石室（南から）



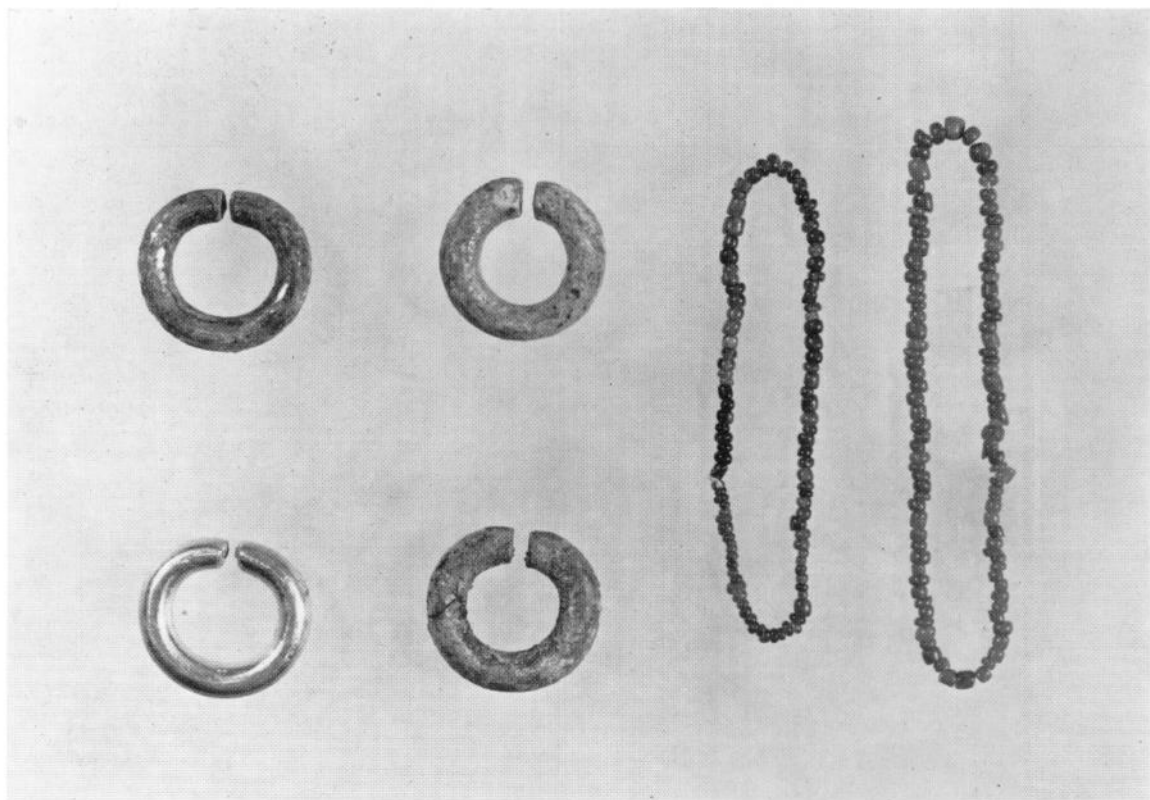
2 石敷撤去後の石室（北から）



2 掘り方と側石



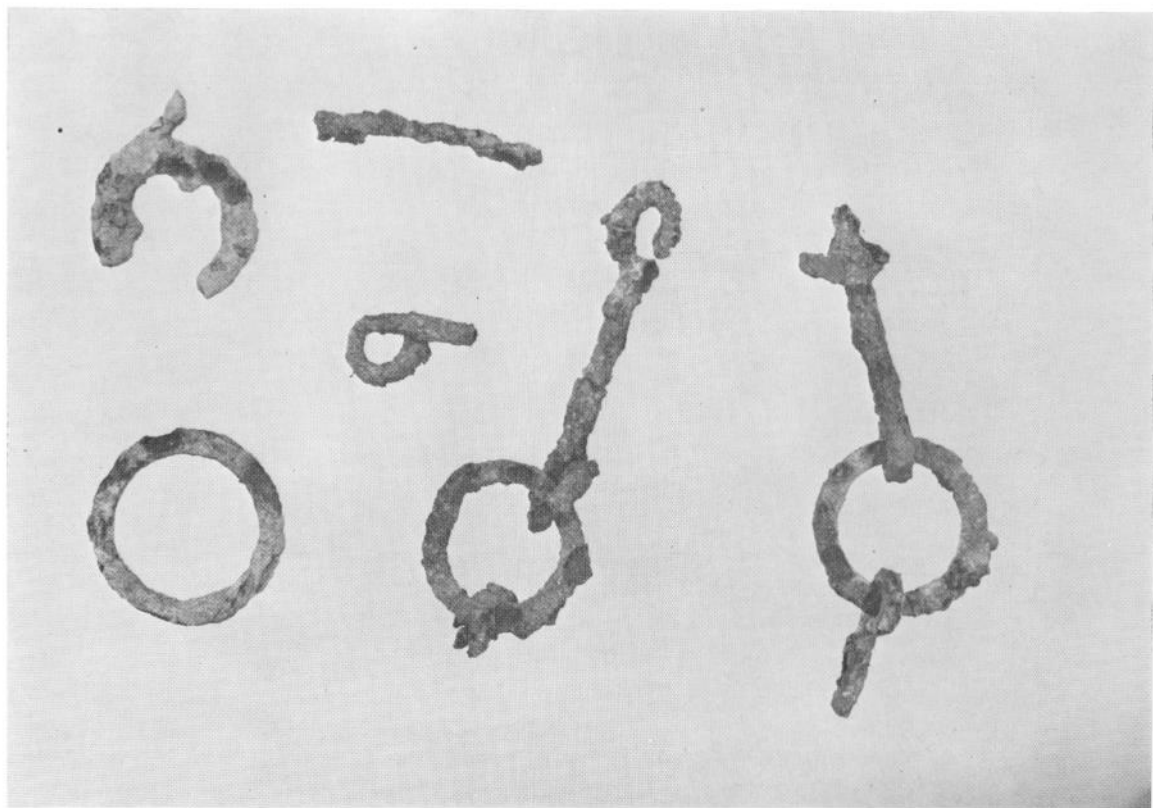
1 掘り方と側石



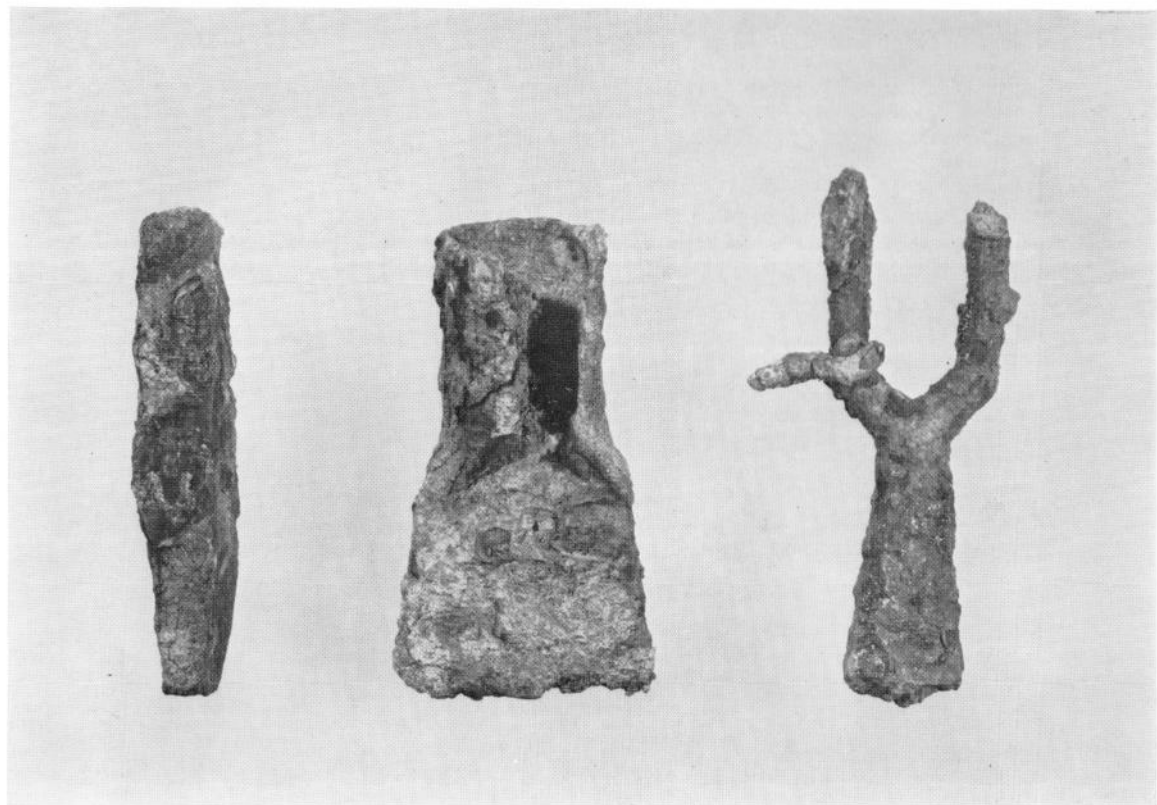
1 耳環・小玉



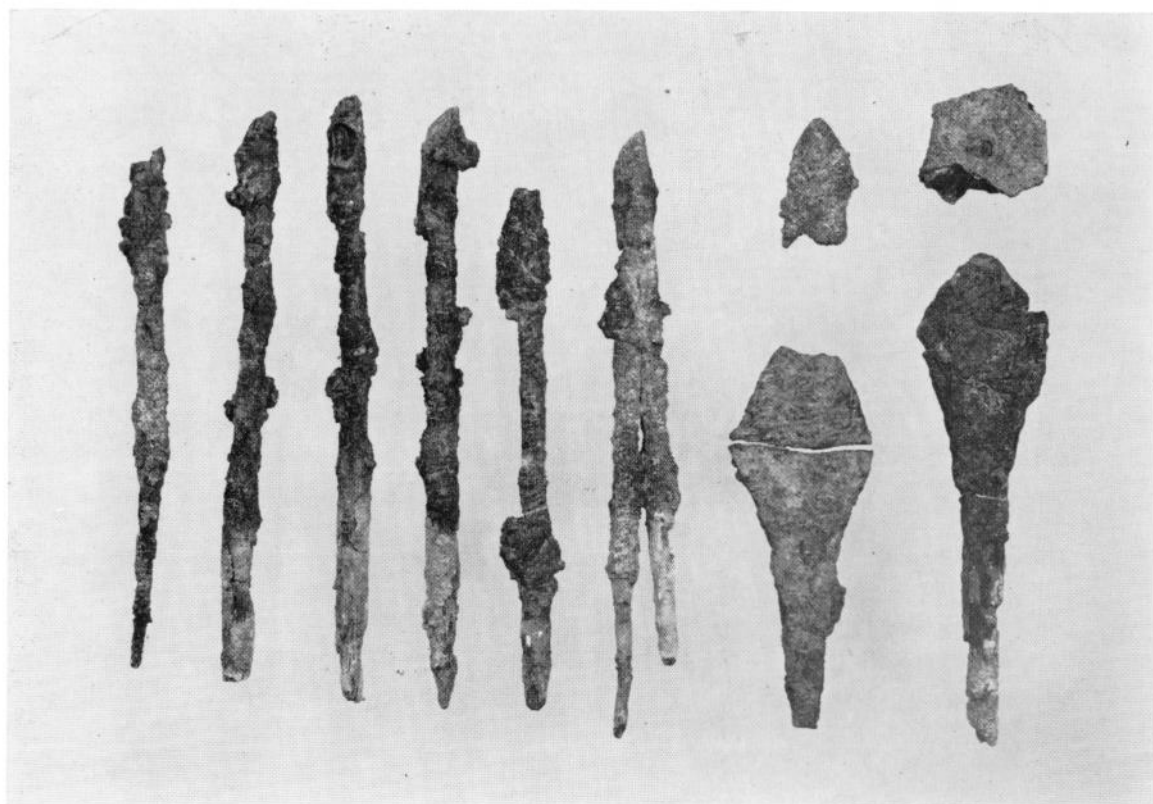
2 小玉・丸玉・管玉



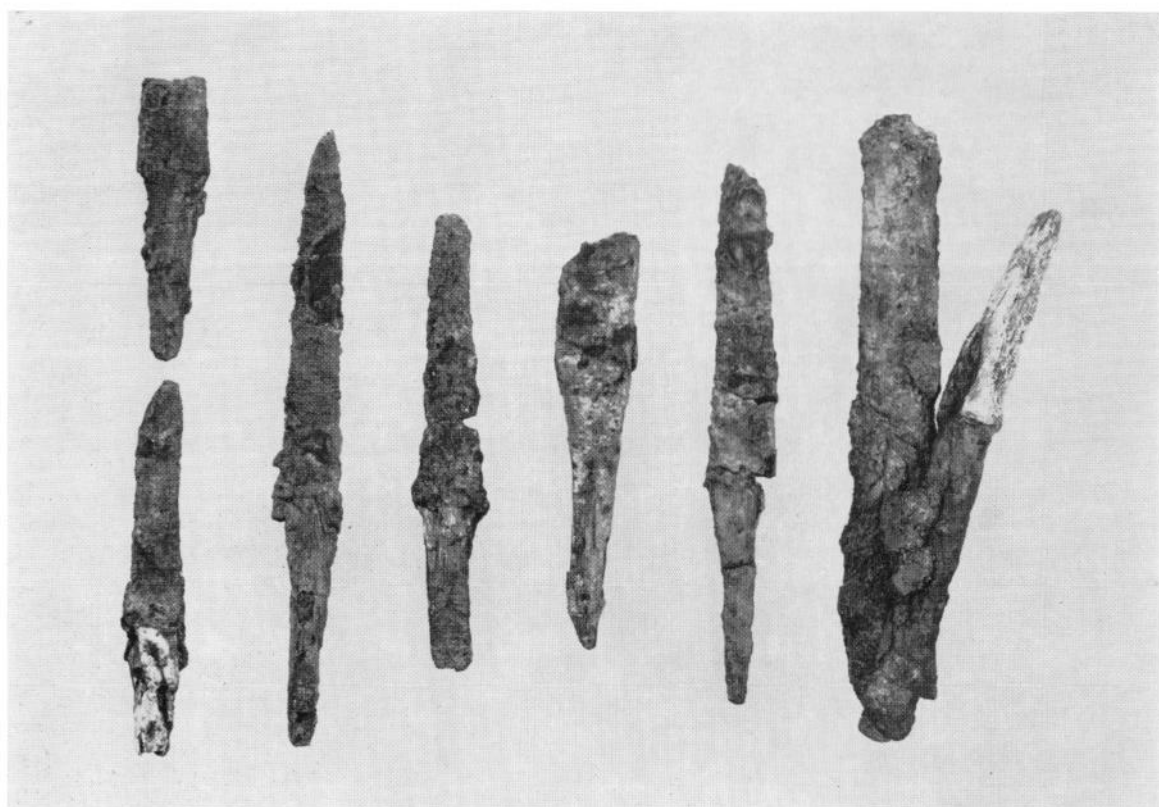
1 馬具類



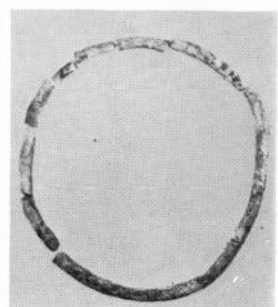
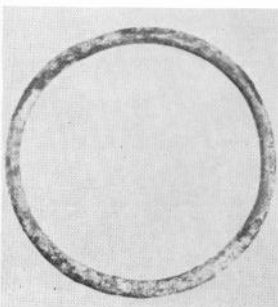
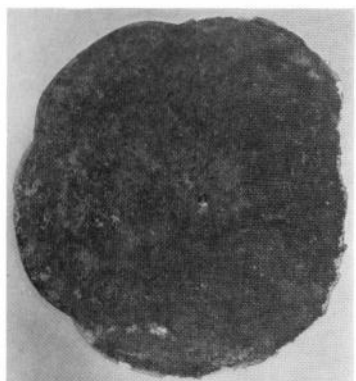
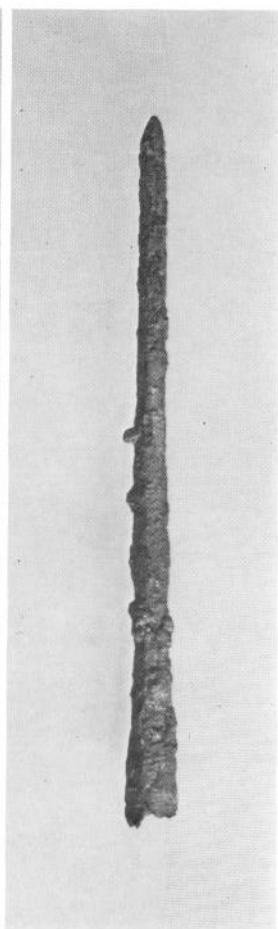
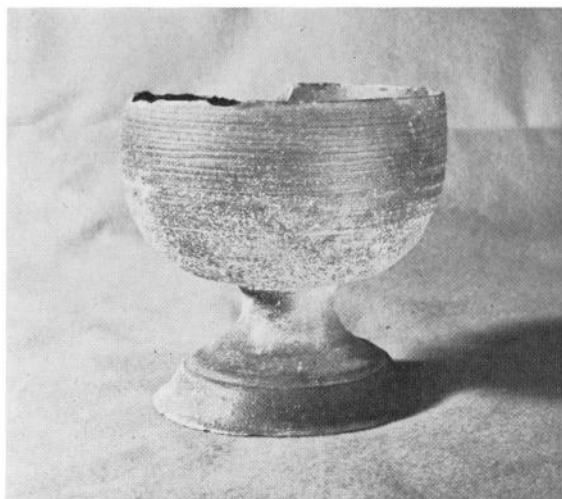
2 金槌・鉄斧・簞



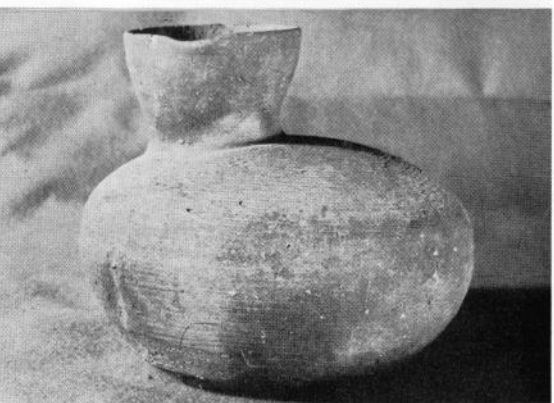
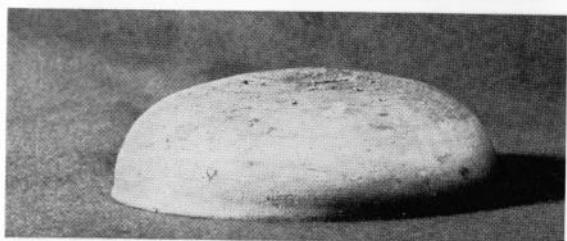
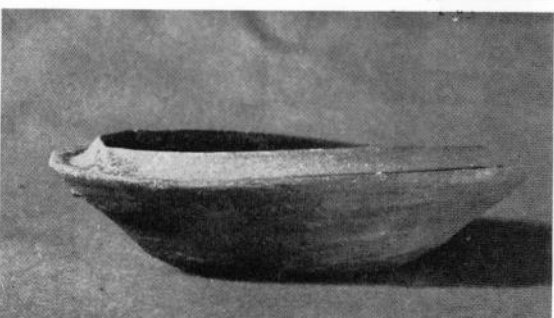
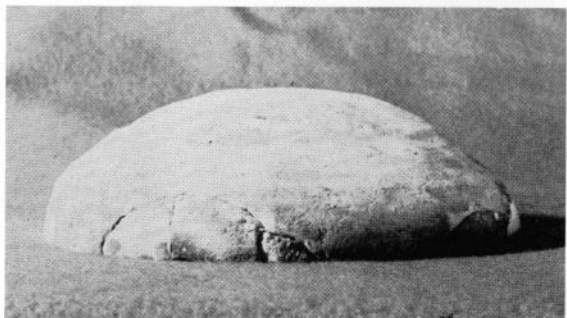
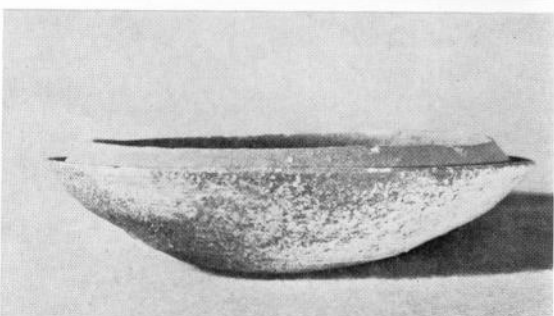
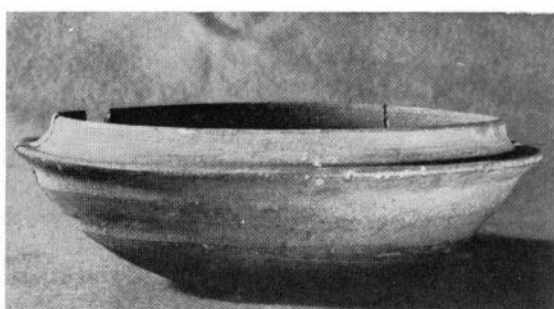
1 鉄 鏃



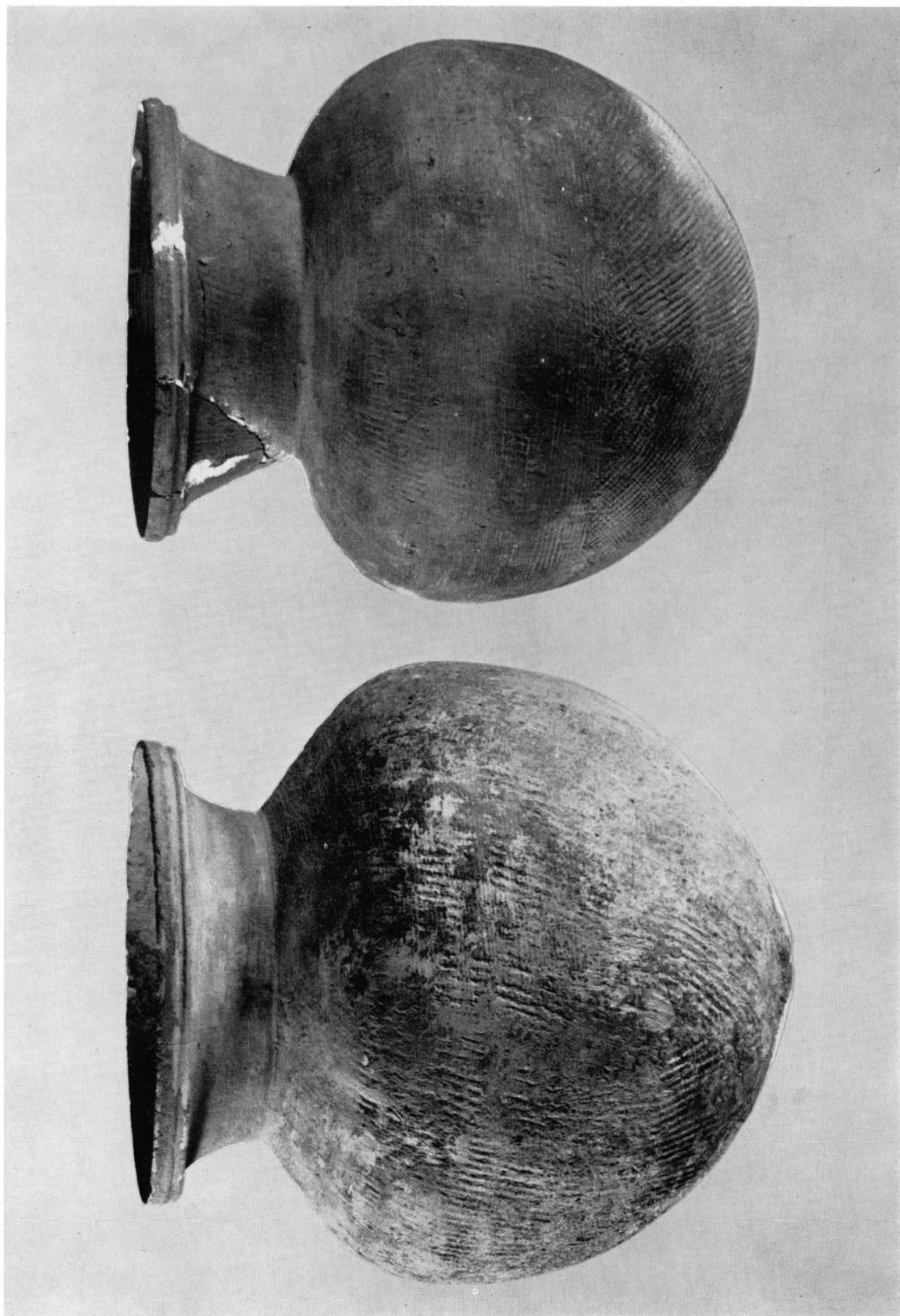
2 刀 子



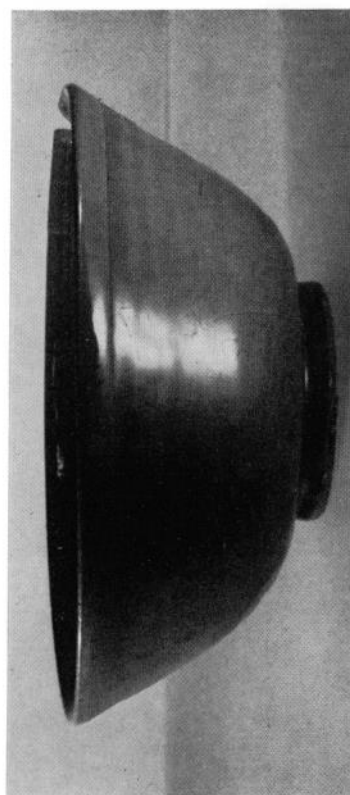
須恵器・土師器・鉄刀・鉄鉾・銅釧・六花鏡



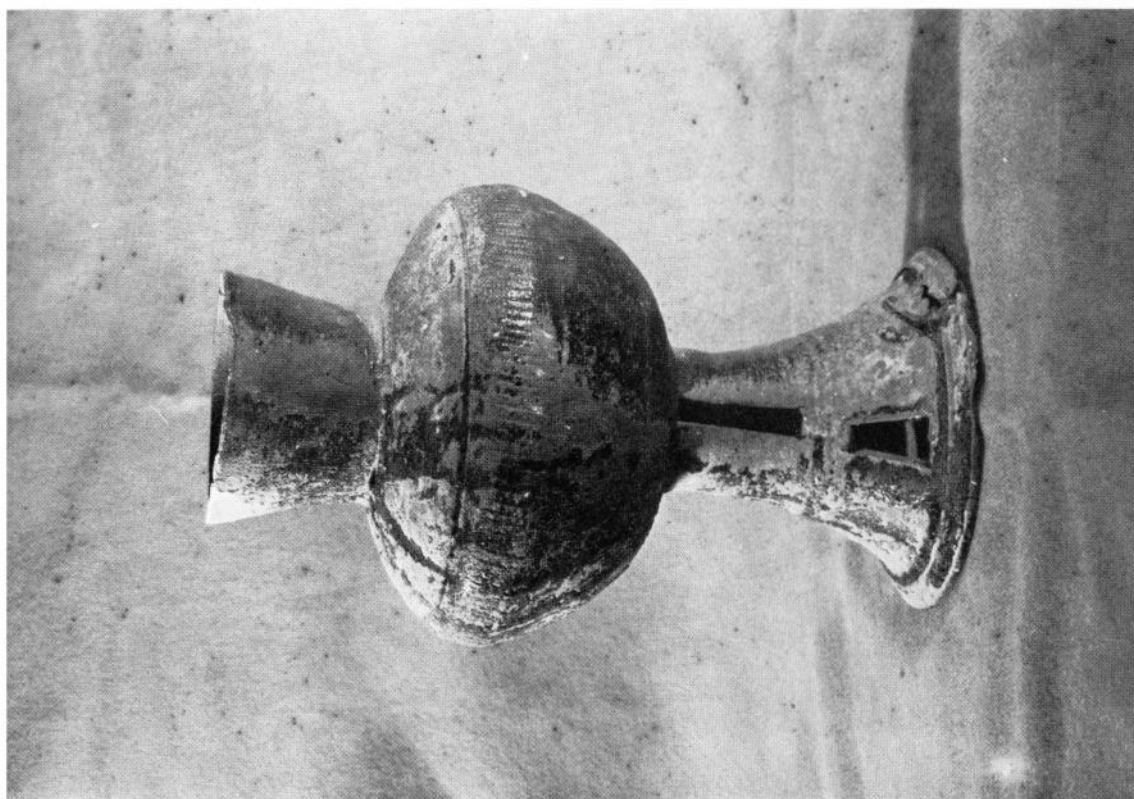
須 恵 器



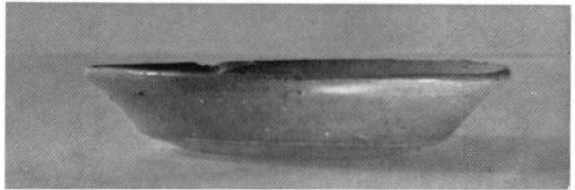
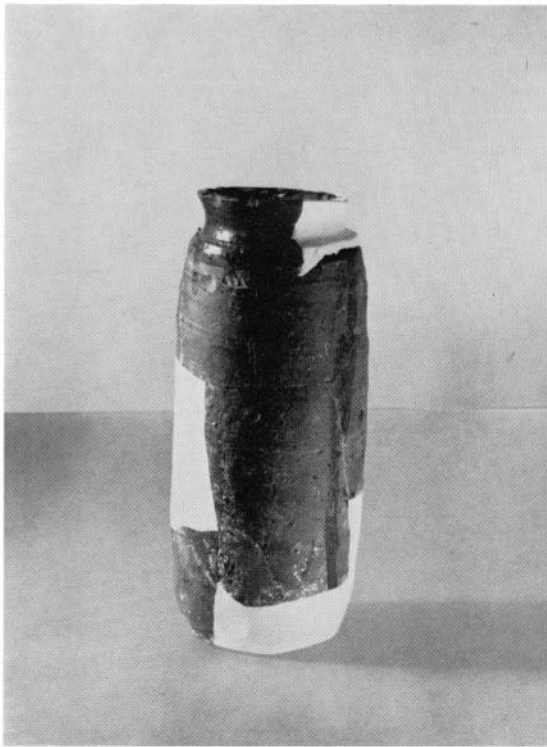
須惠器



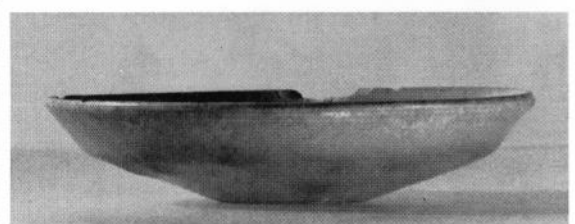
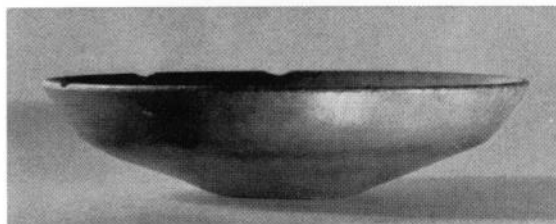
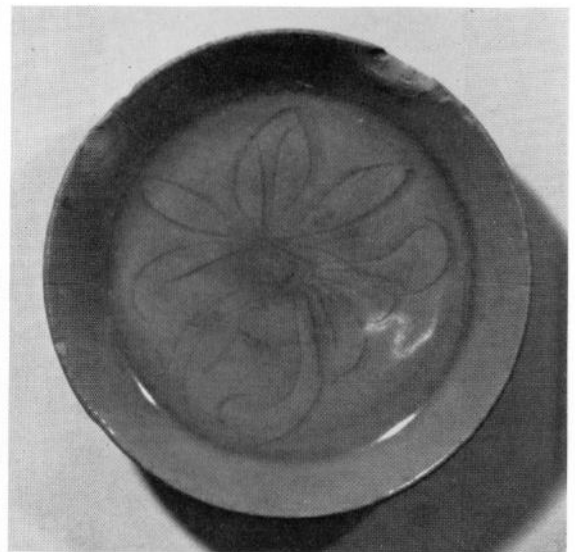
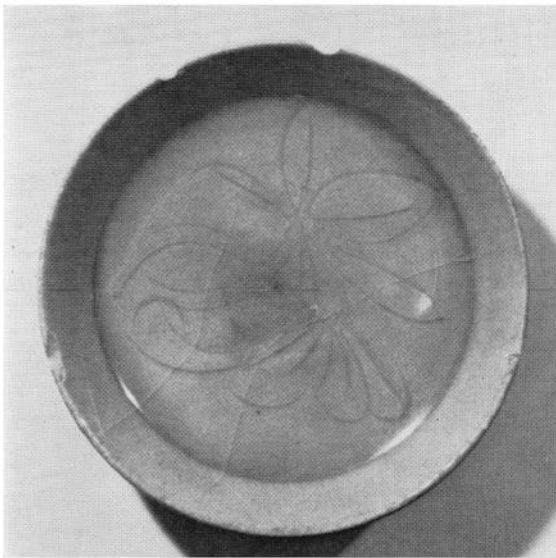
2 中世墓出土青磁



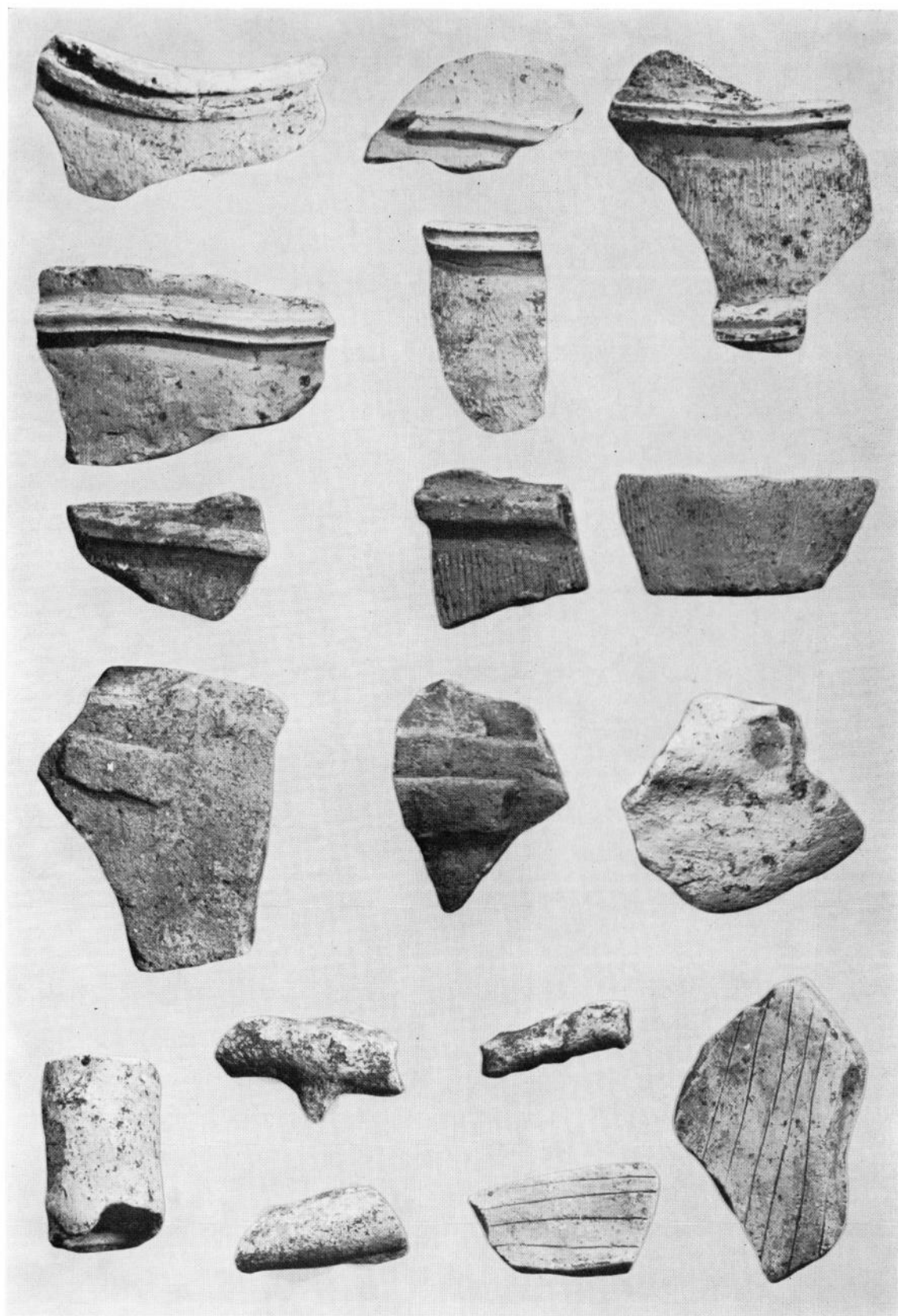
1 須惠器



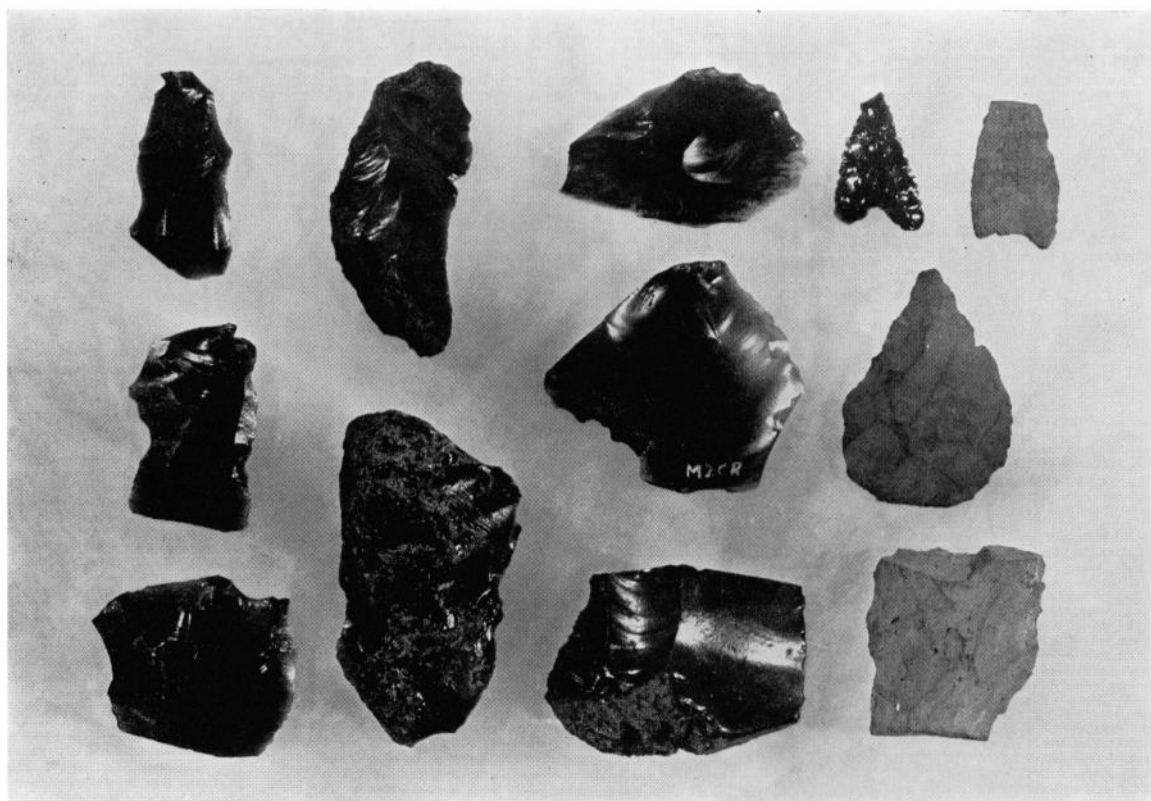
1 中世墓出土陶器短頸壺・青磁皿



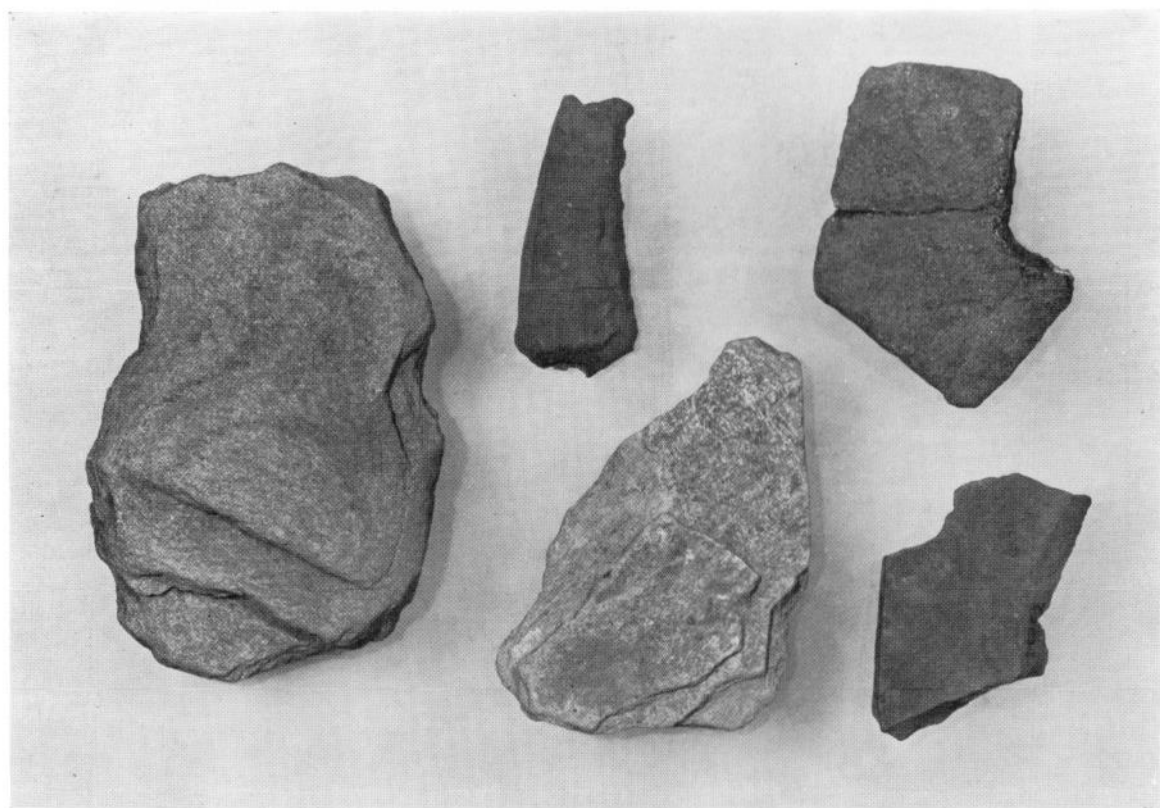
2 中世墓出土青磁皿



埴輪片



1 墳丘内出土石器



2 墳丘内出土石器

山陽新幹線関係
埋蔵文化財調査報告

第 1 集

昭和 51 年 3 月 31 日

発 行 福岡県教育委員会
福岡市中央区西中洲 6-29

印 刷 株式会社 天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町 10-18